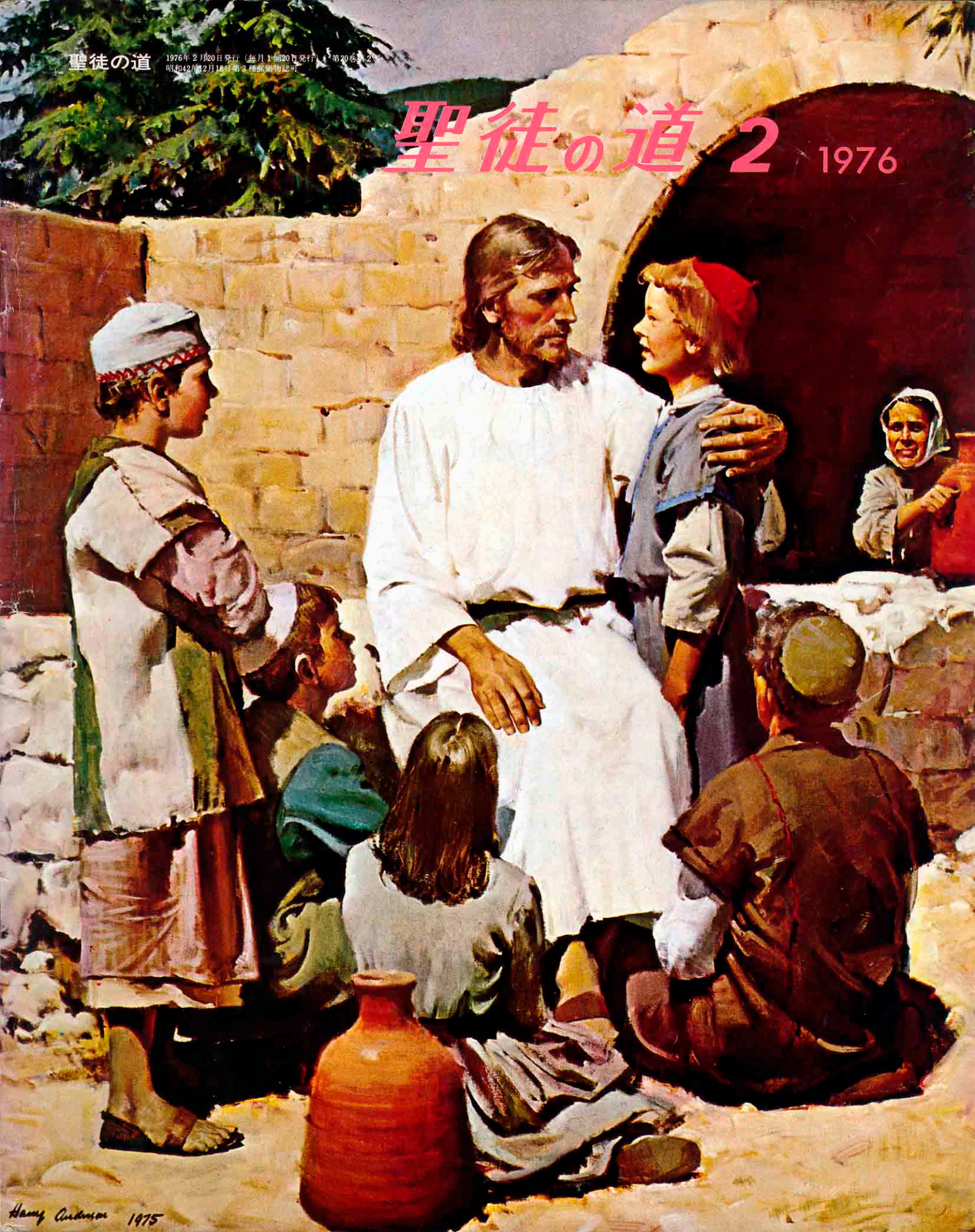
聖徒の道　1976年2月20日発行（毎月1回20日発行）　第20巻第2号
昭和42年2月18日第3種郵便物認可

聖徒の道 2 1976



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ハイト

諮問委員会

ロバート・D・ヘイルズ
（内務伝達部長）
ジョン・E・カー
（配送翻訳部長）
ダニエル・H・ラドロウ
（教会教課企画調整主任）

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー
ロジャー・ギリング（デザイナー）

日本語コーディネーター

八木沼　修一

聖徒の道　2月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25
定　価　年間予約1,700円　1部 150円
海外予約1,700円
INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

1976　2月号

もくじ

実践の時代……スペンサー・W・キンボール……34
実行！……ロバート・L・シンプソン……38
千年に1度か2度……ブルース・R・マッコンキー……41
幼な子の信仰……トーマス・S・モンソン……45
予言者の信仰……A・セオドア・タトル……48
君も知らなければならない……マリオン・D・ハンクス……51
家庭の夕べ……ジェームズ・A・カリモア……54
成功例……スターリング・W・シル……56
証……ジーン・R・クック……58
世に与えるメッセージ……エズラ・タフト・ベンソン……59
アメリカの将来……マリオン・G・ロムニー……62
邪悪に対抗する……ゴードン・B・ヒンクレー……65
主の前に聖い者とされるために……O・レスリー・ストーン……68
心を洗い清める……ジョン・H・バンデンバーグ……71
誓約と祝福……ウイリアム・H・ベネット……74
民を主に備えさせる……デルバート・L・ステイプレー……77
予言者と予言……リグランド・リチャーズ……80
王国の鍵……ジェームズ・E・ファウスト……84
感謝……チャールズ・A・ディディア……87
刈り入れ……ウイリアム・R・ブラッドフォード……88
できないことがあろうか……デビッド・B・ハイト……90
インマヌエル－神われらと共にいます……ヘンリー・D・テイラー……92
わが愛子に聞け……マーク・E・ピーターセン……94
アロン神権を展望して……ビクター・L・ブラウン……97
神権の力……W・グラント・バンガーター……100
誓約に従いて……マリオン・G・ロムニー……103
「彼らは神のほまれよりも人のほまれを好んだからである」……N・エルドン・タナー……106
神権者の特権……スペンサー・W・キンボール……110
神の律法……N・エルドン・タナー……115
人々が健全な教えに耐えられなくなる時が来るだろう……L・トム・ペリー……119
東洋の人々の信仰と主のみ業……アドニー・Y・小松……122
ひとりではできない……ロバート・D・ヘイルズ……124
タバナクル……ハワード・W・ハンター……127
死者の贖い……ボイド・K・パッカー……129
神の選民である私の先祖……ジョージ・パトリック・リー……133
伝道精神……レックス・D・ピネガー……135
みたまの言葉……ジョセフ・B・ワースリン……137
家族の探求……エルドレッド・G・スミス……140
愛は持続しなければならない……マービン・J・アシュトン……142
兄弟たちの説教……スペンサー・W・キンボール……145
ローカルニュース……147

1976年はアメリカ合衆国建国二百年祭にあたり、合衆国内では現在、国家をもう一度見つめ直そうという意識が高まっている。今大会の説教にもこの問題に触れているものが数多くある。

末日聖徒イエス・キリスト教会
第145回半期総大会報告

教会の総大会は、どれを取ってみてもそれなりの歴史的価値を持つものである。しかしながら、1975年の10月総大会は、教会史におけるひとつの輝ける道標として長く人々の記憶に残ることであろう。

まず第一にあげられるのが、教義と聖約の中で述べられている「七十人第一定員会」の発足である。キンボール大管長は、この定員会が「ゆくゆくは70名の会員によって組織されることになるだろう」と語った。

第二に、総大会と時を同じくして開催されていた補助組織の中央大会が今大会をもって終りを告げるということである。これらの補助組織(扶助協会、日曜学校、初等協会）の大会は、毎年6月に全世界で一斉に開催される地区集会をもって代行される。

10月3～5日の大会を管理したのは、教会の大神権の管理大祭司（教義と聖約107：65－67）であり、予言者、聖見者、啓示を受ける者、第12代大管長の職にあるスペンサー・W・キンボールである。全世界からこの大会に参加した教会員ならびに指導者は、テンプルスクウェアのタバナクル、同じくテンプルスクウェアにあるアッセンブリーホール、テンプルスクウェアから1ブロックのところにあるソルトパレスに集った。タバナクル以外の会場は、収容人員の関係でタバナクルに入場できない人々のために設けられたもので、教会幹部の中から数名が両会場に赴き、管理した。

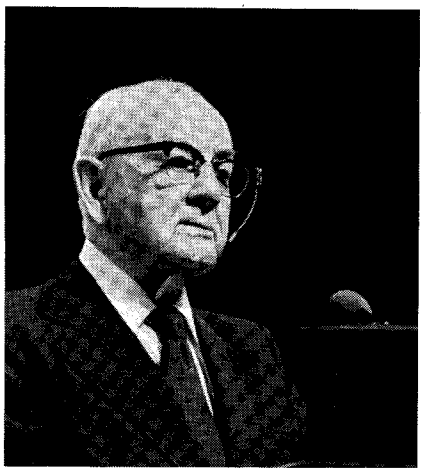
大会は合計7回にわたって開かれた。10月3日（金）は、午前10時および午後2時の2回、4日（土）は午前と午後の一般大会および午後7時からの神権会の計3回、5日（日）は午前と午後の2回である。さらに土曜日の午前7時から9時まで、神権および扶助協会指導者のために福祉集会が開催された。

キンボール大管長は金曜日の午前の大会で、4名の新しい教会幹部の氏名を発表した。七十人最高評議員会会員ミルトン・R・ハンター長老の死去に伴い、その空席を埋めるために召されたジーン・R・クック長老、それに七十人第一定員会会員として召されたチャールズ・A・ディディア、ウイリアム・ローゼル・ブラッドフォード、ジョージ・パトリック・リーの各長老である。これで教会幹部は総勢52名を数えるに至った。

大会の模様は合衆国ならびにカナダの広域にわたって中継放送された。同時に通信衛星により、メキシコ、中央および南アメリカ、ヨーロッパ、南アフリカ、フィリピン、それにアジアの一部の400に及ぶラジオ、テレビ局から放送された。また以上あげた遠隔地では、国際短波放送でも聴取された。土曜日に行なわれた神権会の模様は、約225,000名の神権者が集った合衆国、カナダ、オーストラリアの1,035の会場に閉回路で中継された。

以上の大会に付随して開催された中央大会および集会は以下の通りである。扶助協会中央大会(10月1～2日)、十二使徒会地区代表セミナー(10月1日)。

今回から毎年2月ならびに8月に、総大会特集号を発刊することになった。今月号はその第1回目で、第145回半期総大会の特集である。ここに掲載された数々の力強い証とメッセージが真理を見出すてだてとなれば幸いである。



実践の時代

**環境を美化し、菜園を造り、樹木を植え、
安息日を守り、伝道し、身体を清く保とう。**

大管長
スペンサー・W・キンボール

私たちは、この総大会にあたって、この会場におられる方々、ならびにテレビやラジオで視聴しておられる方々、皆様を歓迎したい。また、心からの愛を皆様にお伝えしたいと思う。

本日私たちは、4名の新しい教会幹部の召しを発表したい。彼らは主のみ業の中で特に伝道の業に携わることになる。これまで七十人最高評議員会の幹部書記を務めてきた、バウンテフルのジーン・R・クック長老は、七十人最高評議員会会員になる予定である。また、七十人第一定員会が組織される予定である。この定員会には将来70名の会員が召され、7名から成る会長会が管理することになる。本日、3名の兄弟が七十人第一定員会に召されることになっている。ベルギー出身、現在ドイツのフランクフルトに在住している七十人のチャールズ・A・ディディア兄弟、テキサス州サンアントニオから現在チリ・サンチャゴ伝道部の伝道部長を務めている七十人のウイリアム・ロウセル・ブラッドフォード兄弟、それにコロラド州トワオク出身でニューメキシコ州シプロックに在住している現アリゾナ・ホルブロック伝道部長である七十人のジョージ・パトリック・リー兄弟の3名である。以上4名の兄弟たちは、教会幹部の責任に就くことになる。これら4名の教会幹部は、後ほどこの大会で、他の教会幹部と共に皆様の支持をいただくことになっている。

私たちは本年2月と3月に、ブラジルのサンパウロとアルゼンチンのブエノスアイレス、次いで8月には、台湾、香港、フィリピン、韓国、日本でそれぞれ地域総大会を開催した。過去5年間に開いた地域総大会に出席した人々は約11万4,000名を数える。このように私たちは、ソルトレークの総大会に来ることのできない人々のために、大会を開いている。

南米の人々のために、サンパウロに神殿を建てることを発表し、次いでアジアにおいても、東洋の人々のために日本に神殿を建てることを発表した。これは発展のしるしであると思う。これらふたつの神殿が建てられ、献堂されるときには、両地域に住む人々にとって、神殿への距離は大幅に短縮され、時間と経費は節約できることになり、容易に神殿に参入して、聖なる儀式にあずかれるようになるであろう。

人々は、これらの地域総大会に出席するため、自動車やバス、列車、飛行機、また船で遠方からはるばるやって来た。大会に出るために、多大の犠牲を払ったのであった。ひとりの姉妹の手紙から引用したいと思う。

「最後の一般大会は特に素晴らしい会でした。キンボール大管長は人々に別れの言葉を述べて手を振られました。そして一同は、『神よまた逢うまで』を歌い、私たち夫婦は抱きあって涙を流しました。

私は教会員であってとても祝福されています。」

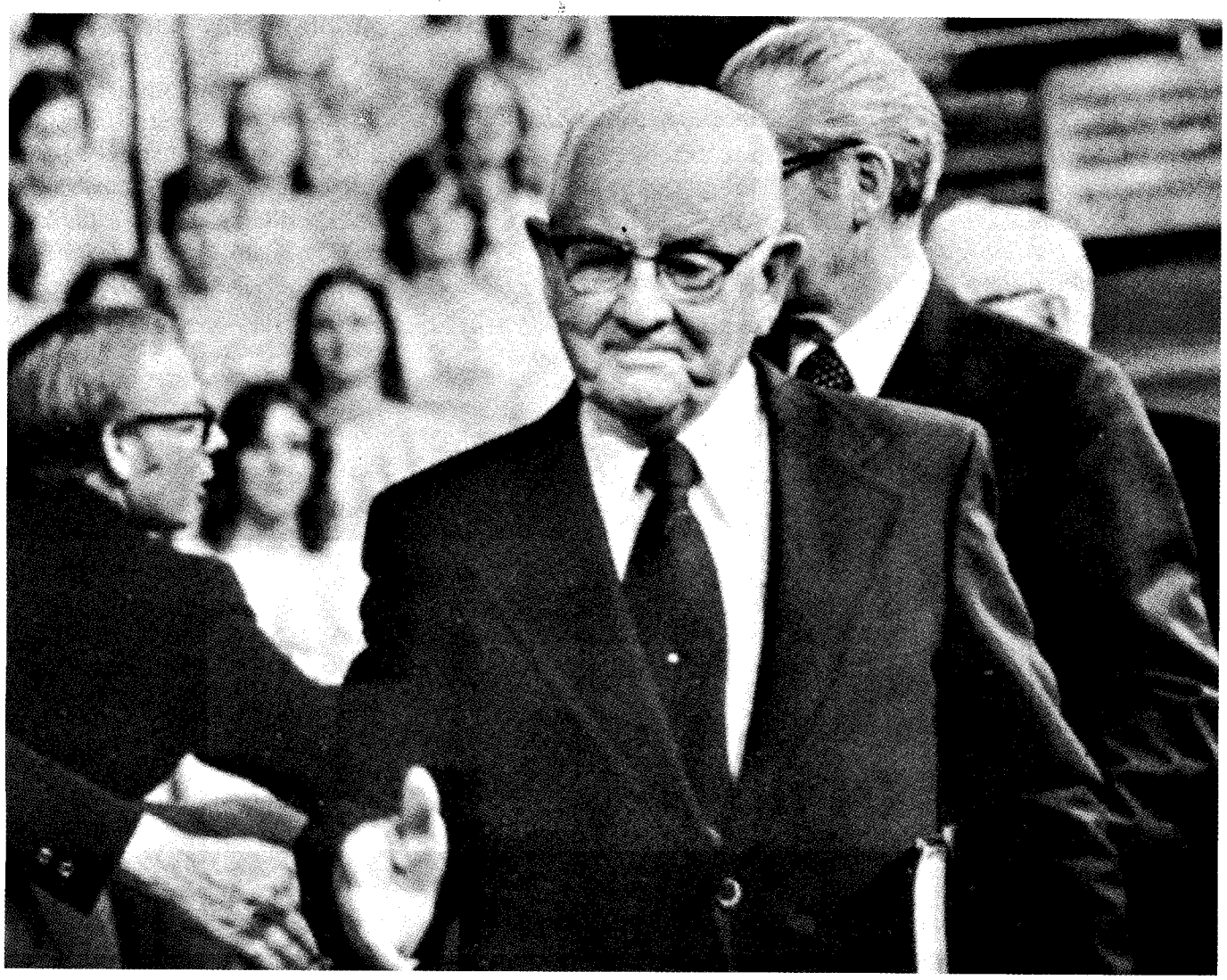
別の姉妹はこう書いている。

「すべては終わりました。何が。地域総大会が。彼ら指導者がこの地にもっと長く居て下されればと思います。……予言者の飛行機が到着する日はどしゃぶりでした。ところが不思議なことに、飛行機が空港に着く直前に、太陽がさんさんと照り始めたではありませんか。台風の予報が出ていました。しかし、幹部の方々がお帰りになるまで、台風はやって来ませんでした。私はキンボール姉妹に同伴した折、彼女と一緒に歩けるなんて信じられないことですと言いました。するとキンボール姉妹は、あなたと全く変わりがないですよ、とおっしゃいました。姉妹は洗濯もすれば、皿洗いもするし、料理、野菜作りなど、私がすると同じことをするとおっしゃるのです。」

別の手紙には次のように書いてある。

「地域総大会は本当に素晴らしく、フィリピンのモルモン全員にとって貴重な経験でした。初めて大管長が会場を訪れ、会衆が『感謝を神にささげん』を歌い始めたとき、私は泣いてしまいました。

私たちはマニラからさほど遠くない所に住んでいます。そのため、大会後は毎晩家に帰ることにしていました。日曜日の大会が終わったのは午後10時頃でした。そこで私たちは、12時の外出禁止の合図が鳴るまでに帰宅しようと道を急ぎました。ところが途中で、



自動車の後輪がパンクしてしまったのです。それで私たちは宿泊しなければなりませんでした。幸いなことにひとりの警官が来て、今夜はこれ以上先へは行けないだろうから適当な場所を見つけて泊まるようにと言ってくれました。そこで私たちは、外出禁止時間が解除される午前4時まで、ガソリンスタンドに泊まりました。翌日私たちは、大会の後片付けのために再びマニラに戻りました。」

統一した服装で「山の如く強く」を歌う1,200名の若人のコーラスは、あたかも一人一人がその曲を作った人々のような思いを抱かせる、心のこもった見事なものであった。

各国の政界の指導者に会う機会をいただいたとき、私たちは彼らに、教会の宣教師がその国にアメリカのお金を持ちこんでいるだけでなく、使節の役割をも果たしていることを説明した。宣教師たちは、国民の忠誠心と愛とを育て、新しい会員に正直と誠実とを教えている。現在東洋の教会員は約6万2,000名を数えている。

今回の大会でも、教会幹部から多くのテーマに基づいて話をいただく予定である。従って私は、皆様の注意を喚起したい若干の点についてのみ話したいと思う。

私たちはこれまで幾度か、菜園を造り、樹木を植えるように勧めてきた。そして今年、菜園の数が増したことを喜んでいる。私たちが車で出かける町はどこでも、以前に見られなかった菜園が見られる。トウモロコシやトマト、人参、玉ネギ、二十日大根、カボチャその他が作られている。私たちは皆様の働きを喜んでいる。ワード部の菜園や地域社会の菜園、隣り組の菜園が造られている。私たちは、皆様が自分の菜園から新鮮な野菜を収穫することによって、ある程度まで、生活費を減じてこられたものと確信している。

日本のある兄弟から、このような便りをいただいた。「今私は菜園を造っていますが、ジャガイモがとてもよくできています」と。

主はエデンに園を設けられたときに、次のように言われた。

「……人の用いんために備えたるすべてのもの……人はその食うに善きことを観たり。」（モーセ3：9）

「われ主なる神、かの人をとり彼をエデンの園に置きてこの園の手入れをなさしめ、またこれを守らしめたり。」（モーセ3：15）

現在の神権時代にも主は次のように語っておられる。

「……地に満つるすべてのものは汝

らに与えらるべし。すなわち野の獣、空の鳥……

然り、また汝らの食物、衣服、家屋、小屋、果樹園、野菜畑、葡萄園など何れにしても、それらのために地より生ずる諸々の草と善きもの、

然り……地より生ずるものは、皆人の為人の用いんために造られ、眼を楽しませ、また等しく心を悦ばせんためなり。

然り、これらは肉体を健(すこやか)にし人に元気をつくるよう、食物、衣服、味、香りのために造らる。」(教義と聖約59：16－19)

少女からも次のような手紙をいただいている。「私はお父さんの畑作りを手伝っています。そして弟は庭の掃除をしています。」

デゼレトニューズ社とユタ州美術協会も、ユタ州のカルビン・ランプトン知事の提唱により、合衆国独立200年記念として、100万州民のために100万本の樹木を植えた。私たちは皆様がこのことを真剣に考えるよう願って止まない。樹木は美と祝福をもたらし、果樹は生活に必要なものを提供してくれる。

田園地方に住むある方からいただいた手紙には、次のようにある。「私たちは大管長の助言に従って屋敷を見直したのですが、恥ずかしくなりました。私の家は開拓時代の田舎家で、普通の納屋と鶏小屋、家畜小屋がついていました。また、柵は壊れたままでした。

私たちは古い納屋を取り壊し、柵を立て直してペンキを塗りました。その他の戸外の建物は白色に塗り、納屋の跡は掘り起こして菜園にしました。本当に楽しい仕事でした。ありがとうございます。」

アフリカのある行政官が、嵐で荒廃した土地を視察したときのことである。彼は自動車で、たくさんの巨大な杉が根こそぎ倒れている地方を訪れた。そして担当官に言った。「ここに杉を植林しなければなりませんね。」すると担当管は答えた。「このような大きさの木になるには、2千年かかりますよ。おまけに、50年経たないと種もとれません。」

「それでは、今すぐに植林しなければ」と行政官は言った。これは皆様に対する勧告でもある。

「すべての者に各自の家のドアの前を掃かせよう。そうすれば全世界が清められるだろう」とゲーテは語っている。

もうひとつ大切な事柄について述べたい。今日クリスチャンの住む多くの地方で、人々は聖なる安息日に、商店を開かせ営業させている。これを正せるのは私たちである。もし私たちが買わないようにするならば、商店は店を開けないことだろう。どうぞこのことについてもう一度考えていただきたい。家庭の夕べに子供たちと話し合っていただきたい。今後一切安息日に買物をしないとすべての家族が決心することは、全く素晴らしいことである。

主イエス・キリストは言っておられる。「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行なわないのか。」(ルカ6：46)私は主が悲しみの気持をもってこれを言われたと思う。

エゼキエル書にはこのような一節がある。「わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言葉を聞く。しかし彼らはそれを行なわない。」(エゼキエル33：31)

主を愛していながら、なぜ主の律法を破るのだろうか。私たちは皆様が、安息日に物を買うことをやめるよう心から切に願っている。

私たちはまた、伝道の業を続けている。今年宣教師は数千名の増加を見、現在約21,000名に達している。福音を宣べ伝えるグループとしては、世界最大である。

新しい次元が開かれて、南アメリカやヨーロッパ、東洋、南洋諸島その他で何千名もの地元の宣教師が働くようになったことは、注目に価する。私たちは彼らの献身と働きに非常に満足している。地元の宣教師は伝道を始めるにあたって、言語の訓練を受ける必要はなく、一般にビザも必要ない。また、人々の生活様式や物の考え方もよく知っている。私たちはまた、全世界の教会において地元の指導者を召しており彼らの誠実な態度と優れた能力そして、献身的な姿を目にしている。

私たちは、離婚率の増加についても心を痛めている。離婚はすべて、悲惨な生活、誓言の破棄、子供に対する義務の放棄と権利の喪失、家庭の破壊を意味する。離婚は好ましいことではない。正当化できる離婚は、ごくわずかであると思う。婚姻関係を持つにあたっては、十分な注意を払う必要がある。次いで男女は、最善を尽くして、その結婚を幸せに保たなければならない。これは可能なことである。

ほとんどの離婚は、わがままや、その他数々の罪による。使徒パウロはその解決策を知っていた。夫はその妻を愛し、妻はその夫を愛するようにとパウロは言っている。結婚生活を送る男女は、夫婦協力して入念に予算を組み、その通りによく従う必要がある。多くの結婚は店先で破綻をきたしている。無計画な買物が原因なのである。結婚は夫婦の協力なしには成り立たないことを覚えていただきたい。協力して計画を立て、家族のしつけにも共同であたるべきである。民事結婚が破綻をきたしている割合は非常に高い。私たちは、神殿結婚により夫婦の関係が一層親密なものになることを感謝している。

主が次のように言われたとき、悲しみの内にその言葉を発せられたように思う。「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。

その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。」(マタイ7：21－23)

家庭の安定度は、社会の離婚率にかなり正確に反映される。

その他数多くの大切な理由から、私たちは若人に、結婚を慎重に考え、こ

の神聖な儀式のために聖なる神殿に参入するように勧めているのである。

私たちは堕胎を禁ずものである。人々がこの重大な背罪を犯すことのないように願っている。

「当教会は堕胎に（敢然と）反対しており、ごくまれな場合を除いて、堕胎をしたり、堕胎手術を受けたりしないように教会員に勧告している。……

堕胎は今日の最も忌まわしく、罪深い行為のひとつである。なぜなら、この恐ろしい堕胎容認が、性的な不道徳をもたらしているからである。

堕胎の罪を犯した教会員は、事情によっては、教会の評議員会によって懲戒処分を受けなければならない。この深刻な問題を取り扱うにあたって、教義と聖約59章6節に述べられている主のみ言葉を心に留めておくとよい。『汝盗むなかれ。また、姦淫を犯すなかれ。また、人を殺すなかれ。また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。』」（*Ensign*「エンサイン」1973年3月号、P.64）

最近ある雑誌記者が次のように書いている。「社会の道徳は、現在最低の水準にまで、歴史上類を見ないほど低い水準にまで落ち込んでいる」と。

私たちはますます激しさを加えつつある暴力と性の退廃を目にしながら、恐れを覚えている。非常に多くの手段を通して、私たちの居間に、このような行為があからさまに伝えられているのである。しかし同時に、心の励みを覚えることもある。というのは、夕方の早い時間には、両親が何の心配もなしに子供たちに見せることのできるテレビ番組が、テレビ局幹部の好意によって確保されているからである。私たちは、それがさらに拡張されるよう切に願っている。神が彼らの義なる働きを祝福したまい、私たちの大切な家族がこの世の悪から守られんことを。

私たちは、故国を離れて当地に来たベトナム国民を受け入れるにあたって、援助を与えることができ、喜んでいる。私たちは個人的に、最初の避難民に会った。異国の新しい環境のもとに入った彼らに会ったとき、私たちは、幌馬車や手車でほとんど何も携えることなしにこの新しい土地に来た私たち自身の先祖を思い出した。現在、数百のベトナム人の兄弟姉妹が、私たちと共に新しい生活を始めている。その中には教会員もいれば、教会員でない人々もいる。私たちは、政府の支援金を受けずに、彼らに住まいを提供している。しかし私たちの受ける報いは、救い主の述べられた言葉にあるのである。

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」（マタイ25：40）

これらの良き人々に衣食住を提供するにあたって援助して下さった、神権者や扶助協会の姉妹たち、ならびにその他の人々に感謝申し上げたい。

適正な関税を納めることなしに、物品を他の国に持ち込むことがないよう、正直であっていただきたい。時折、それを合理化する人々がいる。隣人からだまし取ったり、商店から盗んだりすることにはちゅうちょする人が、関税をごまかし、正しい申告をしないことを当然の権利であるかのように考えているのが現状である。私たちはこの行為を非難するものである。すべての点で、また自分の行なうすべての事柄において正直であるよう勧める。この規則にはいかなる例外もない。これらの納税義務その他に厳密に従い、正直であるように願っている。

この総括声明を終える前に、道徳に対する教会の立場を繰返し申し上げたい。神は昨日も今日も、永遠に変わらない。神はご自身が昔に定められた道徳の標準を、人間の考えで変更し、更新することを決して願っておられない。罪は罪であり、いつの時代にも罪である。私たちは清い生活を送ろうと努めている。また幼年時代から青年時代を経て、死に至るまで、いかなる類にせよ、婚前の性生活は邪悪な行為であると宣言するものである。また既婚者は交わした誓約を守るべきであると宣言するものである。

言葉を換えれば、しばしば言われてきたように、未婚の男女は完全に純潔を保ち、既婚者は完全な貞節を保つべきである。いわゆる性革命論者が秩序を変え、状態を変えたことに対して、私たちは相容れない気持を抱いている。私たちはポルノや自由放任、またいわゆる性の解放を、あらん限りの力をもって禁ずるものである。この不道徳な行為をもたらす自由放任を教え、唱道する人々は、清い標準を定められた神から、いつの日か悲しい罰を下されることになるであろう。私たちはこのことを恐れている。

ここで再び、救い主の感銘深い言葉を繰り返したい。「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。」（ルカ6：46）

主はまた言われた。「汝ら今の代の人々に向いて、悔改めのほか何事をも語るべからず。」（教義と聖約6：9）

「わたしは人々になやみを下して、盲人のように歩かせる。彼らが主に対して罪を犯したからである。彼らの血はちりのように流され……

彼らの銀も金も、主の怒りの日には彼らを救うことができない。全地は主のねたみの火にのまれる。主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽される。」（ゼパニヤ1：17、18）

私たちは塔の上の見張り人である。人々に警告し、宣言し続けるものである。私たちの手には、ラッパがある。力強く吹き、警告を発しなければならない。

イザヤは語っている。「あなたに仕えない国と民とは滅び、その国々は全く荒れすたれる。」（イザヤ60：12）

この大会にあたって、話をする兄弟たち、ならびに話を聞く皆様方すべてに主の祝福があらんことを。そして、皆様の心が奮い立ち、証が心の内に高められるように。神を主と仰ぐ国民に祝福のあらんことを。天の恵みが皆様の上にあらんことを。イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。



実行！

大管長の机上に示された座右の銘を、私たちはぜひ自分のものとしなければならない。

十二使徒評議員会補助
ロバート・L・シンプソン

愛する兄弟姉妹たち、私が教会の総大会に出席するようになってから何年かの年が過ぎた。今朝、私はあなた方に、イギリスのロンドンでも、ニュージーランドのオークランドでも、トンガのヌクアロファでも、ユタ州のソルトレーク・シティーでも、福音は真実であるとの確信をお伝えしたいと思う。私は今この大会に出席できることを感謝している。

キンボール大管長、私はこの数ヵ月間、あなたの愛のメッセージと挨拶とを海外の教会員に携えてまいりました。そして今この場で、私はあなたに、南太平洋の10万人以上の教会員の真心からの愛と変わらぬ忠誠とをお伝え致します。教会史上初めての、広域に及ぶ意欲的な総大会の一環として、来年2月に大管長を迎える日を、彼らは指折り数えて待っています。

9つの地域で延べ17日間にわたって大会のセッションが44回も開かれることは、考えただけで驚異である。たとえそうでないにしても、時差に合わせて時計の針を18回も変えながら、4万5千キロも空の旅をすることを考えてもみていただきたい。

それが、民に「歩みを早めよ」とチャレンジする人のスケジュールである。それが、「私の言うようにしなさい」にとどまらず、もっと肝心なことには「私のするようにしなさい」と宣言する人のスケジュールなのである。ラッパが確かな模範の音を吹き鳴らすとき、それにこたえることははるかに容易になる。

キンボール大管長の机にひときわ目立つように掲げられているのが、「実行！」という短い言葉である。この霊感豊かな指導者にとっては、個人の都合は二の次である。すべてのことが主の都合に合わせて行なわれている。働くということに関してキンボール大管長の模範はなかば伝説のようになっている。これはすべての教会員が従うべき模範である。

私が第2次世界大戦中にワイオミングの空軍基地に配属されていたとき、支部の聖餐会で、翌週の支部大会には、もしかしたらソルトレーク・シティーから教会幹部が訪問して来るかもしれないという発表があった。次の日曜日の朝、私たちが支部大会に行くと教会幹部が訪問したとのことで、ひとりの人が紹介された。だれもが初めて会う人だった。それが、十二使徒に召されたばかりで、支部大会訪問も初仕事のひとつであったスペンサー・W・キンボール長老であった。彼の物腰は穏やかで、証は堅く、語ることからしても、そのような大きな召しを受けるのもなるほどと思わせるものであった。そのとき彼は確信を新たに、このようなことを述べた。「兄弟姉妹たち、私は主がどうして私のような者を召されたか、よくわからない。しかし私には捧げることのできるタレントがひとつある。私の父は私に、いかに働けばよいかを教えてくれた。もし主が働き手を使いたいと望まれるとしたら、私はそのお役に立てると思う」と。確かに主は働き手を使われた。実際に主は、最も大切な時期に最も大切な責任を務める用意のある熱心な働き手を必要とされたのである。

今がその時である。いかに働けばよいかを知っている予言者が、行く手を導いている。そして確かな事実がひとつある。この末日の業には、予言者と足並みをそろえて進もうとする何千名もの人が必要だということである。

ひとりで歩む予言者は、力が無いに等しい。どの神権時代にも勤勉に働く優秀な弟子たちが必要とされてきた。今キンボール大管長は、教会歴史上これまでになく、熱心な働き手を大勢求めている。

私たちは予言者と足並みをそろえる用意の手始めとして、次の3つの目的を一緒に考えてみようではないか。

第一は教義にもっと精通すること、第二はもっと喜び進んで実行すること、第三はみたまの賜をもっと受けられるようになること。

ある立派な教師がある時こう言った。「読まない人は読めない人と何ら変わらない。」近代的な教授法の確立した文明の時代にあって、福音に無学なことは言い訳が立たないと言っても、ほぼ過言ではない。特に水のバプテスマを受け、毎週聖餐を受けて誓約を新たにしている私たちにとってはそうである。

2番目の事柄は喜び進んで行なうこ

とである。私は世界中の宣教師と会うときにいつもこのことで胸が躍る。学業や仕事を2年間中断し、家族や友人や自分の関心事を傍へ置いて、予言者からの召しにこたえることを生活の第一に置くのは、人間的に見て好都合なことだろうか。違う。では、心は満たされるだろうか。そう、満たされる。そうでないならば、何かを信じたならば、すぐさま実行することである。

ここでしばしの間、私が半月前に南太平洋での集会に出席した間のメモをご紹介したい。予言者からの勧告は決して軽んずべきものではない。トンガ・ヌクアロファステーキ部は、すべてのワード部、支部で聖歌隊を組織し、隣人もメンバーに迎えるようにというキンボール大管長の勧告に従った。つい先月、私とシンプソン姉妹はそのステーキ部の合唱祭に出席して非常に楽しい時を過ごした。全部のユニットが参加し、ある小さな支部などは、支部の全会員数とほぼ同人数の聖歌隊を結成していた。どこもかなりの数の非教会員が含まれていて、ある聖歌隊は3分の2までが求道者によって占められていた。どの聖歌隊でも、バプテスマを受けたばかりの人が歌っていた。そのほとんどは、聖歌隊に参加したことを契機としてバプテスマを受けた人であった。彼らは全員白い服に身を包み、よく訓練を積んでいた。霊的に高められた素晴らしい夕べであった。予言者の指示に従うことによって与えられる祝福が、如実に示された夕べであった。あなた方のワード部や支部に聖歌隊はあるだろうか。非教会員をメンバーに迎えているだろうか。それを実行しようではないか！

ここで、少しこのことを考えてみよう。御存知のように、教会には、7千以上のワード部や支部がある。そのワード部や支部が来年12ヵ月間にひとつの家族を招き入れたとしたら、どうであろう。子供が2，3人いる家族と仮定してみる。その5人家族が聖歌隊に迎えられ、もし改宗できたとしたら、さらに3万5千人の改宗者を迎えることになる。何と素晴らしいことではないだろうか。それが、予言者の要請を実行した報いなのである。

御父の持つすべてのものを受け継ぐ志願者となった人々は、ホームティーチングの責任が、テレビ番組やこの世の関心事よりも重要であることを早く悟るべきである。静かな細い声が促すとき、私たちはそのことをしようではないか。すぐに実行しようではないか。

霊的な感受性は、喜び進んで最善を尽くそうとするすべての人に惜しみなく与えられる賜である。それは、仕えようという望みと、たとえ自分に好都合ではないと思えるときにも、第一歩を踏み出す勇気を持った人に与えられる賜である。私たちが自分の生活に執着拘泥すると、みたまの賜は失せてしまう。

救い主はごく簡単にしかも美しく教えられた。しかし、いわゆる近代文明は私たちの生活に様々な挫折を持ち込んだ。現代の社会環境は、大切な永遠の目的とおよそかけ離れたにせものを、私たちの生活にあまりに多く要求しているように思われる。

先日シンプソン姉妹と私はニュージーランドのオークランド市クィーンストリートを歩いていて、波止場からそう遠くないある場所に来た。そしてそこでひと休みした。そのとき私は、最初の伝道中にちょうどその場所で起きたひとつの出来事を妻に話して聞かせた。

私の目にはあのときの光景がまざまざとよみがえってきた。群衆の中でひと組の年老いたマオリ人夫婦が、輸送船で戦いに出て行くマオリ大隊に手を振っていた。

老夫婦は、ひとりの青年兵士が彼らの方に笑顔を向けると、さらに大きく手を振った。マオリ語の会話から察して、孫息子の出征の見送りであることは明らかだった。

その戦争は、マオリの老人が青年兵士として出征した1800年代の戦争とは似ても似つかない、何千もの人々を一挙殺りくする非道な武器を備えた戦争であった。間もなく青年の姿が見えなくなると、老人が妻の方を振向いて、少々皮肉めいてこう言った。「カ タヒ クア パ ケハ タトウ。」「さあ、これでわしらも文明人じゃて」という意味である。

文明とは何であろうか。進歩とは何であろうか。一体何が大切で、何が大切でないというのだろうか。聖典には、神の道は人の道とは異なると教えられている。これ以上に真実を言い当てた言葉はない。

神が啓示された言葉によれば、この私たちの世界がある目的は、真実たったひとつで、それは単純明快である。それは何年かの年月をこの地上で過ごしにやってくるすべての人に、不死不滅と永遠の生命を得させることである。

知っての通り、不死不滅は、救い主の贖いの犠牲によって成就されている。人種や肌の色や主義、信仰、行ないの一切に関係なく、すべての人は死を越えて生き、無条件で神よりのその賜を恵まれる。

その次の、永遠の生命つまり昇栄を得るには、ひたすら各人がキリストの教えと神権の諸原則に従うことだけが必要とされる。しかしこれは不死不滅とは違って、各個人が永遠の最終目標をめざしてそれにふさわしい規律と生活態度を体得することが必要なのである。

最も感銘深いのは、福音の真理が世界中の正直な人々の心に受け入れられていることである。救い主はその翼の下から、ひとりの人たりとも閉め出しはされなかった。それは現在の教会でも同じである。私の知人には、月曜日ごとに家庭の夕べのため早く帰宅するボストンの銀行員がおり、ペルーの山中に小さな農場を経営する素晴らしい兄弟がいる。トンガのババウ島に住み、カヌーでホームティーチングの召しを忠実に果たす若い父親がいる。彼の信仰は、仕事を愛し、熱心にホームティーチングを行なうロンドンの青年実行家と何ら変わらない。どちらも、喜び進んで実行しているのである。

あのマオリの老人が身に押し寄せてくるいわゆる文明というものについて、その真の価値は何なのかと問うてみることは、至極当然のことである。原子力と機械化のこの文明も、正しく利用するならば有益である。機械化と自動化で、人々に神の永遠の原則を教える



説教に聴き入る父と娘

時間がふえるならば、私たちはこの上なく豊かな恵みを受けるであろう。しかしただ悪い方向へ私たちの歩みを早めるだけならば、敵との戦いに負けるのである。

願わくは私たちに心を動かす力が恵まれ、力を奮い起こして、救い主の生涯と現在の地上の生ける予言者の模範に従えるようにならんことを。ただ実行することが、私の心からの祈りである。主イエス・キリストのみ名により、アーメン。



千年に1度か2度

1820年の父なる神とイエス・キリストの訪れは、偉大な神のみ業の先触れであった。

十二使徒評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー

千年に1か度2度、すなわち塵より成る死すべき人間が生ける霊の結合体となってから10回余りであろうか、人知を超越した途方もなく重要な出来事が起きている。そしてその出来事を契機として、天も地も全く新たな時代を迎える。

20世代に1度か2度、天地は完き友愛の絆にひとつに結ばれる。そしてそこには神聖なドラマが繰り広げられ、それより後の地上の出来事は、全く異なった方向へと展開していく。

ある時は静かな園で、またある時は火と雷の下るシナイ山で、あるいは封じることのできない墓穴の中で、そしてある時は2階の部屋で、主は人類の諸事に自ら手を下され、その救いのためにみこころを表わしてこられた。しかもそれらの出来事は、ほとんどと言ってよいほど衆目の届かないところで起きている。その場にあった人間はほんの一握りにすぎない。

今から6千年前にエデンの東の園で起きた出来事はそのひとつである。そこでアダムとイブは、人類を生ずるために堕落したのであった。もうひとつの出来事は、それまでの歴史の流れを一変させるものであった。神を信じる老予言者は箱舟を造り、地のあらゆる住民と別れて7名の男女と共に乗り込み、水の墓から救われた。

これらの出来事の中で他の追随を許さないのは、エルサレムの城壁外のゲッセマネと呼ばれる園で、地球の主があらゆる毛穴から血をしたたらせ、苦しみを負われたことである。主は、悔改めを条件として全人類の罪を自らの身に受けられたのであった。さらにアリマタヤの墓の内部で起きたもうひとつの出来事は、すべての生ける霊の結合体の生涯に影響を及ぼすこととなった。ひとりの完全な御方の罪なき霊が、神のパラダイスから、かつて槍で突かれ今は栄光の不死不滅となった体に戻ったのである。

しかしながら、ここで特に触れたいことがある。それは、この啓示に基づく宗教の最も偉大な真理と称されるほど重要な出来事である。1820年の早春のある美しく晴れわたった日、ニューヨーク州パルマイラの町はずれの森でその出来事は起きた。それは4月6月のことであろうか。恐らくそうであろう。少なくともそう言い伝えられている。それはともかくとして、その日の出来事は、その日からかの大いなる終りの日に至るまでの間に生を受ける数十億とも何百億とも知れぬ天父の子らの救いに大きな影響を与えることになった。その終りの日に、御子は汚れない状態で王国を天父に引き渡される。

モリアンキュメルがゼーリン山に向かって「移れ」と命じたとき、山は実際に移った。また、モーセが海に向かって「分れよ」と命じたとき、海は左右に分れて壁となった。そしてヨシュアが「日よ、とどまれ、月よ、やすらえ」と命じると、そのようになった。

しかしながら、これらの事柄をあの春の朝、ニューヨーク州西部の森で起きた出来事に比べてみれば、みな取るに足らない小さなことばかりである。

私たちは、この輝ける朝の天来の奇跡に対して、礼拝と感謝の思いを胸に満たしつつ畏敬の念をもって思いをはせる。ではまず、天が開けて奇跡が行なわれる背景について眺めてみることにしよう。

かの恵みの年、1820年は、それまでの1,400年間と同様、暗黒が地を覆い、人々の心がはなはだしく暗く閉ざされた年であった。山々が福音のあけぼのの光にその姿を浮かび上がらせていた頃、世はいまだ霊的な暗闇の中にあり、空には暗雲が低くたれこめていた。天使の導きは止み、神のみ声は聞かれず、造り主のみ顔を拝する人間はいない。賜、しるし、奇跡、その他古代の聖徒たちに授けられていたあらゆる特別な賜は、もはや心に信仰の根をおろした人々の共有のものではなくなっていた。示現は止み、啓示はなく、天は閉ざされていた。古えの時代、主は義と選民の上に注がれたが、今はそれもない。

死者のよみがえりはなく、盲人の目が開かれることも聾者の耳がその機能を回復することもなかった。その行ないが天においても地においてもつながれるという正統な権能を有する者がいないのである。パウロは福音を説き、ペテロはその福音のために死んだ。その同じ福音が、もはやキリスト教各派

の説教壇から宣べられないのだ。

背教が極限にまで達し、全世界がくまなくその闇の中に埋没していたのである。かの卑しいナザレ人の宗教はどこにも見出せず、すべての宗教、教派が邪道に陥っていた。サタンは歓喜し、その使いたちはあざけり笑っていた。当時の社会や宗教界は、みなこのような状態であった。

しかし、万物を知りたまい、この世と地獄のいずれに対しても力を持っておられる神の深い知恵により、約束されていた回復の時が訪れた。1820年、偉大なるエホバは、世の始めから聖なる予言者たちの口を通して語ってこられた万物更新の業を開始されることになったのである。こうして子孫のことについてアブラハム、イサク、ヤコブと交わされていた誓約がまさに成就されることになった。

植え込み、刈り取る季節になると、ぶどう園の主人は必要な人数をぶどう園に送る。人々の間における主のみ業は人によって行なわれるのである。すなわち、選ばれた者たちが主の僕となって働く。このようにして、定められた時に、定められた人ジョセフ・スミス・ジュニアがこの世に誕生した。この偉大なみたまの人については次のように言われている。「主の予言者にして聖見者なるジョセフ・スミスは、ただイエス・キリストを除くのほか、この世に生を受けたる何人よりもこの世に於ける人類の救いに尽したり。」（教義と聖約 135：3）こうしてこの予言者は、予任されていた通り、偉大な末日の業の到来に際して主の器となて働いた。

聖なる市シオンを築くために主がエノクを必要とされたとき、彼はそこにいた。イスラエルの偉大な律法学者モーセを主が必要とされていたとき、モーセはいた。また約束されたメシヤが人々を贖うために自らの命を捧げる時が来たとき、大いなる救い主はそこにおられた。そして、「時満ちたる神権時代の先駆をなす」者として、偉大な末日の予言者ジョセフ・スミスがそこにいたのである。（教義と聖約128：18）

主はジョセフ・スミスに次のように言っておられる。「地のいや果にある者すら汝の名を訊ね、愚なる者ども汝を嘲弄し、地獄は汝に向いて怒りを起さん。

然るに心の潔き者、賢き者、貴き者、徳ある者たちは汝の手の下よりいさめと権威と祝福とを常に求めん。」（教義と聖約22：1，2）

1820年、まさに時は熟し、みこころにかなう人がそこにいた。時を待たずして示現は開け、福音の真理の燃えさかる炎は、主のぶどう園にはびこる宗派のいばらと雑草を焼き尽くすこととなったのである。

その日に備えるかのように、将来の主の予言者が世に知られぬままひっそり平和に暮らしていた辺境地方には、宗教に対する関心と不安が高まっていた。堕落したキリスト教界の牧師たちは狂ったように自分の宗派の教えを説き、「ここを見よ」「かしこを見よ」と叫んでいたのである。（ジョセフ・スミス2：5）

宗教を公言する者たちはみな、あらゆる理屈と詭弁を弄して、自らが救いをもたらすと信ずる組織に改宗者を得ようとしていた。それはやがて激しい感情の対立にまで発展し、大勢の人々は互いに苦々しい気持を抱いていた。そして「言葉の争いと信念の動揺」から憎悪が広がり、人々はいろいろな宗派に分裂してしまったのである。（ジョセフ・スミス・2：10）こうした論争のただ中にあって、将来の神の予言者は自分の胸に何度もこう問いかけた。「私は何を為すべきか。すべてこれらのともがらの中、何人が正しいか。或いは彼らは共にことごとく間違っているのか。もし彼らの中で誰かが正しいとするならば、それは何れであって、どうして、それがわかるのか」と。（ジョセフ・スミス2：10）

神が聖なる「言葉」であるイエス・キリストに命じて生ける光を輝かせたまい、真理を求めて思い悩む少年の心を照らしたもうたのは、まさにこの時であった。

聖典を調べ、福音の真理を心に銘記していただきたい。この世において永遠の生命の言葉を心ゆくまで味わい、来たるべき世における不死不滅の光栄を待ち望んでいただきたい。予言者たちが記した言葉を残らず読み、深く考え、祈って欲しい。これこそ主が、主の聖なる言葉に対して私たち人間にたどって欲しいと願っておられる道である。そして時の始めから終りに至るまで万事を見通し、すべての子供たち



を愛と慈悲の下に治めておられる神は、この進歩と啓示の道に、そのみ手をもって少年ジョセフを導かれたのであった。

当時14歳のジョセフは、それからわずか24年後に、これからまさに見ようとしていることのために、またそのことについて述べた証のために殉教を遂げる。彼が読んだヤコブ書の一節が、予言者の筆になる聖なる書き物の中で最も大きな影響を及ぼすこととなったのである。

モーセは次のような偉大な宣言を下している。これは、多くの人々が旧約聖書中最も価値ある言葉とみなしているものである。「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。

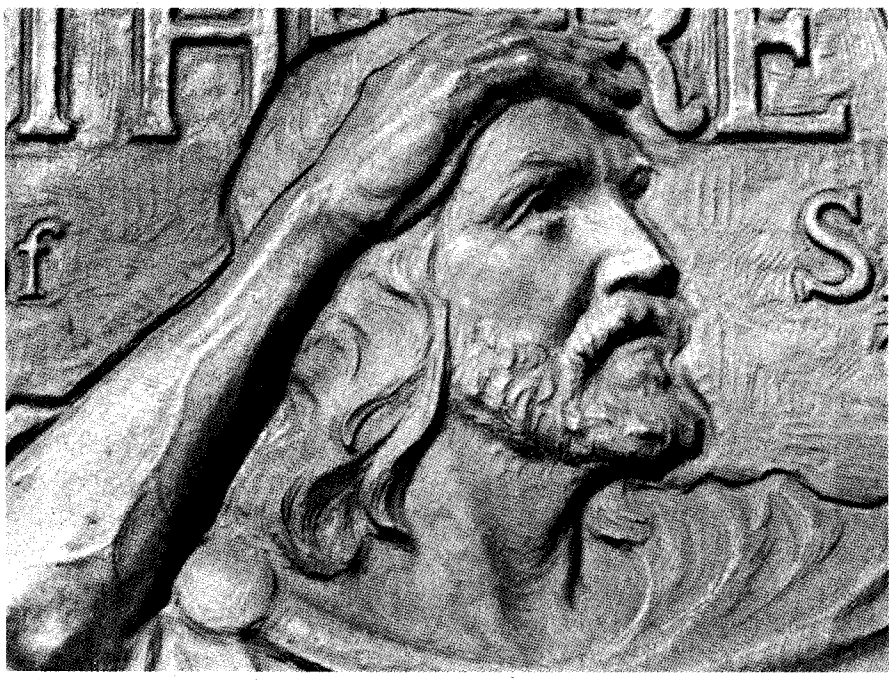
あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。」（申命６：４，５）また主イエスも、愛と奉仕について述べたこの言葉を取り上げ、第一の大切な戒めとしておられる。

次の聖句は、新約の時代に語られた最も偉大なものとして、大方の人が認めるところのものである。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ３：16）

この種の聖句がいかに重要であり、なおかつ人々の生活に大きな影響を及ぼしているか、いくら語っても語り尽くせない。しかしながらヤコブの言葉は、最初の示現への扉を開き、すべての人がこの末日における神のみ業を知ることのできる方法を私たちに教えてくれる。この短い言葉には、予言者の口を通して語られたどの言葉よりも力強い意味が含まれているのである。すなわち、やがて改宗者をもって全地を覆うという神の最も大いなるみ業の先駆けとなったのが、この聖句であった。

こう書いてある。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」（ヤコブ１：５）

何と平易で簡潔で純粋な言葉であろうか。時を超えてすべての人々に、彼らを造られた神のみこころを知る方法を告げた言葉がここにある。これこそ新約時代の最後の予言者のひとりが聖霊の導くままに書き記した言葉、末日の最初の予言者の胸に深い感銘を与え最も大いなる福音の神権時代を先導する役割を果たした言葉なのである。



三人の見証者の記念碑に描かれた愛弟子ヨハネ。アバード・フェアバンクス作。(テンプルスクウェア)

人よ、あなたは知恵に不足してはいないだろうか。どの教会が正しくどれに加わるべきか知っているだろうか。もっと多くの知識を必要としてはいないだろうか。時間と空間という障害を乗り越えて、永遠の見地から物事を見ることができるだろうか。

では、神に願い求めていただきたい。神にまみえることを求めていただきたい。あなたの造り主を信頼し、真理とあらゆる義の源である御方に心を向けていただきたい。

しかしながら、その願いには条件が伴なう。ヤコブはこう記している。「ただ、疑わないで、信仰をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。

そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。」（ヤコブ１：６，７）

まさに歴史の分岐点であった。

神のみたまが静かに暗黒の世に下り始め、まだ世に生を受けていない人の霊が「光あれ」のと宣言を待ちもうけていたちょうどそのとき、若きジョセフは神に導かれ、偉大な光明と真理の時代の先駆けとなったかの聖句に、思いをはせていたのである。

「どの聖句にもまさって、この時ほどこの言葉が私の心に力強く迫って来たことはない。それは私の心の底という底を大きな力で貫き通すような気がした。私はこの言葉を再三再四思いめぐらし……」（ジョセフ・スミス２：12）

神の方法はこうであり、聖きみたまはこのように働く。ヤコブの言葉は、心を神に調和させる人々以外には決して知ることのできないある力をもって、偉大な末日の予言者の心に深く浸透していったのである。

その地方全域を憎悪と混乱に陥れていた宗教上の論争について、ジョセフ・スミスは次のように語っている。「種々な教派の宗教々師たちは、聖書の同じ章句をめいめい非常に異って解釈し、その結果人が聖書に訴えて疑問を決しようとする信頼をことごとくうちこわしていたからである。」（ジョセフ・スミス２：12）

彼は神に願い求めなければならなかった。すべての人がそうである。そして彼はそれを実行した。家からさほど遠くない森に入り、人目につかないところでひとりひざまずいて祈ったのである。彼は身も霊もすべて造り主に託し、心の願いを神に訴えた。

人類の将来と希望が開かれる時であった。陰うつな背教の暗の中に一条の光が投じられ、天地創造のときのあの「光あれ」との宣言が再び発せられる時であった。そして、福音の光、「永遠の言」の光が、今まさに全地に降り注がれようとしていた。

しかし、重大な事柄は容易に進むものではない。地を揺るがすような出来事は、山ほどの抵抗にあうものである。すべての物事には反対のものがある。真の教会を見出そうとする人は、世の反対にあうのである。ジョセフ・スミスも例外ではなかった。

祈り始めるや否や、悪魔の運勢が恐るべき力をもって戦いをいどんできた。ジョセフはこう語る。「……私は何とも知れぬ力によって捉えられ、ついに私は全く抵抗力を失った。またその力は私の舌さえしびれる程の驚くべき力を振ったので私は物言うこともできなかった。そしてあたりはだんだん暗くなり、一時はあたかも私はこのまま急に死んでしまうかのように思われた。」（ジョセフ・スミス２：15）

これがサタンのやり口である。天に住まう神が、あらゆる時代を通じて最も大いなる光をこの世に送ろうとされたとき、悪魔の運勢は、彼らの暗黒の王国において最も深い闇と罪悪とをもって対抗したのである。約束されていた回復の業に対してこのように戦いをいどんだ私たちの共通の敵ルシフェルは、成就したこのみ業に対して今もなお戦いを企てている。

「しかし、私は自分を捉えたこの敵の力から何とぞ逃れしめたまえと、全力を振りしぼって神を呼び求めたが、私が今にも絶望に打ち沈んでわが身を破滅に任せようとしたその瞬間、それは考えただけの滅亡というようなものではなく、目に見えぬ世界から来た何ともわからぬ生き者で、全くこれまで私がどんな者に逢っても覚えたことのない程の驚くべき強い力を見えた者の力に打ち負けて、わが身を見捨てようとしたその瞬間、この非常な驚きの瞬間である、私は自分の真上に太陽にも増して輝やく一つの光の柱を見た。）（ジョセフ・スミス２：16）

こうして天は裂け、幕は開かれた。長い間閉ざされ続けた天からは祝福が雨のように降り注ぎ、光明と真理、そして啓示と奇跡の時代が遂に到来したのであった。

神の偉大な末日のみ業の開始には、時、必要性、人、神のみこころ、これらの条件がすべて整っていた。天変地異は起こらなかった。シナイ山の雷と雲のような先触れはなかった。それはマグダラのマリヤが、開かれた墓の前で復活された主に「ラボニ」と畏敬の念をもって呼びかけたときの、あの静寂の中で起こった出来事であった。

そしてこの瞬間、重々しい暗黒は吹き払われ、かつて人に下され記録された中で最も崇高な示現が開かれて、古代の神々が再びそのみ姿を現わされたのである。

「私は自分の真上に太陽にも増して輝やく一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて、光はついに私の上にふり注いだ。

その光の柱が現われるや否や、私はわが身を縄った敵から救い出された事に気が付いた。そしてその光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。」（ジョセフ・スミス２：16，17）

この御方こそ天におられる大いなる神である。何という驚異であろうか。天が開かれ幕が開き、宇宙の造り主が降って来られる。そして、天父と御子が地上の人間に言葉をかけられるのである。再び聞かれる神のみ声、神は死んだのではなかった。実際に生きておられ、言葉をかけられる。私たちは今や、古代の人々と同じように神のみ言葉を聞くのである。

ジョセフ・スミスはこう語る。「私が主に伺おうとした目的は、私が何れに加入すべきかを知るためにすべての教派の中で何れが正しいかを知ることであった。それで私はわれに返って言葉が出せるようになるや否や、私の真上で光に包まれて立ちたもう御方に、すべてこれらの教派の中で何れが正しいかそして私は何れに加わるべきかを伺った。

ところがその御答に『汝はその何れにも加わるべからず、彼らことごとく誤れるを以ってなり』と言いたもうた。そして、私に話しかけたもうたその御方は『彼らの信条はことごとくわが目より見て悪むべきものなり。また彼ら信条を口にする者たちはことごとく腐敗せり。また彼らは唇もてわれに近づけど、その心はわれに遠ざかれり。彼らは人の誡命を教えとして教え神を敬う様をすれども神の力を否む』と宣うた。」（ジョセフ・スミス２：18，19）

千年に１度か２度、新しい扉が開かれる。この世において平安を得、来たるべき世において永遠の生命を受け継ぐ者になりたいと望む者はみな、その扉をくぐらなければならない。

20世代に１度か２度、新たな時代の世が明ける。東から照る光は、人の心から地の闇を追い払う。

人目の届かないある静かな森の中で、天と地との親しい交流があった。1820年春のニューヨーク州パルマイラでのことである。そして、これに比肩し得る出来事は、もう二度と起こらない。

人間が神を求め、神がそれに答えられた。

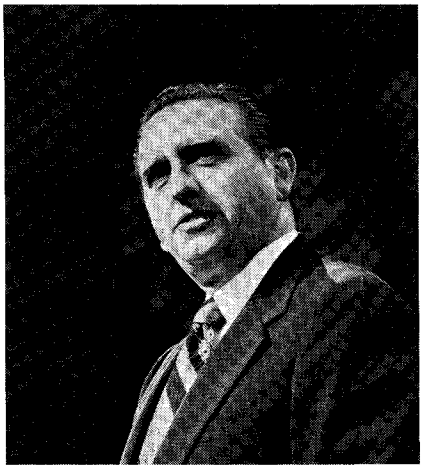
ジョセフ・スミスが天父と御子にまみえた。

私はこのことを知っており、それを証する。イエスは神の御子であり、私たちはその証し人である。主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

幼な子の信仰

「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。」

十二使徒評議員会会員
トーマス・S・モンソン



大会の時節は、1年のうちでも何と素晴らしい時であろうか。ソルトレーク・シティーのテンプルスクウェアは、主のみ言葉を聞くために遠くからやってくる何千何万の人々の集合場所となる。きょうこのタバナクルには、あふれるばかりの人が集まっている。なつかしげな会話が合唱団の歌と祈りと、説教を述べる人の声に変わると、うるわしい敬虔な雰囲気が場内を満たす。

皆さんのお顔に真理への信仰と献身を拝見するたびに私はへりくだる思いを覚えている。歴史を経た座席の堅さは年月を越えてもいっこうに変わらず、座り心地は悪いというのに、皆さんは辛抱強く腰かけておられる。

特に、来場の子供たちに感謝している。左手の二階席には、10歳ほどのかわいい少女が座っている。その女の子の名前も、どこから来たのかも私は知らない。その汚れない笑顔とやさしい眼差しを見て、私はきょうのこれからの時間、準備していた話をやめて、あなたに話をしたいと思う。

私はあなた位の少年であった頃、私にも日曜学校の教師がいた。彼女はよく聖書から、世の救い主、贖い主であるイエスの話を読んでくれた。ある日彼女は、手を接いて祈ってもらおうと小さな子供たちがイエスの前に連れてこられたことについて教えてくれた。イエスの弟子たちは子供を連れてきた人々を叱った。「それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、『幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である』。」(マルコ10：14)

その教えは、以来ずっと私の胸から離れない。つい数カ月前も、私はその意味を再認識し、その力にあずかった。私の教師は主であった。そのときの経験をお話したいと思う。

ソルトレーク・シティーのはるか遠く、ルイジアナ州シュリブポートから130キロほどの所に、ジャック・メスビン家族が住んでいる。彼らは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である。つい最近まで愛らしい娘さんがいて、家中を明るくしていた。その名前をクリスタルという。しかし彼女はわずか10歳でこの世の生涯を閉じたのだった。

クリスタルは家のまわりの広々とした農場を駆けまわるのが好きだった。乗馬が得意で、4Hクラブの成績もすぐれ、その地方や州の博覧会で賞をもらっていた。彼女の将来はまさにバラ色で、毎日は楽しかった。ところがそんなときに、足に異様なはれ物が見つかったのである。ニューオーリンズの専門医は診察の結果、がん腫という診断を下した。足を切断しなければならなかった。

彼女は手術によって回復し、いつも陽気に、不平を言わず毎日を過ごしていた。しかしそれから、医師たちは、がんが小さな肺に転移しているのを発見した。メスビン家の人たちは、それでもあきらめず、クリスタルが教会幹部から祝福を受けることができるように、ソルトレーク・シティーへの飛行機の旅を計画した。メスビン家は教会幹部にひとりの知り合いもなかったので、クリスタルに全教会幹部の写真を見せて選ばせたのが、偶然にも私であったという。

クリスタルはソルトレーク・シティーまで来ることができなかった。病状が悪化したせいである。死は近づいていた。しかし彼女の信仰はぐらつかなかった。彼女は両親にこう言った。「ステーキ部大会はまだ？教会幹部はいらっしゃる？きっとモンソン兄弟よ。私が行けないから主はきっとモンソン兄弟を私の所に送って下さるはずよ」と。

その間にソルトレーク・シティーでは、シュリブポートでの出来事はまるで知らないまま、珍しいことが起きていた。ルイジアナ州シュリブポートでステーキ部大会が行なわれる週に、私はテキサス州のエルパソへ行く責任を受けていた。ところが、エズラ・タフト・ベンソン長老の事務所へ呼び出しがあった。エルパソのステーキ部の分割はすでにほかの兄弟が準備しているので、私にほかの所へ行くようにというのである。もちろん異論はなかった。私はどこでもよかった。ベンソン長老はこう言った。「モンソン兄弟、ルイジアナのシュリブポートステーキ部へ行ってほしいと思うんですが。」私はその責任を引き受けた。やがてその日が

来て、私はシュリブポートに行った。

土曜日の午後は集会が幾つもあった。ステーキ部長会との会合、神権指導者たちとの集会、祝福師との面接、ステーキ部の指導者会。ステーキ部長のチャールズ・F・ケーブル兄弟が少々遠慮がちに、がんを病んでいる10歳の少女を祝福する時間があるだろうかと、私に尋ねた。少女の名前はクリスタル・メスビンだった。私は、できれば祝福したいと答え、彼女は大会に来るだろうか、それともシュリブポートの病院にいるのだろうかと尋ねた。スケジュールが詰まっているのは重々承知していた。するとケーブルステーキ部長は消え入るような小声で、クリスタルは家から外に出られないのですと返事した。シュリブポートから実に130キロの場所である！

私はその晩と翌朝の集会予定と、帰りの飛行便も調べてみた。時間は全くなかった。するとそのとき、別の方法が頭に浮かんだ。大会の公の祈りでその子のために祈れないものかと。主は必ずわかって下さるはずだ。そういうことにして、私たちは予定の集会をそのまま続けた。

そのことがメスビン家に伝えられ、了解はしたものの、みんないささか失望した。主は自分たちの祈りを聞いて下さらなかったのか。主はモンソン兄弟をシュリブポートまで遣わして下さったではないか。家族はもう一度祈った。最後の願いを聞いて下さい、大事なクリスタルの願いを聞きとどけて下さいと。

メスビン家の人たちがひざまずいて祈ったちょうどそのとき、ステーキ部センターの時計は7時45分を指していた。指導者会は霊的だった。私はメモを区分けして説教壇に立つ用意をしていた。すると、私の霊に語りかける声が聞こえてきた。その言葉は短かく、日頃聞き慣れたこの言葉だった。「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。」（マルコ10：14）　メモを見る目がかすみ、私の心は祝福を求めているいたいけな少女のことでいっぱいになった。私は



天使を見、その声を聞き、金版に触れる三人の見証者。アバード・フェアバンクス作。（テンプルスクウェア）

決断した。集会予定を変更した。集会よりも人の方がもっと大切である。私はジェームズ・セラ監督に、メスビン家に連絡を取ってきて下さいとお願いした。

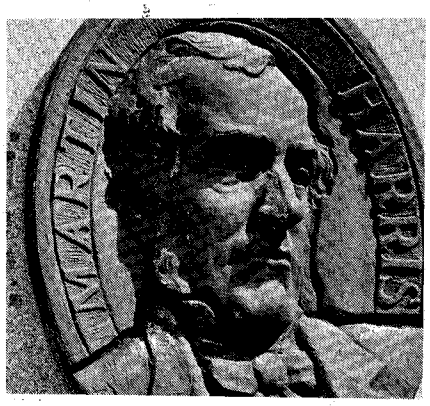
メスビン家の人たちが祈り終えて立ち上がったところで、電話のベルが鳴り、翌日曜日、主の日の朝、私たちが断食と祈りの精神をもってクリスタルの病床にかけつけるという知らせが伝えられたのである。

私はあの早朝の、メスビン家が家庭と呼んでいる彼らの天国への道中を、決して忘れることができない。私はこれまで、聖なる宮居を含めて清い場所にたびたび入ってきた。しかし、主の存在をあのときのメスビン家におけるほど強烈に感じたことは、いまだかつてない。大きなベッドにひっそりと横たわったクリスタルは、本当に小さく見えた。部屋は明るく楽しげで、東の窓から寝室いっぱいに射し込んでくる日光は、私たちの心に満ちていた主の愛と同じにまばゆかった。

家族はクリスタルの枕もとを囲んだ。もう起き上がることもできず、話もできないほどに弱っている幼な子の顔を私は上からのぞき込んだ。病気は進み、すでに彼女は目も見えなかった。私はみたまの強い力を感じて、ひざまずき、彼女のかぼそい手を取って、ただこう言った。「クリスタル、来たよ。」彼女は口を開いてつぶやいた。「モンソン兄弟、いらっしゃるってわかってました。」私は部屋を見わたした。立っている人はいなかった。みんながひざまずいていた。祝福を施すと、クリスタルの顔にかすかな笑みが浮かんだ。彼女の「ありがとう」というささやきを最後にして、私たちはひとりずつ静かに部屋を出た。

それから4日後の木曜日、シュリブポートの教会員がメスビン家の人々と信仰をひとつにし、クリスタルのためにやさしく愛の深い天父に特別な祈りを捧げる中で、クリスタル・メスビンの清らかな霊は、病にむしばまれた体を離れて神のパラダイスに入った。

あの安息日に陽の光があふれる寝室でひざまずいた私たちにとって、特に、



三人の見証者の記念碑に描かれた見証者のひとりのマーテン・ハリス。アバード・フェアバンクス作。(テンプルスクウェア)

毎日あの部屋に足を踏み入れ、クリスタルの臨終をみとった両親にとっては、ユージン・フィールドのこの不滅の言葉は、貴重な思い出を呼びさますものである。

おもちゃの小犬はちりに埋もれながら、
でもしっかりとけなげに立っている。
おもちゃの兵隊は赤くさび、
両手の小銃は青さびをふいて。
おもちゃの小犬が真新しかったあの頃、
おもちゃの兵隊がピカピカだった頃、
かわいいブルー坊やがおもちゃに唇をよせて
そこへすわらせたあのとき。
「ねえ、ぼくが来るまで行かないで」
「静かに、静かにしてね」
そう言って坊やはベッドに歩いて行き、
かわいいおもちゃの夢を見た。
坊やが夢を見るときは、天使の歌が
かわいいブルー坊やの目をさます。
ああ、年は久しく、歳月は長く。
でも小さなおもちゃの友だちは今も変らず忠実に！
ああ、ブルー坊やに忠実に立っている。
昔と同じその場所で
小さな手が触れるのを待ち
かわいい顔のほほえみを待って。
長い長い年月を待ちながら
どうしたのかといぶかしげに
あの小さな椅子のほこりの中で。
かわいいブルー坊やはどうしたの、
唇をよせてそこにすわらせてくれた
あのときから。

(*Little Boy Blue*「かわいいブルー坊や」　*One Hundred and One Famous Poems* より　p.15)

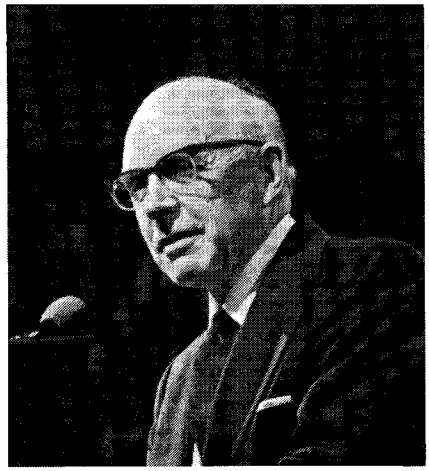
私たちはいぶかり、待ち長らえる必要はない。救い主がこう言っておられる。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」(ヨハネ11：25，26)　あなた方に、ジャック・メスビン、ナンシー・メスビンに、主は言っておられる。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14：27)　そしてあなたがたの愛らしいクリスタルから、このような慰めの言葉が聞けるであろう。「あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。……わたしのおる場所にあなたがたもおらせるため……」と。(ヨハネ14：2、3)

二階席の愛らしい友人、あなたに、そして世界各地の信者たちに。私は、ナザレのイエスが幼な子らを愛し、幼な子の祈りを聞き、祈りに答えたもうことを証する。救い主は実にこう言われた。「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。」(マルコ10：14)

この言葉は、責任を受けてルイジアナ州シュリブポートに行ったひとりの使徒に主が語られた言葉であったことを、私ははっきりと知っている。なぜなら、私がそれを聞いたからである。

私はこれらのことが真実であることを証する。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。

予言者の信仰



キンボール大管長が霊感により伝道の召しを受けた1974年以来、多くの出来事が起き、今後もそれはさらに続くであろう。

七十人最高評議員会会員
A・セオドア・タトル

今ミルトン・R・ハンター長老を失ったことは実に残念である。彼は偉大で才能豊かなしもべであり、誠実な友であった。しかし、私は今日S・デルワース・ヤング会長と七十人最高評議員会を代表し、その一員としてジーン・R・クック長老を心から歓迎申し上げたい。彼は充分な資格と充分な訓練を受けた、偉大な才能の持ち主である。彼は主を愛し、み業が何であるかを知っており、全身全霊を捧げて働く人である。私たちは、七十人第一定員会が組織されることを聞いて、あなた方と共に喜ぶものである。この定員会の３名の会員、すなわちチャールズ・A・ディディア、ウイリアム・R・ブラッドフォード、ジョージ・P・リーの各長老を真心から歓迎する。彼らは雄々しく、人も知る有能な人物であり、立派な宣教師である。私たちは彼らと共に働く特権を心待ちにしている。

信仰には大きな力がある。「信仰はあらゆる行動の原動力である。」（ジョセフ・スミス、*Lectures on Faith*「信仰講話」p.８）

予言者ジョセフは次のように語った。「天地が組織されたのは信仰によるのである。神が語られ、混沌が聞き従い、世界は秩序だった。これは神が信仰を持っておられたからである。人もそうである。人は神のみ名を信じる信仰によって語り、太陽はその運行をとどめ月は従い、山々は動き、獄は落ちた。

人々に信仰がなかったならば、太陽と月と山々と獄に語っても……空しかったであろう。

かように、信仰は万物を治める力と支配と権威とを持つ第一の大いなる統治の原則である。……これなくして力はなく、力なくしては創造も存在もあろうはずがない！

人が信仰によって働くとき、彼は肉体の力によらず、精神の力によって働く。肉体の力を行使する代りに、言葉により働く。信仰によって働くのである。」（同上　p.９，10，61）

私は基本的に信仰には２種類あると思う。私がこれまで話してきた信仰、すなわち神は生きて諸天を治めておられるという信仰は、人生の試しに立ち向かう私たちにとっては支えとなるものである。私たちはその信仰によって、だれもが人生で遭遇する試練に屈服することなく耐えていくことができる。その信仰はこの民の生活を、全歴史を通じて貫いてきたものである。これはまた、私たちの子孫に残す大いなる遺産である。

信仰には、もうひとつある。より強い、しかし人にあまり知られておらず、気づくこともまれな信仰である。神へのこの信仰は、私たちの正しい望みを遂げる能力を増してくれる。それは創造的で極めて重要な信仰である。それが行使されなければ物事が発生しないという大切な信仰である。それは人間の生活に活気を与える大きな力であり、山をも動かす信仰である。

聖典は、天の力には、この世の人間の信仰に支配されるものがあることを教えている。私たちが成功するように助ける主の力は、私たち自身の信仰によってのみ発揮されるのである。「世の人々の中に信仰がなければ神は人の間に奇蹟を行うことができないので、人々が信仰してからでないと神は人に現われたまわなかった。

いつ何時でもまだ信仰のない中に奇蹟を行った者はない、すべて奇蹟を行った者はまず神の御子を信じた。」（イテル12：12，18）

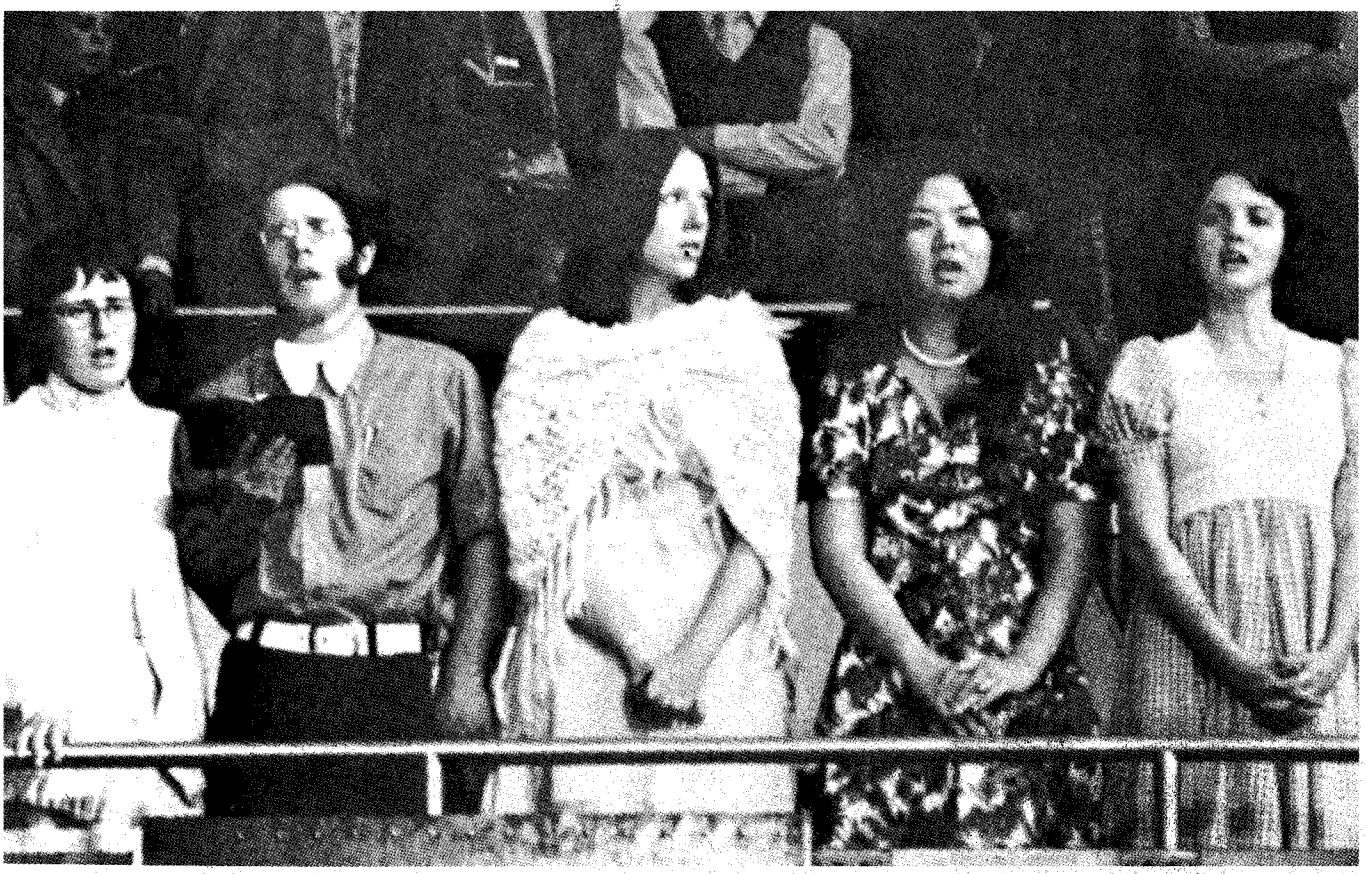
行ないのない信仰が死んだものであるのと全く同じように、信仰のない行ないは死んだものである。私たちは正しい望みを実現させることができる。主が言っておられる通りである。「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように。」（マタイ９：29）

この１年半の間に、私はこのような信仰が事を引き起こすのを見た。それは予言者によって始まった。彼は語り、その言葉はそれまで眠っていた行動に霊的な力を吹き込んだ。その結果民は行動し、悔い改め、変わり、事態は変化した。

予言者は将来を予言するだけではない。予言者は信仰を行使して、事を引き起こすのである。

予言者が語ったときからどんなことが起きたかをお話ししよう。

彼は、さらに多くの宣教師と語った。すると大勢が応じた。それまで宣



教師の出ていなかった世界各地から、しかも大勢の人々が。初めはひとりふたりと、次いで何十人、何百人、そして今は何千人と、心が動いたのである。生活が変わっている。若人が応えている。犠牲が増し、両親が喜びの涙を流している。予言者はそれを喜んでいる。

平素、人々は統計に耳を貸さないが、しかしこれは感銘深い統計である。1年半前、ブラジルではブラジル人宣教師がわずか40名であった。それが現在では100名を越えている。南米各地、メキシコ、アジア、海の島々、ヨーロッパその他の世界の所々方々で同様のことが起きている。

1年半前は、世界中の伝道部を合わせてみても宣教師数は17,600名であった。当時の計画では、今年（1975年）末には19,000名くらいであろうと考えられていた。ところが現在(10月初め)までですでに宣教師数は21,000名を越えている。年内に22,000名を越える見込みである。

宣教師が働くとき、どういうことが起きるかをお話ししよう。

私の家の近所にひとりの青年がいた。彼は召しの通知がいつ来るかと、毎日決まって私の家の前を通り、郵便受けを見に行っていた。推薦書が送られてから、返事がいつになく遅れているようだった。その彼に手紙が届いた日、私は彼の様子を目撃した。彼は郵便受けのところで手紙の封を切り、友だちを呼んで、ふたりで躍り上がって喜んだ。それからグッドニュースを家族に知らせようと、ころがるように道路を駆け下って行った。数分すると16歳の妹が散歩から帰ってきた。そこで私は、兄さんが伝道の召しを受けましたよ。おめでとうと言うと、彼女もまた大喜びし、家をめざして一目散に駆け出した。毎週何百という家庭、何百という人々の心を歓喜させるその期待、その喜びを考えてみていただきたい。それは家族の召しなのである。

この召しは宣教師の家族を祝福するばかりか、宣教師が行く先々の人々をも祝福する。インディアンの人々の間で働いたひとりの女性がこのようなことを書いている。「ナバホ・インディアンは偉大な人々です。彼らに対する愛はとても口では表わせません。……

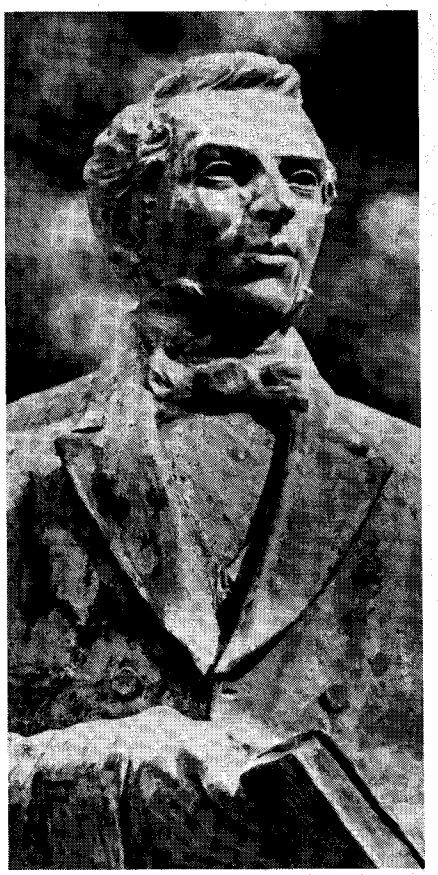
ナバホの人たちは白人の私を自分たちの仲間として受け入れて下さいました。私を白い娘と呼んで下さいました。言葉がなかなか覚えられませんでしたが、レッスンを読みながら教えることができました。ナバホ・インディアンの同僚たちに細かい説明をしてもらえたことは、本当に恵まれていました。私たちは愛によって心を通じ合うことがわかりました。ナバホの人たちは私を愛し、私も彼らを愛しました。私たちはほほえみや笑いや、時には涙で、話をしたのです。彼らは私の不完全なナバホ語を辛抱して聞いてくれ、言葉が思いつかないときには助けて下さいました。私は心に証を得、言葉ではとうてい表わしきれない気持を感じました。……」

彼女は手紙をこう締めくくっている。「12月にひとりの帰還宣教師に会いました。私たちは愛し合うようになり、最近神殿で結婚しました。」

私たち家族が南米で生活していた間

に、長男が伝道に出る年齢になった。大半が改宗者の小さな支部で、彼が初めての宣教師であった。彼の歓送会の閉会の祈りを改宗したばかりの人が捧げたが、彼は心の思いをこう表現した。「父なる神様、私たちのところに宣教師たちが何人も来ました。彼らは私たちの生活を祝福してくれました。私たちは今、今度はこちらから宣教師を送らなければならないと思います。息子たちを主に仕える者として育てることができるように助けて下さい。」

この信仰の祈りは答えられた。その会員の子息は19歳でイタリアへ伝道に召された。私は彼が働いている支部の



主の教会はこの末日の神権時代に予言者ジョセフ・スミスを通して回復された。マホンライ・ヤング作。（テンプルスクウェア）

支部長から、彼について次のような手紙を受けとった。

「ラブオノラ長老が着任してから6カ月たちました。……ここにいた短い間に、彼は9人もの人にバプテスマを施しました。

あなたは以前から彼を御存知ですから、私のちょっとした経験をお伝えしたいと思います。あるとき、私たちは入院している教会員を見舞いに行きました。……20人ほどの病室に、生まれてすぐに捨て子にされた3歳の男の子がいました。彼を愛してくれる人はだれもいなかったのです。その子は鼻をたらしたまま、ベビーベッドの中で遊んでいました。ラブオノラ長老は実の父親のようにやさしくその子の鼻をかんでやり、少しの間ひざに抱き上げ、キスをして、やさしくベッドに返しました。子供の顔には驚きと安堵が入り混じったような表情が見えました。あの青年は私たちが会ったうちで最も偉大な宣教師だと思います。彼が私たちの伝道部のこの支部に来て下さったことは本当に大きな祝福です。」

息子を主に仕える者に育て上げることができるように祈ったあの改宗者は後にラブオノラ支部長となり、次男をも伝道に送ったことは、信仰のたび重なる証である。

最近飛行機の中で、私たち夫婦のわきに若い姉妹宣教師が席を取った。彼女は私たちを知らない様子で、やがて会話が始まった。彼女は私がだれであるかを知ると、がっかりしてこう言った。「まあ、残念！　モルモン経を差しあげようと思っていましたのに。ニュージーランドに着くまでに、モルモン経を3冊だれかに差しあげるつもりでした。」

兄弟姉妹、私たちはもうひとつのチャレンジを受けている。それは自分が宣教師になることである。私たちは宣教師を送り出そうとばかりしていて、このことをあまりしていない。しかしこれこそ、私たちがあの2番目の種類の信仰を働かす機会である。

私たちは自分自身と家族の目標を立て、それが達成できるように真剣に祈らなければならない。神への信仰を働かせなさい。そうすれば成功するであろう。

1年半前に、キンボール大管長は次のように述べた。

「ステーキ部や地方部の伝道活動は……ようやく始まったばかりである。私たちが……自分の視点を変え、自分の目標を立てるべき時がすでに来ていると、私は考える。」（*Ensign*「エンサイン」1974年10月号　p.14）

ステーキ部伝道活動は眠れる巨人であり、目をさます事業はすでに始まっている。私たちは今全ステーキ部長に、この活動にこれまで以上の関心を注ぎ、以下の3つのことを実行するようお勧めする。(1) ステーキ部の目標を立て、(2) 七十人を正しく組織して正しく働かせる。(3) 全家族が福音を他の人に分かち与える。私たちの指導者がしているように、この業のために、すべての教会員は歩みを早めなければならない。今朝、あのように素晴らしい事実となって示されたように。

宣教師となって奉仕する場はどの教会員にもある。国内、国外を問わず、またこの世と霊界のいずれに住む人々のためにも働けるのである。

今から1年半前、ひとりの人が伝道活動はもっと改善できる、もっと効果的に、もっと多くの人を導くことができると、その信仰を披歴した。当時それは不可能に思えた。しかし彼を補佐する人たちは直ちに自分たちの信仰を彼の信仰と合わせ、信仰は3倍になった。次に十二使徒がそれに加わり、教会指導者と大勢の教会員がその信仰を幾倍にも幾倍にも増してきた。信仰は信仰を呼び、その業は現在力強く進展している。

私たちの救いと天父のすべての子らの救いは、生ける予言者の勧告に私たちがどれほど従順であるかにかかっている。願わくは、私たちがさらに大きな神への信仰を奮い起こして、それを働かせることができるように。

私は、この業が真実であり、キンボール大管長が生ける予言者であることを証する。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



君も知らなければならない

父親は模範を示さなければならない。その上に、息子たちと語り、彼らに経験を与える必要がある。

十二使徒評議員会補助
マリオン・D・ハンクス

若い人たちが、教えようとする姿勢で行なうレッスンよりも、親や大人の私たちの行ないからもっと多くのことを学ぶということは、何度も言われて来たことである。正直や誠実を口でいくら教えても、実際にそれを標準として確立している人々と交わり、観察することにはとうてい及ばない。若者たちは、私たちが口で言うことや、自分はそのつもりでいる私たちの姿ではなく、私たちの現実の姿をまねるのである。誠実で、真っ正直な生活、責任ある市民として生活する模範にまさる教えはない。

しかし私たちには、親として、また大人として自分の持つ知識や理解、強い確信を子供や若い世代の人々に引き継ぐ大きな特権がある。この特権が極めて重要であることは言うまでもない。また模範が大切であるからと言って、この神聖な義務をおろそかにしてよいというわけではない。私たちが母親のひざで昔学んだ教えは、今も鮮明に残っており、父親の口から聞いた教えは心の奥底に深くしみこんでいる。

いかなる理由があろうとも、私たちに幸いをもたらす基となる原則を子供に伝える機会を奪ってはならない。これを伝える責任が私たちにはあるからである。

聖典に通じている人ならば、神聖な記録に見られる力強い有益な教えの多くが、親からその子に、特に父親から息子に与えられたものであることを知っているはずである。

私は幼なくして父を失い、父親を知るという恵みにあずかれなかった。多くの両親、それも特に父親が息子にどんなことを学ばせたいと願ってきたのかを聖典を通して理解できたことは、私にとって非常に重要な出来事であった。また私は、自分にとって本当に大切なものを子供の心に伝え残したいと願う親心の強さ、深さをも感じることができた。

父から子に対する教えの力強い感動的な例として、アルマが息子たちに自分の生涯で得た深い教訓を話した一連の章がある。アルマには、良きにつけ悪しきにつけ（彼も私たち同様その両方を経験した）、自分の経験から得た事柄、それも自ら強く確信することで、ぜひとも子供たちに教えたいということであった。そのような事柄の中から3つのことを、彼は謙遜に、心温まる強い証として息子ヒラマンに話し（アルマ36）、さらにそれを別の子供たちにも繰り返し証している。

彼はこう語った。「わが子ヒラマンよ。汝はまだ青年であるから、汝が私の言葉を聞いて私に学ぶよう、ひたすらこれを汝にすすめる。すべて神に頼る者は、苦しみや悩み禍に逢う時に助けられてこれを忍ぶことができ、また終りの日に高く挙げられる。これを私は確に知っている。

しかし、私は肉体上の力で自分でこれを知るのではない。私の霊の力でこれを知るのである。肉欲の心でこれを知るのではない、神によってこれを知るのである。私は汝にこれをよく解って欲しい。」（アルマ36：3，4）

「…私に宿っている神の『みたま』がこれらのことを私に示すのである。もしも私が神によって生まれなかったならば、これらのことを悟れなかったであろう。

……主イエス・キリストに憐みを願い求めるまでは少しも罪の赦しを受けなかったが、イエス・キリストに祈り求めたら私の身も霊も安らかになって慰めを得た。」（アルマ38：6，8）

「私はあらゆる試み苦しみ悩みに迫られたときに助けを得てこれを忍ぶことができた。……それであるから、私は今も神を信じて頼っている。」（アルマ36：27）

「わが子よ、私がこれを話すのは、お前が知恵を得て、ただキリストによらなければ全く人を救う道も手段もないことを私から学んで知るようにするためである。見よ、キリストは世の生命であってまた世の光である。見よ。また真理と義の言葉である。」（アルマ38：9）

彼が息子たちに述べた最初の力強い証はこれである。すなわち証を得るただひとつの方法、つまりみたまによって、神が生きておられ、イエスがキリストであり、悔い改めた人はキリストによって再び生まれることができるということを自分は知ったというのであ

る。主から自分の証を受けたそのときから、「私は人々を悔い改めさせ、私と同じ喜びを感じさせるために、またこれらの人も神によって生れ聖霊に満されるようにたえずはげんで働いた。

さてわが子よ、見よ、主は私の働きから生じた結果によって私を非常に喜ばせたもう。

主が私に下したもうた御言葉のために多くの人々は神によって生れ、私の味わったように味わい、私が目のあたりに見たように見た。それであるから、これらの人は私が知っていると同じ通りに今私の話したことを知っている。私のもっているこの知識はすなわち神から与えられたものである。」（アルマ36：24－26）

このことはアルマ自身が知っていたので、多くの人たちがそれと同じ祝福を受けていた。彼は喜んで良い働きをする主の器となって、人々に真理の知識を伝えていた。

しかしアルマは、これだけでは満足しなかった。みたまの証を得ており、



ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリの頭に按かれたバプテスマのヨハネの手。アバード・フェアバンクス作のアロン神権回復の記念碑より。（テンプルスクウェア）

人々を心から愛する人ならアルマと同じ気持であろう。その結果アルマは、次のような極めて大切な言葉を残したのである。

「見よ、わが子よ。またこればかりではない。……お前もまたこれらのことをよく知っていなくてはならない。」(アルマ36：30)

これは当然である。愛情ある父親ならば、自分で証を持ち、人が真理の原則を理解できるように助けるだけでは満足しない。自分の最も愛する人々がそのことを知らなければ、心から満足はできないのである。

これらのことは、アルマが息子にぜひとも理解させたかった大切なことである。アルマは息子たちに、数々の真理、多くの素晴らしい原則を教えたが、何にもまさって重要なことは、彼自身がそれを知っていたことである。神の慈悲と恵みによって、アルマはそれらのことを知っていたのである！

彼は他の人々に教えていた。しかしそれだけでは足りない。息子たちにも知らせなければならなかった。その同じ証を私はきょう自分の息子と娘に述べたい。私は、神が生きておられ、イエスがキリストであることを知っている。私はそのことを知っているので、これまで人々に教えてきた。

しかしそれではまだ足りない。私の子供たちに言いたい。君たちは自分でそれを知らなければならないのだ。

そして、君たちに知ってほしいことに、さらにつけ加えたいことがある。アルマは自分なりに、神の赦しという素晴らしい祝福を理解していた。彼が若い時代に、国には不信仰な、霊的に暗闇の状態があったと記録されている。「このようなものたちは今その先祖の言伝えを信ぜず、また死者の復活に関する教えもキリストの降臨に関する教えも信じなかった。

彼らはその不信仰のために、神の道を理解することができなくてその心がかたくなってしまっていた。従ってかれらはバプテスマを受けようともせず、また教会に入ろうともせず……その神である主に祈り求めようとしなかった……」(モーサヤ26：1－4)

予言者の息子アルマと義なる王の息子である友人たちは、反逆心を抱き、自分たちの賜や才能を教会を滅ぼすことに使っていた。「この男(アルマ)は人の心をいざなって民の間にいざこざを起し、神の仇に民の心を司どらせたから神の教会が盛になることを非常にさまたげた。」(モーサヤ27：9)

彼らはその後間もなく、そのような道を歩む者が必ず被る苦しみと悲しみを経験した。神の慈悲と、父親や神権指導者や一般の人たちの断食と祈りにより、彼らは身も滅びんばかりに激しい苦悶を経験し、つらい悔改めをした後に、悔改めと赦しの恵みと痛手をいやす信仰の力を知ったのである。彼らは生活を180度転換し、赦されて、その後はこれまでの悪事の償いをしようと、全勢力を傾けて善事に励んだ。

かつて悪事を共にした者たちが、今や「真理について深い知識を持つようになった」のである。そのことに関する記録の中に、次のような素晴らしい記述がある。「この兄弟たちはまことに正しい理解をもっている者たちで、神の道を知るために熱心に聖文を研究したから、すでに真理について深い知識を持つようになっていた。そればかりでなく、かれらは非常に熱心に祈りと断食をしたから『予言者のみたま』と『啓示のみたま』とを受け、その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢によって教えた。」(アルマ17：2，3)

過去におけると同様、現在でも力を携えて出でゆく人々は皆、「その手に正義を取り腰に忠信をまといて、世に住める人々に警めの声を」あげることが大切である。(教義と聖約63：37)

「また汝らはすべて温和にしてへりくだり、皆ことごとくの人その隣人にとりて警めの声となる教えを説くべし。」(教義と聖約38：41)

ここで言う隣人の中には、私たち自身の家族も含まれていることを忘れないようにしよう。私たちの家族も自分自身で知らなければならないのである。

アルマの父は証を持っていた。しかしそれだけでは充分でなかった。

イノスの父は知識を得てそれをイノスに教えたが、イノスが証を得たのは、彼自身心が飢えて造り主に真剣に祈り願ったからであった。

息子よ、過去の予言者から、また父から君に与える証をまとめればこうである。私は神が生きておられて、私たちが神の子供であることを知っている。君も私も永遠からみれば同じ世代である。私は、天父が地上に愛のこもった親切や裁きや正義が行なわれるのを喜び、楽しい時も苦しい時も子供たちを支えて下さることをよく知っている。私はこのことをみたまを通じて神によって知らされた。その結果、他の人たちもこの知識の甘さや喜びを味わって知っている。

しかし君もそれを知らなければならない。それを知れば、君は何をもってするよりもより立派な人間になれる。父よりも立派な人間になれる。600年前にある人が記しているように、天父について深遠な説教をするよりも、真の謙遜を身につけ、徳高い生活をして天父に喜んでもらいたいと思うようになるだろう。「悔悟とはどういうものかを知るよりも、悔悟の気持を感じ」たいと思うことだろう。(トーマス・ア・ケンピス *The Imitation of Christ*「キリストの模倣」)

君に、そしてすべての神の息子、娘に神の祝福があらんことを。一人一人が奉仕と心からなる献身の生活を送り、純粋な愛を施し、持てるすべてを要求するキリストの弟子としての道を選ぶことができるように。神の愛はキリスト・イエスによって現わされ、あなた以外にはだれも引き離すことのできないものである。その神の愛を自ら経験し、豊かな人生を送ることができるように。神の祝福があって、あなた方が良き業に活発に携わり、福音の光を、適度に忙しくもくろまれたこの世の活動という枡の下に隠すことに満足せず、命のパンを見出し、食べて、隣人にも分け与えることができるように。

私は、神が生きておられ、イエスがキリストであり、この業が主のみ業であることを証する。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



家庭の夕べ

このプログラムは、家庭の愛と理解の絆を強めるものとして、教会外の人々からも賞讃を受けている。

十二使徒評議員会補助
ジェームズ・A・カリモア

愛する兄弟姉妹、私はきょう家庭の夕べについて少しお話したいと思う。スペンサー・W・キンボール大管長は、ストックホルム地域総大会の説教の中で、世にある問題を解消する手だてとして、ホームティーチングと家庭の夕べがきわめて大切であることを指摘した。キンボール大管長は次のように語っている。「今日の世情はあまりにも世俗的であり、不法が横行している。立派な家庭の若者も反抗心のはけ口を破壊的な行為に向けているように思える。そして多くの者が、司法官に反抗している。一般の組織でも宗教組織でも、政治組織でも、権威を敬う気持は低下しているように思われる。不道徳、幻覚剤乱用、また道徳的、精神的頽廃は目をおおうばかりであり、世の中は混乱している。しかしこの時代に、主はいつの時代にも変わることのない主のプログラムを再び示されたのである。それは健全な生活、真の家庭生活、信頼の上に築かれた家族を世に取り戻す約束を与えている。この計画は、家庭の父親を家族の長としての正しい地位に引き戻し、母親を職場や社交場から家庭に戻し、そして子供をたわいない遊びだけの生活から引き戻すものである。両親が家庭で、素晴らしい活動を交えながら子供たちを教える家庭の夕べのプログラムを行ないさえすれば、それらの悪を阻止することができるのである。」(*Ensign*「エンサイン」1975年1月号 p.3，4)

1964年10月大会で、デビッド・O・マッケイ大管長は再び家庭の夕べプログラムを紹介し、両親がこのプログラムによって家庭で福音を教えることができるようにされた。以来、教会はこのプログラムの重要性を強調している。月曜日の晩は、家庭の夕べを開くため、教会のあらゆる集会は開かれないようになっている。さらに毎年、すぐれた著者陣によって、美しいテキストが出版されている。

家庭の夕べのテキストは毎年907,000部以上も印刷されている。英語で約830,000部、その他17カ国語で77,000部にも達する。そしてこれらの本は48カ国で販売されているのである。

1973－74年度の家庭の夕べのテキストで、大管長会は次のように述べている。「私たちは、皆様に天父が計画された家族という単位の重要性を、再び思い起こしていただきたいと願っております。誠に教会は、家族を助けるために、また会員一人一人の昇栄を助けるために存在しています。

末日聖徒の家庭の本来の役割は、家族各人が成長するためによい環境を整え、各人が全き人となるように助けることにあります。そのためには、親は子供たちの物質的な必要をただ満たすだけでよいというのではなく、それこそ時間とエネルギーを存分に捧げなければならず、子供たちは、自分自身をよくコントロールし、利己的になりやすい気持を抑えるように努力しなければなりません。

皆様は、社会的なまたは職業上の成功のために時を費やすと同じように、家族と家庭の成功のために時を費やしておられるでしょうか。

また、社会の最も大切な単位であるこの家庭のために、最大限のエネルギーを捧げておられるでしょうか。それともあなたの家庭とのつながりは、人生の中でのただ単なる決まりきった、報いのない時間でしょうか。

親と子が、一致して家族の昇栄のために、喜んで家族の責任を果たされるよう、切に願っております。」(p.4)

合衆国では、この家庭の夕べプログラムは教会外部からも注目されている。大勢の個人、グループ、組織からこのプログラムについて問合せがあり、またテキストの注文がきている。そのいくつかを紹介したいと思う。

ネブラスカ州リンカーンのインマヌエルルーザン教会「先日、貴教会の家庭の夕べのテキストを拝見させていただきました。その内容と進め方に、私は深く感動いたしました。」

イリノイ州ディアフィールド、三位一体福音神学校、「貴教会の家庭の夕べテキストを先日拝見させていただきました。とても興味深く思い、ぜひともこのテキストを数冊手に入れたいと思います。」

オクラホマ州保健部、「貴教会では『家庭の夕べ』という家族関係を強める新しいプログラムを始められたとう

かがっております。私どもは、健康増進はよりよい家庭生活にあると考えております。そこで貴教会の家庭の夕べプログラムについて教えていただけましたら幸いと存じます。」

また中央および地方新聞にも、このプログラムに対する賞讃の記事が数多く掲載された。合同国際通信社（ＵＰＩ）の故ルイス・カサル氏は、ある家庭の夕べに訪問した後、次のように書いている。

「子供は家庭で最も大切な宗教教育を受けている。日曜学校や、その他いかなる教会活動を使おうとも、家庭生活でキリストに対する信仰を教えられていない子供たちにそれを教えることはきわめてむずかしい。

すべての宗派がこれに同意している。そのひとつ、末日聖徒イエス・キリスト教会は、両親が子供の宗教心を育むという大切な役割を果たすのを助ける効果的なプログラムを行なっている。

毎週全世界の35万のモルモンの家庭では、両親と子供が集まり『家庭の夕べ』を行なっている。……

モルモンの家庭の夕べで最も印象深いのは、十代後半の子供たちがごく自然に、利己心を抑え、積極的にこれに参加していることである。……

末日聖徒のハロルド・Ｂ・リー大管長は家庭の夕べを強く押し進めたひとりである。彼は先頃モルモンの指導者たちに次のように語った。『主のみ業のうち最も重要なものは、私たちが自分自身の家庭で行なうことである。』

またこのようにも述べている。『家庭の夕べは宗教的な事柄を教える場となるだけではない。これによって家族が一致し、世代の隔差が狭まり、親子間のつながりが強められるのである。』

さらにモルモンの大管長は語った。『家庭が正しくその機能を果たしていれば、多くの問題を避けることができる。世の中でも教会でも、家庭における失敗を償うために多くのことが行なわれている。両親が家族関係を密接で意義深いものにしようとするとき、家庭の夕べは非常に役立つことだろう。その結果、家庭は悪の力の避け所となり、家族一人一人を強める場となるのである。』

大勢の市長や州知事は家族の一致の大切さと、家庭の夕べプログラムが健全な家庭をもたらすことを認めている。週刊誌にしても月刊誌にしても「家族の一致」を強調したものが非常に多い。例えば、「合衆国中の公務員は、家族の一致の崩壊とそれが社会に及ぼす影響について、深い関心を抱いている。

家庭の夕べプログラムを始めたのは、末日聖徒イエス・キリスト教会である。これは全世界の注目を浴びている。このプログラムの第一の目的は、毎週家族が共に集まり、学び楽しむことによって、家族に一致をもたらすことである。

よい家族関係は、社会の強さの源である。

従って、私ヒューストン市市長フレッド・ホフェインズは、12月を『家族の一致の月』と宣言するものである。」

またアリゾナ州知事からも素晴らしい声明が届いている。彼はこの教会の習慣に従って、家庭の夕べを開いて子供たちを教えているという。そして家庭の夕べを賞讃し、次のような声明を通して実施奨励している。

「家庭は社会の基であり、必要欠くべからざる組織である。……

私たちは、歴史上かつてないほどに、家庭生活の崩壊と、それによって引き起こされる容易ならぬ事態を目の当たりにしている。それは特に、子供の福祉にはなはだしく、アメリカの偉大な国力を弱めるに至っている。

家庭生活の崩壊と、これがわが国民に及ぼす影響力について、すべてのアメリカ識者の間でその関心が高まっている。

ある宗教指導者たちは次のように言っている。『いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない。』また『あなたが行なうべき最も大切な働きは、家庭という囲いの中にある。』

そこで、私アリゾナ州知事ジャック・ウイリアムズは、1974年6月2日から1週間を、『家族の週』と宣言する。また、真面目で正しい見識あるすべてのアメリカ国民に、自分自身や子孫、



バプテスマのヨハネからアロン神権を授かる予言者ジョセフ・スミス。アバード・フェアバンクスによるアロン神権回復の記念碑より。（テンプルスクウェア）

そして偉大な国家に対する家庭生活の意味をよく考えるよう望むものである。」

教会はまた、第93議会で、合衆国上院から次のような声明文を受けた。「会員の皆様の開拓者精神、健全な生活、同胞に対する愛、ならびに数々の業績に対して心から感謝致します。」

キンボール大管長は次のように言っている。「教会員でない政府、州および市の指導者から寄せられたこれらの賞讃は真に喜びにたえない。彼らは国家や政治をつくるものが何であり、市や州、政府を破壊するものが何であるかを認識している。また家庭の崩壊は国家滅亡の始まりであることも承知している。さらに不誠実、不道徳、離婚と不信によってもたらされる家庭の崩壊、産児制限、そして娯楽と性に忘我することは、国家の衰退を示すものであることをよく承知しているのである。」（*Ensign*「エンサイン」1975年1月 p.9）

兄弟姉妹、私の心からの証を申し上げたい。これはまさしく主のみ業であり、家庭の夕べプログラムを始めたこれらの人々は大いに霊感を受けている。家庭の夕べのテキストを準備する人々には確かに大いなる霊感が与えられる。この証をイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

10月3日(金) 午後の部における説教

成功例

人がいかなる方法をもって達成したかを研究するならば、私たちも達成を見ることができる。

十二使徒評議員会補助
スターリング・W・シル



1966年の四半期ステーキ部大会の指導者会において、短い成功例がふたつ紹介された。成功例は目標を首尾よく達成した経験であり、他の大勢の人々にとっても得るところがある。

人間のおもしろいところだと思うが、だれにも生まれもっての収集本能がある。リスがどんぐりを拾って蓄えるように、私たちは切手や蝶やコインを集め、株や債券や保険証書や不動産や銀行預金を持つ。また自分で身につけるものもある。態度や技能、習慣、個性といったものである。

ところで、私は1966年からこれまでに72の成功例を集めた。私が自分で末長く用いるつもりで整理し、推敲を重ね、記憶し、記録してきた他人の経験である。きょう私に与えられた12分の時間を使って、3分の成功例を4つご紹介したいと思う。

その第1話として。ジュリアス・シーザーの暗殺後、国はブルータスの率いる陰謀者側と、オクタビウス・シーザーとジュリアス・シーザーの友マーク・アントニーに率いられる人々の二大陣営に分かれた。その後の長く厳しい戦争の中で、マーク・アントニーは史上並ぶ者のない闘士としての頭角を現わした。「それはどうしてだろう」と考えてみるがよい。もし彼の成功の秘訣を発見できたら、私たちはそれを自分にも応用できるのである。

次の言葉は、マーク・アントニーの偉業に対して寄せられた、秘訣を知る糸口の一例である。「説得力のある演説、しっかりした論理、大胆な指導、それに自制心を身にまとって、彼は眼前のすべてのものをなぎ倒した。彼は自ら実に素晴らしい快活さをもって最も苦しい仕事を引き受けた。昆虫と木の皮を食べて何週間も生き延びた。こうして彼は、部下の変わらぬ忠誠を勝ち得、人民の歓呼とオクタビウスの支持と自信を得たのだった。」

このような献身と手腕に阻まれて、敵の将軍たちは間もなくひとりふたりと戦線から落伍していった。その戦争に勝ったとき、マーク・アントニーはジュリアス・シーザーが世界の覇者として君臨したと同じ地位に上っていた。しかしマーク・アントニーは戦いから遠ざかると怠惰になり、怠惰のゆえに最も悲劇的な挫折を招いたのである。

マーク・アントニーはエジプトへ遠征し、そこで美しい女王クレオパトラと恋に落ちた。彼は華やかで優雅で甘く豪奢な生活と、退廃したエジプト宮廷のえじきになった。その偉大な精神は美酒の香りに曇らされ、プルタークが「釣ざおの将軍」と彼を呼んだ通りになった。マーク・アントニーがより良い自己を放棄したとき、部下の忠誠と人民の歓呼とオクタビウスの支持と己れの自尊心は失われた。そしてついに兵が送られ、マーク・アントニーは監禁され、鎖につながれたままローマに連れ戻されたのであった。

今やマーク・アントニーを捕えるのに軍隊はいらなかった。数人の兵卒だけで充分であった。しかしマーク・アントニーは捕縛を嫌い、剣を胸に突き立てた。そして息を引き取る間際にクレオパトラに向かって、自分を倒すことのできるものは世界に自分だけだと言った。「アントニーのみ、アントニーを征服できた」と。そしてローマの兵士が到着するのを眺めながら、自分が祖国に着せたゆゆしい汚名と家名に与えた恥と屈辱を思いつつ、最後の演説をしたのである。ウイリアム・ヘインズ・リトル訳の詩の中で、アントニーはクレオパトラにこう言っている。

シーザーの寵臣たちに、地に伏した
　この獅子を嘲笑させないでくれ
おれを倒したのは陪審長の手ではない
汝の胸を枕にして栄光の輝きから顔をそむけ
汝の抱擁に溺れ狂い、己の誉れを捨てたこのおれが
おれ自身の手で倒したのだ

『アントニーとクレオパトラ』*The Best Loved Poems of the American People*, ヘーゼル・フェルマン編, p.203

マーク・アントニーは世界の支配権を確実に掌握した。そしてそれを奮うことのできるものは世界にただひとり、自分だけであった。ところで私たちは皆、マーク・アントニーの世界よりもはるかに大切な世界を手の届く所に持っている。私たちと日の光栄の王国を

引き離すものは、世界にただひとり、自分だけである。アントニーだけがアントニーを征服できるのである。

成功例の第2話は、ジョン・バニヤンの「天路歴程」からである。バニヤンは、熊手を持って地上のくずやごみを一生かき集めて過ごした男のことを書いている。男の頭上に天の冠を持った天使が立ち、熊手と冠を交換しようとした。ところが男は下だけを見る習性が身についていたため、天使の申し出を無視して地上のごみ集めを続けたのである。

私たちの頭上にも日の光栄の冠を持った天使が立ち、目を上げて神と信仰と正義と理解を見さえしたなら、私たちの熊手と冠を交換しようとしている。獣は四つ足ではい、地面を見るだけだが、人は神を仰ぎ見るように造り主の姿に形どって直立に創造された。

成功例の第3話は、ギリシャ神話のピグマリオンとガラテアの話である。ピグマリオンはキプロス出身の彫刻家で、大芸術家の常として仕事を非常に愛し、やがて生涯の一大傑作を生む日がやってきた。彼は朽ちない象牙で、心、姿ともに美しい盛りの女性像を彫った。何ヵ月もの努力の結果、ついに像は完成した。ピグマリオンが製作に注いだ献身と情熱があまりにも激しかったので、神々はその像に命の息吹きを与えよと命じた。その像が台座を下ったとき、ピグマリオンは彼女にガラテアと命名し、自分の作品である彼女と結婚した。この話はただの神話に終わらない。ピグマリオンの物語は、この世に生きる私たちすべての話でもある。なぜなら、神は自分の仕事を愛する者のために、仕事に命を与えて生かして下さるからである。

成功例の第4話は、12世紀後半の英国の獅子心王リチャードI世の話である。リチャード王はトルコ人から聖墓を奪回しようとして、聖地遠征の十字軍を組織した。しかし遠征は失敗し、リチャード王自身も捕えられて異国の牢に幽閉された。王が不在の間に、国では反逆者が政治の実権を握り、王がようやく脱走を遂げて英国に帰ったときには、身の安全のために、平兵士の姿に身をやつさなければならなかった。英国に戻ったリチャード王は、英国を正しい為政者の手に取り戻す理想を持った忠実な数人の従者たちをひそかに集めた。この少数の人々で最初にしたことは、トーキルストーンの城の襲撃であった。トーキルストーンは王の忠実な友であり家来でもあるアイバンホーが、傷ついて捕われている敵の砦であった。

アイバンホーは城の外に上がった突撃の声を聞いて、傷の痛みと出血のため自分では寝台から起き上がれないので、看護のレベッカに、窓から何事が起きたか見てくれるように頼んだ。まず何よりも、大将がだれであるかを知りたかった。何の企てにも、それが一番大事なことである。それでアイバンホーはレベッカに、大将のよろいにどんな目印がついているかを聞いた。そうすれば大将がだれで、味方の救援かどうかがわかるのである。

ところがレベッカは、大将は印のないありきたりのよろいで、目印も身分を知る手がかりがないと告げた。アイバンホーは、「ではどんな戦いぶりか教えてくれ。そうすればだれなのかがわかる」と言った。つまり、すべての人は指紋が違うようにその人の特徴も違っており、人を見分ける一番の秘訣はその人の行動である。レベッカは、飾りのない黒いよろいをつけた騎士の独壇場で、重い手斧を振り回しながらこの城砦に雷のような強打をあびせていると説明した。彼女は黒いよろいの騎士についてこうも言った。「石や梁がお城の壁からくずれ落ちてきますが、あの騎士は、まるであざみの冠毛か羽毛のようにそれをものともしません。」またこのようにも告げた。「あの方は片腕で20人力のように戦っています。」「ひとりの腕と勇気が何百人も打ち負かす様子を見るのは、恐ろしくも見事です。」 私は、リチャード王の腕力が他の勇士よりもそうまさってはいなかったと思う。その力は腕から来たのではなかったと思う。レベッカは「ひとりの腕と勇気が」と言っている。リチャード王は気迫で戦った。英国のために戦った。人が事に心を打ち込むとき、実際に事が成るのである。

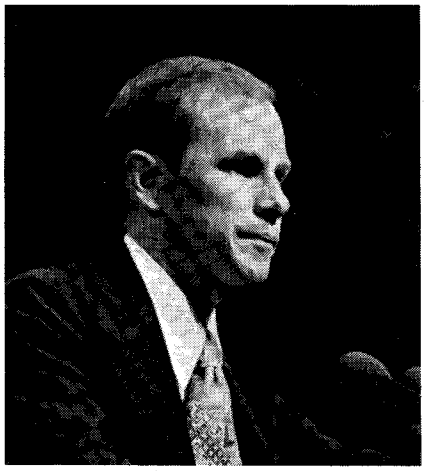
アイバンホーにはその騎士がだれなのかわからなかった。そのように戦うのはリチャード王のほかにだれもいないと思ったが、王はオーストリアの土牢の中だと信じきっていたのである。彼は見知らぬその騎士に大きな賞賛を送った。騎士の名前は知らなかったが見るからに偉大さが知れたので、彼はレベッカにこう言った。「私は一族の名誉にかけて誓う。このような闘いであの立派な騎士と共に1日でも戦うために、私は捕われの10年を耐え抜いてみせる。」捕虜の身はアイバンホーに科せられた一番の罰であっただろうが、彼はこのように言っている。「大義のため、立派な騎士の旗の下で彼と共に戦う特権を思いつつ、狭い土牢の10年に甘んじよう。」

さて、私たちには大義がある。世の中で一番の大義がある。問われているのはこれだけである。「私たちはどのように戦うのか」と。私たちの指導者は言った。「汝ら神の役務に出で立たんとする者は、終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため、すべからく心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして神の役務をなせ。」(教義と聖約4：2)

ここで特別に、地上で起きた最も偉大な経験のひとつを、少しの時間で証したい。この神権時代の最初の予言者がその経験を全世界の人に告げている。

「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76：22－24)

願わくは、私たちに主のみこころにかなう成功が豊かに恵まれ、私たちが日の光栄に引き上げられんことを。これらをイエス・キリストのみ名により、心から祈るものである。アーメン



証

私たちの思いと愛と行動を、イエス・キリストのみ業に捧げよう。

七十人最高評議員会会員
ジーン・R・クック

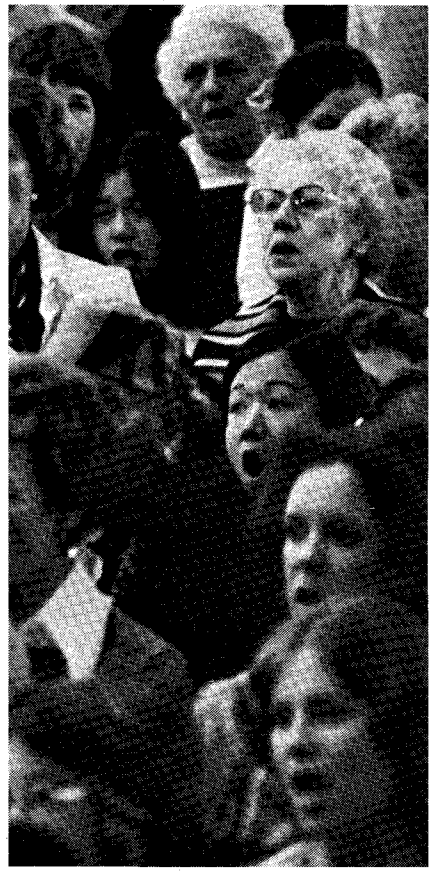
この壇上までの距離が非常に長く感じられました。兄弟姉妹たち、私は胸がいっぱいです。何よりもまず、天父に対する私の愛をありのままにお話したいと思います。けさ、私は明けがたに妻の言った言葉を考えていました。「きょうの準備はできていらっしゃるの？」という言葉です。その言葉がずっと心に鳴り響いています。でもそのとき、もし準備ができていなかったら、もう遅すぎると思いました。私はこの頃、これまでの34年間が準備の時代であったこと、きょうではなく、すでに過ぎてしまったぼう大な数のきのうという日が準備の日であったことを、改めて感じています。その準備ができたのも、私や私の家族に親しく接して下さった神権指導者、伝道部長、長年働いてきた七十人最高評議員会の素晴らしい兄弟たちのおかげです。闘いのほとんどに勝利を収めることができるのも、今ここで言われたように、過ぎ去ったきのうという日々と新しく迎える日々の明けがた、長い長い時間の中にこそあるのだと、実感しています。

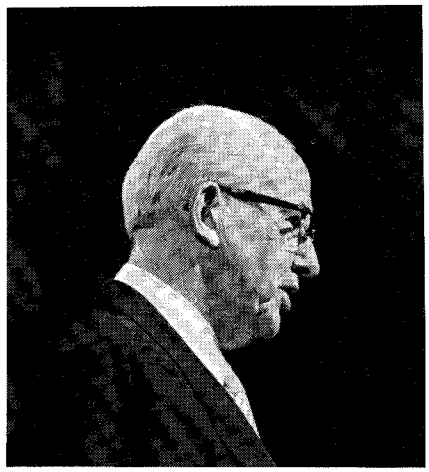
兄弟姉妹たち、私はきょうひとつのことを皆さんにお話ししたいと思います。シル兄弟のおっしゃったことがちょっと頭に残ったのですが、それはアルマの言葉を少し言い換えたものです。アルマはこのように言いました。

「また悔い改めねばならぬこと、主イエス・キリストを信ずること、へりくだって柔和な心を保つこと、主イエス・キリストを信ずる信仰を以て悪魔の誘惑をことごとくうち破ることなどを教えよ。

汝の要する一切の助けを神に祈り求めよ。何事でもすべて主のために為せ。どこへ行くにも主のために行け。常に主を念頭に置いて心の愛情をとこしえに主に向けよ。汝のする一切の働きについて主のみこころを伺え。そうすれば主は汝の為になる善い誡めを与えたもう。眠っている間も主が見守りたもうよう夜寝る時には自分の身を主に任せて寝よ。そして朝起きる時には神に感謝する念を胸に満せ。このようにすれば終りの日に高く挙げられる」。（アルマ37：33，36－37）

兄弟姉妹たち、この教会がイエス・キリストの教会であること、キリストが頭であること、キリストは私たちの救いの岩であることを、私たちは愛情をすべて主に向けるべきことを証申し上げます。また、私たちが愛情をそのほかのものに向けたならば、終りの日に高くあげられるという約束が受けられないことを証します。このように、私たちは心を奮い立たせる言葉を数多く受けていますが、私はこれらを別にしてもこの教会が全地の表にある唯一まことのイエス・キリストの教会であることを確信しています。なぜならば主がそう宣言しておられるからだと証します。私はキンボール大管長が神の予言者であることを証し、私の前にすわっておられる素晴らしい兄弟たちに、私は力と時間と才能と持てるすべてをもって、主とこれらの兄弟たちに求められる限り、どんなことでもすることを誓います。この証をイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。





世に与えるメッセージ

キリストの再臨に備え、悔い改めて滅びから逃れよという、万民に与える警告の声。

十二使徒評議員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

心からへりくだり、感謝の心をもって、私は今日あなた方の前に立っている。私がこれから申し上げることを証する聖きみたまの力があるよう、心から願っている。

私たちの主、救い主イエス・キリストは、この時代に福音を回復し、主の教会、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会を設立された後、主の予言者ジョセフ・スミスを通じて次の啓示を下された。

「聴け、汝らわが教会の人々よ。いと高きところに住みて、すべての人を見まもる者の声は告ぐ。日く、誠にわれ告ぐ、汝ら民よ、遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ、共に聴け。

誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば、一人ものがるる者なし。

而して、この末の世にわが選びたる弟子たちの口より、すべての人々に警めの声は及ばん。」（教義と聖約1：1，2，4）

今日私は警告としてまた証として教義をお話したいと思う。しかも聖なる使徒職を有するものとしてお話するつもりである。この職にある者の責任は、全世界ですべての民に向かって主のみ言葉を宣言することにある。十二使徒評議員会の兄弟たちも皆、私と同じように、全世界に向かってこれらのことを宣言し、すべての民にそれを証する責任を持っている。

主は、予言者ジョセフ・スミスが地上での務めを終えようとしている頃、彼に次のような戒めを与えられた。

「汝は今や、わが福音……に就きて厳かに宣言せん……この宣言は世の四隅に至るまで、あらゆる王に向い、……世のすべての国民に向いてなさるべし。」（教義と聖約124：2，3）ジョセフの務めは、万人を真理の光のもとへ招き入れ、彼らの才能を用いて、地上に神の王国を建設することであった。

この神から与えられた指示に従って1845年4月6日、すなわち、予言者ジョセフ・スミスと兄ハイラムが、真実の宗教の殉教者として世を去った先人と同じように大地をその血で染めた後に、十二使徒評議員会は次のような宣言を発表した。「世の諸々の王へ

アメリカ合衆国大統領閣下へ
諸州の知事各位へ
および諸々の国々の統治者ならびにその民へ」

その内容は次の通りである。

「知りたまえ。

神の王国は既に到来せり。いにしえの予言者らに予言されたる如く、世々祈り求められたる如く到来せり。されば、この王国は全地をみたし、立ちて永遠に至るべし。

大いなるエロヒムは……再び喜びて、明らかなる示現により、また聖き御使らにより、諸天より語れり。また地上にある人と交わりを持ちたり。

かくの如き方法により、偉大にして永遠なる大神権、御子の神権による神権、すなわち使徒職は回復されたり。言い換うれば地上に戻されたり。

この大神権すなわち使徒職は、神の王国の鍵を握るものにして、また地上で結びしことを天にても結び、地上で解きしことを天にても解く権威を握るものなり。すなわち神の王国の儀式、組織統治、指示に関するすべての事を為し執り行なうものなり。

この末の世に設立せらるるは、世の始めより予言者らによりて語られたるすべての事を回復せんためなり。

而して我らは証せん。主の来臨は今や近きにありと。今より後、多くの年を経ずして、国々の民もその王も、人の子が権威と大いなる栄光とを持ちて天の雲のただ中より来臨さるるを見るべし。

この大いなる出来事のために、備えをなすは必要なり。

それ故に、我ら、いと高き所より得たる権能により、汝らに言葉を送り、戒めん。汝ら皆、聖き者の威勢の前に来たりて悔い改め、幼な児の如く自らを低くせよ。また、へりくだりたる心と悔いる精神とを持ちてイエス（キリスト）のもとに来たれ。また、罪の赦しを受けんため、イエスのみ名によりてバプテスマを受けよ。（これ、すなわち、主の埋葬にならいて水の中に沈み、主の復活にならいて新しき生命を得て再び起き上がることなり。）かくして汝ら、人に対する慈悲に満ちたるこの大いなる最後の神権時代にあたり、使

徒及び長老らの按手によりて、聖きみたまの賜を受くべし。

このみたまは、我らの証が真実なりと、汝らに証を為すなり。また汝らの心に光を与うるものにして、汝らの中に在りて、予言と啓示のみたまとして働くものなり。また汝らの理解と記憶の及ばぬものをもたらすものにして、更に来たるべき事柄を汝らに示すものなり。

聖き使徒職及び神権の権威と権能とによりて儀式を施されて得たるこのみたまの光により、汝ら理解の力を賜り、光の子となり、而して、地上に来たるべきあらゆる事から逃るるための備えをなし、はたまた人の子の御前に立つための備えをなすなり。

我らは証せん。かく述べたる教義は、イエス・キリストの完全なる教義すなわち福音にして、唯一の真実にして永遠の変わることなき福音なりと。また、人が救われんために地上に啓示されたる唯一の御計画なりと。」(*Message of the First Presidency*「大管長会メッセージ」1：252－254)

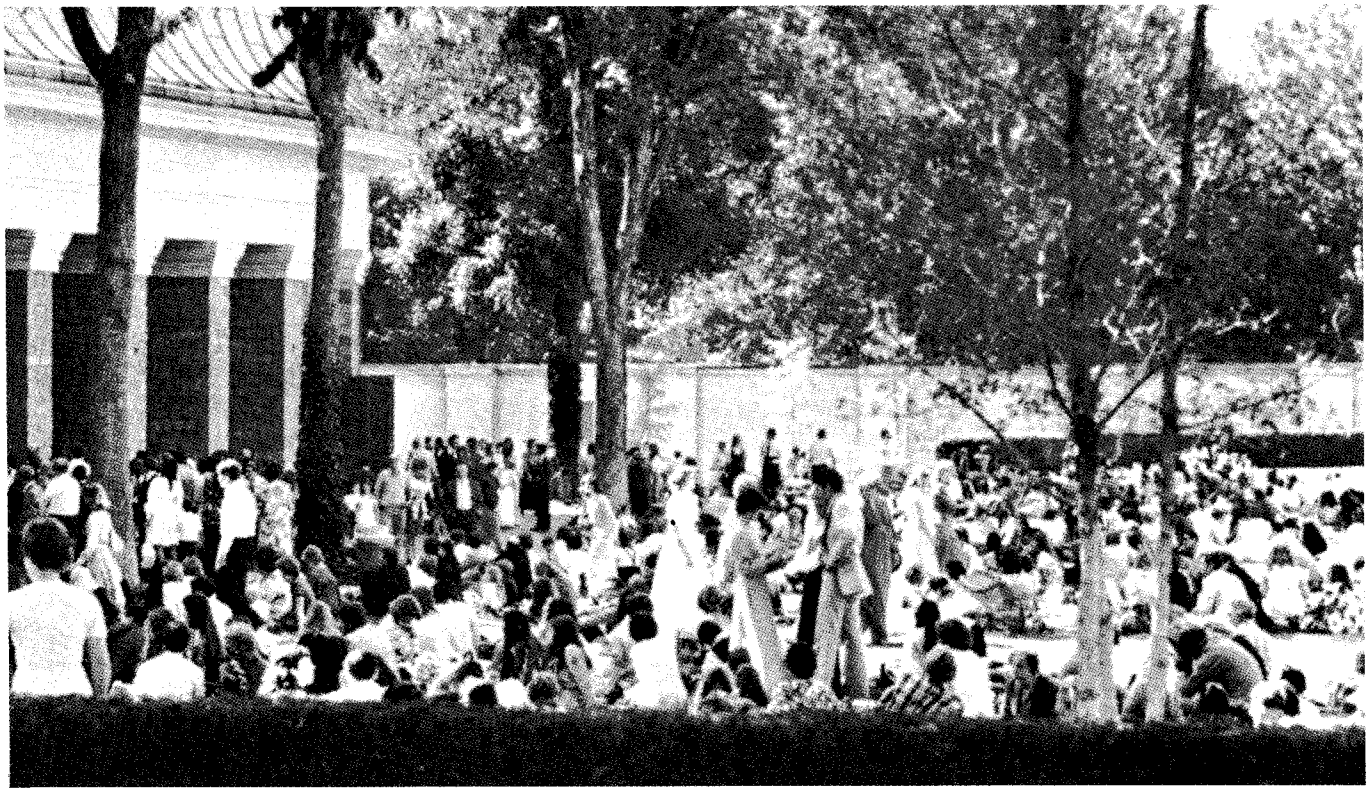
私は、この宣言文の中で言われている偉大な真理を再確認し、新たに世に対して宣言することが、まことに時宜にかなったことであると考えている。

すべての国々の統治者と民に対し、私たちは厳かに、天の神が予言の成就としてこの地上に末日の王国を設立されたことを再度宣言する。聖なる天使たちは、この世の人々と再び親しく交わりたもうた。神は再び天から御自身を現わされ、また神の子らの昇栄に必要なすべての聖なる儀式を執り行なう権威を持つ聖なる神権を、地上に回復された。主の教会は、いにしえに享受されたと同様の霊的な賜をすべて有して、現在人々の中に再度確立されている。これはすべて、キリストの再臨に備えるためである。主の大いなる恐るべき日は間近に迫っている。この大いなる出来事に備えるために、また差し迫った裁きから逃れる方法を教えるために、霊感を受けた使いたちは、この証と警告とを携えて地上の国々を巡って来たし、現在も巡っているのである。

地上の国々は、いまだに罪深い、不義の道を歩み続けている。人はこれまで与えられてきた際限のない知識を、主の意図されたように人の子らを祝福するためではなく、人類を破滅に陥れるために使ってきた。2度にわたる世界大戦といい、恒久平和を標ぼうしながら達せられない空しい努力といい、これは皆、民が邪悪なために地上から平和が取り去られたことを証明するものである。国々は罪のうちに生き延びることはできず、衰退するであろう。しかし神の王国は永遠に存続する。

それ故、私たちは、主の謙遜な僕として、国々の指導者たちに向かい、神のみ前にへりくだるよう、また神の霊感と導きを求めるよう勧める。また、統治者と民に対しても、その邪悪な行ないを悔い改めるよう勧めるものである。主に心を向け、主の赦しを求め、へりくだって主の王国のもとに結束していただきたい。他に道はない。もしこのように行なうならば、あなた方の罪は消され、平安がもたらされ、そしてそれが持続するであろう。またキリストの再臨に備えて、神の王国の一員となるであろう。だが、もし悔い改めることを拒み、神の霊感の下に語る使いたちの証を受け入れず、神の王国のもとに結束しなければ、邪悪な人々に約束されたあの恐るべき裁きと災難があなた方に下ることだろう。

慈悲深い主は、逃れる道を備えられた。警告の声は、僕たちの口により、すべての人々に伝えられている。この



声が聞き入れられないときには、殺りくの天使たちがいよいよその数を増して出で行き、全能の神の懲らしめがそうした国々に下り、定められた通り完全な終局が訪れるであろう。へりくだって悔い改めて主に立ち返るのでなければ、あなた方は戦争や荒廃など、言い尽くせないほどの苦悩を味わうことであろう。統治者とその民が悔い改めて、その邪悪で不敬な道を歩むことをやめない限り、先の大戦で味わった以上の恐ろしく、また際限のない破壊が必ず訪れる。神はあなどられるような御方ではないからである。神は、性的な不道徳の罪や秘密殺人結社や胎児の殺害などを決して赦されない。また、神の神聖な戒めや、僕のメッセージを無視する者も同様である。このような邪悪に対しては、必ず大きな罰が下されるであろう。世の国々は罪のうちに生き延びることはできない。逃れる道は明らかである。神の不変の律法が、高き天には厳として存在している。人や国々がこの律法に従うことを拒むとき、必ず罰が下される。必ず滅びてしまうであろう。罪は必ず罰を要求するからである。

警告の声が広く宣べ伝えられるとき、それは必ず証を伴う。1845年に主イエス・キリストの使徒たちによって発表された偉大な宣言文の中にも、同じように証が述べられている。現在の使徒である私たちも、その宣言文を私たちの証として新たに述べるものである。

「かくて、我らは我らの生死にかかわりなく、奴隷と自由の身とにかかわりなく、宣言す、大いなる神はこの時代にあって語れりと。――そして私たちもそれを知っている。

神は我らに聖なる神権と使徒職と神の王国の鍵とを授け、いにしえの聖き予言者らに約束されたる如くあらゆるものを回復せり。――そして私たちもそれを知っている。

神はアメリカの先住民族の記録とその起源につきて啓示し、またその民族の行く末につきても啓示せり。――そして私たちもそれを知っている。

神は完全なる福音を、その賜、祝福儀式と共に啓示せり。――そして私たちもそれを知っている。

神は我らに、まず異邦人より始めて次にイスラエルの残りの者とユダヤ人とにその証を述べよと命じたり。――そして私たちもそれを知っている。

神はまた言えり。もし彼ら悔い改めずして、真理の知識のもとに来たらず……殺人、虚言、高慢、祭司の偽善売教、売春、隠れたる憎むべき行為などをやめずば、その時彼らは、程なくして地より滅ぼされ、地獄へ投げ落とされん。――そして私たちもそれを知っている。

神は言えり。……完全なる福音が証としてあらゆる国々に宣べ伝えらるるとき、そのとき主は降臨し、主と共にすべての聖徒らは1千年の間この地を統治せんと。――そして私たちもそれを知っている。

神は言えり。これらの警告が下され、主の再臨のために民の備えが整うまで、主が栄光のうちに降臨したもうことも、邪悪な者共を滅ぼすこともなからんと。――そして私たちもそれを知っている。

天地は過ぎ行くとも、主の啓示されたる御言葉は、一点一画といえども成就せざることなかるべし。

それゆえ、重ねて我らすべての民に向かいて言わん。悔い改めよ。罪の赦しを受くるためにイエス・キリストのみ名によりてバプテスマを受けよ。されば汝ら聖霊を受け、真理を知り、イスラエルの家と共に数えらるべし。」（「大管長会メッセージ」　1：263－264 ）

今日私がなすべきことはあとひとつしか残っていない。それは私自身の証を述べることである。

私は神が生きておられることを、また神が個性を持った御方であり、私たちの霊の父であられることを、さらに神がその子らを愛し、義しい祈りを聞き、答えられることを知っている。私は、神の子らが幸福になることこそ神のみこころであることを承知している。神は私たちすべてを祝福するよう望んでおられる。私は、イエス・キリストが神の御子であり、私たちの長兄であり、この世の創造主であり贖い主であることを知っている。私は、神がこの地上に再び王国を設立し、予言を成就されたことを、またその業が決して敗れることなく、最終的に地上であらゆる支配の力を掌握し、イエス・キリストが王として永遠に統治されることを知っている。

私は、神が寛大にも再び天から御自身を現わされたことを、また、ジョセフ・スミスがその王国、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会を再び設立するために神より召されたことを知っている。私は、ジョセフがこの業を成し遂げたこと、また基礎を築いたこと、そして偉大な末日の業を続けるためにその鍵と権能を教会に委ねたことを証する。この業は全能の神の指示のもとにジョセフが始めたものである。

私は、ジョセフ・スミスが、真理のために殉教はしたものの、いまだに生きていて、あらゆる福音の神権時代の中で最も偉大なこの神権時代の頭として永遠にその位にあることを知っている。ジョセフは神の予言者であり、聖見者、啓示を受ける者である。彼の後継者も同様である。私は、今日なお、主が霊感によってこの教会を導いておられることを知っている。その力を感じてきた。私は、大管長会やその他の教会幹部が、神の栄光とその子らの昇栄にのみ目標をおいていることを知っている。そして最後に、私は、このみ業を受け入れない者はだれでも、神の日の光栄の王国に救われることはないし、またすべての人に下る最後の審判の法廷でその裁きから逃れることができないことを知っている。

心からへりくだり、祈りの心をもってこの証を残したいと思う。私は自分がやがて造り主にまみえ、またあらゆる人と共に神の裁きの法廷に立たなければならないことを充分承知している。私は、この偉大な末日の業が神のみ業であるという証をいただいていることを、世の中にあるあらゆるものにまして感謝している。また世界各地にいるすべての人々に対し、この証に耳を傾けるよう、イエス・キリストのみ名により勧めるものである。アーメン



アメリカの将来

アメリカは「約束の地であるから、およそこの地を所有する民は神に事えなくてはならぬ。」さもなければ、滅ぼし去られる。

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹。私の話の間に私たちが共にみたまを受けることができるよう、一緒に祈っていただきたいと思う。私はきょう、主が私たちに伝えようと苦心されたひとつの教えについてお話したい。

この国（アメリカ合衆国）建国200年に関連してよく聞かれるのは、「基本的な自由と平和と繁栄を、もう200年維持できるだろうか」という話である。

その答えは、「できる」である。私たちがそれぞれ悔い改め、この地の神であるイエス・キリストの律法に従うならば可能である。

主は律法の基本を、十戒と、山上の垂訓と、さらにはふたつの大切な戒めの中で述べておられる。

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。

……自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」（マタイ22：37，39）

2,000年以上も昔に、主は宣言された。「この土地は主のつれて来たもう者が所有するために神聖にされている。もしもこの人々が、主の与えたもう命令に従って主に仕えるならば、この土地はかれらにとって自由の国となり……。」（IIニーファイ1：7）

またもうひとりの古代の予言者はこう語った。

「この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事えさえすれば、奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることがない。この地の神とは私たちがすでに記した言葉によって明らかに示されるイエス・キリストである。」（イテル2：12）

古代アメリカの住民の記録から、前述の言葉が成就されていることを指摘するのが、私の話の目的である。

ニューヨーク州の西部、パルマイラの近くに、「クモラの丘」（モルモン6：6）として知られる有名な丘がある。今年の7月25日に、私はその丘の頂上に立って、目の前いっぱいに繰り広げられる息を飲むようなパノラマを、畏敬の念に打たれながら見守っていたが、そのとき私は、その近辺で25世紀の昔に起きた出来事、すなわち偉大なジェレド人の国家の終焉を告げる出来事に遠く思いをはせた。

モルモン経を読んでおられる皆さんは、シズの率いる軍とコリアントメルの率いる軍の間で繰り広げられた、兄弟同士相争う戦いで、コリアントメル側は200万人近くを失い、200万人の男ばかりでなく「その妻子もまた一しょに」死んだ（イテル15：2）ことを思い出されるであろう。

戦いが激しくなってくると、生き残りの人たちが「ことごとくみなその妻子を伴って」（イテル15：15）、クモラの丘の周辺に集まった。（イテル15：11参照）

「コリアントメルの方を善いと思う者はコリアントメルの軍へ集り、シズの方を善いと思う者はシズの軍へ集った。

……ここに於て男も女も子供もみな武器を持ち、楯と胸当とかぶととを身に着け、完全な武装を整え相対して出陣した。そして一日中互いに戦ったが勝敗はなかった。

その夜になるとかれらは疲れて各々その陣に帰り、その味方の死者を非常に悲しみ歎き……。」（イテル15：13，15，16）

この戦いは何日にもわたって繰り返され、やがて「コリアントメルとシズとの二人を除いてそのほかの者はみな剣にかかって命を落とし」、シズ自身も「多く血を失ったから気絶してしまっていた。」

「そこでコリアントメルはその剣によりかかってしばらく休んでからシズの首を打ち落した。この時シズはその首を打ち落されながらも一度は手をついて身をもたげたがまた倒れて、息をつこうと身をもがきながら最后を遂げた。

コリアントメルもまた地に倒れてまるで死んだ者のようであった。（イテル15：29—32）

こうして、かつての強国、主が「全世界の中、汝らの子孫をもてわがために起す国民に勝る国民はなかるべし」（イテル1：43）と言われたジェレド人国家の末裔は、クモラのふもとで滅びたのである。

クモラの丘に立ってその悲劇的な場面を思い、現在の美しい回復の地を眺めながら、私は心に、「なぜそのようなことが……」と叫んでいた。

その滅亡から15世紀ないし20世紀前に、彼らの先祖の一団がバベルの塔から神に導かれてやってきたときのことを思い出すと、その答えはすぐにわかった。そのとき主は「約束の地とはほかのどのような土地よりも勝れてよい土地であって、神が義しい民に与えようとして備えておきたもう所である。それであるから、この約束の地が備えられた後いつであってもこの土地を所有する者たちは、ただ一つの真の神に事えなければ主の烈しい怒りがかれらに下ってかれらは亡ぼし去られると言うことを、主は断固としてジェレドの兄弟に誓いたもうた。

これで約束の地について神が定めたもうたことが明らかに知れる。すなわち、この地は約束の地であるから、およそこの地を所有する民は神に事えなくてはならぬ。もし事えなければ、神の烈しい怒りを受ける時になって亡ぼし去られる。神の烈しい怒りを受けて亡びる時はすなわち民の罪悪が極点に達する時である。

この地はすべてのほかの地よりも勝っている地であるから、この地を所有する者が神に事えない時に亡びてしまうことは神がとこしえに定めたもうたところである。』（イテル2：7—10）

この言葉の通り、ジェレド人は、今述べたようにしてアメリカの地で滅び去った。それは、彼らがこの地の神であるイエス・キリストの律法に逆らい、「罪悪が熟した」からである。

昔、神に導かれてこのすぐれた土地へやってきて、正義の内に発展を遂げ、強力な国家となり、その後悪に走って、堕落し、罪悪が熟し、神の言葉通りに滅ぼされた国民は、ジェレド人だけではない。

「神に導かれて」と、私は特に強調したい。それは先に指摘したように、民はそのように導かれると主が言っておられるからである。「主の御手によって導かれなければ何人もこの土地には来れない。

それであるから、この土地は主のつれてきたもう者が所有するために神聖にされている。もしもこの人々が、主の与えたもう命令に従って主に仕えるならば、この土地はかれらにとって自由の国となり、従ってここに住む者は決して自由を奪われることがないであろう。もしも自由を奪われるならば、それはかれらの罪悪によるのであって、罪悪がはびこる時地は悪人のためにのろわれるが、義しい者たちにとってはいつまでも祝福されるからである。』（IIニーファイ1：6，7）

ここで述べる第2の文明国、ニーファイ人国家は、紀元前600年から紀元400年にかけてアメリカで栄えた国である。この文明も、ジェレド人国家と同じ理由によって、同じ場所で、同じようにして滅びた。その死闘の記録から引用しよう。

歴史家であったモルモンはこう書いている。「さて私は、わが民であるニーファイ人が滅亡した記事を書いて結びとする。私たちはついにレーマン人の前をのがれた。……私たちはクモラの地へ進んで……民の残りの者を私たちは全部クモラの地へ集めた。……私の民とその妻子とはレーマン人の軍が進んでくるのを見た時、すべての悪人の胸に満ちている非常に死を怖れる心を抱いてレーマン人と戦を始める時を待った。

レーマン人は剣、弓、矢、まさかりおよびあらゆる武器を以て私たちを襲ったので、私と一しょに居た一万人の部下はうち倒され、私もまた負傷して兵の間に倒れたが、敵は私を殺さずにそこを通り過ぎた。

レーマン人は私の軍の中を通り過ぎて、私をいれて二十四人（この中に息子のモロナイも居た）を除くほか、私の民をことごとく殺した。そこで私たち二十四人は生きのこり、その翌日…クモラの丘の上から見わたすと、……〔23万人の〕兵の殺された所も……見えた。

……私の民はただ私も一しょに居た二十四人と南の国々へ逃げた数人と、味方を去ってレーマン人に加わった数人とを除いて一人のこらず殺され……

私は死んだ私の民のことを悲しみ悼んで全身が引き裂ける思がし、次のように叫んで言った。

『美しい者たちよ。お前たちはなぜ主の道を離れたのか。……お前たちはなぜお前たちを抱えようとして両手をひろげたもうたイエスを拒んだのか。

見よ、お前たちはこれさえしなかったならば死ななかったものを。……

美しい息子よ、娘よ、父母よ、夫婦よ、美しい者共よ。どうしてこのように死んでしまったのか。

ああ、この大きな滅亡がお前たちに来ない内にお前たちは悔い改めたらよかったものを。』」（モルモン6：14，5，7，9－12，15－19，22）

それから少しして、モロナイはこう書いた。

「見よ、私モロナイは父モルモンの記録を書きついで結びとする。……

そもそもクモラの大激戦の後、すでに南の国々に逃げていたニーファイ人はレーマン人に狩り立てられてとうとう一人のこらず殺された。

私の父もまたレーマン人に殺されて、私は一人だけ生き残ったから私の民の悲しい全滅の記事を書かなくてはならない。』（モルモン8：1—3）

ジェレド文明とニーファイ文明の悲劇の結末は、主が次のように言われたことの証明である。「この地は約束の地であるから、およそこの地を所有する民は神に事えなくてはならぬ。もし事えなければ、神の烈しい怒りを受ける時になって亡ぼし去られる。神の烈しい怒りを受けて亡びる時はすなわち民の罪悪が極点に達する時である。』（イテル2：9）

モロナイが書いたこの言葉は、現在この土地を所有している私たちに向けた言葉である。「さて異邦人よ」（ここで異邦人とは、モルモン経の予言者たちが、現在のアメリカの住民と故郷の旧世界の民をさして使った言葉である）「さて異邦人よ、私は神が定めたもうことをあなたたちが知るように、またあなたたちに悔い改めをさせ、あなたたちが、罪の極るまで罪悪をつづけないように、またあなたたちに今までこの土地に住む民が自分の上に神の

烈しい怒りを招いたようなことをさせないためにこの歴史をあなたたちに伝える。

ごらん、この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事えさえすれば、奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることがない。この地の神とは私たちがすでに記した言葉によって明らかに示されるイエス・キリストである。」（イテル2：11，12）

「主の御手によって導かれなければ何人もこの土地には来れない」（IIニーファイ1：6）という主の言葉の通り、1492年に、コロンブスは神に導かれてアメリカへ来た。

時をさかのぼる紀元前590年から600年の間に、ニーファイは時の流れを越えて未来の示現を見、「眺めると、私の兄弟たちの子孫と大海をへだてている異邦人の中（つまりヨーロッパの国々の中）に一人の男が見えた。すると神の『みたま』が降りたもうてこの男に霊感を与えたもうたから、この男は大海を渡って約束の地……へ行った。

私はそれからまた神の『みたま』がほかの異邦人にも働きたまい、この人たちが……大海を渡って行くのが見えた。私にはまた約束の地に多くの異邦人がいるのが見え……。」（Iニーファイ13：12—14）

コロンブス自身が、自分は神に導かれてこの地（アメリカ大陸）へ来たとはっきり語っている。

「イザベラ女王の御前でアービング（宮廷歴史家）はこう述べている。『コロンブスは雄弁に力強く自分の計画を披露した。彼は自ら後に語ったように、**天からの力で心に火をともされ、自分をこの壮大な計画をなすべく天から選ばれた使者だと考えた。**……

コロンブスの息子フェルナンドは父の伝記の中で、あるときこう言ったと父の言葉を残している。『神は私に信仰と、その後勇気を与えたもうたから、私はいさんで旅立とうと思った。』**『この計画について私に霊感を与え、後には、海を西へ向かって行けばスペインからインドへ航海できるとはっきり教えたもうた聖なる神のみ名によって』**と、コロンブスの志も記録されている。」（ニーファイ・ローウェル・モリス*Prophecies of Joseph Smith and Their Fulfillment*「ジョセフ・スミスの予言とその成就」1945年 p.289，294，295）

コロンブスが導きを得たことから、私たちは現在このすぐれた土地にいるのである。

神は独立戦争で勝利を与えて下さった。この国の独立は神のお陰である。神はこれまで義にかなったあらゆる業において、私たちを栄えさせて下さった。また、「この目的のためにわが挙げたる賢き人々の手によりて」（教義と聖約101：80）合衆国の憲法を制定したと、主は語っておられる。

神が御自ら愛する御子と共に予言者ジョセフ・スミスに現われたまい、イエス・キリストの福音の新しい神権時代を開かれたのは、この地である。神はこの地に神の教会を設立し、この地の隅々と可能な限り全世界に使いを送って、この地の神であるイエス・キリストの律法を宣べ、教えている。

主はこの地について古代の宣言を新たに啓示し、何度も繰り返してこられた。「この地はすべてのほかの地よりも勝っている地であるから、この地を所有する者が神に事えない時に亡びてしまうことは神がとこしえに定めたもうたところである。」（イテル2：10）

このことが私たちに啓示されているのは、「神が定めたもうたことをあなたたちが知るように、またあなたたちに悔改めをさせ、あなたたちが罪の極るまで罪悪をつずけないように、またあなたたちに今までこの土地に住む民が自分の上に神の烈しい怒りを招いたようなことをさせないため」（イテル2：11）である。

私たちは時満ちたる神権時代にいる。この時代は主イエス・キリストの再臨で絶頂をきわめる時代である。主の再臨が近づいていることと、折々に地上の民に用意されていることに関して、主は144年の昔にこう言われた。

「神の怒り限りなく悪しき人々の上に注がるる日……

この故に、主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地の果にまで及ぶ。

されば汝ら備えをなせ、そは主の来るは近ければなり。

而して主の怒りは燃え、主の剣は天にてうるおいたれば、今やこの世に住む人々の顔に下されん。

……地より平和の取り去られ、悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしともいえども今や近きにあり。

されど主もまたその聖徒らを支配し、その真中にありてこれを統治せん。……この世に下る審判のために天より降り来らん。」（教義と聖約1：9，11—13，35，36）

世界各地の教会員、非教会員を問わず、私の愛する兄弟姉妹。私は皆さんに自分の証を申し上げたい。私はきょうここでお話した事柄が過去の出来事も将来の出来事も、真実であることを知っている。私たちの目の前にあるものは明瞭、明確である。選択は私たちにかかっている。問題はただひとつ、この神権時代に属する私たちが悔い改めてこの地の神であるイエス・キリストの律法に従うか、あるいは罪悪が極点に達するまで律法を拒み続けるか、いずれかである。

私たちは悔い改めて律法に従い、それによって、この地の義しい人々に約束されている祝福を受けることができるように、贖い主イエス・キリストのみ名によってへりくだり祈る次第である。アーメン。





邪悪に対抗する

悪を撃破し、社会の品位を高めるための4つの方法。

十二使徒評議員会会員
ゴードン・B・ヒンクレー

この壇上から語ることは、この上ない大きな責任である。従って、私は聖きみたまの導きがいただけるよう願っている。

最近、ひとりの青年が私を訪ねて来た。彼は顔立ちもよく、優秀そうな学生であり、また品もあった。だが、ひどく思い悩んでいる様子であった。彼は長い間、道徳的にはずれたことを行なってきたが、ようやくそれに対して大きな疑問を抱くようになってきた、と言った。

「どうして、そんなに考え方が変わったのですか」と私は尋ねた。

彼は小指にはめた指輪を示した。重厚な金の台座の上に美しいダイヤモンドがはめてあった。彼はそれを誇らしげに見せてくれた。「これは祖父のものでした」と彼は説明してくれた。「昔、僕の祖父が長男であった父に贈ったんです。そして僕の父も長男の僕に贈ってくれたわけです。ところがある晩、僕が、例の仲間と一緒にいたときのことです。彼は僕の指輪の由来を知っていて、こう尋ねたんです。『君はその指輪をだれにあげるつもりだい。僕は君で最後だと思うな。』」

「僕はそう言われて心中穏やかではありませんでした。」彼は話を続けた。「僕はそれまでそんなことを考えたこともありませんでした。『僕は一体どこに行こうとしているのだろうか。』僕は自分に問うてみました。『僕は光もなければ、希望もなく未来もない、そんな袋小路を歩いているんだ。』突然、自分には助けが必要なことがわかったんです。」

私たちは、現在の彼を築き上げた様々な影響について話し合った。彼の育った家庭のこと、仲間との交際のこと、彼の読んだ本や雑誌のこと、彼の見た演劇のことなど、色々話し合った。彼は、数多くの仲間も同じような境遇にいるか、もっと悪い境遇にいる、と話してくれた。

その晩、私の執務室から家へ歩いて帰るとき、その青年の悲痛な姿が頭に浮かんで離れなかった。その青年はやっと自分の立場を認識したのだった。もし彼が現在と同じような生活を続けていたら、決して自分の息子を持つこともなく、また彼の祖父から受け継いだ指輪を渡すこともできなかったであろう。青年は自分の将来に寒々としたものを感じ、ようやく助けを乞い願うようになったのだった。

夕食後、私は朝刊を広げてみた。朝出かけるとき、読んでおかなかったからである。さっと目を通している途中、映画の広告が目に止まった。大部分は、退廃的で、暴力と性欲を刺激するような文句があからさまに書きたてられているものであった。

それから私は、私あての郵便物に目をやると、小雑誌が1冊あった。翌週のテレビ番組を一覧表にしたものである。この雑誌も同じような種類の番組で埋められていた。ニュース雑誌が1冊、私の机の上に置いてあった。この号では、犯罪の増加率に関する記事で紙面に割かれていた。そのグラフによれば、1963年から1973年の間に、人口はたった11パーセントしか増加していないのに、暴力犯罪は、何と驚くなかれ、174パーセントも増加しているとのことであった。さらに、その雑誌の記事によれば、警察力の増強と刑務所の拡張のために、数億ドルの予算が追加されたとのことである。

ポルノ洪水といい、性や暴力に異常なほど執着する風潮といい、これは何もこの合衆国だけに限ったことではない。ヨーロッパでも、他の数多くの地域でも、状況は同じである。最近のニュースによれば、デンマークのある映画会社が、神の御子の生涯を描く、卑わいで色情的で不敬な映画を製作する予定だそうである。このように世界的に陰惨な様相は、腐敗がますます社会のすみずみにまで浸透している証拠である。

わが国の立法府や法廷も、この波の浸食を受けている。道徳から逸脱した行為を処罰する法律も、新しい法令や法廷の判例で覆されつつある。これは皆、言論の自由、出版の自由、そしていわゆる私事の選択の自由という名のもとに行なわれていることである。だが、このいわゆる自由の結果、人は堕落した習慣と行為の奴隷となり、やがて破滅への道をたどることになる。ひとりの予言者は、遠い昔に、その過程

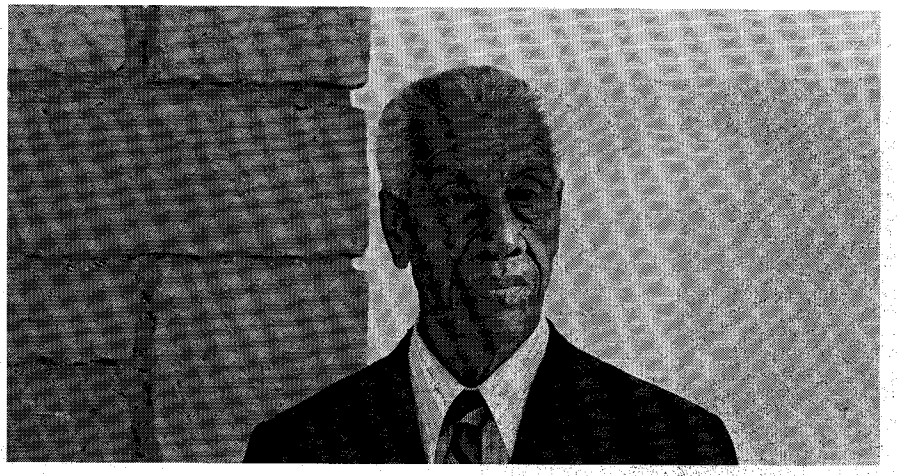
について次のような適切な言葉を述べている。「このように悪魔はこの人々をだまし、心を配って地獄へつれて行くのである。」（IIニーファイ28：21）

一方私は、この合衆国にも他の国々にも、何百万何千万という善良な人々がいることに、大いに満足している。大体のところ夫は妻に対して誠実であり、妻も夫に対して忠実である。子供たちも、穏健に、勤勉に、また神を信ずる信仰の中で育てられている。こうしたことから力を得て、私は状況が決して絶望的ではないと信ずるものである。また私は、みだらな行為と暴力が大手を振ってまかり通るのを黙って許したり、絶望的な気持になったりする必要がないことに満足を覚えている。その波は高く、勢いは強い。しかし、これまで述べたような力を十分に蓄えて現在効果的に働いている少数の人々の力に、自分の力を加えるならば、必ず押し戻すことができるのである。私は、この邪悪に対抗するというチャレンジは、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員なら、市民として決して避けることのできないチャレンジであると信じている。そして、その戦いを始めなければならないとすればその時は今である。この精神にのっとり、私は、戦闘開始に際して留意すべき4つの点について提案したいと思う。

まず第一は、自分から始めよ、ということである。世界の改革は自己の改革から始まる。私たちの信仰の根本的な信条は、「われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高徳なるべきこと……を信ず」（信仰箇条第13条）ということである。

他の人々に高徳な影響を及ぼしたいと望むからには、まず私たち自身が高徳な生活をおくっていなければならない。私たちの生活による模範は、言葉を尽くして説く以上に、大きな影響を及ぼすものである。私たちが他の人々を引き上げたいと望むなら、私たち自身が一段高い所に立っていなければならないのである。

自分を尊敬することから、人の美徳は始まる。自分が神の子であって、天父の姿に形どって造られていること、また偉大なそして神のような諸徳を発揮できるよう大きな可能性が授けられていることを知っている人は、広く世にはびこっている汚ない、みだらな勢力に対抗するために、必ずや自分を鍛えることであろう。アルマは息子ヒラマンに次のように言った。「神の命に従って生きよ。」（アルマ37：47）



主は山上で群集に向かって語られたとき、次のような素晴らしい言葉を述べられたが、これは単なる思いつきで言われた言葉ではない。「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。」（マタイ5：8）

ある賢者も言った。「まず自分から正直な人間になりなさい。そうすれば世界からうそつきがひとり減る。」

シェイクスピアは、登場人物のひとりの口を借りて、次のような説得力ある訓戒を与えている。「おのれに誠実なれ。さすればかならず、夜が昼につぐごとくにじゃな、他人に対しても誠実ならざるを得ん。」（「ハムレット」一幕3場78－80、三神勲訳）

私は、この話を聞いているすべての人に対し、チャレンジを与えたいと思う。不浄なものを避け、心の思いを高めていただきたい。また、諸徳の模範になるよう自分の行動を抑制し、言葉使いに注意して、ただ精神を高めて成長の助けになるようなことだけを語っていただきたい。

では次に第2の点に移ろう。よりよい明日は、よりよい世代の育成から始まる。ということである。つまり、両親は子供たちを育てるにあたって、よりよく働く責任があるということである。家庭は、高徳を育むゆりかごであり、性格が築かれ習慣が培われる場所である。家庭の夕べは、主の道を教える良い機会である。

あなた方は、子供たちが色々読書をすることを知っているであろう。子供たちは本を読み、雑誌を読み、新聞を読む。子供たちの心の中に、最善のものを好む性質を育てていただきたい。子供たちがまだ小さいうちに、有益な物語をたくさん読んであげていただきたい。そのような話は、その内容の高徳さのゆえに、決して子供たちの心から消えることはないであろう。子供たちを良い本に親しませていただきたい。家のどこか片すみに、小さくとも特別のコーナーを設けて、そこに偉大な精神を培うように意図された本を最低2、3冊はそろえて置いていただきたい。

また、家の中には、教会などで出版された良い雑誌を置き、それを読むことにより思いが高められ、気高い精神の持ち主になれるよう配慮していただきたい。適当な家庭向けの新聞を用意して、広く世間に見られるような汚らわしい宣伝や記事にさらされることなく、子供たちが世界の出来事を読めるようにしていただきたい。町に何か良い公演があるときには、家族そろって劇場へ出かけるようにしていただきたい。あなた方がそのような興業を後援するならば、その種の催し物を企画している人々には、この上ない激励になることであろう。情報機器やテレビをよく利用して、生活を豊かなものにしていただきたい。その中には良いもの

がたくさんある。だがそれでも選択する必要はある。キンボール大管長は、昨日、テレビ各局が夕方の主要時間帯に適当な家族向け娯楽番組を放送する努力をしている、と話された。このような努力を払っている人々には、良いものに対しては感謝の気持を、悪いものに対しては不満な気持を抱いていることを知ってもらうとよい。大体において、私たちは求めるものを得ている問題は、私たちの大部分が求めようとしないことであり、さらに言えば、良いものに対して感謝の気持を表わさないことにある。

家庭に音楽を取り入れていただきたい。あなた方には、とても音楽的とは言えない曲のレコードをたくさん持っている十代の子供がいるかもしれない。その子供たちに折に触れて、もっと良いものを聞かせてあげていただきたい。その影響下においていただきたい。音楽が自ら語りかけてくれるであろう。あなた方が考える以上に、子供たちは深く鑑賞しているものである。それは言葉で言い表わせないかもしれないが、心で感じられるものである。そして、その影響は年が経つにつれ、段々と表面に表われてくるであろう。

では次に第3の点である。**世論の確立は少数の熱心な声から始まる。**立法府の人々の面前で、けんか腰に大声をはり上げたり、こぶしを振り上げたり、脅迫したりしなさいということではない。私は、立法や行政の分野で重責を担う人々に対して、私たちの確信を熱心に、誠実に、かつ積極的に表明する必要があると信じている。残念なことに、少数ではあるが、さらに大きな自由を求めて所かまわずポルノを売りまくり、みだらな表現に一層拍車をかけている。彼らは声を大にして叫ぶため、立法に携わる人々は、彼らの言うことが大多数の人々の意志を代表しているものだと信ずるようになるのである。

私たちは自分たちが全く後押ししていないものまで獲得しているようである。

私たちの声に耳を傾けてもらおうではないか。だが金切り声をあげようなどとは思っていない。むしろ、確信をもって語り、それによって話す相手に、私たちの気持の強さと私たちの誠実な努力とを知ってもらいたいと思っている。心の思いを手紙にしたため、切手を貼って投函しただけで思いもかけない結果が生まれることがある。思いがけない結果は、重責を担っている人々との静かな対話から生まれるのである。

主はこの民に対して次のように言われた。「この故に善を為すにうむことなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。それ、小なる事より偉大なる事起る。

見よ、主は真心と喜びて事に従う精神とを求む。」（教義と聖約64：33,34）

この「真心と喜びて事に従う精神」こそ、物事の本質である。規則や法令や法律を制定する人々に、それが地方であろうと中央であろうと、話しかけていただきたい。学校を管理する責任ある地位に就いている人々に話しかけていただきたい。無論、玄関払いをくわせる人もいるであろうし、あざけり笑う人もいるであろう。落胆するかもしれない。だが、それは今に始まったことではない。エドモンド・バークは、1783年に下院で演説した際、大衆受けのしない主義主張を唱道する人々について、次のように言明した。

「彼は、自分の行く道にどんなわなが仕掛けてあるかよく知っている。…彼は自分のかかげた目的のゆえに、中傷され、ののしられる。彼はやがて、真の栄光を築き上げるためには悪評が不可欠な要素であることを心に留めるようになる。また、中傷と悪口が勝利には絶対に欠かせないものであることがわかる。」（ジョン・F・ケネディ「勇気ある人々」序文より引用）

使徒パウロは、アグリッパ王の面前で弁明する機会を与えられたとき、ダマスコへ行く途中におけるあの奇跡的な自分の改宗について話をした。主のみ声で次のように戒めを与えられたと宣言したのである。「さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。」（使徒26：16）

私は、主が私たちに対して、次のように言われるのではないかと思っている。「さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。そして真理のため、善のため、さらに品位のため、美徳のために語りなさい。」

最後に、第4の点である。**戦いのための力は神の力により頼むことから始まる。**神こそ、あらゆる真理の力の源である。パウロはエペソ人に次のように書き送った。

「最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい。

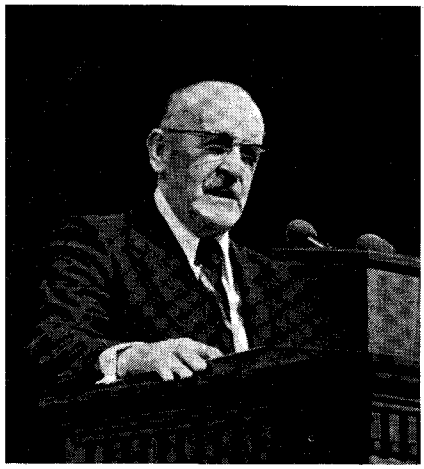
悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。

わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。

それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。」（エペソ6：10—13）

兄弟姉妹の皆様。邪悪の津波が押し寄せている。紛れもなく洪水が起こっている。私たちの大部分は、比較的平穏無事な生活をおくっているため、この洪水がどれほど広範囲に及んでいるかあまり認識していない。何億というお金が、ポルノを作り出す人々によりみだらなものを売り歩く人々により、また下品なもの、堕落したもの、性や暴力に関わるものなどの取引きをしている人々に吸い上げられている。神が私たちに、強さと知恵と信仰と勇気を与えて下さるように。そして、市民として、これら諸悪に対抗して立ち上がり、様々の美徳を擁護する私たちの声に耳を傾けてもらおうではないか。これら諸徳が実行されていた昔は、人も国家も強大なものになった。だが、一方顧みられなくなったとき、人も国家も腐敗していったのである。

神は生きておられる。神は私たちの力であり、助け主である。私たちが努力を重ねるとき、善良な人々が大勢私たちの群れに加わることであろう。私はそれを心からへりくだって祈り、私の証す御方、すなわち主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。



主の前に聖い者とされるために

私たちは、ありのままの考えや行ないによってはじめて主の前に聖い者とされる。

十二使徒評議員会補助
O・レスリー・ストーン

愛する兄弟姉妹。私は今朝、良い評判を得ることの価値についてお話したいと思う。

今までこの壇上から、私たちの生活を改め、福音に従って生きることの大切さについて、貴重なメッセージを数多く聞いてきた。皆様はもし、「キリストの戒めを守り、教えに従って生活することはなぜ大切なのですか」と尋ねられたら、どのように答えるだろうか。

おそらく多くの人が、「永遠の生命を得るために」と答えることだろう。

その通り、永遠の生命を得るためである。ではだれのためだろうか。自分自身のためだろうか。確かに自分自身のためでもあろう。しかしキリストはこのように教えられた。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。」(マルコ8：35)

私たちは心しなければならない。自分自身に仕えるのではなく、同胞のために仕えるべきである。そうすることによって、天父のみ業と栄光の内に己を滅却することである。私たちの奉仕を最も有効なものとするためには、私たち自身の生活を秩序立ったものとすることが必要である。そして福音に従った生活をするとき、私たちの生活は義と徳を放つようになり、人々の生活に大きな影響を与えることができる。自分自身の救いのために義しくあるというだけで充分でないのはこのためである。私たちは自分の持てる徳を人々に放ち、私たちの模範と評判から、人々がその生活を高め、救い主の生きた模範に従いたいという望みを抱くようにさせなければならない。

日々の生活を見てみると、私たちは人々によって裁かれていることがしばしばある。正当な裁きもあれば、不当なものもある。人々が私たちのことをどのように考え、どのように裁くか、それを私たちがいつも制御できるとは限らない。しかし、私たちの行ないによって人々に伝えるメッセージを左右することはできる。私たちはできる限りのことを行なって、良い評判を得る必要がある。これは金銭に換算することのできないものである。これが人々に良い影響を与える鍵であり、ひいては福音を伝える手段となる。

良い評判を得ることの重要性を私は痛感させられたことがある。それは数年前、すでに成功を得ていたある大実業家と事業を始めたときのことだった。私たちは、新しくある品物の卸し業を始める計画をしていた。彼が資本金を提供し、私が経営を受け持った。意見が一致すると、彼は莫大な額の小切手を切り、こう言ったのである。「事業が成功すれば、その功績はすべてあなたのものとなるでしょう。そして失敗しても同様にすべてがあなたのものとなることでしょう。」そしてこうつけ加えた。「万一事業が失敗したら、あなたは私以上に多くのものを失うでしょう。私はお金を失うだけですみますが、あなたは評判を失うことになります。それはお金よりもはるかに価値あるものです。」

この有能な実業家が述べた良い評判を得ることの価値を決して忘れることはないだろう。幸い私たちはその事業に成功した。

私は評判を上辺だけの見せかけ、すなわち、浅瀬しかないのに深いところがあると装ってみたり、偽りの潜んだ正直、不正のある徳というものだとは考えたくない。むしろ人の心の本来の姿をはっきりと示す窓のようなものだと考えたい。私たちは、気高い考えや行ないによってはじめて、主の前において清い者とされれる。そしてこのような状態にあってこそ、同胞に最も効果的に仕えることができると言えよう。

キリストは、まず他人のことを考えるようにと教えられた。自分だけひそかに福音に従った生活をするだけでは不十分である。私たちは接するすべての人に模範を示さなければならない。この点から考えると、大切なことは、私たちが何であるかだけでなく、人々が私たちをどう考えているかもまた大切なのである。宣教師として効果的に働くためには、優れた特質を身につけ、すべての点について高潔であるとの評判が得られなければならないであろう。

私について言えば、信頼、すなわち

人と交際するときに正直で高潔であるという評判を得たいと思う。また、金銭上の責任は約束の日またはそれ以前に果たす人であり、しかも契約書と同じように口約束にも信頼がおける人という評判を得たいと思う。誠意にあふれ、信頼できる人という評判も得たいし、戒めを守り、神の王国建設のために全力を尽くす人だという評判も得たい。

時々次のように言うのを耳にすることがある。「私が何をしようとかまわないじゃないか。私の人生なんだから、したいことができるはずだ。」私たちの行ないによって最も影響を受けるのは



自分自身であるということは真実であろう。しかし、人はこの世で、孤島に住んではいない。すべての人は人々と交流して生きているのである。従って、気ままに振舞うことはできない。人はみな、他の人々あるいはグループに属し、それを代表しているのである。例えば、私たちは家族を代表しており、家族の評判は家族一人一人の行ないによって築かれる。

ジョージ・アルバート・スミス大管長は重い病気にかかったときのある経験を語っている。それは健康の回復をはかるために、ユタ州セントジョージで転地療養していたときのことである。大管長の容態はきわめて悪く、ほとんど動けないほどだった。スミス大管長は話の中で次のように回想している。「ある日、このような状態の下で、私は意識を失い、死んだかと思った。私は大きな森を前にして、美しい大きな湖のほとりに立っていた。この世での働きを終え、ふるさとへ戻ったのだと感じた。いや、感じたようだった。だれかいないものかと思い、辺りを見回した。しかし目の前には大きな森、後ろには美しい湖があるだけで、人のいる気配は全くなかった。

私は辺りをさぐり始めた。すると森の中に小道があった。それはあまり人の通らない道のようで、ほとんど草に覆われていた。その道をしばらく歩くと、思いもよらぬほどあの森から離れてしまっていた。すると男の人がひとりこちらに向かって来るのが見える。非常に大柄な人だった。私は足を早めた。その人が私の祖父だとわかったからである。……祖父がこちらに向かって来るのを見て、どんなにうれしかったことだろう。私は祖父の名を継いでいたので、そのことをいつも誇りに思っていた。

あと数歩というところで祖父は立ち止まり、私にも止まるように合図した。それから、このことを少年、少女そして若人の皆さんは決して忘れないでいただきたいのだが、祖父は真剣なまなざしで私にこう言った。

『おまえが私の名で何をしてきたか知ってもらいたい。』

私がかつてしたすべてのことがまるで走馬燈のように、私の前に写し出された。すべてのことが。そこに立っているそのときまでのことが、すべてあっという間にありありと写し出された。私の生涯がよみがえったのである。私はほほえんで祖父を見つめ、こう言った。

『あなたの名前を使って、あなたが恥ずかしく思うようなことは何ひとつしませんでした。』

すると祖父は近づいて、私を抱きかかえたのである。意識を取り戻したのはそのときであった。私の枕はまるで水をかけたかのようにぬれていた。それは恥じずに答えることができた感謝の涙だった。」

スミス大管長は次のように続けている。「私はこのことを幾度となく考えた。そしてそれ以来、それまで以上に家族の名前を大切にしようとしてきた。全世界の人々に申し上げたい。あなたの父と母を敬いなさい。あなたの家族の名前を尊びなさい。なぜなら、その名前であなたが何を行なってきたかをいつか彼らに、そして天父に報告する特権と義務があるからである。」（ジョージ・アルバート・スミス、*Sharing the Gospel with others*「福音を分かち合う」p. 111, 112）

私たちが代表しているのは家族だけではない。私たちが属している地域社会、地方、国の総体的な評判は、個人の行ないを土台としている。また私たちの多くは生計の資を得る会社や企業を代表している。学生は学校を代表している。そして、教会員である私たちは行ないによって教会を代表しているのである。私たちは何を伝えようとしているのだろうか。

私たちには神より与えられた特別な責任がある。バプテスマを受けるとき、私たちはその身にキリストのみ名を受けるのである。そして毎週聖餐を受け、天父と交わした誓約を新たにする。御子のみ名を受け、御子を常に忘れず、またその下したまえる戒めを守ることによって、御子のみたまが常に共にあるようにという誓約を新たにするのである。（教義と聖約20：77参照）

バプテスマを受けることによって、私たちはキリストの家族の一員となり、キリストのみ名を負う。私たちは神権者として、また王国の民として、この地上でキリストを代表するのである。

私たちにはキリストを代表し、宣教師となって、世のすべての人々にキリストのメッセージを宣べ伝える特権が与えられている。同時にキリストのみ名を受けるにふさわしくあり、私たちが出会うすべての人にあらゆる点で主を正しく代表するという義務も与えられている。このように生活するならば、私たちの生活はその行ないによってキリストの教えそのものとなるであろう。キリストは次のように言っておられるからである。

「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。

また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。

そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」（マタイ5：14－16）

人格を築くにつれて、私たちの光はさらに輝きを増すようになる。そして、得ている評判がまさに内なる自己を反映したものとなるのである。その結果、神のみ前と同胞の前にあって、自己評判と自己はひとつに結ばれる。

長年にわたる教会と実業界の経験から、私は、私たちが行なうすべてのことに価値ある良い評判を維持することがいかに重要であるかを悟った。

証申し上げる。この世の生活で本当の喜びと幸福を得、主によく仕えて、主の王国建設に力を尽くすためには、良い評判を築き、それを維持しなければならない。これは罪を悔い改め、福音の原則に従って生活し、神の戒めを守ることによってはじめて達成されるのである。

私たちすべてがこのことを実践できるよう救い主イエス・キリストのみ名によってへりくだり祈る。アーメン。



心を洗い清める

聖典は、主のみ前にあって聖くなるための
ステップを教えてくれる。

十二使徒評議員会補助
ジョン・H・バンデンバーグ

1925年の冬、イギリスのリバプールの町の小さな集会場で、英国とヨーロッパ大陸の各地へ派遣される予定の宣教師の一団が集まって、ヨーロッパ伝道部長のジェームズ・E・タルメージ長老から助言と指導を受けていた。その助言の中には次のような訓戒も含まれていた。「あなた方はアメリカ西部の比較的質素を旨とする地方の出身ですから、当然のことながら、これまで慣れ親しんできたこととは全く異なる習慣や様式に遭遇することと思います。またそれを見て、批判したくなることがあるかもしれません。しかし決して批判しないよう注意して下さい。忘れないで下さい。あなた方は外国へ行けば外国人なのです。あなた方の方が客人です。そのような習慣や様式もいいものだということがすぐにわかるでしょう。皆、経験に裏打された産物なのですから。学び取るつもりで眺めていた方がよいでしょう。」

そこに集っていた宣教師のひとりであった私は、オランダへ派遣されたが、オランダで過ごしている間に、その勧告が賢明であったとわかるようになった。赴任から離任までの間、私は自分の観察から多くを学んだ。私は多くの町々を訪ね歩き、清潔な環境や絵のように美しい建物や見事に整備された数々の水路や運河をこの目で見た。それにもまして、私は幸福な人々と交わりを持つことができた。安息日には多くの人々が大きく美しい教会へ出かけて行った。人々は快活で豊かであり、議会政治の下に生活していた。私は彼らの歴史も学んだ。私たちは、宣教師として伝道地内を自由に動き回ることを許されていた。ここには、宗教の自由を勝ち取るために80年もの長い間戦い抜き、多大の犠牲を払うという歴史があった。アメリカ合衆国と強い絆で結ばれた国であった。もしオランダの人々が、イギリスでの宗教的迫害を避けるためにオランダに保護を求めてやって来た人々をかくまってくれなかったとしたら、その数年後、アメリカの海岸にたどりついた人々の姿はあったであろうか。当然のことながら、オランダからアメリカへ移住した人々も大勢いた。そして、彼らは、自由を愛する心と神を信ずる信仰の故に、イギリスの植民地の一部に多大の貢献をした。この植民地は、そこに住む人々がそれぞれの良心に従って神を礼拝することができるように、設立されたものである。

ジョージ・ワシントンは、宗教の問題に関して極めて強い意見を持っていた。1796年に彼は議会を去るにあたって次のような演説をしている。

「政治的な成功をもたらす様々な傾向や習慣のうちでも、宗教と道徳からの支持は、絶対不可欠な要素である。自分は愛国者だと宣言しておきながら、人類の幸福を築くこの偉大な柱を破壊しようとする者は、全く無駄な骨折りをしているのである。この柱は、人や市民の義務を、最も強固に支えてくれるからである。ひとりの政治家としても、信仰深い人々と心を一にして、これを尊び、大切に育てるべきである。

……簡単な質問をしてみよう。正義の法廷における取り調べの手段である誓約から、宗教的義務感をなくしたとしたら、一体、財産や名声や生命の安全の保障は、どこへ求めて行けばよいだろうか。道徳は宗教無しでも存続し得る、などという仮説には、余程用心してかかろうではないか。ある特殊な精神の形成には、優れた教育の影響が必要なことは認めるが、それでも、理性と経験から、国家の道徳は宗教的な原則などなくとも維持しうる、などという妄想は決して抱いてはならないことが明らかである。

美徳や道徳が民衆政治には不可欠の原動力である、ということは、大体において真実である。この法則は、大なり小なり力を得て、自由政体のすみずみにまで及んでいる。これを心の底から知っている人なら、社会構造の根幹を揺るがすような試みを、冷淡に眺めていることができるだろうか。」(*Documents of American History*「アメリカ歴史記録」p. 173参照)

確かに、オランダ国民の幸福の尺度は、宗教や美徳の力をどれほど生活に取り入れているか、ということであった。オランダ国民のこうした性質に慣れ親しんだ私は、彼らが清潔ということに極めて敏感であることにも気付いた。私たちが一軒一軒戸別訪問をして

いたとき、オランダ人の住んでいた地域だけが特に目についたのである。彼らは細心の注意を払って、彼らの住居とその周囲を見事な状態に保っておくのである。通りにごみをためることなど決してなかった。また、通りにごみ容器を出しっ放しにしておくことも決してなかった。法律でそれを禁じていたのである。これは50年前のことである。だが、最近の新聞記事を読んで、今なおその感受性が根強く残っているのを知り、うれしく思っている。その記事は、おおむね次のようなものであった。

「アメリカ人がオランダに行って最初に気付くことは、何かあるはずのものがないということである。……

もちろん、ごみはない。空きカンや古新聞紙が下水溝で風に吹かれていることもない。酔っ払いも見当らないし、路地に酒びんが転がっていることもない。飢えた野良犬もいなければ、よどんだ川から発散するはずの悪臭もない。

オランダ人は、公害や浪費や醜悪に対して、どう対処すべきなのか、いつでもよく知っていた。彼らはそれを許さないのである。」（トム・ボーデン "*Holland; Taking the Tension Out of Life*" 『オランダ；人生から緊張を取り除く』*Washington Post*, 1975年6月7日, p. A－11）

オランダの人々の住まいは確かに質素であったかもしれないが、彼らは細心の注意を払って，住まいを清潔にしていた。私たちは、女性が朝、ドアの真ちゅうをみがき、家の玄関口にブラシをかける姿をよく目にした。また歩道にまでブラシがけをしている光景が何度も目にとまったものである。

その理由を尋ねる必要はあるまい。清掃の行き届いた通りを歩けば、家の中にごみや汚れを持ち込むことがないということを知っているため、それによって、良い習慣が一層確立したことは言うまでもない。恐らくこの考え方は、心にもあてはまるのではないだろうか。心の中に入り込もうとする不純なものを掃き出すために、絶えずみがきをかけ、それによって心が汚されないようにするのである。

私はこの清潔の習慣について思い巡らしていたとき、とっさに、私が子供の頃に与えられた訓戒で思い当たるものがあった。私はその頃、足や顔を洗うという日課をおろそかにしようとしていたのである。「清潔は聖潔に通ず」という言葉で、両親からやさしく注意を受けたものである。私はこの言葉を度々耳にしていたために聖句であると

乏しい水の最後の一滴を友のために分け与える隊員。ギルバート・リスウォルド作のモルモン大隊記念碑より。(ユタ州庁)



思っていたが、その後大分たってから、これがジョン・ウェズレーの説教の中にある言葉だということがわかった。そして、ここで私はあなた方の心の中にこの言葉を注ぎ込もうと思う。本当に、肉体的な清潔と霊的な清潔の間には類似点がある。ちょうど清い肉体、清い家、清い環境が病気の広がるのを防ぐように、清い心、清い思い、清い行為は悪の入り込むのを防ぐのである。ヘブライの教父の言葉に、次のような教えがある。「宗教の教義は、慎重さということに言い換えることができる。そして慎重は活気に、活気は潔白に、潔白は節制に、節制は清潔に、清潔は聖潔に、それぞれ言い換えることができる。」(バートン・スチーブンソン編 *The Home Book of Quotation* 「家庭引用辞典」p. 279)

聖典の目的、言葉を換えて言えば、宗教の教義の目的は、人々の信仰が次第と低下するのを防ぎ、最終的には、彼らが永遠に天父と共に住めるように、彼らの魂を清潔な状態に保っておくための手助けをすることにあるのである。それは段階を踏んで行なわれる。パウロは、ヘブルの聖徒たちにあてた手紙の中で、数々の教義について言い及んでいる。

「そういうわけだから、わたしたちは、キリストの教の原則をあとにすることなく、完成を目ざして進もうではないか。つまり、死んだ行ないの悔改めと神への信仰。

バプテスマについての教と按手、死人の復活と永遠のさばき、などの基本の教をなおざりにしておくことをやめようではないか。

そして、わたしたちは、完成を目ざして進むのである。」(霊感訳ヘブル6：1－3)

だが、はじめに、もっと細かい教えが与えられた。神がアダムに語りかけられたときのことである。その聖句を示そう。

「この故に、汝らの子らに教えよ、すなわちすべての人は何所にあるもことごとく悔い改めざるべからず。然らざれば彼ら決して神の王国を嗣ぐこと能わず。汚れたる者は王国に住むこと能わず、すなわち神の御前に住むこと能わざればなり。……

故にわれ汝に一つの誡命を与えてこれらの事を汝らの子らに自由に教えしむ。曰く、

罪によりて堕落は来れり。その堕落によりて死は来れり。汝ら水と、血と、わが創りし霊とによりてこの世に生れたれば、塵よりして生ける『霊の結合体』になりぬ。されば、誠に汝ら水と「みたま」とによりて再び生れ、わが生みし独子の血によりて清められて天の王国に入らざるべからず。かくして汝らすべての罪より清められ、この世に於て永遠の生命の言葉を受け、来るべき世に於て永遠の生命：まことに不死不滅の栄光を受くるなり。

そは汝ら水によりて誡命を守り、『みたま』によりて義とせられ、血によりて聖められるる故なり。」(モーセ6：57－60)

宗教的な教えというものは、だれにとっても何かしら意味のあるものであるが、その教えが真実であるという確固たる基盤に立っていなければならない。もしその教えが神話や伝説、仮説、想像、あるいは人の作った教義の上に立てられたものであるなら、その中には何も真理はない。私たちは今日、現代社会における道徳と高潔さの衰退に関心を払っているかも知れない。だが、信仰というものの概念が、生ける泉でなく、行ないの伴なわない原則に堕してしまったとしたら、また宗教が単に身分を確立するために教会に籍を置くだけのものになってしまったとしたら、私たちは他に何が期待できるだろうか。今こそ全人類が神に尋ねるときである。神は私たちの創造主だからである。「あなたは私たちに何を求めておられるのですか」と。だが、この質問に対する答えは既に与えられている。イエスは御父から教えられたことを教えたのである。すなわち、「すべての人は……ことごとく悔い改めざるべからず。然らざれば彼ら決して神の王国を嗣ぐこと能わず。汚れたる者は王国に住むこと能わず。」(モーセ6：57) イエスは救いの計画を教え、また次のように言って人類を励まされた。「わたしに従ってきなさい』(ルカ18：22) また、次のようにも言われた。「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。

神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ7：16, 17) 以来、救い主の教えられた教義は決してたじろくことがなかったのである。

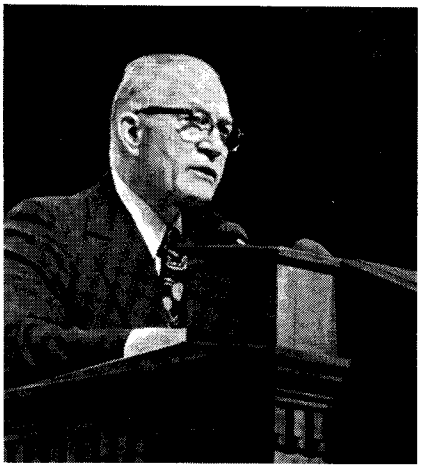
福音は、個人個人が自分を治める上での原則である。そういう目的で与えられた福音は、人の生涯に確信を与え、人が存在する目的とその永遠性を説き明かしてきた。その律法と儀式を厳格に守ってはじめて、人は神の王国の一員になれるのである。

私たちが踏み行なうはずの進歩の段階を示す原則は、私が前に引用したパウロの言葉の中に述べられている。その進歩の一つ一つの過程は、ヘブライの教えの言葉の中に、なかなかうまくまとめられていると言ってもよい。その原則は試してみることができる。そして実際、それが人生に適用された場合、人は、私たちの天父が求めておられるような清い状態にまで達することもできるのである。

これまで、神がアダムに語られたみ言葉を引用して教えを説いてきたが、ここで人は皆、古代の予言者モロナイの勧める教えを入念に研究する必要があろう。モロナイは、すべての聖典学習に応用できる公式を与えている。

「ごらん、私はあなたたちにすすめたい。……あなたたちはこの記録を読む時に、アダムが造られてからあなたたちがこの記録を受けるまで、主が世の人々にどれほど憐みを垂れたもうたかを思い起して心の中に深く考えてほしい。

……それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え、もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」(モロナイ10：3, 4) 私もそれを証する。イエス・キリストのみ名により、アーメン。



誓約と祝福

主と誓約を交わす者は、従順ならば祝福を受ける。しかし不従順な者はのろいを被る。

十二使徒評議員会補助
ウイリアム・H・ベネット

兄弟姉妹の皆さん、私たちの天父は、アダムの時代から現代に至るまで、その子らと誓約を交わし、祝福を約束してこられた。そして神の子らは、それらの誓約を忠実に守るならば、その祝福にあずかることができるのである。本日私は、これらの誓約と祝福についていくつかの事柄をお話したい。

聖典から、私たちは全員、肉体をもって生まれる以前に霊として、文字通り天父の霊の子として存在していたことがわかる。しかし、すべての者が同等の英知を具えていたわけではない。ある者は他の者よりも従順さと忠実さにおいて勝っていた。その結果、彼らは特別な祝福を与えられ、この世において特別な使命を果たす者として選ばれたのであった。(アブラハム3：11，12，14，16—19，22，23参照)

私たちは聖典から、これら選ばれた者たちを幾人かあげることができる。その第一は、霊界において高い地位にあり、天使長として知られていたミカエルである。彼は選ばれ、御父と御子の下にあって、永遠に人類の長として立つ、最初の人間アダムとなった。そのほかに選ばれた者として、セツがいる。セツは、義人アベルの死後、アダムの息子たちの中で最も忠実であった。エノクもそうである。エノクは、彼の血統を通じてノアとメシヤが生まれるであろうとの約束を主から受け、また彼の子孫は地球が存在する間存続するであろうという約束も受けている。また、ノアもそうである。ノアは選ばれ、洪水後、この地上における人類の第二の父となったのであった。さらに、ノアの選りすぐりの息子セムも選ばれた。アブラハム、イサク、それにヤコブもそうである。　(アブラハム1：3；モーセ1：34，6：8，22，45，46；ルカ3：8；教義と聖約29：26；88：112—115；78：16；107：53—56；116；*Teachings of the Prophet Joseph Smith*, p. 157)

偶像崇拝の横行する中にあっても、アブラハムは真実の神を礼拝し続け、主より与えられたあらゆる試みに耐えて、その忠実さを証明した。その結果、主はアブラハムと誓約を交わし、彼と、最後の代に至るまでの彼の忠実な子孫とに祝福を約束されたのである。こうしてアブラハムは、「先祖に属ける権能を保つ正当の世嗣、大祭司となりたり。」(アブラハム1：2)そして、この神権の権能は、「神が子孫に就きて先祖に与えられし任命に従い」、忠実な者の血統を通じて受け継がれた。(アブラハム1：4。教義と聖約84：14—16をも参照)

なぜ特定の者が選ばれて、神権を受け、神の特別な使いとしてこの世で神の代理を務めたのかと、疑問に思うかもしれない。これに対して、予言者アルマの極めて確信に満ちた答えがモルモン経に記録されている。

「祭司たちが聖任された仕方は次のようである。かれらはそのすぐれて堅固な信仰と善い行いとがあるために、神の先見の明によって創世の前からすでに選んで備えておかれた。かれらはまず善を選ぶのも悪を選ぶのも心のままに許しておかれたが、すでに善を選んでその信仰がすぐれて堅固であったから、聖い召を受けてこの職に召された。……

かれらがこの聖い職に任ぜられたのはその信仰に由ったのであって、……」(アルマ13：3，4)

それ故にアブラハムは、前世において忠実であったために、これまた神権を持つ資格のあった忠実な先祖の血統を通じて、この地上に生まれることを許されたのであった。そしてまた、前世の善き業に加えて、この世のあらゆる試しに耐え、遺憾なく忠実さを証明したことから、主は彼とこの神聖な誓約を交わされた。この誓約は、アブラハム2：8，9，11に記録されている。

「わが名はエホバなり。われは始めより終りを知る。これを以て、わが手汝を覆わん。

われ汝を大いなる国民となし、汝を限りなく恵み、汝の名をすべての国民の中に大いならしめ、汝は汝の末の子孫にとり祝福の基となりて、汝の子孫は万国の民にこの導きと教えを施す職と神権とを携えて行かん。……

われ汝を祝する者を祝し、汝を咀う者を咀わん。また……この権能は汝によりて継続し、また汝のすえ……によりて世界の眷族ことごとく祝福を得ん、



大管長会：左からＮ・エルドン・タナー第一副管長、スペンサー・Ｗ・キンボール大管長、マリオン・Ｇ・ロムニー第二副管長

すなわち福音の祝福にして救いの祝福、すなわち永遠の生命の祝福を得んと言う約束を汝に与えたればなり。」

主はこの誓約を、アブラハムの忠実な息子、イサクとの間に更新し（創世17：19—21；24：60；25：11；26：1—4）、またアブラハムとイサクの祝福を、ヤコブに確認されたのであった。このヤコブは、主によってその名をイスラエルと改められ、彼の子孫は、イスラエルの子ら、主の選民として知られている。そしてこの民は、神権を携え、真の神と真実の福音に関する知識をこの世に保つという、特別な使命を帯びているのである。

主とアブラハムとの誓約には、アブラハムの直系の子孫のほかに、その時以降福音を受け入れるすべての人々も、養子縁組によってアブラハムの子孫になる、という約束が含まれていた。また、アブラハムの血は諸々の国民の間に混じり、彼らに福音に伴う特権が恵まれるという約束も含まれていた。

主が現代に下された啓示によると、私たちはイスラエルの子らであり、またアブラハムのすえの子らである。（教義と聖約 103：17）従って私たちは、その血統により、また福音のすべての儀式に従うことによって、先祖アブラハム、イサク、ヤコブの祝福にあずかる資格があるのである。

神権の正当な継承者である私たちは、強くなければならない。義しい生活を送り、神権の力を保ち、全世界に対する私たちの偉大な救いの使命を認識し、強くなければならない。

私たちにとって神権は、他のいかなる所有物にも増して貴いものである。私たち神権者には、ふたつの大切な使命がある。ひとつは福音を説くこと、もうひとつは、救いの儀式を執行することである。福音の原則を日常生活に応用することによって、自分自身と家族と、さらに人類に幸福をもたらすのが私たちの使命である。そして私たちがこの世にある大きな目的は永遠の生命を得ることなのである。

教義と聖約86章で、主は次のように述べておられる。「かくの如く主汝らに言う。汝らはすなわち代々父の血統によりて神権を有つ者たちなり。

何となれば、汝らは肉に由りて正当なる世つぎにして……

すなわち、この故に汝の生命と神権とは依然残されたり。而して世の始めよりこの方すべての聖なる予言者の口によりて語られたるすべての事の回復する時まで、汝と汝の血統とによりてこれは必ず依然残らざるべからず。

されどもし汝ら絶えずわが善を行い、異邦人の光となり、この神権によりてわが民イスラエルを救う者とならば汝ら幸福なり。」（教義と聖約86：8—11）

神権の権威と権能には、誓約の責務が伴う。すなわち、アロン神権に聖任された者は、その誓約に基づいて与えられるままに、その職の義務を果たさなければならない。（教義と聖約20：46—60；107：13，14，85—88）また、大神権すなわちメルケゼデク神権に聖任された者は、「父のもてるすべて」

を受け継ぐ道を開く、神聖な誓約に入る。(メルケゼデク神権の誓詞と誓約については、教義と聖約84：33—41を参照)

「新しき且つ永遠の誓約」とは、イエス・キリストの完全な福音であり、神より与えられた生命と救いの計画の範囲内にある約束と規約はすべてこれに含まれる。そして、心から信じる者は、この計画によって、キリストの日の栄光の家族に入り、「父のもてるすべて」を受け継ぐことを許されるのである。

モルモン経には完全な福音があり、その中に与えられている律法と教義は、それを受け入れる者に義務を負わせるものである。人はバプテスマの誓約を交わすと、必然的に永遠の生命を約束されることになる。それによって門戸が開かれるのである。しかし、この大きな約束を勝ち得るためには、まずその約束を受けるにふさわしいことを自ら証明しなければならない。

出エジプト記に述べられているように、いつの時代にも神の民には、安息日の律法が永遠の誓約として与えられてきた。(出エジプト31：16参照)そしてこれには、物心両面の祝福が約束されている。(教義と聖約59：9—20)

聖餐の儀式によって、教会員は主と交わした誓約を新たにする。同時に、信仰篤くふさわしければ、彼らに恵みをもたらし、永遠の生命に導く聖き「みたま」を受けることができるという確信を再び得るのである。(教義と聖約20：77，79；Ⅲニーファイ18：7，11；モロナイ4：3；5：2)

知恵の言葉でさえも、約束を伴う原則として与えられている。(教義と聖約89：18—21参照)

私たちは神殿において、偉大な福音の真理を学んでいる。神殿のエンダウメントは、地上における人の生涯に関する知識を与え、またこの世において幸福を得、天において昇栄を得るための方法と手段を与えるものである。また神殿のエンダウメントは、進歩の実を享受するために、また可能な行く末に到達するために人はいかなる行ないをなすべきかということについても特別に教えている。罪に陥らないように、そして貞節を守り、徳高く、誠実であること、また利己心を持ってはならないことを教えている。さらに真理の大義のために、また永遠の福音を人々に説くために、自分自身の持てるすべてのものを主に捧げるように教えている。

自分自身のエンダウメントを受け、この貴い知識を得る者は、与えられた教えに従い、日常生活においてそれを実践することを、神と誓約するのである。また、神殿で交わした約束を履行しない者は神から罰せられ、他方、真理を受け入れ、それを実践し、戒められている通りに福音に従って生活する者は、豊かな祝福を受けるであろうとも説かれている。

恐らく、神殿の儀式の内で最も素晴らしいものは、この世だけでなく永遠にも及ぶ、夫婦と子供たちとの結び固めの儀式であろう。福音によれば、夫婦関係は死をもって終わることもなく、墓を越えて続く。この世と永遠に及ぶこのような結合、結び固めは、大管長ただひとりが所有する特別な権能によってのみ執行することができるのである。大管長はこの権能を他の人に委譲することができ、現にそうしている。従って、大管長からその権能を受けている神殿職員やその他の人々は、神殿において諸々の儀式を執行することができるのである。

すべての教会員は、その行ないが義しければ、適正な年齢に達すると、貴いエンダウメントを受け、私たちに救いと昇栄をもたらすための御父の偉大な計画について常に新鮮な記憶と維持することができる。

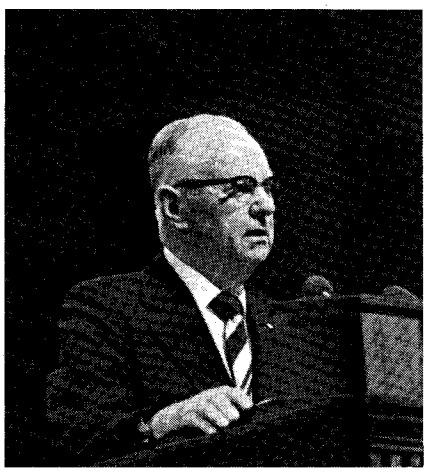
兄弟姉妹の皆さん、結論として言えることは、私たちが神殿で交わす誓約が永遠にその効力を持つ神聖なものであるということである。このことを決して忘れないでいただきたい。不幸なことに、神殿推薦状を受けるための面接で、誓約に忠実でないことが明らかになる人々がいる。また、誓約を軽視していること、守っていないことが面接で明らかにされる神権指導者もいる。そしてある人々は、ふさわしくない状態で神殿に入っている。そのような人々は、自分の永遠の行く末を危険にさらしているのである。

皆さんにとってためになる、ひとつの話をしたい。それはひとりの兄弟の話である。彼はある若くて美しい女性を愛するようになり、ふたりは神殿に入って、今も永世にも結び固められた。しかしやがて誓約を軽視し、重大な罪を犯し、教会から破門されてしまった。次いで夫婦は離婚した。その後、彼の最初の妻は、神殿の結び固めの解消を申請した。こうして始めて、彼女は他の男性に結び固められるのであった。すると彼は、その解消に同意するか、あるいはそれを拒むか問われたときに、数頁に及ぶ長い手紙を書き送った。それは次のような言葉で始まる。

「ええ、同意します。彼女にふさわしい幸せを得られるようにしてあげたいと思います。」次に彼は数段落にわたって、先妻の徳を称えた。続いて、このように言っている。「なぜ私は、彼女と息子のためにできることをしなかったのでしょうか。不注意だったからです。誘惑者の声に耳を貸し、捕えられたのです。これまで彼女と息子に行なってきたことは決して赦されないことでしょう。」最後に「絶望した男より」と結んで署名がしてあった。

兄弟姉妹の皆さん、私たちには自由意志がある。しかし、私たちが選んだ事柄の結果を決める自由意志は全く持たない。行ないに対して責任を取るのは私たち自身だからである。

皆さんに証を申し上げたい。この教会は神の予言者により導かれている。そして、予言者、聖見者、啓示を受ける者として支持されているそのほかの神の予言者たちは、彼の傍らにいるのである。私たちの予言者の声に耳を傾けよう。私たちが交わした誓約に忠実でいようではないか。心からイエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。



民を主に備えさせる

主の予言者の指示に従うならば、民を主に備えをさせることができる。

十二使徒評議員会会員
デルバート・L・スティブレー

愛する兄弟姉妹ならびにラジオ、テレビに耳を傾ける友人の皆さん。救い主の降誕に先立って、来臨を告げる数多くの予言があった。古代の予言者たちは、世の人々がキリストを彼らの救い主、主、神として認めることができるように、主の降誕に先立つ出来事を知らせ、地上での使命を告げた。イスラエルの家にはキリストの地上の生活に関する数多くの予言の記録があったが、永遠の御父はそれでも特別の使者バプテスマのヨハネを送って、「民を主に備え」させた。(ルカ1：17)

キリストの降誕と生涯とそのみ業についての古代の予言者たちの予言は成就された。そして、それらの予言を真心から信じる人々は、キリストを受け入れ、従う備えができていた。これが事実であることから考えて、キリストの再臨について予言されていることもきっと成就すると、期待できるのである。

キリストの地上の使命が終り近くになったとき、弟子たちは世の終りについての教えに関心を持ち、ひそかにキリストに尋ねた。「『どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか』。

そこでイエスは答えて言われた、『人に惑わされないように気をつけなさい……』。」(マタイ4：3，4)

そのとき救い主は再臨に先立って起こる出来事やしるしを弟子たちに話された。それはマタイ伝の24章に載っているので、よく調べてみるとよい。

イエスは、不法がはびこり、にせキリストが大勢の人を惑わし、にせ予言者が出て大きなしるしや奇跡を示し、選民をも惑わそうとし、大きな艱難が起こるであろうと弟子たちに話された。戦争と戦争の噂があり、国は国に敵対して立ち、飢饉や疫病や地震があって、予言者ダニエルが言ったような荒らす憎むべき者が出ると。

キリストの再臨に先立つ出来事についての聖典の予言は、地上の全住民への道しるべであり警告である。そのしるしが成就するのを目にしながら、これらの警告に聞き従わずにいられるだろうか。

バプテスマのヨハネがキリストの降誕に先立ってみ業のために道を備えるべく遣わされたように、神は救い主の再臨に備えてこの最後の福音の神権時代を開くひとりの予言者を送られたのである。予言者ジョセフ・スミスは疑い深い世に向かって、イエスがキリストであり、まさに神の子であることを証した。

主は末日の啓示の中で、終りの時代には艱難、荒廃、災害、破壊があることを再び繰り返された。主はこのように警告しておられる。

「その日、戦につきて聞かん、また戦いのうわさにつきて聞かん。全世界は揺れ動き……

人々の愛は冷やかになり、不法は満つべし。

この時に当り、その世に立ちて而も地に溢るる懲しめを見終りて後始めて過ぎ行く人々在るべし。世を滅ぼすべき疫病、地を覆うべければなり。

また地震も至る所に起り多くの荒廃は来らん。されどなお人々はわれに向いてこころを頑固にし、互いに剣を執りて殺し合うべし。」(教義と聖約45：26，27，31，33)

ずっと以前から世界のどこかに戦争があり、今も戦争の噂が多くの国の重大関心事となっている。また国は国に敵対している。

不安定な政府があり、倒れた政府がある。政界や実業界の指導者たちの高潔さ、誠実さ、正義などは、下落の一途をたどっている。

世には不法がはびこっている。そして多くの人々は、人を惑わして闇と罪の道へひきずり込むことに、良心の呵責をみじんも感じていない。

自分はキリストだ、予言者だと主張してはばからず、欺瞞と狡猾さで大勢の人をひきつける人々がいる。

飢饉と疫病は引きも切らず、地震は回数も程度も年々激しくなり、自然界の災害は厳しさを加えていく。

サタンは人に猛威をふるい、実際、サタンの弟子、サタンの崇拝者だと表だって自称する人々がある。

現在の世は、神を捨てた人や神を忘れた人であふれている。そして彼らは自分の判断に頼って、神の律法を変え

ようとしている。彼らにとって、神を信じることは時代遅れなのであろう。彼らは、神の戒めが永遠不変なことを忘れている。私はひとつ尋ねたい。被造者が創造主よりも賢いことがあり得ようか。

我が国の裁判所は神の律法と戒めに代わり、人の作った法を取り入れている。神は死んではいない。神は永遠に同じで、確固として変わらず、神の子らへの愛とあわれみに満ちておられる。

悪の力は神の力と対立する。サタンは国家や国民生活の上に広く力をふるっている。国家の指導者が自分勝手な道を歩んでいると、誤解や問題は増加し、論争や争いがふえることだろう。

主は予言者ジョセフ・スミスに告げておられる。「汝ら備えをなせ、まさに来るべき事のために備えをなせ、そは主の来るは近ければなり。」(教義と聖約1：12)

このみ業の最後の神権時代に、主は「汝ら、主の大いなる日のために備えを為せ」(教義と聖約 133：10)と警告された。

私たちは、主の再臨に備え、私たちにできる最も大切なことは何であるかを充分に理解して、従順と忠実さによって主の罰から逃れようではないか。

そのために、次の事柄を考えなくてはならない。私たちは自分の生活と家庭とを整える必要がある。それはつまり、自分を見つめ、悪い行ないを認め、必要ならば悔改めをすることである。神の戒めをすべて守ること、隣人を愛すること、模範的な生活をすること、良い夫、良い妻となることである。そして子供たちを正義にかなった方法で教え導くこと、仕事や家庭ですべての

太平洋に向けて歴史的な行軍をするモルモン大隊を、いぶかし気に見守るインディアン。



行ないに正直であること、イエス・キリストの福音を世のすべての民に宣べ広めることである。

主は言われた。「見よわれその時期に於けるわが業を急ぐべし」と。(教義と聖約88：73)

主のみ業は急を要する。時は少ない。この末日の主の王国の進展が急務であるということは、あわてふためき、ろうばいせよという意味ではない。この福音の光と真理を求めるすべての人の間に、主の王国を早く確立し、強固にしたいという願いが込められているのである。福音は、すべての子らのための神の生命の計画なのである。

神は諸天を開き、主の再臨に備えるよう子らに警告するため、予言者たちに天の使いを送ってみ業を急がれるであろう。

キリストは、「日はすでに傾き働き人をわが葡萄園に呼び入るる最後の時なり。即ち第十一時なり」(教義と聖約33：3)と強調された。

救い主は末日の教会を設立するにあたって、これが地上に主の王国を建てる最後の時であると言っておられる。(教義と聖約27：13参照)

予言者ダニエルは末日の神のみ業について語り、天の神が決して滅びず、他の民にも渡されず、永遠に立つ王国を建てられると告げている。(ダニエル2：44参照)

そのように、この福音の神権時代が最後である。主は、末日の教会が滅びるとは決して言われなかった。神はやがて大敵サタンを含めてすべての敵を征服される。神の律法と戒めを守り、主の味方につくことが明らかに得策である。危険の多いこの末の時代に、世に警告を発する私たちの責任は重大である。救い主は言われた。

「収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい。」(ルカ10：2)

末日聖徒イエス・キリスト教会は、人の刈り入れに多くの働き人を送るというこのチャレンジに添って永遠の福音をあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる世の人々に伝えるため、大勢の宣教師を召し、全世界に送り出している。

主は主の民に、「われまた誠に汝らに告ぐ、主の再臨は近づきて夜来る盗人の如く世を襲うなり」(教義と聖約106：4)と警告された。

また、「見よ、主なる神は天の唯中を過りて叫ぶ天使を遣わして言わしむ。汝ら、主の道を備えよ。その道を備えてこれを直くせよ。主の来る時近ければなり」(教義と聖約133：17)とも言われた。

教会員と世の民にキリストの再臨の備えをさせ、キリストを受け入れる用意をさせるというチャレンジを、私たちはどのようにして果たしたらよいのだろうか。次の勧告に耳を傾けよう。

「その時主の腕現われて、主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず、予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる者のその民の中より絶たるべき日来るなり。

そは彼らわが儀式より離れ去り、わが永遠の誓約を破りたればなり。

彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども、その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。」(教義と聖約1：14－16)

主はこうも言われた。「主、われ言いたることは、われ言いたるなり。われ言い逃れせず。天地は過ぎ行くとも、わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも、僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」(教義と聖約1：38)

主は、霊的なことにも物質的なことにも主の民のとるべき道を示すため、教会に予言者や使徒や教師を置かれた。これらの指導者たちの権利、権能、神権の力は、救い主御自身から来る。神に任命された指導者の勧告に従えば、私たちは安全である。

末日聖徒イエス・キリスト教会に属する私たちには、生ける予言者スペンサー・W・キンボール大管長が与えられている。彼が神から召されていることを私は証する。彼は私の教師、私の指導者、私の模範である。私は信仰と祈りによって彼を支持する。彼が予言者に召されていること、神から指導者として召されていることを、私は完全に確信している。キンボール大管長の人格は清廉で、精神は敏活、その勧告は賢く、判断は適格で、ビジョンは明晰である。彼はすべての人を心から愛し、人々の友であり、思いやりが篤い。

私たち教会員は、私たちの予言者でもある主の予言者に従って、その教えと勧告と彼自身が示す模範に心を留めたならば、決して道を誤ることはない。

救い主は末の時代について、さらにこのように教えられた。

「また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い。

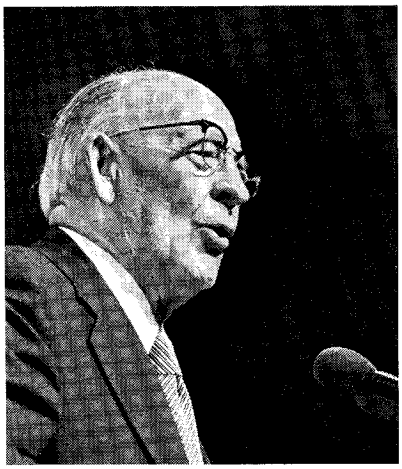
人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が揺り動かされるからである。そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。

これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから。

あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。

これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい。」(ルカ21：25－28，34，36)

兄弟姉妹、私たちは予言の成就を見極め、自分の家庭を整えて、この重大な日のために備えようではないか。そして、民に主の再臨の備えをさせるというチャレンジを果たそうではないか。これらを、イエス・キリストのみ名によってへりくだり祈るものである。アーメン。



予言者と予言

この教会は予言を土台として建てられている。ある予言はすでに成就されており、またある予言はやがて成就されようとしている。

十二使徒評議員会会員
リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹、教会のこの素晴らしい総大会に出席する機会にあずかり、とてもうれしく思っている。主のみたまの導きによって語るとき、私がこの限られた時間内で申し上げることが、あなた方の証を強めるものとなり、教会員でない方々にも何かを感じていただけると確信している。

今日私は、予言と予言者の重要性について少しお話したいと思う。

救い主は復活後、ふたりの弟子とエマオに向かわれたが、弟子たちは「目がさえぎられて」(ルカ24：16)救い主を認めることができなかった。救い主はふたりの弟子の話に耳を傾けながら、かつて御自身が教えられたことを、このふたりは理解していないということに気がつかれた。そこで救い主はこう言われた。「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。」(ルカ24：25)そしてモーセをはじめとする予言者たちが、救い主のことをどのように証しているかを彼らに示された。聖典を調べれば、予言者たちが救い主の生涯と使命を極めて細かい点に至るまで予言していることがわかる。例えば、救い主が十字架に掛けられたとき、その衣をくじで引いて取るというようなことまでも予言している。(詩篇22：18)

ペテロは次のように言った。「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。」

聖書の予言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。(これは重要なことである。)

なぜなら、予言は昔決して人間の意志から出たものではなく、神の聖者が聖霊に感じて語ったものだからである。(欽定訳IIペテロ1：19—20)もし私たちにこれと同じ力があるなら、私たちは予言を理解できるはずである。

神の予言者たちは、救い主が時の絶頂においでになると予言したように、再臨に先立って起こる重要な事柄についても数多く予言している。そのうちのいくつかをお話したいと思う。

予言者アモスはこう言っている。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」(アモス3：7)もしこのことを理解していれば、予言者を頭としない業を捜し求める者はこの世にだれもいないはずである。主は頭である予言者に知らせないでは、どのような業も行なわれない。予言者ジョセフ・スミスの時代から今日の予言者、スペンサー・W・キンボール大管長に至るまで、神が多くの予言者を私たちにお与え下さったことに感謝しようではないか。

私はキンボール大管長と37年もの間親しくしている。この世で彼ほどキリストに近い人を私は知らない。もしも主がキンボール大管長のような人を通して語られないとすれば、ほかにだれがそれにふさわしいと言えるだろうか。私は生ける予言者が与えられていることを感謝している。

「預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった」(IIペテロ1：19)と語ったときのペテロの言葉を理解するならば、主のみむねとみこころを知るためには神の予言者による以上に明らかでかつ確実な方法はないということを理解するならば、「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」ことがわかるのである。(アモス3：7)

今日アメリカには約700ものキリスト教会がある。しかし、前に述べた言葉を信じ、イエスが予言をどれほど重要に考えておられるかを知るならば、人は、神がみむねやみこころをあらわされる予言者のいる教会以外に、真理を捜し求めはしないはずである。

なすべきことはたくさんあった。ペテロは、ペンテコステの日の後、キリストを殺した人々に向かってこのように言った。「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。

それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわさして下さるためである。

このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならない。」（欽定使徒3:19—21）

このように、真理を求める人は更新を求めることだろう。改革ではなく、継続でもない、更新を。もしペテロが神の予言者であったなら、救い主が再臨される前に、すべての予言者たちの口を通して語られた万物の更新が起こるはずである。キリストは「万物更新の時まで」天にとどめておかれることになっているとペテロは述べているからである。失われたものを回復するこれら古えの予言者たちの訪れを受ける、この世の予言者がいない限り、更新は起こり得ない。イザヤが予言したように、数々の教会は人の戒めを教えてきたのである。しかし私たちの教会には生ける予言者がいる。

主は予言者ジョセフ・スミスを立てられた。このことはこの大会で多くの人が証している。記録の示す限り、かつてこの地上に住んだどの予言者よりも、予言者ジョセフ・スミスを通して多くの真理が私たちに明らかにされた。ジョセフ・スミスは、救い主が再びおいでになる前に、この世を訪れてすべてのことを回復することになっていた古代の予言者たちから、多くのものを私たちに与えてくれた。彼が回復したものは数多い。

例えば、あなた方はネブカデネザルの夢とダニエルの解き明かしを御存知だろう。ネブカデネザルは夢を忘れた。そこで博士や法術士たちを呼び集めたが、その夢を解き明かせる者はだれもいなかった。そこでイスラエルのダニエルのうわさを聞いたネブカデネザルは彼に尋ねた。ダニエルは次のように答えた。「しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです。あなたの夢と、あなたが床にあって見た脳中の幻はこれです。」（ダニエル2:28）

それから、私たちが現在生きているこの末日に至るまでのこの世の王国の興亡について語った。そして、末日に天の神はひとつの国を立て、これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされないであろうと解き明かしたのであった。（ダニエル2:44参照）神は予言者を通して王国を築かれる。そうであるとすれば、神は予言者がいなくて、永遠に耐え得る王国を、お建てになるだろうか。

ダニエルは人手によらずに切り出されたひとつの石があるといった。それははじめほんの小さなもので、6人の男性によって建てられた王国であった。そしてダニエルが石は大きな山となって全地に満ちると言ったように、その王国は発展してきたのである。（ダニエル2:35参照）

今日のこの教会ほど飛躍的な発展を遂げている宗教団体はない。なぜなら、これは天の神がその約束に従って築かれたものだからである。

私が南部諸州伝道部の伝道部長をしていたとき、宣教師のひとりがある集会でネブカデネザルの夢について話した。その集会には求道者が数人出席していた。集会後私はドアの前に立って、彼らとあいさつを交わしていた。するとひとりの人が近寄って来て、牧師であると自己紹介し、こう言った。「あなたはあの王国がモルモン教会だと思っている訳ではないんでしょうね。」

私は答えた。「なぜモルモル教会ではないとおっしゃるのですか。」

彼は言った。「そんなはずがありません。」

「なぜそんなはずがないのですか。」

「王のいない王国などあり得ません。あなた方には王がいません。ですから王国もない訳です。」

「あの、もう少し読んでいただけるとおわかりになると思います。ダニエル書7章を読んでみてください。そこにはダニエルが天の雲に乗って人の子のような者がおいでになるのを見たこと、



また『彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。』（ダニエル7：14）とあります。」

私は続けた。「人の子のような者が天の雲に乗っておいでになったとき、もしも王国の備えができていなければ、どのようにして王国を与えることができるでしょうか。それをしているのが末日聖徒なんです。」

あなた方は神の聖徒として、教会の偉大な伝道プログラムを促進し、また什分の一や献金を納めるために、時間、才能、資産、それに自らの子供たちをさえ犠牲にしている。このようなことは、今日の世にあって類のないことである。これは神が予言者を通して働きかけておられるからである。パウロは当時の教会に次のように書き送っている。「またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。」（エペソ2：20）

従って、真理を求める者は使徒と予言者を土台として建てられた教会を捜す必要がある。ここで私の証を申し上げたい。この教会こそ使徒と予言者を土台として建てられたイエス・キリストの教会である。そして主なるキリストは今なお、生ける予言者を通して教会を導いておられるのである。

このほかにも多くの予言が与えられている。使徒パウロが、主は私にみむねの奥義を示してくださったと言っているが（エペソ1：9参照）、これは確かなことである。では、みむねの奥義とは何か。「それは、時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」（エペソ1：10）地上にあるほかのどの教会にも、天と地上のものをつなぐこのような計画はない。

また、私たちは、主の民が救い手としてどのようにシオンの山に登るかについての予言も知っている。（オバデヤ21）イエスは次のように言われた。

「死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。」（ヨハネ5：25）なぜなら、この世を離れた人もすべて、この福音を聞く必要があるからである。すべてのひざは主に対してかがみ、すべての舌はイエスがキリストであると証すると言われている。（ローマ14：11参照）これによって、私たちは使徒パウロが述べた次の言葉の意味をさらによく理解することができる。

「そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」（Ⅰコリント15：29）

この神権時代に起こることになっているもうひとつの偉大な出来事がある。それは、マラキを通して主が言われたように、主の来られる道を備えるために主の使いが送られ、主はすみやかに主の宮においでになるということである。「その来る日には、誰が耐え得よう。……彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。」（マラキ3：1，2）これは明らかに最初の来臨とは何の関係もない。最初の来臨では、主はすみやかに主の宮においでにならなかった。また主のおいでになった日、すべての人は耐えることができた。しかし末日に主がおいでになるときは、邪悪な者は岩に向かって、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ」（黙示6：16）と叫ぶであろうと言われている。

私たちには死者のための業があり、そのために神殿を有している。そしてこのことは、マラキの述べた次の言葉と密接な関係を持つ。「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。」（マラキ4：5，6）

この結果を考えていただきたい。この約束にあるように、エリヤ（エライジャ）が来たことを告げる人々がこの世のどこかにいるだろうか。エリヤはすでに来た。1836年4月3日、カートランド神殿において、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリーに現われ、天地をつなぐ偉大な業の鍵を渡したのである。それ故に、神殿が建てられているのである。また同時に、イザヤが予見した事柄も現実となっている。「終りの日に次のことが起る。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、……すべての国はこれに流れてき、多くの民は……言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。」（イザヤ2：2，3）

この敷地内にある神殿はヤコブの神の宮であり、私たちの先祖である開拓者たちが、何千キロに及ぶ旅を終えた後、建てたものである。完成までに40年もの歳月を要した。素晴らしい建物ではないか。世の中にこれほど美しい建物があるだろうか。私がオランダで伝道していた当時、すべての改宗者は教会に入るや神殿に引かれて、持ち物すべてを売り、わずかなお金さえも貯めて、この国へ渡ろうとしたものである。その結果彼らは主の道を知り、その道を歩むことができたのであった。

このほかにもたくさんの予言があるが、イザヤが目にし、予言した次の事柄について申し上げたいと思う。「その日、主は再び手を伸べて、その民の残れる者を……あがなわれる。

主は国々のために旗をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を……集められる。」（イザヤ11：11，12）

ジョセフがわずか18歳のとき、天使モロナイは夜中に三度ジョセフを訪れ、さらに翌朝再び姿を現わし、この句を再三引用して、予言が成就することを告げたのである。そのときに予言者ジョセフ・スミスに課せられた責任を考えていただきたい。彼は国々のために旗をあげたのである。世の中に、この教会ほど会員たちのために力を尽くし、また会員を増して、世の旗となっている教会はない。人々は私たちが

これらのことをどのように行なっているのだろうと、私たちのもとにやって来る。

イザヤは集合について、このほかにも多くのことを知っていた。主はイスラエルをすみやかに集められ、イスラエルはくつのひもを解いたり、まどろんだり、眠ったりする時間さえないことをイザヤは予見している。(イザヤ5：27参照) 何千年も昔のイザヤの時代にさかのぼって、当時の交通機関を目の前にしてこの言葉を記したことを想像していただきたい。

この予言の成就を示すものとして、次のようなことがある。マッケイ大管長が最初のステーキ部を組織するためにスコットランドに赴いたその帰途のことを、神殿において私たち十二使徒の兄弟たちにこのように語った。ロンドンを発ったのは午後2時で、それからシカゴに立ち寄って兄弟たちと少しの間会い、その夜自宅のベッドで休んだと。彼はくつのひもを解く時間も、まどろんだり眠ったりする時間もなかったそうである。そして、初期の頃、人々がシオンにやって来たときのことと比較した。人々は43日間船に乗り、それから幾週間もかかって平原を横切らなければならなかったのである。集合について考えていただきたい。聖徒たちがどのようにしてこの地(ユタ州)に向け、河岸を旅するはずであったか、その予言について考える時間があればと思う。開拓者たちはこれを成就したのである。主が彼らの悲しみを喜びに変えられることについて、エレミヤは次のように言っている。「『イスラエルの民をエジプトの地から導き出した主は生きておられる』とは言わないで、『イスラエルの民を北の国と、そのすべて追いやられた国々から導き出した主は生きておられる』という日がくる。」(エレミヤ16：14，15)

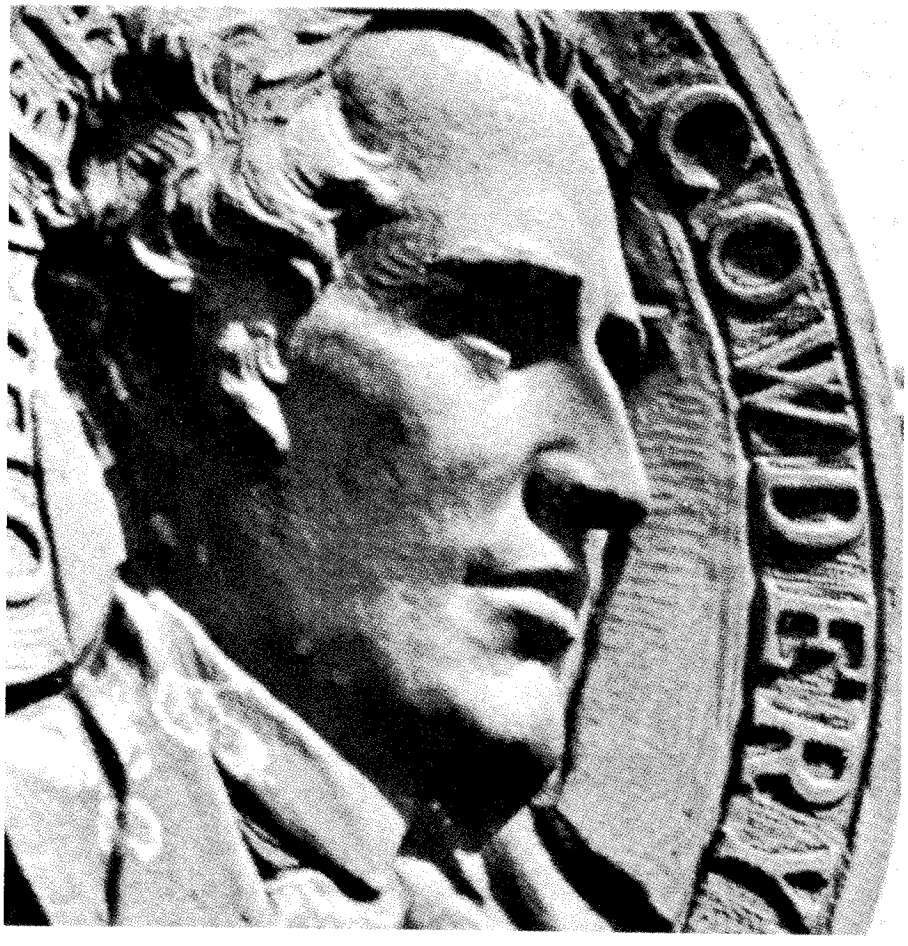
このことは、この教会が組織されて以来、主がその民に行なってこられたことである。そして現在、私たちはステーキ部と神殿を彼らのうちに設け、彼らはシオンのステーキ部に集められているのである。

さらにエレミヤはこう続けている。主は多くの漁師を呼んで彼らを漁らせ、また多くの猟師を呼んで、もろもろの丘、山、岩の裂け目から彼らをかり出される、と。(エレミヤ16：16) 世界各地に散在する伝道部に行くとおわかりになると思うが、現在21,000名以上の宣教師が戸口から戸口へ、村から村へと足を運び人々を集めている。それはまさに予言者が予言した通りである。この教会が文字通り、予言を成就していることがおわかりいただけると思う。

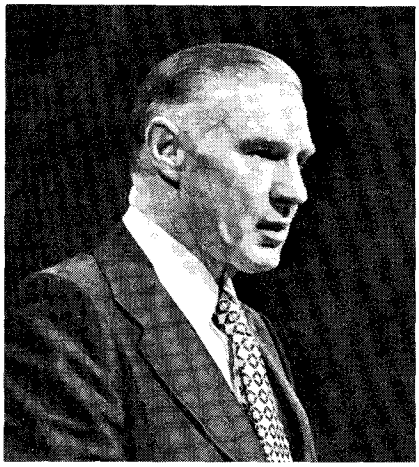
エレミヤは次のように言っている。「主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである。町からひとり、氏族からふたりを取って、あなたがたをシオンへ連れて行こう。わたしは自分の心にかなう牧者たちをあなたがたに与える。彼らは知識と悟りをもってあなたがたを養う。」(エレミヤ3：14，15)

今日ここにおいでのあなた方は、町からひとり、氏族からふたりというように、主の道を学ぶために来られた方方である。今日この壇上に座っている幹部の兄弟たちは、主のみこころに従ってあなた方を教える牧者である。

あなた方すべてに神の祝福があるように、また、主は生ける予言者を通して、この教会が生ける予言者を土台として建てられていることを語っておられる。私たちが世の人々に証を述べるのは、このことが確かに主のみ業であると知っているからである。このことを認識していただきたいと思う。これが私の証である。この証を謙遜に、主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



モルモン経の翻訳に際して予言者ジョセフ・スミスの書記を務めたオリバー・カウドリ。アバード・フェアバンクス作。(テンプルスクェア)



王国の鍵

南アメリカの聖徒たちが神殿を建てる備えをするにあたり、主のみたまはそのただ中にあって力強く働いている。

十二使徒評議員会補助
ジェームズ・E・ファウスト

先週のある静かな朝、私はブラジルのサンパウロの私の事務所を後にして、サンパウロ神殿の敷地まで歩いて行った。心地よい朝もやが晴れようとしているときだった。敷地に向かう通りのなだらかな坂を上って行くと、予定地のやぶがきれいに片付けられ、新しいくいが打ち込まれているのに気付いて、興味深くまたうれしく思った。そこに打ち込まれたくいは、神の栄光と、南アメリカに住む神の子供たちへの限りない祝福とのために、近く建設される予定の新しい神殿用地を示すものである。この神殿は、現在南アメリカに建っているいかなる建物とも全く異なるものになるはずである。

私は神殿の入口になる予定の場所に立ったとき、36年前の出来事を思い出した。私は同僚たちと共に、21日間の船旅のあとサントスに上陸し、汽車でサンパウロに向かったのである。同じ船の中に、アルゼンチンとウルグアイへ向かう宣教師たちもいた。このふたつの伝道部は共に、南アメリカでは比較的新しい伝道部であった。

当時は南アメリカ全域でも、ほんの一握りの教会員しかいなかった。ほとんどはヨーロッパからの移民であり、その大部分がヨーロッパでの改宗者であった。私は先週、巨費を投じて建てられるこの新しい、特別な建物の建築予定地に立ったとき、36年前の南アメリカでは教会の前途がいかに暗く、また見通しのたたないものであったか、思い出していた。私たちの伝道部全体で、1年間に3人のバプテスマしかなかった。70人以上の宣教師が熱心に働いていたにもかかわらず、そんな状態であった。当時はまだ、ポルトガル語訳の教義と聖約も、高価なる真珠も、モルモン経もなかった。また、私たちの教えようとしている高尚なメッセージとはおよそ似ても似つかない小さな部屋で集会を開いていた。集会の前には、部屋をきれいに掃除して、空きびんやくずを片付け、前夜の馬鹿騒ぎの後始末をしなければならなかった。伝道にはいつも困難がつきまとい、落胆の連続であった。

これに対して、昨年、南アメリカでは8,000人以上の改宗者のバプテマスがあった。現在ではこの広大な大陸に、22のステーキ部と17の伝道部と152,000人以上の教会員がいる。それでもみ業は始まったばかりである。南アメリカの地区代表やステーキ部長や伝道部長に召されている人々は、皆実務家である。中には銀行家、実業家、工場主、そして専門家などがいる。彼らは偉大な能力と信仰の持ち主である。

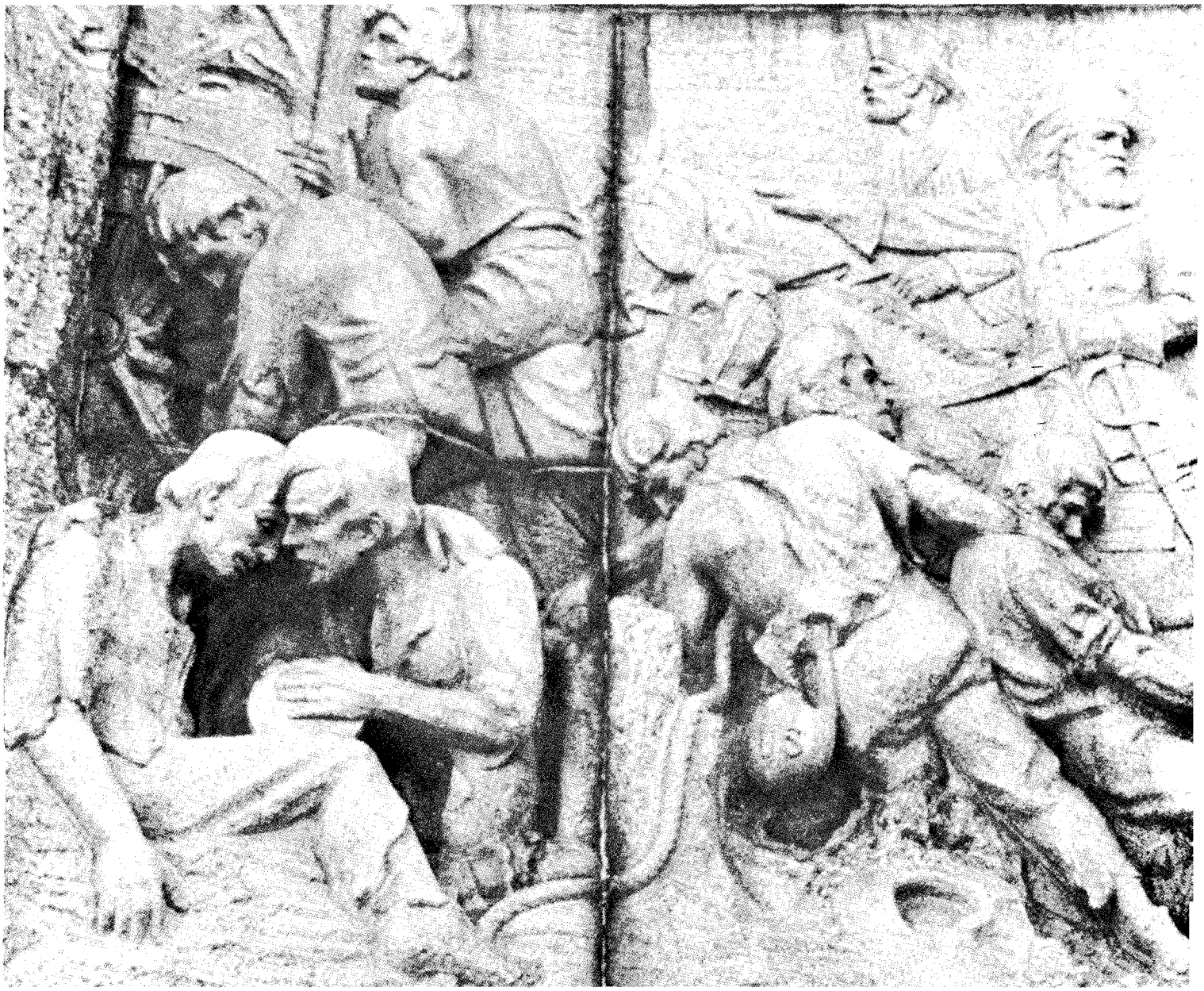
これが皆、神のみたまにより起こったことを思うとき、驚嘆せざるを得ない。当然のことながら、これはイエスが最初の使徒たちに言われたことが成就したのである。「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。」(マタイ16:19) これを皆、身近に見てきた私は、これが神のみ業であるということに疑いを持つことができない。

ブラジルで現在起こっていることは同様に他の国々でも起こっている。私が神殿の敷地を訪ねた日、ボリビア・ラパス伝道部のマカリスタ伝道部長から手紙が来た。「私たちが以前ここにいたときと比べ、現在の教会の発展は驚くばかりです。私たちが1967年にここを去るとき、会員は300人足らずでした。それが現在では、8,500人も会員がいます。」 昨日教会幹部に支持されたブラッドフォード伝道部長も、チリから次のような手紙を送ってくれた。「チリでの教会の歴史はまだ浅いですが、私は、多くの地元の指導者の強さと能力に驚いています。」 確かに、王国の鍵は現在の予言者と近代の使徒たちに授けられている。古代に救い主が授けられたものと同じ鍵である。

先週、神殿予定地で、様々なことを思い巡らした後、私は神殿の内部の部屋が建つ予定の所に立った。朝もやもこの頃には晴れ上がり、遠くに、大都市サンパウロの一部を見ることができた。私は、年若い宣教師としてその市で、13人の宣教師と約300人の会員と共に、み業を管理していた頃のことを思い出した。現在この都市には、4つのステーキ部があり、約100人の宣教師が働いている。現在では、隣のカンピナスとサントスにもステーキ部がある。

南アメリカにおいてこのように偉大な発展が見られたのは、合衆国やカナ

荒野を渡り、山を越えて 2,000マイルもの苦難の旅を続けたモルモン大隊。ギルバート・リズウォルド作のモルモン大隊記念碑より。(ユタ州庁)



ダから来た何百人もの宣教師とその家族が払った犠牲と献身があったからであり、また献身的な伝道部長がいたからである。だが現在では、その状態も変わりつつある。ブラジル・ポルトアレグレ伝道部には現在 136人の宣教師がいるが、そのうちの58人、すなわち43パーセントがブラジル出身の宣教師である。アルゼンチンにいる4人の伝道部長は皆、南アメリカ出身の人々である。私はこれまでいかなる人の前でも、これが神のみ業であるということを言ってはばからなかった。

先週のその朝、私は神聖な神殿用地内をくまなく歩き回った。そして、打ち込まれているくいの位置から、結び固めの部屋が設けられる場所を確かめた。すでに、その場所は聖別されているように思える。私は心の目で、様々な光景を眺めることができた。清く汚れのない若い男女、手に手を取り合って、顔には笑みをたたえている。多くはかっ色の膚をしていて、彼らの白衣と見事な対称を呈している。彼らは、この神聖な場所へやって来て、神の聖なる神権の権能の下に、この世においても永遠にわたっても結び固められるのである。ふさわしい家族がこの場所にやって来て、同じ権能の下に結び固められ、永遠の家族の結び付きを約束されたときの喜びがいかに大きいか、これを想像することは容易なことであった。彼らはアンデスの高い峰を越え、

高原を越えてやって来るであろう。また、海を渡って、大きな都市からやって来るであろう。また、この地上でイエス・キリストの福音の祝福を受ける機会が与えられずに死んだ人々のためにも、その場所で王国の扉は開かれるのである。さらに、ふさわしい会員たちは、人類の永遠の道程に関する儀式あらゆる人間の限りない可能性と発達に関する儀式も受けることになる。これは、慈愛に富んだ正義の天父により、全人類のために備えられているものである。人の心を啓発するこの儀式にあずかることを許された人々は、この世においても永遠の世においても、自らを高めて、その最高の域にまで可能性を引き上げることができるのである。そして、創造主のみ前で家族と共に永遠の交わりを持つのである。

このことを心に思い、目に涙していたとき、私は南アメリカのある偉大なステーキ部長が語った話を思い出していた。彼がソルトレークの総大会に来るときに、彼と妻は、ソルトレーク神殿で結び固めを受けるのに5人の子供のうちどのふたりを連れて行くべきか決めなければならなかった。5人の子供全部を連れていく余裕がなかったからである。しかし、彼らはその計画を変更した。彼らは、南アメリカで最初の神殿へ、5人の子供を皆連れていくことにしたのである。彼の兄弟も同じ市でステーキ部長をしているが、彼もエンダウメントを受ける特権にまだあずかっていない。また、神殿で妻や家族と結び固めも受けていない。

1週間前のその日の朝、サンパウロ神殿の建設予定地で、私はまだ神殿用地内を歩き回っていた。私は神殿の設計図を何度も見ていたので、自分がどこにいるか、よく知っていた。そして、設計図を見るたびごとに興奮し、涙を禁じ得なかった。今度は私は、浸礼盤が置かれる予定の場所に立ってみた。キンボール大管長のおかげで、ノーブー以来の他の神殿と同様に、その神殿にもイスラエルの12支族を表わす12頭の牛の背中に浸礼盤が置かれるはずである。ここにも喜び、胸をときめかせて子供たちがやって来ることであろう。ここでは、生きている間にその機会を持たなかった人々のために、身代りのバプテスマという神聖な儀式が執り行なわれるのである。ここへ来てバプテスマを受ける人々の喜びは、いかに大きいことであろうか。また、永遠の旅路にあってこの救いの儀式を長い間待ちこがれていた者たちの喜びも、いかに大きいことであろう。それは想像するに難しくない。私は、イエスが使徒たちに、「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう」と言われたことを心から感謝している。これらのことを皆深く考えるとき、これが地上における神のみ業であるということを否定することができないのである。

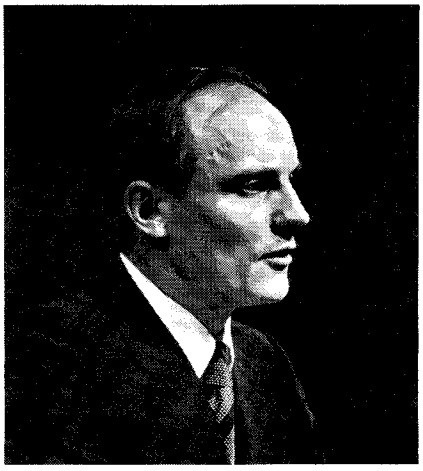
次に私はこの待望久しい神殿の区画を示すくいの外に向かって歩き出した。そして今度は、尖塔がどれ位の高さになるのか想像しようとした。また同時に、コロンビアやエクアドルやペルーやボリビアやパラグアイから、背の低い、厳しい表情をした原住民がこの場所にやって来て、その尖塔を眺めている光景も思い浮かべようとした。その中で、この建物に用いられている素晴らしい技巧を賞賛しないものがいるだろうか。また、彼らの先祖の神聖な建築物の壁に残された巧みな細工と比較してみないものがいるだろうか。その建築物は、今なお、クスコやマチュピチュを始め、南アメリカ各地に数多く立っている。彼らの祖先にも自分たちの神殿があったのである。

これらレーマン人やその他の民族の子孫たちは、偉大な過去を受け継いだ人々であり、イエス・キリストの福音の持つ力を担っている人々である。また彼らは、大いなる未来が約束された民である。そのような人のひとりが、昨日、教会幹部として支持された。最近、ペルーのクスコにあるプラサデアルマスに、8,000名以上の人々が集まり、ブリガム・ヤング大学の主催による「レーマン人一族」の話を聞いた。彼らの時代は間近に迫っている。

南アメリカに近く建設されるこの新しい神殿は、そこに住む人々にとって、どんな意味があるのだろうか。それは偉大な尽きせぬ祝福を意味する。また、大きな犠牲をも意味する。キンボール大管長は最近東京で、極東初の神殿の建設を発表したとき、次のように言われた。「いまだかつて、犠牲と努力とを求めないような神殿が建てられたことはありません。」(キンボール大管長の説教、1975年8月9日) それには多額の費用もかかる。例えば、先月チリの忠実な会員たちは、サンパウロ神殿の建設のために、1,902,178エスクドの献金をした。これは、387ドル90セント(邦価に換算すると約11万6千円)になる。

私が青年の頃、南アメリカでの伝道活動は極めて困難であったが、そのとき以来ずっと神のみたまは力強く、南アメリカの国々の上に注がれている。現在その地で神のみ業はどのように進展しているであろうか。問題も多い。チャレンジも大きい。だが、信じられないほどの発展である。私が南アメリカについて申し上げたことは、全世界の他の地域についても言える。これは、偉大な世界の教会である。そして私たちは、まだほんの始まりを見ているに過ぎない。私は南アメリカで起っていることを実際にこの目で見てきたので、これが神のみ業であることを否定することができない。疑いは持っていても、その心が誠実で正直な人々がいたら申し上げたい。この偉大な進歩の陰にあって、それを産み出している力は何なのか、尋ねてみていただきたい。それは愛の力である。神の愛、家族の愛、そして同胞に対する愛の力である。そして、イエスが再び王国の鍵を生ける予言者と近代の使徒たちに授けられたため、この家族の愛を始め、その他のものも、人と同様、永遠のものになり得るのである。イエスは昔の使徒たちに言われた。「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。」(マタイ16：19)

証申し上げる。この奇しきみ業が全地にわたって進展しているのは、この同じ鍵、同じ権能によるのである。イエス・キリストの聖なるみ名により、アーメン。



感謝

七十人第一定員会で働く召しを受けた、一教会幹部の述べる感謝。

七十人第一定員会会員
チャールズ・A・ディディア

愛する兄弟姉妹、たとえまだ教会の教義ではなくとも、フランス語が天上の言葉であることはだれもが知っておいでと思う。そう、そんなことは知らないというのであれば、私は次の大会までに、悔い改めておかなければならない。

さて、愛する兄弟姉妹、私がきょうここにあるのは、私を押し、ひっぱり、助け、支えてきょうここに末日聖徒イエス・キリスト教会の一員としてあらしめてくれた大勢の人々のおかげである。

きょう皆さんにお話したいのは、ただ感謝の気持である。まず妻に、愛する妻に。私のためにしてくれたこと、私を信頼し、ふたりの息子の愛情深い母親になろうと常に努力してくれることを感謝したい。

そして今は亡き私の母に。勇気をもって家族を教会に導き、子供たちに福音の原則を教えてくれたことを。

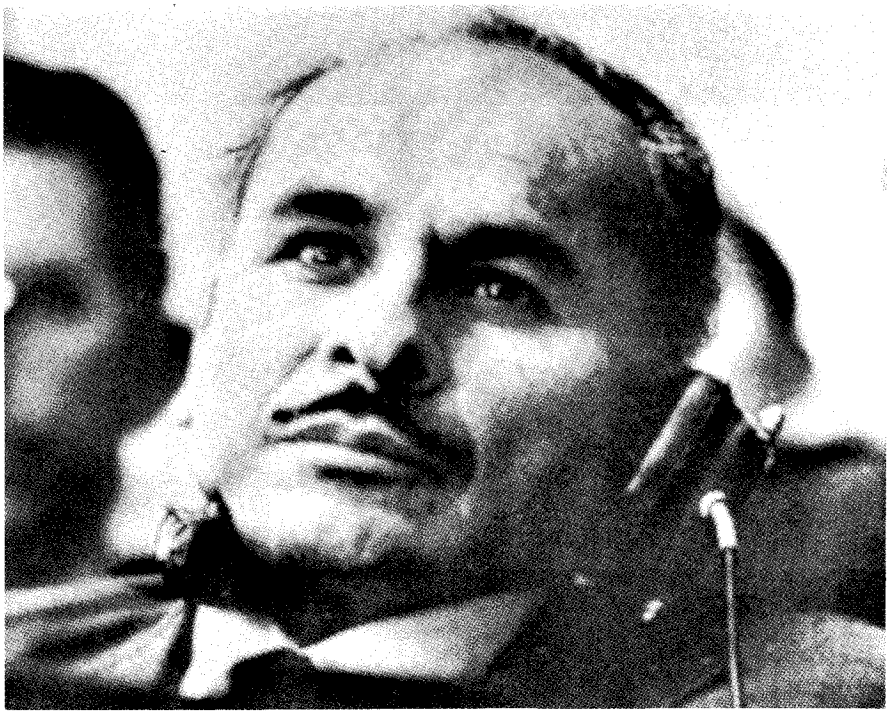
そして父に。まだ教会員ではないが、私に教えてくれた数々のことを。父は常に人生の良きものを選ぶことを教えてくれた。

宣教師たちに。家の玄関をノックして、私に福音の回復を伝えてくれた宣教師、私に教え、バプテスマを施してくれた人たちに。フランス、スイス伝道本部で共に楽しく働いた人たちに。尊敬する宣教師たちに、彼らの献身と犠牲と模範に。

そしてアメリカの素晴らしい人々に感謝を申し述べたい。皆さんと皆さんを生んだ父や祖父たちは、40年間に2度までも私の祖国に自由をもたらすため命を差し出してくれた。　教会の指導者たち、私が常にイエス・キリストの福音を実践するように助けてくれた幹部たちに、感謝したい。また、敬愛する主の予言者キンボール大管長に。彼はここにいて困難なときに私たちを導き、指導して下さる。罪を贖って下さった私の主、救い主イエス・キリストに、贖罪の感謝を捧げたい。私に美しい主の福音を知らせて下さった天の御父に、感謝の気持で一杯である。

私は皆さんに私の証をお伝えしたい。私は、神が生きておられることを知っている。イエスがキリストであることを知っている。私が今持っていると同じ証、すなわちモルモン経の真実なことと、現在の地上のイエス・キリスト教会に存在するすべての原則が真実であることの証を、聖霊が皆さんの耳にささやくことを私は知っている。

この証を謹んで皆さんに申し述べる。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



刈り入れ

世の毒麦の中から集められ、束ねられる多くの小麦。

七十人第一定員会会員
ウイリアム・R・ブラッドフォード



愛する兄弟姉妹、私はこの機会とこの壇上に立つに至った次第に、身が細る思いである。数日前、妻と私はチリのサンチャゴで電話を前に、抱きあってだれはばからずに泣いた。キンボール大管長から、この聖なる定員会で働く召しを受けたあとのことである。

私は皆さんの前に自分の弱さを告白する。しかし主が、みたまを求める者たちに強さのよろいをつけさせ、力をまとわせて下さることを、私は知っている。私はこれまでの生涯、「わたしに従ってきなさい」とささやく声に導かれて決定を下してきた。みたまの指示に従うことは大きな特権であり名誉である。それができるように、みたまとの交流の道がちゃんと開けていることを、私は皆さんに確言する。

私は、家族と先祖に敬意を表わしたい。福音の回復のときから現在まで、福音に捧げた彼らの献身を。苦難の時代にシオンを守って闘ったその努力を。私がこれからも常に、先祖の尊い名を敬い続けられるようにと祈る。父母はこの数日中にも、3回目のフルタイム伝道に出発するはずである。彼らの愛と模範は私の生活に深い影響を及ぼしてきた。父は私に、人生の良いものにはつま先だけ漬かるのではなしに思いきって飛び込め、福音の大海にどっぷり漬かれと教えてくれた。母は毎日私をその大海の岸にまで連れて行ってくれた。

永遠の恋人である妻に、またその子供たちが与えてくれるこの上ない喜びに、心の中の愛はどうしたら言葉に表現できるだろうか。それは神聖な喜びである。それは、聖典が「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」と語るその幸せである。（IIニーファイ2：25）　私たちの交わりはこの現世に貴重なやさしさを添えてくれる。



「人みなたゆまず車を押せよ。」トーリーフ・ナファス作の手車隊記念日から。（テンプルスクウェア）

6月に行なわれた新伝道部長のセミナーで、妻と私は、キンボール大管長その他大勢の教会幹部の教えに浴する特権を得た。今は収穫のときであり、刈り入れは私たちの肩にかかっているというキンボール大管長の言葉は、強く私たちの胸を刺した。麦を毒麦の中から刈り集めるときは来たのである。私は人生の大半を、種まきや刈り入れといった仕事に接してきて、麦が毒麦に負けそうなときの農夫の心配がよくわかる。

主は言われた。「この故に、小麦も毒麦も共に刈り入れの時充分熟するまで育つに任せよ。而して、それよりまず小麦を毒麦の中より選みて集め、小麦を取り集めたる後、見よ、みよ、毒麦は束につかねて畑は焼くばかりなり」（教義と聖約86：7）

刈り入れのときは充分に熟している。私たちは今、最後の刈り入れどきに遣わされている。鎌は私たちの手にある。日が暮れないうちに鎌を使わなければならない。私は主のあの言葉が成就しつつあると感じている。チリ・サンチャゴ伝道部では120名の宣教師のうち32名がチリ人だが、9月中220名のバプテスマがあった。その中で家族ぐるみの改宗が40件である。チリの宣教師は予言者に喜んで従っている。

私は働き人のひとりであることを誇

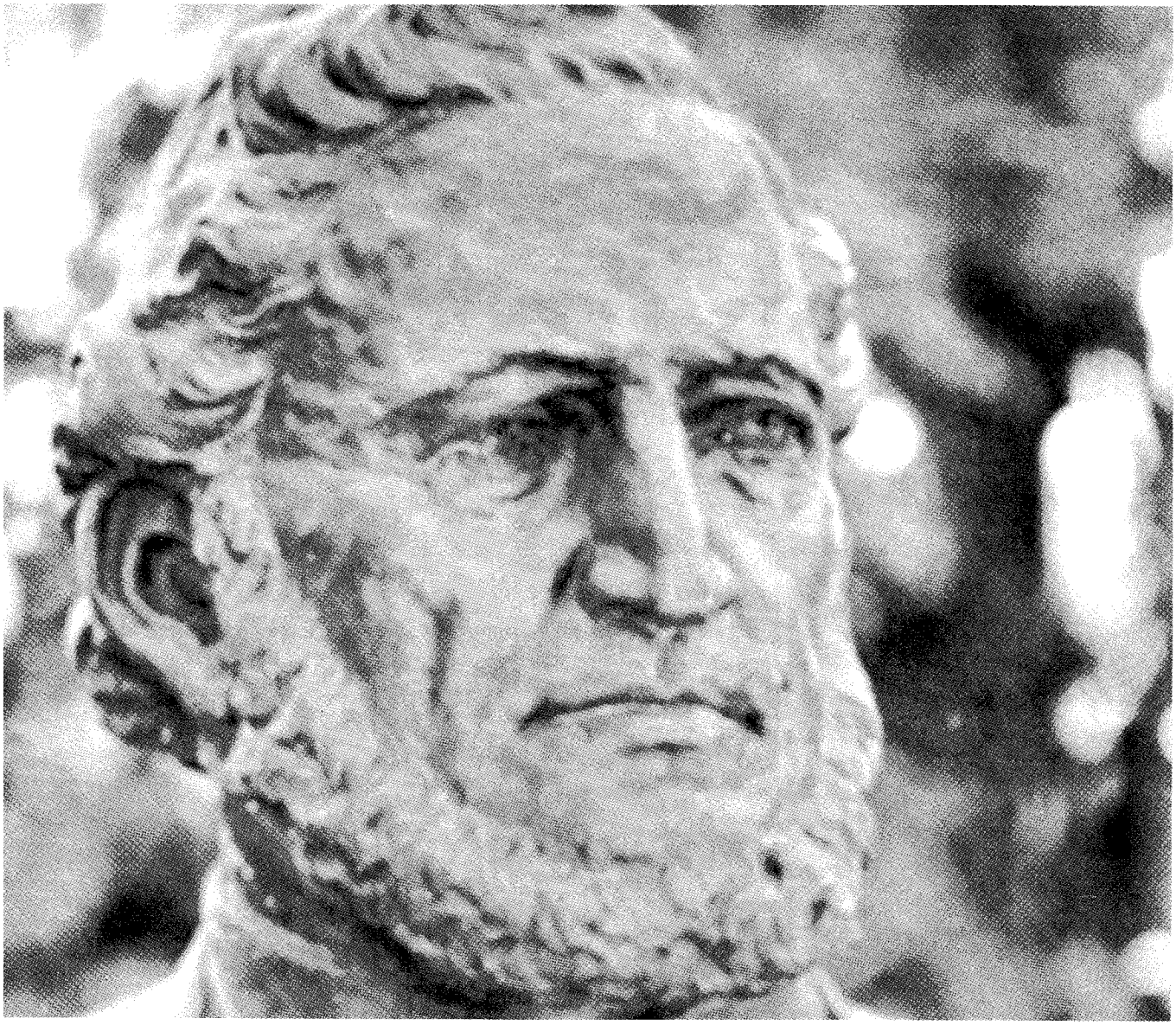
らしく思う。救い主がこの業を導いておられること、また生ける予言者と予言者に従う人々が聖霊の語る声に聞き従って主の指示が得られていることを知ると、私は大きな安らぎを感じる。

この業が真実であること、キンボール大管長がみ業を達成するためのビジョンを持っておられることを、私は厳粛に証する。私は悔改めの心をもって、自分の身を主に差し出したい。私は、予言者や中央の定員会で働く清い人々に指示されるときに、自分の力のすべてと、主がみ業に用いるようにと祝福して下さった賜のすべてを捧げたい。私は、彼らが刈り入れを指導するために召された聖い人々であると、皆さんに証する。私は予言者に心からの愛を表明し、彼が特別な方法で、まことの生ける神から指示を受けておられることを皆さんに申し述べたい。

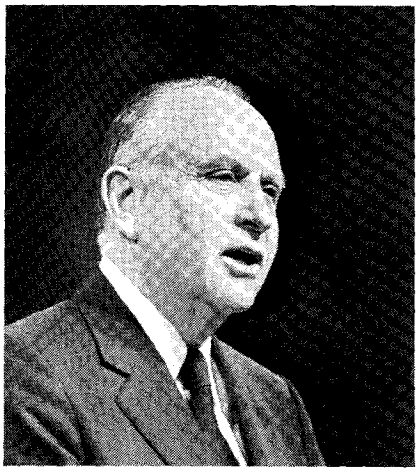
私は、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに言われた主のこの言葉に心ひかれる。「わが子らよ、善を行うことをおそるるなかれ。何事にても汝ら蒔くところのものをまた刈り入るべければなり。この故に、汝ら善の種を蒔かばそのむくいとしてまた善の実を取り入るべし。この故に小さき羊の群よ。おそるるなかれ。善を行え。この世と地獄と共になりてむかい来らしめよ。もし汝らわが盤の上に立たば、彼ら打ち勝つ能わざればなり。

何を念うとも、念々われを見るべし。疑うなかれ、おそるるなかれ。わが肋の突き傷と、またわが手足にある釘痕を見よ。忠信なれ。わが誡命を守れ。さらば、われ汝らに天の王国をつがしむるなり」。（教義と聖約6：33，34，36，37）

私は、この教会が真実であることを厳粛な気持で証する。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



第2代大管長であり、ロッキーの山あいに教会の基を築いたブリガム・ヤング。エドワード・フロートン作（ブリガム・ヤング墓地）



できないことがあろうか

長老定員会会長とホームティーチャーは、まず祈り、次いで働きかけるならば、不活発な兄弟たちを活発にすることができる。

十二使徒評議員会補助
デビッド・B・ハイト

キンボール大管長は昨年10月の地区代表セミナーで、神権指導者としての私たちの責任について感動的な話をされた。大管長は「私たちは従来と異なる方法でより良く事を運ばなければならない！」と語り、「できないことがあろうか」と幾度もチャレンジした。(“*Lengthening Our Stride*”『歩みを早める』1974年10月3日地区代表セミナーの説教より) 各ステーキ部を訪問すると、この言葉が実行に移されているのを如実に見ることができる。

最近私は、不活発な会員を割り当てられた、長老定員会所属のあるホームティーチャーのことを聞いた。彼は大きなビジョンの持ち主である。ある日曜日の朝早く神権会に行く途中で、彼は割り当てられた教会員の家を訪れた。

「神権会に行く途中なんですが、あなたもいかがですか。」

相手はびっくりし、日曜日の早朝に起こされたので気分を悪くして、「いいえ、興味ないですから」と言い、戸をバタンと閉めた。彼はどうして教会が自分の名前を知ったのかと不思議に思った。

その次の日曜日の朝、また玄関のベルが鳴った。彼が戸を開けると、また同じ人がニコニコとして立っており、神権会に行く途中だという。

「気が変わりはしないか、と、寄ってみたんです。ぜひおいでいただきたいんです。」

彼は無愛想に、「帰って下さい！かまわないで下さい！」と返事して戸をピシャリと閉めた。

その次の週も同じことが繰り返され、ホームティーチャーはこう言い残して行った。「大勢の男性から成るグループがあるんですが、あなたがぜひ必要なんです。あなたは私たちの定員会の会員です。来週の日曜日もお寄りしてかまいませんか。」教会に行きたくなかった彼は、早朝の訪問者を撃退する方法はただひとつ、その集会に行って、自分がまるで関心のないことを見せつけることだと考えた。

次の日曜日、ホームティーチャーが玄関のベルを鳴らすと、「帰って下さい。かまわないで下さい」の挨拶ではなく、無関心なことを思い知らせようと彼が服装を整えて待っていた。しかし霊的な神権会で親しげな握手と心からの関心を寄せられ、彼の態度は変わり、励ましが必要だったその男性の意識は目覚めたのである。

「長老見込み会員、しかもその多くが教会の少年少女たちの父親である彼らに手を差し伸べなさい」(“*Lengthening Our Stride*”『歩みを早める』p. 2) というキンボール大管長の指示に、神権定員会指導者たちはよく応えている。このチャレンジは私たちの最善の努力を引き出し、熟慮を促し、より良い方法を見出させるはずである。大管長はあなた方神権指導者を駆り立てるだけではない。大管長は、「さらに良く、より良くできないことがあろうか」と告げているのである。大管長はそれがあすではなくきょう必要なことを強調している。

教会が主の目的達成に資するにあたって効果的にその働きをなすには、相応の権威と権限の委譲が必要である。主のみ名によって行ない、神聖な主の目的の達成を促進する権威と権能を有する聖なる神権が、主から人に授けられた主な理由はそこにある。

救い主はこう言われた。「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。」(マタイ28：20) 不活発な父親や夫をまず捜し出し、福音に従ってどのように生活すべきかを教えなさい。

半年前、コロラド州デュランゴステーキ部の長老定員会会長に、レイモンド・ガーロク兄弟が召された。彼は教会員の再活発化に素晴らしい成功を収めた。ホームティーチングがその成功の鍵である。彼らは不活発な会員を教え励ますのにフィルムストリップを使用した。7名の定員会会員がそれぞれプロジェクターを買い、ホームティーチャーが不活発な人の家でそれを使ったのである。

ひとりの長老見込み会員は、「もう私の家にホームティーチャーをよこさないで下さい」と言っていたが、彼ら夫婦が別の不活発な教会員の家を訪ねていたときに、ホームティーチャーがちょうどプロジェクターを持って訪れてきた。彼はそのフィルムストリップ

を見て心を動かされ、再びホームティーチャーの訪問を受けるようになった。理解あるホームティーチャーに助けられて、彼はまた教会に戻ったのである。

この定員会の指導者たちは福音研究セミナーの教師に最適任者を選び、一度に4組の夫婦を呼んで福音の真理について学ぶセミナーを開いた。また定員会の93名全員の所在を確認し、連絡を取った。長老定員会会長は、「失敗は全くありません。あるとすれば、ちょっとした障害だけです」と語っている。ただ4人を除いて全員にホームティーチャーが割り当てられており、彼は「その4人にも近くホームティーチャーがつく予定です」と言う。

彼らは、不活発な会員に教会が楽しい所であることを知ってもらおうと、社交活動やスポーツ活動の委員会をふやしている最中である。委員会の長に兄弟を割り当てると、その妻が補助に召されて協力する。定員会の会員たちは山でキャンプをし、キャンプファイアを囲んで6時間も教会のことを語りあったとのことである。長老定員会会長は、「本当に良い霊のごちそうでした」と報告している。

兄弟が召しを受けられるようになるとすぐ、定員会会長が監督を助け、その人にふさわしい責任を考える。指導者が神権個人面接をきちんと正しく行なうようになると、ホームティーチングは30パーセントからほぼ100パーセントにまで伸びた。この定員会は新しいアイデア作りが非常にうまいが、彼らは成功をホームティーチャーの努力と主の祝福のおかげだという。

「兄弟を役職に召す前に、謙遜になって祈ります。今まで召しを断わられたことは一度もありません。」

長い間教会から遠のいていた兄弟たちは、「本当に関心を持ってくれる人はいないと思っていました」と語っている。この定員会は主の示された精神を自分のものとしたのである。「そは、必ずしもすべての人信仰なきが故に、汝ら努めて求め、互いに智恵ある言葉を教うべし。」（教義と聖約88：118）ガーロク会長は、失われた人をどうしたら連れ戻せるかを知っているのである。

現在ステーキ部長が召しているメルケゼデク神権定員会指導者は、神権組織と再活発化の効果的な諸原則を教わり、指導を受けている。それらの新しい指導者は敏腕でスターリング・W・シル長老の話に出てきたような農夫とは違う。農夫が荷馬車で農産物を市場へ売りに行った。坂が非常に急で、2頭の馬はさんざん難儀していた。とうとう農夫は通りがかりの人に尋ねた。「この山のてっぺんまではあとどれぐらいでしょうねぇ。」するとこういう答えだった。「ここは山道なんかじゃありませんよ。うしろの車輪がはずれてるじゃないですか。」

最近ある人が、大きなワード部の中から自分がどのようにしてはずれていったかを教えてくれた。「妻と私が初めて教会について知ったのは、親切で霊的なふたりの宣教師が家に来てくれたときです。彼らはわが家を訪れ、教え、改宗まで導いてくれました。私たちはすっかり彼らの心に甘えていました。改宗者の人ならたいてい経験するでしょうが、バプテスマの後に問題となるのは、まずその素晴らしい長老たちの転任です。

私たちがそれまでと同じ気持でいるのは非常にむずかしいことでした。自分たちだけではとてもやっていけないと思いました。それで教会活動から遠ざかってしまったのです。妻は家庭訪問教師の訪問を断わりましたし、ホームティーチャーにはかまわないで下さいと頼みました。

それからきっと長老定員会で、捜さなければならない『失われた』兄弟たちの話が出たことでしょう。そうなんです。私もその中に入っていました。ある日玄関でノックの音がしました。戸を開けてみると、まだ若い男性がそばかすだらけの顔をにこにこさせて、自分は長老定員会の会長ですが、ちょっと話をしていいですかと言いました。

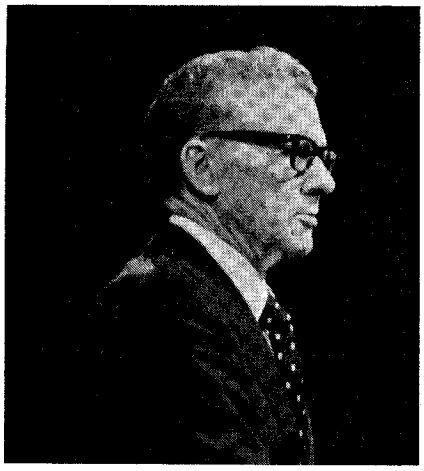
それから数週間、彼は何度も家へ来て、庭で取れた野菜や、鶏卵、娘には誕生カードをくれました。ただ話をして帰るだけのときもありました。スポーツプログラムに誘ってくれましたし、だれかが私たちに失礼なことをしていたらすみませんと謝るんです。私たちがなぜ教会に戻る気持になったのかといえば、それは彼が私たちを愛してくれたからです。彼は真心からそうしていました。真剣に考えてくれました。私に自分の証を聞かせてくれました。私は彼のおかげで自分の心を、よく見つめることができるようになったんです。それに天父に祈るようにも勧めてくれました。

私たち家族に対する彼の愛に心から感謝しています。永遠に忘れません。主は私たちに祝福を与えて下さいました。私たちは主の神殿へ行って永遠の結び固めを受けました。何度も神殿に入って、約束されている光明と知識をさらにたくさん得ました。

私は今、長老定員会の副会長をして会長の彼と一緒に働いています。妻は初等協会の教師と家庭訪問教師をしています。以前は迷っていた私ですが、私のことを心にかけ、時間を割き、愛と関心を寄せてくれた彼のおかげで、教会に戻り、家族を主のもとに導いていくことができるようになったのです。」彼はさらにこう続けた。「教会員の皆さんにお願いします。周囲を見まわして、失われた子らが天父のもとへまた帰れるように助けてあげて下さい。」

私たちの予言者が語ったチャレンジを、定員会は受けて立っている。「できないことがあろうか。行なおう」と。定員会の兄弟たちは、私たちにそれができることを承知している。定員会の人たちは皆、何千名もの人々がただ親しみあふれる両の手を持っていることを承知している。定員会の会長は次の言葉を実感として味わっているのである。「夜はふけ、日が近づいている。」（ローマ13：12）

私は、キリスト・イエスが神権の力の源であることを証する。いかなる力も、主の教会の発展を阻止することはできない。イエス・キリストのみ名によって。アーメン。



インマヌエル—神われらと共にいます

主のみたまを常に伴侶とすること。これを私たちは最も必要としている。

十二使徒評議員会補助
ヘンリー・D・テイラー

過去のあらゆる時代におけると同様に、今日の若人は、広範囲にわたる多くの重要な決定を下すことを求められている。スペンサー・W・キンボール大管長が告げているように、教会はもっと多くの宣教師を必要としている。今こそ「歩みを早め……見方を変え、目標を高く掲げる」時であると、キンボール大管長は述べている。

キンボール大管長は、1974年4月にチャレンジを与え、こう述べている。「現在、宣教師の人数は18,600名である。(会員たちはこのチャレンジを受け入れ、現在21,000名以上に及んでいる)　私たちはもっと宣教師を送ることができる。もっと多くの宣教師を。……私はもっと多くの宣教師を求めてはいるが、証のない宣教師やふさわしくない宣教師を求めてはいない。……若人たちは、伝道に行くことは大きな特権であり、宣教師は肉体的、知的、精神的に健全でなければならないこと、また『主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり』(教義と聖約1：31)ということを理解するであろう。」

さらに大管長は続けている。「若人はすべて伝道に出るべきですか、との質問をたびたび受ける。その答えは主から与えられている。『然り、すべての若人は伝道に出るべきである』と。」

伝道以外にも、キンボール大管長は次の事柄を指摘している。「また、すべての人は什分の一を納めるべきである。すべての人は安息日を守るべきである。すべての人は集会に出席すべきである。すべての人は神殿で結婚し、子供たちを正しくしつけるべきである。その他多くの立派な業を行なっていただきたい。もちろん、そうすべきである。しかし現在必ずしもそれを行なっているとは言えない。」

また大管長は言っている。「すべての人が世に広く福音を宣べるための準備をすべきであるにもかかわらず、それを行なっていないことを、私たちは実感として味わっている。非常に多くの若人が伝道に出る年齢に達していながら、そのための準備が全くできていない。もちろんそのような若人を送るべきではない。すべての若人に準備をさせる必要がある。肉体的な面から見て伝道活動に不適格な人の数は、ごくわずかである。……情緒的、知的、道徳的にふさわしくない若人があまりにも多い。生活を清く保たず、伝道活動の精神にそぐわないことがその理由である。彼らを準備させておくべきであった。させておくべきであった、という言葉を使いたい。しかし、すでに律法を破ってしまったからには、彼らの特権は取り上げなければならない。このように私たちは、これらの若人をふさわしく保つという大きなチャレンジを負っているのである。」(1974年4月4日、十二使徒会地区代表セミナー。"*When the World Will Be Converted*" *Ensign*『世の人々が改宗する時』「エンサイン」1974年10月号、p.2－14参照)

福音を宣べ伝える主な責任は、神権者の双肩に課せられているが、大勢の若い女性にも、宣教師として働く特権が与えられることだろう。従って、彼女たちも同じように、召される時のために準備を整えておくべきである。

両親は重要な役割を果たすことができる。すなわち、息子や娘に、ふさわしい生活を送って伝道に携わる資格を得たいという望みを抱かせる役割である。

私は、善い父母から生まれたことをいつも感謝することだろう。なぜなら私たち子供を教育するという責任を果たしてくれたからである。私たちの家庭では、伝道に出ようかどうかと迷うことは決してなかった。それは義務として教えられており、当然のこととされていたからである。ただいつ出るかということだけが問題であった。このように励まされ、希望を与えられた結果、6人の兄弟が全員伝道に出た。

伝道を志願する人は、どこそこの地方で働きたいという希望を持っている。これは自然なことだと思う。そして私の場合もそうであった。私の祖父母は、3人が英国生まれであり、英国で福音を聞いて改宗し、教会に入った。そして私の父は英国で伝道した。

後に私はヒーバー・J・グラント大管長から召しを受けたが、任地は英国ではなく、合衆国東部であった。瞬間私はがっかりした。しかし、宣教師は

主が望んでおられる地方で働くよう霊感によって召されると教えられたことがあった。そのとき、「主よ、みむねのまま行かん」（末日聖徒讃美歌 No. 100）という、私の好きな讃美歌の歌詞が心に浮かんできた。そして私はその伝道の召しを喜んで受けた。

東部諸州伝道部への召しは、私の半生の中で際立った祝福であった。当時その伝道部を管理していたのは、教会幹部のひとり、B・H・ロバーツ長老であった。ロバーツ長老はそのとき、七十人最高評議員会の先任会長で、非常に立派な宣教師であった。主は私に、この偉大な指導者と親しく交わる機会を与えて下さったのである。こうして私は、彼に対して深い尊敬と愛を抱くようになった。

ロバーツ長老は熱心な学者であり、才能ある作家であり、福音の麗しい原則を説く数多くのすばらしい書物を著わした著述家であった。また、勇敢で忠実な、信仰の擁護者でもあった。さらにロバーツ長老は、献身的な歴史記録者として、教会歴史中の興味深い重要な出来事を調べ、それを概要のかたちでまとめた。

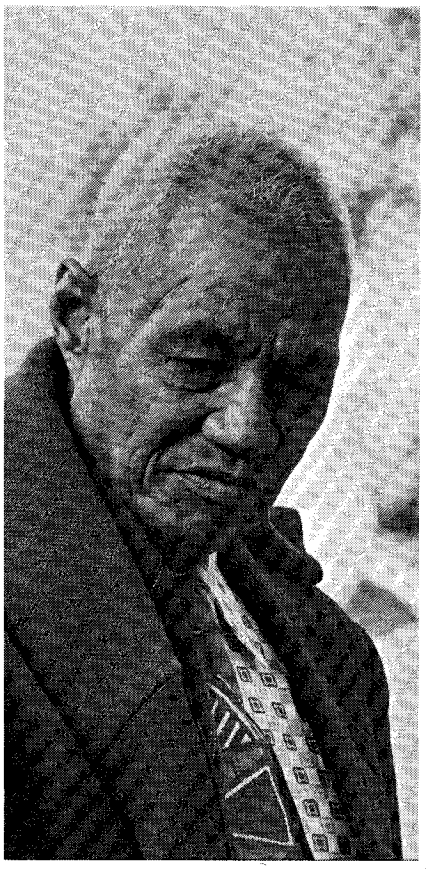
ロバーツ長老は力強い説教者としてもよく知られており、いつも様々な務めに従事していた。非常に力強く、大きな感化力をもって話し、説教台に立って教会員の胸を打ち、霊感を与えたことは数限りない。私はこのような霊的指導者の下で働く機会をいただいたことを思い起こし、いつまでも感謝の気持を持ち続けることだろう。

ロバーツ伝道部長が堅く信じ、宣教師たちに教えていたことがある。それは、宣教師が伝道を効果的に行ない、成果をあげるためには、福音を教えるときに主の「みたま」を求め、その導きを受けなければならないということである。そして彼は、次の主のみ言葉を強調した。「この『みたま』は、信仰の祈りによりて汝らに与えらる。而して汝らもし『みたま』を受けざる時は教うべからず。」（教義と聖約42：14）

ロバーツ伝道部長は、絶えず熱心に主の「みたま」を求め、導きを請うことによって、自ら宣教師に素晴らしい模範を示したのであった。私たちは伝道本部で毎日祈り会を開いていたが、ある日、ロバーツ伝道部長に祈りの順番が回ってきたときのことである。伝道部長は心から感謝と願いの祈りを捧げた。するとその祈りにより、幕が薄くなり、私たちは「みたま」を通して主を身近に感じることができたのであった。

聖典に通じていたロバーツ伝道部長は、伝道部のスローガンを出していた。それはたった一言、「インマヌエル」という言葉であった。イザヤは、救い主の誕生を予告し、「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる」（イザヤ7：14）と予言している。

それから数世紀後、キリストの使徒マタイは、インマヌエルという名前の意味を説き、次のように記録している。「『見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう』。これは、『神われらと共にいます』という意味である。」（マタイ1：23）ロバーツ長老は



この「インマヌエル」というスローガンを、自分の説教に、手紙に、本や写真に署名するときに、あるいはその他いろいろな機会にいつも使った。

すべての宣教師は、聖き「みたま」を通して、「神われらと共にいます」という状態を保つようにすべきである。また同じく、会員もみなこれを目指すべきである。聖き「みたま」は敏感であり、不浄な体にはとどまらない。従って、聖き「みたま」を受けるためには、人は心と体を清く保つ必要がある。

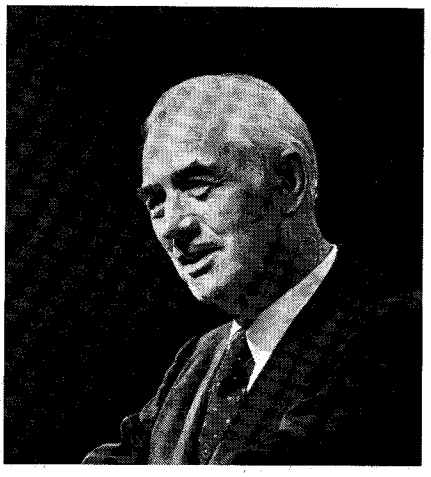
さわやかな弁舌で評判の若者がいた。彼は語ることにかけて素晴らしい才能を持っていた。そして人々からほめられることにうぬぼれ、幾分尊大になっていた。彼がワード部の聖餐会での話を頼まれたときのことである。聖餐会は進み、その若者が次の話者であることが発表された。そして彼が微塵の謙遜さも見せず、自信満々の素振りで説教台に向かったとき、監督は副監督の耳もとでささやいた。「さびしいですね。彼はひとりぼっちですよ。」

救い主は復活後、天に昇るに先立ち、ガリラヤに近いある山上で使徒たちに会われた折、自分は神のもとに戻って行くが、いつまでも「みたま」を通じて彼らの所にいると言われた。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」（マタイ28：20）

その通り。すべての若い男性は伝道に出るべきである。それを目指し、目標とし、心から望むべきである。伝道に出るか否かは、この生涯において下す決断の中で最も重要で、また影響の大きいものである。

私は、すべての若い男性が自らを備えて、伝道の召しを受けることができるようにと祈って止まない。これらのことをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

わが愛子に聞け



末日聖徒は、主の祝福にあずかる民、主が生きておられることを知っている民である。

十二使徒評議員会会員
マーク・E・ピーターセン

この大会において私たちのために歌を歌い、素晴らしい演奏をして下さった皆さんに、心から感謝を申し上げたい気持で一杯である。これまでになく感動を覚えている。まことに個人的ながら、コーラスの方々ならびにオルガニスト全員に、私の感謝の気持を申し上げたいと思う。皆さんは、この素晴らしい大会に大きな貢献をしておられると思う。

私たち末日聖徒には、世の人々に対するメッセージがある。それは神から与えられたものであり、神がこの時代に再び天より語りたもうたことを全人類に宣言するものである。

全能の神は次のように言っておられる。「聞け、汝ら諸々の天よ、地よ耳を傾けよ。喜べ、そこに住む者たちよ。主は神にして、主の他に救い主なければなり。

主の知恵は偉大にして、その為したもうところは驚嘆すべく……」(教義と聖約76：1，2)

また言っておられる。「誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば、……すべての人々に警めの声は及ばん。」(教義と聖約1：2，4)

私たちのメッセージで最も重要なのは、ナザレのイエスが主なるキリストであり、全人類の贖い主であり、クリスチャンの言う救い主であり、ユダヤ人のいうメシヤであるという点である。この同じイエスが、マリヤから生まれた、文字通りの神の御子であり、このイエス以外に救い主はいないことを、私たちは心から厳粛に宣言するものである。

全能の神は、ナザレのイエスが神の御子であることを繰り返し断言し、「わが愛子に聞け」とはっきり命じられた。そしてこの末日においても、全能の神は、イエス・キリストについて大いなる新たな啓示を下すに及んで、再び「彼に聞け」と命じられたのであった。

従って私たち末日聖徒は、イエス・キリストについての新たな近代の啓示を皆さんにお伝えするものである。父なる神は、「彼に聞け」と言っておられる。神の心からなる勧告に耳を傾けようとする人は、イエスの言葉を聞いていただきたい。

私たちのメッセージは、真理に基づくものである。この混乱した世界には欠かせない大切なものである。主御自身、次のように言っておられる。「汝ら民よ、遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ、共に聴け。

誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば、一人ものがるる者なし。」(教義と聖約1：1，2)

このように私たちが近代の主の啓示の言葉を宣言するときに、大勢の人々は、それが信頼できるものであるかどうかをすぐ心に問う。そして、その信頼性の大部分が、人としての私たちの信頼性にかかっていることを、私たちは十分に承知しているのである。このことを心に留めた上で、少し皆さんに、私たち末日聖徒についてお話したい。

私たちは、まじめで、立派な人格を身につけ、正直で、義しい生活を送るように命じられている。そして私たちは、信仰の基本原則として、徳と純潔とを教えている。また、家庭を堅固で保護の得られる場とするように提唱している。

私たちにとって、家族は文明の基石であり、また常にそうでなければならない。家庭は正しい人間関係の基である。

私たちは教会の男女に、貞節は最も気高いものであることを教えている。私たちはみな神の霊の子であり、それにふさわしく生きるならば、ついには完全な者となって、天の御父のようになれるというのが主の計画であることを信じている。(マタイ5：48参照)

私たちは、家族は永遠の単位となるよう意図されており、死と復活の後、永遠不滅の生活として存続することを信じている。

私たちが夫婦それぞれに貞節という高い標準を教えているのは、自らを備え、このような約束にあずかるにふさわしい者となるためである。私たちにある道徳の標準はただひとつ、万人に共通のものである。私たちはいつもこのように訴えている。「汝ら、主の器をもてるものは潔くあれ」と。(教義と聖約38：42)

教会員の増加は著しい。誠実な心を持つ男女は、すぐに私たちのメッセー

ジに応える。10年前の会員数は250万であったが、現在では350万に達している。

私たちは着実に伝道プログラムを進めている。現在62ヵ国に133の伝道部が置かれている。しかし10年前はわずか74にしか過ぎなかった。また今日の宣教師数は21,168名で、そのほとんどが20歳前後の若者である。しかし10年前は12,585名であった。現在これらの宣教師は、自ら進んで2年間全時間を捧げ、自費で伝道に携わっているのである。皆さんはこのことから、私たちが心から確信を抱いているものが真実のものであることを判断いただけるものと思う。

また、教会員は一般に、支部、ワード部およびステーキ部と呼ばれる組織に分けられている。この支部とワード部は教区に相当し、ステーキ部は管区に似たものである。10年前のワード部および支部数は6,000であったが、現在はほぼ8,000を数えている。またそれより大きな単位であるステーキ部は10年前には412であったが、今は700を超えている。そしてこれらは、南アメリカからスカンジナビア、アラスカから南洋諸島に至るまで、数多くの国々に見られる。

私たち教会員は一般に健康である。カリフォルニア大学公衆衛生学部のジェームズ・E・エンストロム博士は、去る4月9日付の「パサデナ・スターニューズ」で、モルモンの癌の罹患率は全国平均の50パーセント以下であると報じている。癌の死亡率がアメリカ国内で最も低いのは、ユタ州である。

肺癌を見てみると、末日聖徒の女性は全国平均のわずか31パーセント、男性はわずか38パーセントに過ぎない。また、食道癌の場合、末日聖徒の女性は全国平均の11パーセント、男性は34パーセントである。以上の数字は、ユタ洲癌登録所の理事を務めているジョセフ・F・ライオン博士の提供によるものである。

(国勢調査局発行の)1971年度「合衆国統計要約書」をもとにしてユタ州と他州を比較してみるとおもしろい。合衆国全州における様々な病気の罹患率



サッター鉱山で金を発見したモルモン大隊の兵士。これがゴールドラッシュの発端となった。ギルバート・リスウォルド作のモルモン大隊記念碑より。(ユタ州庁)

が、その順位に従ってすべてあげられている。次にその幾つかを取り上げたい。

心臓病の場合、ユタ州は46番目に位している。インフルエンザと肺炎は49位、脳血栓は46位、動脈硬化症は49位、肝硬変は45位、気管支炎と気腫、ぜんそくは30位、結核は50位、性病は50位、主要循環器と腎臓病の合併症は50位、循環器系の病気は50位、神経系に影響を及ぼす血管障害は50位、心臓病による高血圧は43位、その他の高血圧は50位、伝染病は50位、妊娠による余病は46位、幼児死亡率は50位である。

ユタ州のこれらの順位について語るとき、全人口の約30パーセントが私たちの教会に所属していないことを心に銘記しなければならない。ユタ州の統計には彼らも入っているのである。

教会は、青少年の育成を図るボーイスカウト・プログラムで、他をリードしている。私たちは、あらゆる国民、宗教、民族の少年を訓練する上で、このボーイスカウト・プログラムが非常に有効な組織であると考えている。

合衆国全体では、スカウトの年齢の少年でそれに登録しているのは、わずか23パーセントに過ぎない。しかし、末日聖徒の間ではその率は85パーセントとなっている。

合衆国全体でイーグル章を得ているのは、登録したスカウトの内の1.5パーセントであるが、末日聖徒では4パーセントである。

1974年度、私たちの教会はスカウティングの後援団体として、合衆国で2番目に多くの隊を後援している。当教会をしのいだのは、PTAであった。PTAの後援数は20,800隊で、当教会の後援数は14,344隊であった。また、当教会に続くのは、ユナイテッド・メソジスト教会の13,789、次いでローマ・カトリック教会の11,734である。

少年犯罪の多い今日、私たちの教会に所属する256,000人の十代の少年の内、70パーセントが教会に活発に出席し、同じく238,000人の少女の内、73パーセントが活発であることは、まことに喜ばしいことである。このことを考えていただきたい。これほどの組織がどこにあるだろうか。考えてみていただきたい。アルコールやタバコ、また婚前の性関係を禁じる教会において、50万にも及ぶ十代の若者が献身しているのである。もし可能であるならば、このような団体を教えていただきたい。

皆さんは、教会の日曜学校の出席にも関心を持たれることだろう。幼ない子供たちの59パーセントが、毎週日曜学校に出席している。また、十代の若人の60パーセントが、毎日曜日、クラスに活発に出席している。

私たちは教会で、「神の栄光は英智なり」と教えている。(教義と聖約93:36参照)私たちはまた、人の栄光も同じく英智であると信じている。このことを念頭に置いて、教育の普及に励んでいるのである。

カーネギー高等教育方策研究評議会の議長であるクラーク・カー博士は、昨年のユタ大学の卒業式で、次のような興味ある演説をしている。

「ユタ州は、3歳から34歳までの全人口の就学率を見た場合、合衆国一である。

ユタ州は、各年齢別の就学率を見た場合、16、17歳を除くと、すべて合衆国一である。このふたつの年齢では、ミネソタ州が一位である。

ユタ州は、25歳以上の全住民の平均就学年数は合衆国一である。……

ユタ州は、州の歳入に対する医学部の運営費を見た場合、合衆国一である。」

次いで彼はこう語っている。「カーネギー高等教育委員会は、50州のそれぞれで、高等教育の現況を調査した。その結果、他の多くの州と違って、ユ

タ州には大きな欠陥は何ら認められなかった。」

素晴らしいことではないだろうか。

さらに彼はこう問いかけている。「なぜユタ州はこれほど抜きん出ているのだろうか。富んでいるわけでも、歴史が古いわけでも、教育の振興に対する立地条件が良いわけでもない。その秘密を知ることができたら、恐らくどこへでも輸出できるだろう。しかしこれは容易でない。なぜなら、その秘密はその歴史にあると思われるからである。皆さんの過去の指導者たちは、教育に大きく力を入れている。」続いて彼は、ブリガム・ヤングの話を引用して、教育の価値を訴えた。

教育に対するこのような考え方は大勢の教会員に影響を与え、その結果彼らは、合衆国やカナダを始め、世界各地で卓越した地位に就いているのである。

「会社幹部の地位にあるモルモン」というテーマの座談会で、マーク・W・キャノン氏が話したことであるが、最近の研究から次のことが明らかになったとのことである。アメリカの主要な事業体471社を調べた結果、州人口に対する社長の人数は、他のいかなる州よりもユタ州生まれが最も多い。合衆国の平均では、人口 205,000人にひとりの社長であるのに対しユタ州は62,000人にひとりの社長を輩出している。現在、55名の末日聖徒が1千万ドル以上の資産を有する会社で、社長あるいは理事長、または副理事長の地位にある。また、7,500万ドル以上の資産を持つ会社で要職に就いている人は、77名である。

幾人かの末日聖徒は合衆国で閣僚を務め、カナダでも要職に就いてきた。軍隊には陸軍大将もいれば、海軍大将もいる。また、ある末日聖徒たちは長年合衆国議員を務めており、カナダの行政組織に入っている人々もいる。例えば、1952年に合衆国上院および下院に議席を置いていた末日聖徒は15名であり今日は28名の議員がいる。

同じく、連邦銀行局、合衆国関税裁判所、合衆国関税委員会、連邦住宅管理局等でも、末日聖徒は要職に就いている。

モルモンの大祭司、ハービー・フレッチャー博士は立体音響を開発し、また同じくモルモンのフィロ・ファンズワース氏はテレビを開発した。

国際ロータリークラブや国際ライオンズクラブの会頭を務めたモルモンもいる。アメリカ医師会やアメリカ銀行協会、その他各種の科学協会の会長をも務めている。また、科学界や実業界経済界の要職にある人は数多く、ここですべてを述べることはとてもできない。

今日、大勢の人々が、いわゆる「女性解放運動」(ウーマンリブ)に関心を寄せている。

皆さんは、選挙権を得た最初の女性がモルモンの女性たちであることを知ったら、喜ばれることだろう。モルモンの女性たちは、1世紀以上も前のブリガム・ヤングの時代にこの大切な権利を与えられたのである。

私たちは、モルモンの女性は世のいかなる女性よりも束縛が少なく、大きな自由を得ていると信じている。彼女たちは、万人に対する自由と公平の本当の意味を知っている。これこそ、宗教の一部であり、日常生活の基だからである。

私たちの教会には、女性自身が運営し、指導する、女性のための組織がある。女性の扶助協会として知られており、約100万の会員を擁するものである。この組織の指導者たちは世界婦人評議会で著しい貢献をしている。そのひとりであるベル・S・スパッフォード夫人は、最近、合衆国の全国婦人評議会会長を務めた。

この扶助協会の目的は、困っている人々に慈善奉仕をすることである。それと同時に、女性の教養を増し、彼女たちが人生の貴い目標を達成し、家族の中に気高い理想を築くのを助けることである。

私たちはメッセージの一部として、世の人々に、モルモン経と呼ばれるもう一冊の新しい聖典を紹介している。現在この本は毎年100万冊以上出版されている。これは、古代アメリカの神聖な記録である。モルモン経のことを語るとき、聖書も使っているのかどうかとの質問を時折受けるが、もちろん聖書も使用している。私たちは、他のほとんどのクリスチャンと同様に、聖書を使い、それを標準聖典のひとつとして受け入れている。しかしまた、モルモン経をも神のみ言葉と信じている。この本は、キリストを証する第2の書物であり、この末日における主のみ業を証するものである。

私たちは現代の啓示を信じており、全人類に、神は新たな予言者を起こしてこられたと宣言するものである。これらの予言者は、人類を導くために現代の啓示を受けて、それを伝えているのである。

私たちのメッセージは神聖であり、真理に基づいている。そして教会員は、堅実な市民であり、法律を守り、そう明で、進歩的な人々である。これは教会員を知っている人すべてが認めるところである。私たちの生活態度は適正で、使命とメッセージが神にその源をもつ確かなものであるという証拠を十分に反映している。皆さんが目にする通りである。私たちが偉大な宗教のメッセージを世の人々に宣べ伝えるのは、これまで私が話したような理由によるのである。

この暗黒と罪と混乱の時代に、皆さんは神からの新たな啓示を歓迎なさらないだろうか。この啓示によって、神の存在が再確認され、救いへの道が再び示される。そしてこの啓示は、丘の上の燈台のように、人生の進路を告げてくれるのである。

私たちは証する。神は世の造り主であり、現在も生きておられる。イエス・キリストはこの世の贖い主であり、現在も生きておられる。また私たちは一致して、主イエス・キリストに関する天父の戒めを公言するものである。「わが愛子に聞け」と。救いは主イエス・キリストの内にあり、主を通してのみ得られるのである。私たちはこのことを、主イエス・キリストの聖なるみ名によって証する。アーメン。



アロン神権を展望して

若い神権者たちは娯楽や放縦を望んでいない。彼らが求めているのは、人に奉仕する機会である。

管理監督
ビクター・L・ブラウン

今宵、私はアロン神権関係の責任にあるすべての教会役員にチャレンジを与えたいと思う。これには、すべての執事、教師、祭司、さらに成人の指導者も含まれる。まず、アロン神権がどういう力を発揮できるのか、その展望についてお話し、その後で、その展望を現実のものとすべく、共に手を取り合って、努力を続けていきたいと思う。また、もう一言申し上げたいことは、私がこれからお話する原則は、若い女性にもあてはまるということである。この若い世代を育成するにあたって、私たちは、決して若い女性の力を無視したり、過少評価したりしてはならない。

兄弟たちよ。時折、アロン神権の業が誤って指導されていることがある。指導者たちは、若人が教会に対する興味を失っていくのを見ると、毎週のように大事業を考案しようとして躍起になっている。大活動集会や十代向けのパーティーや目新しい場所の訪問などを計画し、それによって、教会の若人の関心を高め、学校の活動やクラブやテレビと対抗しようとしているのである。また活動の夕べにはいつも決まって、祭司や教師にバスケットボールをさせるかも知れない。これは、指導者たちが、他になすべきことを持たないからであり、また、若人の中にもそういう活動を好む者がいるからである。将来に対する見通しに欠けた指導者というものは、若人を失うことを恐れて、決して彼らに犠牲を求めようとせず、好むがままに任せているのである。「娯楽活動は教会の青年たちの求めている活動である」と考えている指導者もいるかも知れない。また「もし私たちが彼らを活発にしておきたいと思うなら、彼らの望むものを与えてやらなければならない」と言う人もいる。だがたとえ若い人々がそのような活動にしばらく参加したとしても、彼らは、そのような活動を通じて改宗を経験することもなく、それどころか、神権を持つことを特別な栄誉と考えなくなってしまうことも度々ある。その結果、成熟しきらずに大人になってしまい、教会と人類のために働く奉仕の業にも、満足な準備ができなくなってしまうのである。

運動や大活動集会やパーティーに本質的な誤りがあると言うのではない、個人の好みばかり満足させている活動では、その目標としている方向が間違っているために、必ず失敗の憂き目を見るということなのである。主がアロン神権定員会に委ねられた業を果たそうともせずに、このような方法で、奉仕と個人の犠牲をはなはだしく無視し、教会の青年の興味を引くために世間と同じ様な方法で対抗しようとしているのである。このようなことが続くとやがて、青年たちは、教会というものはただ彼らの移り気と願望を満足させるためだけに存在する、と考えるようになるであろう。また、どれだけしたいほうだいをさせてくれるかによって、教会を評価するようになるであろう。そして、彼らがこのように考えるようになると、彼らは、世の中の誘惑の方が、私たちがに与えうるものよりも、ずっと魅力的で、刺激的であると思うようになるかも知れない。そうなれば、私たちは世間の模倣をしたばかりに、青年たちを失い、彼らを世間に委ねてしまうようになるのである。

それよりもはるかに良い方法がある。私たちは神権定員会に焦点を合わせ、また、神権定員会が主の委ねられた業をいかに果たすか、という点に目を向けることである。主の業を果たすとき、定員会は、その会員の昇栄のために力強い貢献をするのである。アロン神権の指導者がその定員会の仕事を真面目に考えるとき、彼は定員会の会員に不便を強いたり犠牲を求めたりすることに、何も恐れを感じないであろう。このような定員会会員は、自己犠牲から生まれるすがすがしさと喜びを経験するが、この様な満足感は、世の中からはせいぜいそのかけらしか得られないものである。この経験をした会員は、神権が神聖なものであることがわかるようになり、また神権に対して感謝と尊敬の念を抱くようになるのである。

もう一度繰り返そう。神権の業を行なうことをアロン神権定員会の目標とするならば、定員会の会員は活発になり、またその状態を維持するであろ

う。もし定員会会長会や成人の指導者が主の業を無視し、活動にばかり心を奪われて娯楽的な計画に終始するようになると、定員会会員は必ず興味を失っていくことであろう。次の言葉は、人生の哲理である。「人は大義のために犠牲を払ってはじめて、その大義を愛するようになる。」

私たちは皆、これを経験から知っている。伝道に出る前には、とるに足らない未熟な祭司だった青年が、伝道に行って数ヵ月間困難な日々を過ごした後に急に成長する、という例は度々目にしている。証と目的と心の平安が、無軌道と混乱と無関心とに取って代わるのである。これは簡単に説明できる。彼らが偉大な目的のために犠牲を払うようになるからである。兄弟たちよ。アロン神権者たちは、神と人類に対する奉仕の業に携って得られる犠牲の喜びを経験するのに、伝道に出るまで待つ必要はない。また、人を愛し、神権を擁護するという大義を持つのに、19歳になるまで待つ必要もないのである。

教会の青少年たちは、娯楽で満足しようとは思っていない。彼らと話し合ってみるとよい。教えてくれるであろう。彼らは映画を見に行くよりも、彼らの友人が福音について学ぶ、家庭集会を持ちたがっている。

彼らは教会のレクリエーションホールで騒々しい遊びに興ずるよりも、病弱の子供のために誕生パーティーを開いてあげたいと思っている。彼らは、大人から最良の道具を無料で貸してもらって、自分たちの食事も皆料理してもらうようなキャンプに連れて行かれるよりも、定員会の不活発会員と親しくなるために、自分たちの手で定員会キャンプ活動を計画し、実行したがっているのである。

私は、私たちが奉仕活動ばかりすべきであって、レクリエーション活動はすべきでない、などと言っているのではない。教会の偉大な伝統の中で、レクリエーションも社交活動も文化活動も維持していく必要がある。私が申し上げたいことは、調和というものがあるはずであり、また奉仕とレクリエーションをうまく調和させる必要があるということである。どんな活動でも、たとえそれが娯楽的な活動であっても、少なくともそこに参加する人々が成長するための助けになるような計画を立てることができるはずである。どんな活動でも、たとえそれが肉体労働を必要とするような企画であっても、大きな楽しみになりうるのである。霊的な経験というものは、私たちがかかわるあらゆる分野に折り込むことができる。こうしただけでも、競技場で見られるような貧困なスポーツマン精神は改められるはずである。

最近私はステーキ部のユースコンファレンスのプログラムを検討してみた。青少年の指導者が自分たちの手で選んだプログラムである。彼らの挙げた項目は次の通りである。(1)自分をよく知る、(2)神をよく知る、(3)系図とステーキ部図書館の利用法、(4)自己訓練及び誘惑や短気を克服すること、(5)両親と青少年の関係、(6)ダンスのワークショップ（スウィングとフォックス・トロット）、(7)小遣いを上手に使う方法、(8)デートをするには、(9)就職の面接に成功するには、(10)青少年の指導者養成、(11)食糧の準備と保存及びパンの製造、そして最後に、(12)女性――現在の社会におけるその役割と地位。以上である。

この一覧表は、教会の青少年について、その実体の一面を表わしているにすぎないが、大人たちはこれさえも認識していないことがほとんどであろう。教会の青少年たちは、奉仕されるよりはむしろ奉仕したいと思っているのだ、ということを覚えておこうではないか。自己犠牲により、青少年たちは素晴らしい人格を形成している。自己犠牲を払うことにより、自分が本当に何者であるかがわかるからである。彼らには、アロン神権に比類ない可能性を発見する権利がある。これにより、世の多くの人々が味わっているような自己に対する無関心を埋めるのである。アロン神権定員会の活動では楽しみは得られても、個人的な達成感や成長や自分を犠牲にする喜びなどは味わうことができない、などとは決して言わないようにしよう。教会の定員会を、はっきりと、また確実に、イエス・キリストの福音の実践の場としようではないか。世の中の弱々しい組織を模倣する必要は決してない。

ある青年の話を、あなた方にお話したいと思う。彼は、この重大な原則が見事に実践されているのを見て、私に次の様に手紙を書いて来てくれたのである。「かつてあるワード部に出席していたときのことです。そのワード部にはメルケゼデク神権者がほとんどいませんでした。でも、どう見ても霊性が欠けている様子はありませんでした。それどころかむしろ、会員の多くは、それまで知っていた神権の力が見事なまでに発揮される光景を目にしていました。

力の中心は祭司でした。彼らは、生涯で始めて、祭司の持つすべての義務を果たし、同じワード部の会員の必要を満たす仕事をするよう召されたのでした。彼らは本当の意味でホームティーチャーに召されたのです。ただ訪問する長老に黙ってついて行くのではなく、兄弟姉妹たちに自ら祝福をもたらすよう召されたのです。

それまでのこれら4人の祭司からはとても考えられないことでした。そこいらの不良と変わりませんでした。彼らはセミナリーの教師を、2、3ヵ月で次々と追放してしまいました。またスカウトの旅行のとき、ある地方で大暴れをしました。でも彼らが必要とされたとき、そして彼らの精力的な働きに全幅の信頼が置かれたとき、彼らは神権の奉仕の業の中で最も輝きを放つ存在に数えられるようになったのです。

この秘密は、監督がアロン神権者たちに、天使の現われを受けるような人物に成長して欲しいと訴えたことにあります。そして彼らはそのような人間にまで成長しました。助けを必要としている人々に援助の手を差し伸べ、強さを必要としている人々に強さを与えました。その結果、ワード部の他の会員の成長を助けただけでなく、定員会の会員自身も成長したのでした。ワード部内には、偉大な一致の精神がみなぎりました。会員たちは皆、人々が精神とこころを一つにすることによりどれほどの成果が上がるのか、知り始めました。この成果の中には説明のつか

ないものはひとつもありませんでした。ただアロン神権を適切に行使しただけなのです。」

世の中では、多くの組織、教会、政府、そして家族までもが、人々に犠牲を求めることを恐れているがために、その力の大部分を失っている。アロン神権の分野で同じ様な誤りを犯さないようにすることが、肝要である。私たちは決して恐れることなく、アロン神権者たちに主が命じられた業を果たすよう期待すべきである。

アロン神権の偉大な業を果たすにあたって、新しいプログラムは何ら必要としない。あなたたちは、新刊の「アロン神権手引き」を既に受け取ったか、そうでなければ近々受け取ることであろう。その中には、聖典と末日の予言者の教えの中から、アロン神権の組織と運営に関する簡単な原則を概略してある。この原則をうまく応用すれば、教会の青少年の間では活動と改宗に一層拍車がかかり、宣教師の準備も一層立派にできることであろう。

ここでしばらく、一緒に熟考してみたいと思う。あらゆる部門の指導者たちが、この手引きに書かれているままに、熱心に、正しい原則を適用したとしたら、アロン神権を持つ青少年たちはどうなるであろうか。既にあなた方のうち何人かは、ステーキ部長が月例の神権個人面接の際、各監督にアロン神権関係の報告を求めることにより、どれほど大きな成果を上げているかご存知のことと思う。ステーキ部アロン神権委員会の長であるステーキ部長が、各監督に、アロン神権定員会によって行なわれた奉仕活動について尋ね、また、定員会会員の伝道活動や神殿結婚や父親としての準備がどれほど進んでいるか尋ねるときに、業は急速に進展する。この月例神権個人面接という場を通して、アロン神権と若い女性に対して最も重い責任を持つ監督の考え方も変わり、強められるはずである。もちろん、ステーキ部長が神権個人面接を行なおうとしなかったり、行なわなかったり、さらには、監督の第1の最も重要な責任がアロン神権と若い女性にあるという指示を受け入れなかったりしたら、監督はその管理の職を完うするのに困難を感ずることであろう。

では次に、副監督たちが自分に責任が委ねられている定員会の仕事の管理指導を適正に行なった場合、どんな成果が表われるか考えてみよう。副監督たちが、それぞれ執事、教師の定員会の会長会と月例神権個人面接を行なっている場合、副監督たちは、入念な質問と訓練を通じて、アロン神権の活動に描く夢を彼らに伝えることにより彼らに活気と霊感を与えることができるのである。

すべての監督が祭司定員会の会長としての務めを着実に果たし、会長会の集会を管理し、定員会の集会と活動にすべて出席した場合、どんなことが起こるか考えてみていただきたい。また同様に、副監督たちがそれぞれ責任ある定員会の行事に皆参加し、青少年一人一人と親しくなったとき、どんなことが起きるか、必要なら他の人々に尋ねてみるとよい。

アロン神権を指導する上で著しいまた優れた成果を上げたければ、それぞれの定員会アドバイザーは、見えないところで多くの時間を費やし、定員会会長が適切に指導の役目を果たせるよう準備させるとよい。定員会集会の前に定員会会長会の集会をもち、定員会の集会を定員会の会長会自身が管理するようになれば、画期的なことが起きるであろう。

では次に、教会の青少年たちが次のようなことに従事したらどういう人物になれるのか、考えてみよう。すべての定員会のカレンダーが、悲しんでいる人、苦しんでいる人に慰めを与えたり、ワード部や地域社会の人々の生活に喜びをもたらしたりするための活動や事業の計画で埋められたときには、どうであろうか。また、定員会でその会員を見守ったり、彼らに宣教師活動の準備をさせたりする活動や事業の計画で埋められたらどうであろうか。

定員会が聖典で指示されたままの責任を実行したあかつきには、アロン神権者たちはどれほど成長することであろうか、また教会はどれほど祝福を受けることであろうか、これについてもっと深く考えてみようではないか。例えば、ホームティーチャーとして働く祭司たちが教会員の家族に「声を挙げてもひそかにても祈りを為し、すべて家庭の務めにいそしむよう」（教義と聖約20：51）勧めたらどうであろうか。また、教師や執事が啓示されたままの義務をすべて果たしたらどうであろうか。こうしてみると、アロン神権を持つ兄弟たちは、この偉大な末日のみ業を進めるにあたって、何と大きな役割を担っていることであろうか。彼らは、神権定員会が、地上に幸福と平安と繁栄をもたらすために神のみ力を行使する権利と特権の与えられた神権役員の一団であるということを、認識するようになるであろう。

これらのことが皆起きたときには、指導者はもう世間の模倣にしかすぎないプログラムを考案しようなどとは思わなくなるであろう。私たちは、改宗や活動、宣教師の準備、青少年の霊的成長などの鍵が、恐れることなく、徹底的に自らを備え、主がその概略を示された通りに、アロン神権の根本的な、そして基礎的な業を遂行していくステーキ部長会、監督会、そしてアロン神権定員会の会長会にあることを悟るであろう。

私たちが末日に果たすべく召されているこの業は、偉大な業である。私たちは、これを信仰深く、また活発に果たして、栄光ある結末を迎えられるよう、願っている。

私の兄弟たちよ。証申し上げる。この教会の監督には、この教会の青少年を管理する責任がある。また主は、私たちがその管理の職を正しく行なうよう望んでおられる。私は、教会の監督やステーキ部長たちが、必ずこれを行なってくれると信じている。またさらに私は、アロン神権定員会の会長会にも信頼を置いている。また彼らの成熟度、信仰の堅固さ、そして霊性の深さに信頼を置いている。指導者として、他のいかなる世代の人々も到達し得なかった段階にまで高められるであろうと信じている。この証をイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。



神権の力

私たちは主の示された方法によって神権を行使するならば、その大きな力を発揮することができる。

十二使徒評議員会補助
W・グラント・バンガーター

愛する兄弟たち。私は、これから申し上げることが今宵のブラウン監督の話の補足となるものであると信じている。そして、私が話す間、主のみたまが私を祝福して下さることを信じてやまない。

私は自分のことを、神権をテーマにして話せる権威者であるなどと思ってもいない。しかし、あなた方と共に長年過ごして、神権に関して、その目的や力などについて深く考えてきた。

教会では、極めて一般的な言葉で証が述べられるのが普通である。例えば神が生きておられ、イエスがキリストであり、これが真実の教会であることを知っている、と私たちは言う。だが福音のもっと細かい領域では、必ずしも同じような信仰を示していない。

私はかつて、福祉計画以外なら全部信じるとか、什分の一以外なら全部信じるとか言う人がいることを耳にしたことがある。また、予言者ジョセフ・スミスやデビッド・O・マッケイには従うことができるが、ブリガム・ヤングやヒーバー・J・グラントには従うことができないと言った人もいる。このような選択は全く矛盾している。

今宵、あなた方に尋ねてみたいと思う。「神権の力に関して、どのような証を持っているだろうか。」

ここに集っている兄弟たちの中で、ホームティーチャーはどれ位いるだろうか。手をあげてみていただきたい。この放送を聞いている人の中にも手をあげた人がいるかもしれない。9月が終わったばかりであるが、あなた方ホームティーチャーのうち、何人が「ホームティーチングの割当てをすませた」だろうか。兄弟たちよ、こういう質問の仕方には注意した方がよい。御存知のように、悪魔が「ホームティーチングの割当てをすませただろうか」という言い方を教えたのである。こういう言葉で、ホームティーチングの持つ広汎な使命を表現しようと言うのなら、不十分極まりない。

私たちに「ホームティーチングの割当てはすませただろうか」と質問させることにより、悪魔は、その効果の90パーセントを奪っているのである。こうした質問には皆、月の最終日に手早く訪問して、それを報告書に送り込めばよい、という意味合いが感じられる。

私たちが神権の性質を完全には認識していない例が、ほかにもある。監督会はある事柄を特別にうまく計画したいと思ったら、だれにその責任を委任するであろうか。その通り。扶助協会である。ではなぜ神権者ではないのだろうか。それは、私たちが「神権者はそんなことしてくれませんよ」と言う習慣ができているからである。なぜステーキ部長の中には、ステーキ部大会に人々を連れてくる際にホームティーチャーを利用しない人がいるのだろうか。それは、「ホームティーチャーはそんなことしてくれませんよ」と広く言われているからである。「父親はそんなことをしませんよ」とか、「このワード部の人たちは責任を受けようとしません」などと言う人もある。

はっきりと言おう。このようなことを言うのは、神の力に対する信仰が足りないか、神の力を理解していないか、どちらかである。ある立派なステーキ部長が、思わず「ホームティーチャーはそんなことをしてくれません」という言葉を口から滑らせた。私は彼に次のように答えた。「ステーキ部長、今あなたが何を言ったか知っていますか。私にはあなたが、主は教会を導くための手続きを制定されたがその方法では実りがない、と言っているように思えます。あなたは、もっとよい方法を考え出しでもしたのですか。」

私はレックス・リーブ部長のステーキ部の大会に行ったことがある。彼は私を連れて建物の中を案内し、大会のために準備した2,000脚のいすを見せてくれた。私は彼に、どうして2,000人出席することがわかるのか尋ねてみた。彼は、「私たちはホームティーチャーを派遣して、皆大会に出席するよう招待しました。そしてホームティーチャーは私たちに報告してくれました。それで明日、2,000名の人が集まることがわかったんです」と答えた。私が大会で話をすることがホームティーチャーを通して知らされていたことは明らかだった。2,000人のうち75人が来なかったからである。それでも、彼らは49パーセントの出席率を得て、それ以来、

発展に拍車がかかっている。

数年の間、私はマリオン・G・ロムニー副管長の下で教えを受ける特権を得たことがある。副管長は、私たちに「教会の憲法」について教えてくださった。これは、教会の設立のときに与えられた啓示のことである。この啓示の中で主は、教会統治の手順について概略を述べられた。長老は、教義と聖約第20章によれば、小神権の助けを受けて、「教会員を守護」（42節、53節）するはずである。「守護」の仕事の一部は、教会員の家庭を訪れ、家庭の務めにいそしむよう指導することによって果たされる。他の啓示では、長老定員会は特に「常任教職者」（教義と聖約124：137）の団体として述べられている。アロン神権を持つ人々も、やはり「常任の教職者」（教義と聖約84：111）と呼ばれている。

5年前に「教会の『教職者』はだれですか」と尋ねられたら、私たちの多くは「監督です」と答えたことであろう。現在私たちは、そのように簡単に答えるわけにはいかない。数多くの仕事が現在、長老に委任されていることを知っているからである。啓示でもこれは律法にかなっていると言っている。現在、ひとつのワード部には最低50人の「教職者」がいるはずであり、彼らは、数年前にひとりしかいないと考えられていた教職者に代わって仕事をするのである。

ではここで、これまで監督が行なっていた仕事を50人で行なった場合、福音のみ業を進展させるにあたって、どれほど大きな力が増し加えられることになるか、それを考えてみよう。

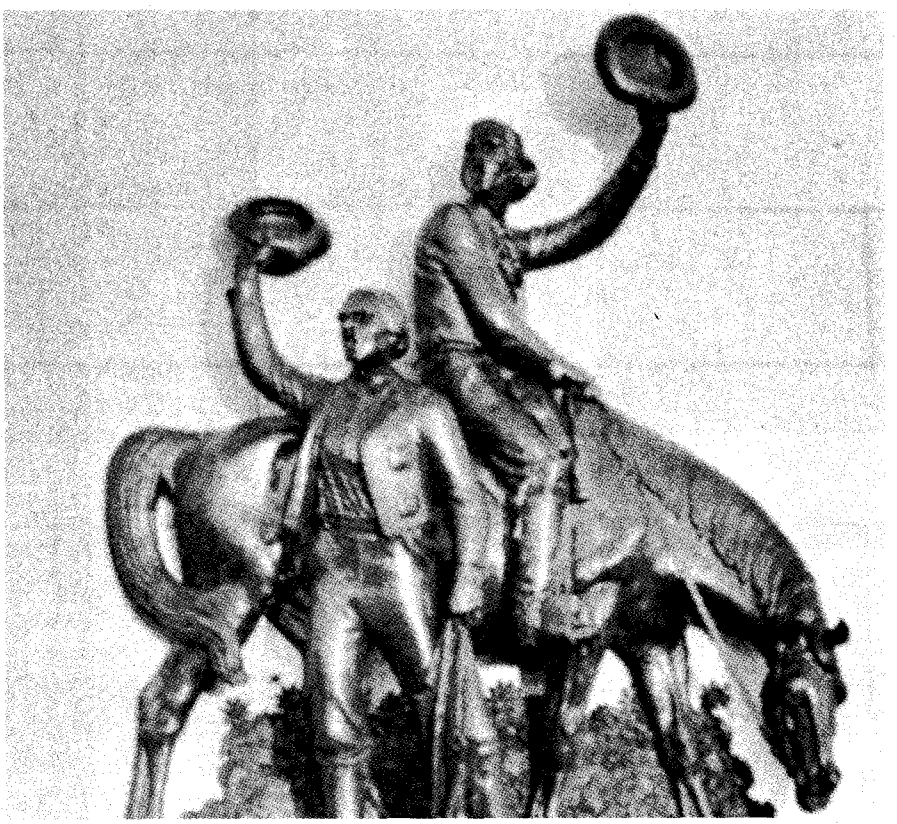
「でもホームティーチャーはそんなことしてくれません」と言うかも知れない。そういう人は、主の方式に対する信仰があるのだろうか。それともないのだろうか。なぜそれを試してみないのだろうか。

神権のことが深く理解されていない例をもう少し挙げてみよう。断食証会でよく起こることであるが、時折、だれか親戚や友人が病気になったとき長老を呼んで灌油の儀式を施してもらった、という経験談をすることがある。そして、その人が癒されると、私たちは神権の権能についての証があると言うのである。

誤解しないでいただきたい。私は、この神聖な素晴らしい儀式の効果を決して過小評価しているのではない。私たち自身が、また私たちの愛する人々が、生きているのと死んでしまったのでは大きな違いがあることも事実であるし、私もその驚くべき力を何度か目撃している。だがなぜ、あなた方の証をそれに限定するのだろうか。なぜ麻薬やアルコールのために霊的に死のうとしている息子を持つ父親のところへ長老たちを派遣して助けようとしないのであろうか。離婚や背罪のために死に瀕している家庭に祝福をもたらすために、なぜ神権者を派遣しないのであろうか。神よりも世を愛する人々になぜ神権による癒しを施さないのだろうか。どうして私たちは、楽しそうに「私はホームティーチングをすませました」などと言っていられるのだろうか。教会の家族の半数は、永遠の生命を「結び固められ」ていないため、救い主の降臨のときに「荒れ廃れ」てしまう状態にいるというのに。病人に按手を施す以上に、長老が行なわなければならないことがここに山ほどある。肉体的な病気が癒された人も、最終的にはまた病気になって死んで行く。だが福音に基づく援助の手を差し伸べたときには、その癒しは永遠のものとなり得るのである。

ここで神権の力が拡大された場合のことを考えてみるのも、妥当なことと思う。ここに集っている人々は、「歩みを早めよ」「大きなビジョンを持とう」という私たちの現在の合い言葉を知っているからである。私が初めて伝道部長になったとき、キンボール大管長が訪問して下さったが、私はそのとき、前任の伝道部長のあの精力的なペースをとても維持できそうもないと切々と訴えた。そのとき、大管長は次のようなことを答えられた。「いや、いや。もうそんな話は聞きたくないですね。あなたは過去のことで満足できな

1847年7月21日、ソルトレーク盆地に入って主にホザナを叫ぶオルソン・プラットとエラスタス・スノー。マホンライ・ヤング作の約束の地記念碑より。



いでしょう。教会のものはすべて前進しなければならないんです。それを知りませんでしたか。忘れないで下さい。あなたの指導の下で進歩しなければならないのです。」

私がなぜ神権の力についての証を持っているかおわかりであろう。私はその証を得るように言われた。そして今本当にその証を持っている。

主は言われた。「この神権は、すべての世に神の教会に連綿として在り。」（教義と聖約84：17） 他にはだれも地上でこの神権を持っている人はいない。「而してこの大神権は福音を授け、また王国の奥義の鍵……を保つものなり。」（教義と聖約84：19）

私たちの宣教師は毎日、神をさえ信じない人々に教えるため出かけている。しかし、彼らに授けられている「大いなる力」のために、また彼らの偉大な信仰により、聖霊は彼らの近くにいる。その影響力が感じられるとき、人々はそれに応え、悔い改め、従うのである。この長老たちが、そのような人々にバプテスマを施すとき、教えと儀式が一体となって、神権の力が力強く行使されるのである。神の子供たちは、生まれ変わって永遠の生命に入る。そしてこの宣教師の大部隊の数が、1万人から2万人に増えるとき、神権の力も著しく倍加されるのである。

定員会についても同じことが言えるはずである。私たちが「教職者」の数をひとりから50人に増強したのなら、神権の力も50倍に増すことができるはずである。そして彼らの起こす奇跡は肉体的な病気の人に対して起こした奇跡もはるかに及ばないほど増大するはずである。だれかが「私に福音を伝えてくれた人がいます」とか「私の全人生を変えてくれた人がいます」と言うのを聞いて大きな喜びを感じるときに、あなた方は偉大な奇跡に対して証を述べることができるのである。

執事、教師、祭司の神権の長は監督と、それぞれの定員会の会長である。教会において父親の神権の長は長老定員会の会長である。もちろん、場合によっては大祭司や七十人の会長であることもある。聖典によれば、すべて父親は、「この神権に来」（教義と聖約84：42）なければならない。そうでなければ、その家族は予言者マラキに予言されたとおりの裁きを受け、荒れ廃れて、父親に結ばれることもないのである。（教義と聖約2章参照）このために福音が回復されたのであり、これがあってこそ地球が主の降臨の折に荒れ廃れることはないのである。

メルケゼデク神権の会長は、通常長老定員会の会長であるが、彼は完全な福音が全教会員に与えられるように心を配る必要がある。これがこの神権の役割である。彼は、自らも、また現在ホームティーチャーと呼ばれている定員会の「常任教職者」を通じても、福音を授けるべきである。もしこの方法を信じず、また活用しないとしたら、神権の力についての真実の証を持つこともないし、成功することもできない。他方、この方法を用い、忠実である限り、成功は保証されるのである。

私は、あなた方が神権につける神の力を得たときにはじめて、人々はあなたによく応じるようになることを知っている。リグランド・リチャーズ長老は以前このように言った。「ワード部を分割することになって、一方のワード部に活発な会員を皆集め、もう一方のワード部に不活発な会員を皆集めたとする。そうしたら私に不活発な方のワード部をあずけていただきたい。1年以内に、あなたの競争相手になるワード部にしてみせよう。」 彼ならそれができるであろうし、しかも喜んでそれをするだろうと思う。

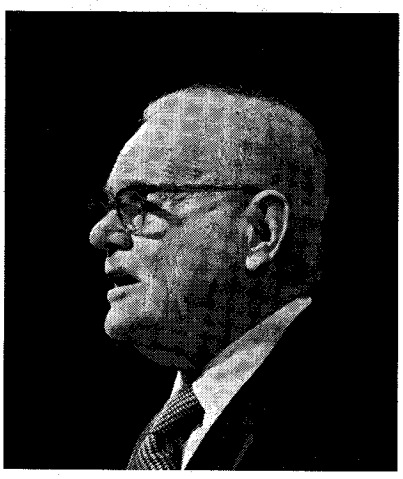
私はかつて、あるステーキ部長から彼のステーキ部の長老定員会の会長のひとりが大きな成功を収めたという話を聞いたことがある。「その会長の名前はハーシェル・ペダーソンといいます。恐らく名前を聞いたことはあると思います。ブリガム・ヤング大学にいた頃は、やせていて『ホネ』と呼ばれていました。」 私もあなた方の多くと同じように、ペダーソン兄弟の話は聞いたことがあった。実際のところ、彼は私のステーキ部で成長したのである。彼は、オリバー・カウドリ・ペダーソンの7人の息子のひとりである。彼らは全員伝道に出たが、ほとんどはデンマークに召された。私は彼が伝道から帰ってきたとき、その報告談を聞き、彼が結婚するとき、神殿推薦状に署名した。そのために、私はステーキ部長の話に興味を持ったのである。

ステーキ部長は話を続けた。「ペダーソン兄弟は、彼の定員会の会員に皆神殿推薦状を受ける資格を得させようと決心しました。現在では6人を除いて皆資格があります。」 しばらくして私が教会のホームティーチング委員会で働いていた頃、私たちはこの話を思い出し、ペダーソン兄弟にどのようにして彼の定員会をそんなに変えたのか報告を依頼した。彼はこう答えた。「私たちは3人を除いて皆活発にしました。その後私は解任されて、ステーキ部伝道部長になりました。でも私が解任されてから、彼らはその3人も活発にしました。

神権者が皆、主のみ業に心の底から携わったとき、どれほど大きな可能性が引き出せるか考えてみていただきたい。現在の私たちの成果を考えた場合私たちのエンジンはまだ始動したばかりの状態である。

伝道活動では、その視野を大幅に広げて、各ワード部がかつての全ステーキ部の分と同じ位の数の新会員を獲得しつつあるステーキ部がある。また神殿事業では、数々のステーキ部で、神権者の働きを通して、年間の儀式執行数の増加が近隣の平均的ステーキ部の儀式執行総数よりも多かったと報告している。神権に属けるすべての活動において、この神権を持つ人々の偉大な群れを動かすに十分な信仰を持っていたら、私たちはどれほど進歩できることであろうか。私はそれを思うとき、非常な心の励みを覚える。レーマンやレミュエルのようにはなりたくないものである。「私たちの定員会ではそれがどれほど大変なことか、彼にはわかっていないのだ」と言う人もいるだろう。ニーファイも理解してはいなかった。だが彼には証があった。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

誓約に従いて



誓約の本質を教えるならば、さらに多くの人が活発になり、教える人自らの生活も変わるであろう。

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

兄弟たちよ、私は教会員数の急速な増加に伴う様々な問題について考えてみた。その結果、現在最も急を要する仕事のひとつは、長老見込み会員と不活発な長老の改宗ではないかと考えている。教会にはこのような状態にある兄弟が何万人といる。残念ながら、このようになる人々の数は、毎年、改宗者の数をしのいでいる。

状況を分析した結果、必然的に次のような結論が出た。それは、現在行なわれている事柄に加えて、こうした人々の生活を変えるよう激励するために何か他のこともしなければならない、ということである。彼らを折々のレクリエーション活動に誘うよりも、もっとしなければならないことがある。彼らが真に必要としているのは、**改宗**である。

辞書によると、「改宗する」という動詞は、「ある信仰から別の信仰に転向すること」と定義され、「改宗」という名詞は「確信を伴う信仰の**変化**に従って起きる霊的かつ道徳的**変化**」と定義されている。また聖典の例を見ると、通常、「改宗した」ということは単にイエスとイエスの教えを頭の中で受け入れたということだけではない。イエスとイエスの福音を信ずる躍動的な信仰を持ったことであり、転換、すなわち人生の意味を理解する度合における、また関心、思い、行為などで神に忠誠を尽くそうとする度合における具体的な**変化**のことであるが、この転換を起こさせるような信仰を持ったことである。「改宗」が数段階を経て完成されるものとすれば、真の意味で改宗するためには、心から新しい人間にならなければまだ本物ではない。「再び生まれる」という言葉は、聖典の言葉である。

完全に改宗した人の心の中では、イエス・キリストの福音に反することをしたいという望みは全く姿を消し、代わりに神の愛が芽生える。神の戒めを守ろうという固い、自らを治める決意が生まれるのである。パウロは、ローマ人たちに、そのような人は新しいいのちに生きると説明している。

「それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。

すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが……死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。」(ローマ6：3，4)

ペテロの教えによれば、「新しいいのち」に生きることにより、人は「世にある欲のために滅びること」を免れ、また、自らの心のうちに信仰、徳、知識、節制、忍耐、信心、兄弟愛そして愛を成長させることにより、「神の性質に」あずかる者となるのである。(IIペテロ1：4－7参照)

「新しいいのち」に生きる人は、改宗した人である。一方、ペテロの説明によると「これらのものを備えていない者は、盲人であり、近視の者であり、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れている者である。」(IIペテロ1：9) そのような人は、たとえバプテスマを受けていたとしても、改宗したとは言えない。

モルモン経には、改宗によって起こった著しい変化の例が記されている。ベンジャミン王の最後の説教の時のことである。この説教が非常に力強いものであったため、ベンジャミンが話し終えたとき、群集は地に伏したほどであった。「かれらは、自分たちが肉の欲に支配されている有様をかえりみ、……高く叫んで言った『ああ憐みたまえ。キリストの血による身代りの贖罪の効力を及ぼして、われらが各々その罪を赦されて心を清められるようになしたまえ。われらは天地万物を造ってこの後人間に降臨したもう神の御子イエス・キリストを信じ奉る』と。」(モーサヤ4：2)

民がへりくだったのを見て、ベンジャミン王は次のように言葉を続けた。

「神を信ぜよ、神がましますことと、神が……万物を造りたもうたことと、天でも地でも全知全能であることとを信ぜよ。……

お前たちはその罪を悔い改めその罪を捨てて神の前にへりくだらなくては

ならないことを信じ、神がお前たちを救したもうように真心から祈れ。もしもこれらをみな信ずるならば謹んで実行せよ。」（モーサヤ４：９，10）

ベンジャミン王は、説教が終わったとき、民に彼の言った言葉を信じるかどうか尋ねた。

「すると民は……言った『まったく、われらは王の言われた言葉をみな信じ、またその言葉が確に真実であることを知っている。』」（モーサヤ５：２）

ではなぜ彼らはこのように強い確信を得たのであろうか。「それはわれらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを与えたもう……主の『みたま』に由るのである。

われらは残る生涯の中、神のみこころに従ってその命令をしたもう一切のことを守ると喜んで神と誓約をする。」（モーサヤ５：２，５）

不活発な人たちが皆、このような改宗の域に達したとしたら、本当に素晴らしいことではないだろうか。

長老定員会の会長である方々は、主のみ業のうち、この分野に大きな責任を負っているが、自分の定員会会員を改宗するために何をしているだろうか。



私はあなた方に、主が言われた次の手順について深く考え、熱意をもって実行するよう提案したいと思う。

「また長老の職を管理する長たる者の義務は、九十六人の長老を統轄しこれと共に会議を開きて誓約に従いてこれを教うべし。

この長は、『七十人』の長とは別の者たらざるべからず。而して、全世界に出で行きて巡回せざる者の長たる様に定めらる。」（教義と聖約 107：89，90）

誓約を教えていただきたい。誓約とは、２者またはそれ以上の者の間で取り交わされる、拘束力ある、厳粛な協定である。世の初めから、神の民は誓約の民であった。近代になって長老定員会の会長に与えられた、この「誓約に従いて（定員会会員を）教うべし」という戒めは、まだ戒められた通りには実行されていない。

福音の誓約を理解し、信じ、それに従って生活する人で、教会から遠ざかって不活発になる人はいない。私たちは主の新しくかつ永遠の誓約であるイエス・キリストの福音を理解し、霊界でそれを受け入れ、そのために天上の戦いに参加し、忠実な者には永遠の生命が与えられるという主の約束を実現するためこの地上にやって来た。このことを心から認める者は、この地上に来るときに交わした誓約を理解せざるを得ないのである。

私は、福音の「新しく且つ永遠の誓約」の意味を十分理解していないことが数多くの教会員が不活発になる根本的な原因である、と信じている。長老定員会の会長が「誓約に従い」定員会の不活発会員を「教え」、改宗するように努めるならば、彼らにこの地上に来るときに交わした誓約について教えるのに、それほど問題はないであろう。そのようなことを知らない人には、人生の目標もなければ、目的もない。そうなれば、その他の色々な誓約も意味が無くなってしまうのである。

私は最近旅行したとき、機内でこのことを裏付けるような経験をした。私は、全く初対面の人の隣に座ったので彼に仕事は何かと尋ねた。彼はそれに答えると今度は私の仕事は何かと尋ねてきた。こう尋ねられたため、私は彼に、誕生前も死後も生き続けることを信じるかどうか尋ねてみた。彼はわからないと言った。彼は、誕生前に存在していたり、墓を越えて生き続けるということを想像してできないことはないが、それが一体どういう形でどういう性質のものなのか、全く見当がつかないということであった。

それから私は彼に、福音の計画についてできるだけ簡略に話をし、また私たちが何者なのか、どこから来たのか、どこへ行くのか、なぜここにいるのか、ということについて説明した。

「それは素晴らしい」と彼は言った。「それを知っていれば、生活をするにもはりがあるし、人生にも目的があるというものですね。」

まことにその通りである。これこそ正に福音の意図するところである。私たちが永遠の生命という目標に到達するための手助けとなるものである。そして、この永遠の生命については福音の新しくかつ永遠の誓約の中で説明されているし、またこの誓約によってこそ可能となるのである。

まず、この地上で私たちが最初に交わす誓約は、バプテスマの誓約である。このバプテスマの誓約を説明するにあたって、私は次に述べるアルマの言葉ほど良い説明はないと思う。

「『ごらん、ここにモルモンの泉がある。……あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること、互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと、悲しむ者を思いやって共に悲しむこと、慰めが要る者を慰めること、また神に贖われ第一の復活にあずかる者の数に入って永遠の生命を得るよう、いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、死に至るまでも神の証し人になりたいと心から思っている。

従って、あなたたちがもしも真心からこれを望んでいるならば、あなたたちは主からますます豊にその「みたま」を賜るよう、主に仕えてその命令を守ると言う誓約を主に立てた証拠として、

主の御名によってバプテスマを受けるのに何のさしつかえがあろうか』と。

集った民はこの言葉を聞いて非常に喜び、その手を叩いて『これはわれわれが真心から願うことである』と言った。

このときアルマは……ヒーラムと言う一人の男をつれて行って水の中に立ち、高らかな声で祈って言った『主よ、汝のしもべが聖き心を以てこの働きを為し得るよう「みたま」を与えたまえ』と。

こう言って祈ると主の『みたま』がアルマの上に降った。そこでアルマは『ヒーラムよ、われは全能の神より権能を受けたるにより、汝がすでに肉体の死ぬまで全能の神に仕えたてまつると誓約をしたる証拠として汝にバプテスマを施す。ねがわくは、主の「みたま」が汝の上に降り、また全能の神が創世の前より備えたもうたるキリストの身代りの贖いによりて汝に永遠の生命をたまわらんことを』と言った。」(モーサヤ18：8－13)

主はこのバプテスマの誓約をこのように重要に考えておられるため、私たちに毎週この誓約を新たにするよう戒めを与えられたのであった。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」(教義と聖約59：9)

私たちは毎週聖餐にあずかるとき、心の中に聖餐の祈りの言葉を思い浮かべて、バプテスマの誓約を新たにする。

このバプテスマの誓約に加えて、私たち聖なる神権を持つ者は皆、もうひとつ特別な、神聖でかつ最も重要な誓約を結んでいる。これは「神権に属ける誓約」(教義と聖約84：39)である。この誓約は、教義と聖約第84章に次のように記録されている。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

主は言う、またすべてこの神権を受け入るる者は、われを受くるなり。

そは、わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。

また、われを受け入るる者はわが父を受くるなり。

而して、わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父の持てるすべては彼に与えらるべし。

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。

この故にこの神権を受くる者は、すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け、而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。

されど何人にまれ一度この誓約を受けて後これを破り、またことごとくこれに違背する者はこの世に於ても未来の世に於ても罪の赦しを受くることなかるべし。」(教義と聖約84：33－41)

私は以前、もしこの聖句が罰則規定なら、この誓約は受け入れなかった方が良かったのではなかろうか、と考えたことがある。この誓約を破った場合に自分に与えられる罰について考えたからである。だが、これに続く聖句に次のように書かれていた。「而して汝らが受けたるこの神権に来らざる者はすべて禍なるかな。」(教義と聖約84：42)

私にはただひとつのことしかないことがわかった。その誓約を受け入れ、尊ぶことである。これらの聖句から、私が神権を受けながら、その召しを全力を尽くして遂行しなければ、永遠の生命を受ける資格を失うことは、すでに完全明白である。また、聖なる神権を受け入れなくても、同様にその資格を失うことであろう。安全な道は、ただひとつしかない。それは、誓約を受け入れて、その誓約の召しを全力を尽くして遂行することである。主が次のように言葉を締めくくられたのは、こうした意味があったからだと思う。

「われ今汝らに一つの誡命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは、汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」(教義と聖約84：43，44)

では、4番目の誓約に移ろう。これまで3つの誓約について考えてきた。福音の「新しく且つ永遠の誓約」、バプテスマの誓約、そして「神権に属ける誓約」の3つである。では、これから兄弟たちにお話しする第4の、そして恐らくは数々の誓約の中でも極致とも言える誓約は、日の光栄の結婚の新しくかつ永遠の誓約である。

私が今申し上げた一連の神聖な誓約は、その意味が極めて深い。非常に「厳粛」な誓約であるため、主は、「(私たちの)胸にしかと銘ぜよ。(私たちの)こころに……銘記すべし」(教義と聖約43：34)と戒めておられる。

誓約に伴う義務は、その報いを受けたいと望む者が必ず守らなければならないものである。私たち一人一人に責任がある。私たちが交わした誓約を、私たち自身どのように守っていくか、その方法に責任があるのである。また同時に、私たちの管理の下にいる人々が誓約を破った場合、それが私たちがよく教えなかった結果起こったことだとすれば、それについても責任があるのである。

主もそう言っておられるし、私も繰り返して言おう。「長老の職を管理する長たる者の義務は、九十六人の長老を統轄しこれと共に会議を開きて誓約に従いてこれを教うべし。」

さらに主は、神権者の義務に関する偉大な啓示を閉じるにあたって、次のように言われた。「この故に、今や神権者皆各々その義務を覚れ。また己が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。

およそ、怠惰なる者はその地位に居るに値せず、またその義務を覚らず信任さるるに足る行いを示さざる者は、その地位にある値なき者なり。」(教義と聖約107：89，99，100)

神の助けがあって、私たちが誓約に従って生活することができるよう、また、主が私たちの責任の下におき、私たちに教えるよう命じられた人々を私たちが正しく教えることができるよう、贖い主イエス・キリストのみ名によって祈るものである。アーメン。

「彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。」

名声を求めるあまり、標準を下げないようにすることが大切である。

第一副管長
N・エルドン・タナー



壇上に座って、この歴史的に名高いタバナクルに集う神権者の偉大な群れをながめながら、私はアセンブリーホール、ソルトパレス、プロボのマリオットセンター、カナダや合衆国全域の会場、その他世界各地でこの大会を視聴している何千何万という男性の姿を心に思い浮かべていた。私は非常に心を動かされ、圧倒される思いであった。それぞれの会場に集い、予言者の声に耳を傾け、主のみ言葉を聞いて自らの生活を建て直し、さらに良き業と生活を始めようという、偉大な権威と権能の力を感じたからである。

これは、これまで集った男性の集会で最大のものである。あなた方の前に立つことは、極めて大きな特権であり、同時にまた重い責任でもある。私は今宵あなた方の前で話す間、主のみたまが引き続き留まって下さるよう、心から祈っている。

まず第一に、私は、教会の素晴らしい若人に心から感謝の意を表したいと思う。あなた方は特に選ばれて神の神権を持つ者となり、あらゆる国々にあって指導者となっている。また、この偉大な目的のために自らの備えをなして下さっていることにも感謝している。自分が何者であるかを認識し、また自分の責任が何であるかを認識し、さらに、伝道にいくにふさわしい生活をしている若人は、やがて教会にあっても、地域社会にあっても、指導者となるであろう。私は今日の社会において青年男女が世の悪に対抗し、神権を尊び、イエス・キリストの教会の会員であることの意味を理解することがいかに困難であるか、よく知っている。

問題を抱えている人もいないではない。私はそのような人々に、悔い改めて義の道を歩み、罪より離れ、忠実な者に与えられる祝福のために自ら備えをなすよう、主のみ名により訴えるものである。あなた方は選ばれて、今日この時代に、この世に送られたのである。私たちの持つ神権は非常に重要であり、私たちの仕事は極めて大切である。福音の教えに従って生活する以上に、大きな喜びと成功をもたらすものはない。模範になっていただきたい。良い影響を及ぼしていただきたい。主から与えられるいかなる召しにでも応じられるよう常に備えをなし、ふさわしい生活をしていただきたい。

私たちは皆、主に選ばれた僕として、主のみ業のために予任されてきた。主は私たちを、主のみ名によって行動する神権と権能を受けるにふさわしい者とみなして下さったのである。周囲の人々が、あなた方の指導を仰ごうとして常にあなた方に注目しているということを、絶えず心に留めていただきたい。あなた方は、良きにつけ悪しきにつけ、人々の生活に影響を及ぼしており、その影響は次の世代にも伝えられるのである。

私たちがいかに大きな責任を負っているか、次のような認識に立てば一層力強く説明できるであろうし、またはっきりと理解していただけると思う。世界には、およそ99万9千人にひとりの割合でしか、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は存在しない。また、およそ333人のキリスト教徒に対してひとりの末日聖徒という割合でしかない。

現在、世界中の神権者の数は、人類の歴史が始まって以来最高である。かつてない勢力と影響力を持ち、また昔からその重要性は変わらないが、以前にも増して大きな問題とチャレンジに相対しているのである。世界は、その力と強さと影響力とを必要としている。様々な問題に対応できる指導を必要としており、また世にはびこる悪によって引き起こされる問題に打つ勝つ力を必要としている。

主は、正にその目的のために、この末日に主の教会を設立された。教会の将来の進歩は、また事実、世界の将来は、私たちが神権の職をいかに全力を尽くして遂行するかにかかっている。執事、教師、祭司、そしてメルケゼデク神権者は皆、一人一人が救い主と力をひとつにするという責任と特権が与えられている。私たちは主のみ手の中にあってその道具となり、さらに、主のみ業と栄光とを達成するため、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすために主を助けて働くのである。私たちのほかには、これと同じ権能や、このように特別な召しが与えられてい

る人はいない。

もし私たち一人一人が神権を尊び、その召しを全力を尽くして遂行し、さらにサタンの攻撃に対抗するために日々あらゆる面でその影響力を駆使しようとするならば、私たちの及ぼす影響の大きさは想像に難く、測り知れないものがある。私たちの中には、神権を受けることを当然のように考えている人があまりにも多いように思われる。主の望んでおられることをまだまだ完全に理解してはいない。必要なときには変人呼ばわりされても正しいことのために立つ、というほどの確信と勇気と不屈の精神が、まだないのである。

学校のグラウンドで遊んでいる子供でも良い影響を与えることはできる。フットボールのチームでも、大学の構内でも、職場の同僚の間でも、福音に従った生活をし、神権を尊び、正義の立場を取ることにより、無言のうちにも良い影響を与えることができるのである。正しい行ないをしているあなた方を尊敬してはいるものの、同じ信仰を持ちながらあなた方を批判したり、嘲笑したりする人も大勢いることであろう。だが、救い主御自身も、その確信を翻そうとしなかったために苦しめられ、馬鹿にされ、つばを吐きかけられ、遂には十字架にかけられたのである。このことを忘れないでいただきたい。主が弱気になって、「一体何のためにこんなことを」と言ってその使命を放棄したとしたら、一体どんなことが起きたか考えてみたことがあるだろうか。私たちは義務を放棄しようとしてはいないだろうか。世の妨害や邪悪に対抗して雄々しい僕になろうとしているだろうか。勇気を出して、確信の上に固く立ち、真に心からキリストに従う者のひとりに数えられるよう努めようではないか。

先日、ある人が私にこのようなことを言った。「自分が何をすればよいのか知っていて、その上一見福音の証を持っていそうでいながら、福音に従った生活をしようとせず、世の反対に抗して固く立つ勇気や強さを持ち合わせていない人々がいます。これはなぜでしょうか。」私は次の様に答えた。「人がその教えや信仰に反することに同調したり、実際に行なったりするのには、それ相当の理由があるのではないかと思います。」それから私は聖典の中から数ヵ所聖句を引用して話した。

「見よ、召さるる者は多けれども選ばるる者は少し。選ばるることなきは、これそもそも何の故ぞ。

そは、人々の心甚しくこの世に属けるものの上にあり、唯々人間の誉を得ることをのみ望み、次の如き1つの戒めを知らざるによる。

曰く、神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるもの……なり、と。」（教義と聖約 121：34－36）

次に「しかし、このことは知っておかねばならない。終りの時には、苦難の時代が来る。

その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者。

無情な者、融和しない者、そしる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者。

裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快楽を愛する者。

信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。」（IIテモテ3：1－5）

そして、最後に次の聖句を引用した。

「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。

彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。」（ヨハネ12：42，43）

今宵、私がお話したいと思うのは、この最後の聖句についてである。

この聖句を聞いていて、自分の態度に思い当たるところがあって、心の中につらい思いを抱いている人がどれほど多くいることだろうか。もしそうならば、今宵を期して、自分が何者なのかを忘れてしまったり、世の名声を得ようと思ったりすることを止めて、生活態度を変え、悔い改め、神のほまれと祝福にあずかることができるように、進んで努力しようではないか。主の僕である私たちにとって、自分が何者であるか常に心に留め、それに従って行動するということは、何と大切なことであろうか。

私が先程申し上げたように、神権者が皆天よりの召しを全力を尽くして遂行したら、私たちは世にあってどれほど良い影響を与えられることであろうか。また神権者が常に義を選んだとすれば、人は皆どれほど幸福になり、成功感を味わうことであろうか。それは想像に難く、測り知れないほどである。自分が正しいと知っていることをせず、世の名声ばかり望む人がいるが、そのような人々を見るのはいかにも悲しい限りである。そういう意味で、私は、ある立派な教会員であった人の話を忘れることができない。彼は、州議会議員に選ばれた後、仲間のだれからも良く見られたいと思うようになった。彼は、人に名前を知られたいがために、自分の標準を下げ、ある会合で1杯、また他の会合で1杯と酒を飲んでしまった。そのようなことが何度も続き、とうとう彼は、昼食のときでも夕食のときでも、仲間と一緒に酒を飲むようになった。そしてさらに、これは彼の意図しなかったことであろうが、その大望に反して、彼はアルコール中毒になってしまったのである。その結果、選挙民の支持を失い、彼を愛し、彼のために悲しんでくれる友人や家族の尊敬を失い、やがてアルコール中毒患者として早死にしてしまった。何と悲しい事例であろうか。これも皆、彼が神のほまれよりも人のほまれを好んだからである。

だが、事例はこれだけにとどまらない。私たちは、下院議員や上院議員がその地位と自尊心と、他人からの尊敬を失った例を知っている。それは彼らが名声を欲し、誘惑に抵抗する強さを持ち合わせていなかったために起きたことなのである。私たちには主の約束が与えられている。まず神の国と神の義とを求めるならば、これらのものはすべて添えて与えられるという約束で

ある。むろん、これらのものすべてとは、私たちのためになるもののことである。

人々は、私たちが私たち自身の標準に従って生活するよう期待しているし、またそのように生活するときに一層尊敬の念を抱くものである。もちろん、私たちを他の道に進ませようとすることもあるかもしれないが、人々には私たちへの期待感が常にあることを絶えず心に留めておこうではないか。

私はあなた方に証を述べたいと思う。私はこれまでの政界、実業界での経験を通じて、そして個人生活の面でも、福音の教えに従って生活しようとして不都合なことに出会ったことがなかった。また決して妨害を受けたこともなかった。むしろその逆で、主から尊敬と祝福を受けたと感じている。また、いつでも、強さと導きとを求めて主に呼びかけることが容易であったし、事実そのようにしてしばしば強さと導きとを得た。

私の申し上げたいことは、まず神の国と神の義とを求める人すべてに対して、主はその約束を果たして下さるということである。

最も大切なことは、四六時中警戒を怠らず、決して、人気を集め、人のほまれを得るという目的で、自分の標準を捨ててはならないということである。教会幹部のひとりが、祭司のときに経験した出来事を話してくれたことがある。今、仮に彼のことをジョージと呼んでおこう。あるとき、彼の友人が、ガールフレンドをパーティー会場から彼女の家へ送って行くことになった。ところが彼女の妹も一緒だったため、ジョージは彼から妹を送ってくれるよう頼まれた。ジョージは引き受けた。しかし、家へ着いて間もなく、居間に一緒に座っていると、その女の子が突然立ち上がって電灯を消すと、戻って来て彼のひざの上に座り、彼を誘惑し始めた。彼は、拒めば自分の人気が落ち、侮辱されることもわかっていた。しかし彼はそれを拒むと立ち上がって、家へ帰ってしまった。彼はこの話をしながら、多くの人々は自分のことをいくじなしだと思うだろう、でも自分はエジプトに売られたヨセフの話を非常によく覚えていた、と語った。

「ある日ヨセフが務をするために家にはいった時、家の者がひとりもそこにいなかったので、

彼女（ポテパルの妻）はヨセフの着物を捕えて、『わたしと寝なさい』と言った。ヨセフは着物を彼女の手に残して外にのがれ出た。」（創世39：11，12）

このためにヨセフがどれほどの苦しみを受けたか、また主からどれほどの祝福を得たか、私たちはよく知っている。

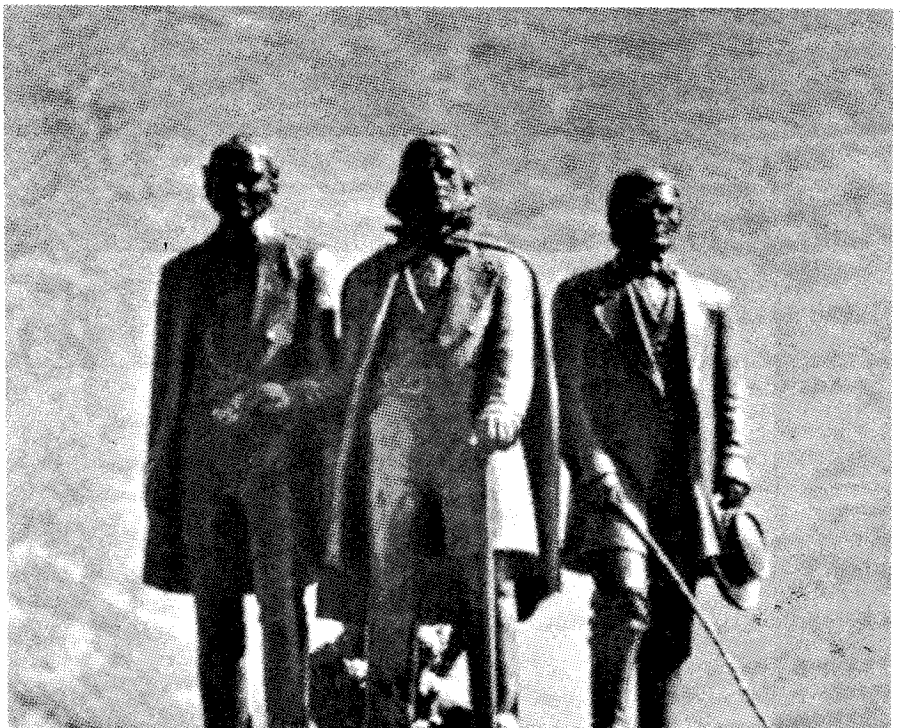
ジョージは続けて次のように言った。「私が彼女と一緒にいたら、どんなことが起きたことか。考えただけでもぞっとします。そんなことをしていたら、私は主の僕としてここにいることは決してなかっただろうとよく思います。」

あるとき、この話をひとりの青年に話したことがあるが、彼は「相当な根性がないと、そういった行動がとれませんね。」と答えた。私はそれ以来、同じような状況のもとで正しい決断を下すためには、確かに根性と気骨と意志の力がいるということをよく考えるようになった。誘惑に負けるということは、すなわち弱いということである。どんなに信仰の強い人でも、絶えず警戒する必要があるのである。

このように、私たちの決断や行為によって自分の生涯が左右されることがたびたびある。青年の中にも、大人の中にも、このような試練にあっている人が多い。またその他にも様々な種類の誘惑があって、その忠実さや性格の強さが本当に試されている。自分が何者なのかを絶えず心に留め、神が見守っていて下さることを覚えていれば、そのような誘惑を避けることも、それに抵抗することも可能である。火遊びをするときには必ずやけどの危険がつきまとうことを、いつも心に留めておいていただきたい。

家族のために生計を維持し、また立派な市民として地域社会の活動に参加するのは大切なことである。だがそのために、神に召され選ばれた子供としての、また神権者としての義務や責任を忘れたり、無視したりするほどこの世のことに巻き込まれるようであってはならない。私たちは絶えず警戒していなければ、まっすぐで狭い道からしだいにはずれ、やがて、完全に道に迷って、自分にも家族にもそして主にも大きな失望を与えるようになり、自分の意志や目的や希望とは全く異なった

ヒーバー・C・キンボール、大管長ブリガム・ヤング、ウイルフォード・ウッドラフ、初めてグレートソルトレークの盆地を眺望する。マホンライ・ヤング作の約束の地記念碑より。



ものになってしまうであろう。

私はこの種の話をよく耳にする。人は自分が何者かを忘れて、仲間の中で人気者となり、彼らのほまれを得ることを望むのである。運動選手の中には、成功したいという気持やほまれを得たいという気持で無我夢中になってしまい、神より与えられた務めや、神から認められることの大切さを忘れてしまう人がよく見受けられる。このような人は結局、方向を見失ってしまうのである。同じことが、政治家にも、慈善事業団体の会員にも、専門職に携わる人にも、実業家にも言える。ほまれや名声に対するこの願望は、少なからず人の行動を左右する。そしてその誘惑に屈服するとき、自分ではほんのおつきあいだと思っても、実際には自分の性格までもねじ曲げてしまうのである。

先日、この問題について話し合っているとき、私にこんなことを言った人がいる。それは、神のほまれよりも人のほまれをいつも愛する人は、だんだんとサタンの部下らしくなっていく、ということである。このサタンは、前世にいたとき、全人類を救おうと申し出た者である。だがひとつの条件があった。名誉と栄光を、神にではなく、自分自身に帰するよう求めたのである。サタンは、結果よりも、ほまれの方に関心があった。栄光とほまれこそが目的なのであった。私の友人は、さらに話を続けた。もし人が神を喜ばせることよりも、人を喜ばせることに関心を持ち続けていたら、その人は結局、サタンと同じような苦汁をなめることになるであろう。人のほまれを求める者は、他人の助けとはならず、傷つける破目に陥る場合が多いからである。それと言うのも、私利私欲に走って一時的なことしかせず、何ら永続性のあること、有益なことをしないからである、と言うのである。

神が私たちに向けられる愛と思いやりは永続するのに対し、人のほまれはつかの間のものであって必ず失意を招くことを私たちは知っている。私たちが自らふさわしいことを知って神より賞賛の言葉をいただくとき、どれほど大きな満足感を味わうことであろうか。

キリストの教えを信ずる者にとって、全く言語道断と言えることがある。それは、高い地位にある人々が、声を大にして不道徳を勧め唱道している人々のほまれを得ようとして、こうした邪悪にさして反対することもなく、キリストの教えに水をさしている、ということである。キリストは、十戒の中で明確に次のように言っておられる。「あなたは姦淫してはならない。」（出エジプト20：14）

さらにコリント人への第一の手紙にも、次のように書かれている。

「それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者……は、いずれも神の国をつぐことはないのである。」（Ⅰコリント6：9，10）

私たちはまた主のみこころに反するような法案がすでに立法化され、現に立法化されつつあることを知っている。それは、最も悪らつで寛大な法律である。兄弟たちよ、主は私たち神権者が義に固く立ち、全勢力を用いてそのような行為に反対し、止めさせ、さらに、主イエス・キリストの教えに従って生活することを全教会員に勧めるよう望んでおられる。

ここで、ニール・マックスウェル長老の文を引用しよう。

「指導者の中には、進んで厳しいことを言う人がいる。だがその内容は真実で、語る必要のあることである。そのように厳しいことを言う指導者は、本当に人々を愛し、人々のことを思いやっている人なのである。自分に従う人からほまれとかっさいを得るために、人を安全な道から誘い出して、2度と浮かび上がれない泥沼に追い込むような指導者ほど冷酷な指導者はいない。まっすぐで狭い道は、正にその通り、まっすぐで狭いのである。それは、険しい上り坂の旅である。地獄に至る道は、道幅も広く、ゆったりとした下り坂である。そして、その道を歩いている人たちは自分が下っていることになかなか気が付かない。人のほまれに気が散って下り坂に気が付かないこともある。そのために警戒信号も見落してしまう。金の小牛をとるか、十戒をとるかの選択は、今でも続いているのである。」「ある考え」と題してニール・A・マックスウェル長老からタナー副管長宛に送られた1975年8月12日付、未出版書簡）

全くもってその通りである。パウロがテモテにあてた警告も、今なお同じように通用するであろう。

「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。

御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。

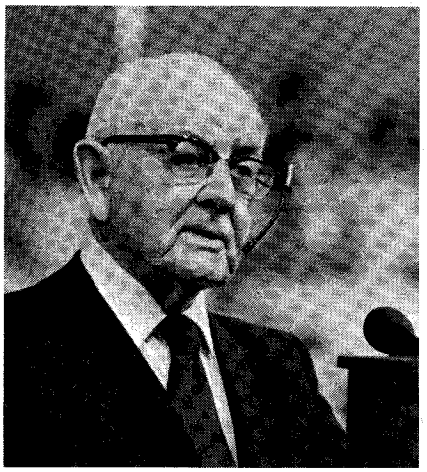
人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。」（Ⅱテモテ4：1－4）

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であるということは、何と幸運なことであろうか。この教会には、教会の四大標準聖典、すなわち、聖書、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠に記された完全な福音がある。また、神の予言者がいて、神はこの末日に私たちを導くために、この予言者を通して語っておられる。

使徒行伝から読もう。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。」（使徒4：12）

ヨシュアが言ったように、私たちも勇気と力強さと理解力と熱意と決断力とを持とうではないか。「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」（ヨシュア24：15）

心からへりくだって、イエス・キリストのみ名によりお祈り申し上げる。アーメン。



神権者の特権

すべての神権者は信仰箇条を覚え、その教えに従って生活しよう。

大管長
スペンサー・W・キンボール

兄弟の皆さん、私たちが22万5,000人の男性からなる大会衆の一員であるということは、考えただけでも非常に胸の高なるのを覚える。この中には、膚の色の異なる方も、顔付きの違う方もおられる。しかし、皆、神権者であることに変わりはない。私たちは、神権者を皆愛している。また今宵、この偉大な大会に共に集まって下さったことを感謝している。

今宵、この会場で数々の大切な教えを聴いてきた。私はここで多少の息抜きに、ひとつの短い話をしたい。ここに集まっている若い諸君は、神権者になる前に、皆、信仰箇条を勉強したことと思う。皆さんは、まだ信仰箇条を覚えているだろうか。しかも、一語一句正確に覚えているだろうか。もし信仰箇条を完全に覚えているなら、家へ帰って、お父さんの前でそれを暗唱してみていただきたい。

数年前のことである。初等協会に出席しているひとりの男の子が、カリフォルニアへ行く列車に乗っていた。その子はひとりきりで窓際に座り、電柱が飛び去って行くのをながめていた。通路をはさんで、やはりカリフォルニアへ向かうひとりの紳士が座っていた。その紳士は、小さな男の子が友人や親戚の連れもなく、ただひとりで旅行しているのに気づいた。男の子は小さいながら、服装はきちんとしていたし、行儀もよかった。この紳士は、その少年にとても興味を覚えた。

しばらくすると、紳士は通路を横切ってこの少年の隣りの席に座り、声をかけた。

「こんにちは、どこまで行くの。」

「ロサンゼルスです。」

「親戚でもいるのかね。」

「はい、ロサンゼルスに。今ひとりで旅行していますが、おじいさんとおばあさんの所へ行くんです。おじいさんとおばあさんが駅まで来てくれます。学校が休みなので、少しの間そこにいるつもりです。」

こうして話が進んで来た。「君はどこから来たの。どこに住んでるの。」

「ユタ州のソルトレーク・シティーです。」

「おお、それじゃ、君はモルモンだね。」

「はい、そうです。」少年は誇らしげに答えた。

「それはおもしろい。私は、モルモンのことや、モルモンの信仰のことについてわからないことがあるんだよ。モルモンの造った美しい町を訪れたこともある。建物は美しかったし、通りには街路樹が植わっていたし、家並もきれいだった。美しいバラや花の咲き誇った花壇も見事だった。でも、どうしてモルモンがあんなに素晴らしい人たちなのか、まだ調べてみたことがないんだよ。モルモンがどんなことを信じているのか、知りたいと思っているんだがね。」

「では、ぼくたちが信じていることを御説明します。『われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。』（信仰箇条第1条）これが第1です。」

この実業家は、これを聞いていささか驚いたが、熱心に耳を傾けていた。少年は続けた。「『われらは、人は皆各各其身にてなしたる罪に対して罰を受け、アダムの咎に対して罰を受けざることを信ず。』（信仰箇条第2条）これが第2です。」

今では旅の道連れとなった紳士は、心の中で思った。「こんな小さな男の子が、これほど大切なことを知っているなんて、これは並のことではないぞ。」

少年はさらに続けた。「『われらは、キリストの贖罪により、すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。』（信仰箇条第3条）これが第3です。」紳士は、この小さな男の子の言葉にすっかり驚いてしまった。まだスカウトの年齢にもなっていない少年なのだ。だが、その少年は一向に構わず、信仰箇条第4条を続けて言った。「『われらは、福音の第一原則と儀式とは、第1、主イエス・キリストを信ずる信仰、第2、悔改め、第3、罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ、第4、聖霊の賜を授かるための按手礼、なることを信ず。』これが第4です。」

「全く素晴らしい。君が、君の教会の教えをあんまりよく知っているので、びっくりしたよ。なかなか賢いね。」

すべり出しに成功したジョニーは、激励を受けてさらに続けた。「『われらは、福音を宣べ、且つ、その儀式を執り行うためには、啓示と権威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。』（信仰箇条第5条）これが第5です。」

「それは、道理にかなった教義だね。人がどういうふうに神から召されるのか、知りたくなってきたよ。人がどのように召しを受け、按手されるのかはよくわかったが、でも、どういう人が福音を宣べたり、その儀式を執り行なったりする権能を持つのかね。」

ふたりは、召しや支持や按手のことについて話した。そして、少年が言った。「もっとお知りになりたいですか。」

紳士は、年端の行かない子供が、教会の教えをこれほどまでに詳しく知っているとは並大抵のことではないと思い、言った。「そうだね、続けてくれるかい。」

そこでジョニーは暗唱を続けた。「『われらは、教会には、初期の教会に在りたると同一の組織、すなわち使徒、予言者、監督、教師、祝福師等のあるべきことを信ず。』（信仰箇条第6条）これが第6です。」

それから、このことに関連して話が続いた。「そうすると、君の教会には、ヤコブやヨハネやペテロやパウロのような使徒とか、モーゼやアブラハムやイサクやダニエルのような予言者がいるというんだね。しかも、祝福師までいるんだね。」

少年は、その質問にすぐに答えた。「はい、祝福師もいます。聖書には、祝福師のことが伝道者となっています。祝福師は教会のステーキ部のある所で召されます。そして、祝福の欲しい教会員には皆、神の霊感によって、祝福師の祝福というのを授けるんです。ぼくも自分の祝福師の祝福を受けました。そして、祝福文をたびたび読んでいます。また、ぼくたちの教会には、使徒が12人います。昔の使徒と全く同じ召しと権能を持っている使徒です。」

紳士は、次のような質問で問い返してきた。「君たちは、異言を語るかね。啓示や予言を信じているのかね。」

すると少年は、目を輝かせて答えた。「『われらは、異言を語る力、予言する力、啓示、示現を受くる力、病を医す力、異言を釈く力等の賜あることを信ず。』（信仰箇条第7条）これがぼくたちの信じている7番目のことです。」

紳士は息が止まる思いだった。「そうすると君たちは聖書を信じているんだね。」

少年はまた答えた。「その通りです。『われらは、正確に翻訳されたる限り、聖書は神の御言葉なりと信ず。またモルモン経も神の御言葉なりと信ず。』（信仰箇条第8条）これが第8番目のことです。」

紳士は、私たちが聖典も啓示も信じていることがわかった。少年はさらに暗唱を続けた。「われらは、すべて神のこれまでに啓示したまいしこと、すべて今啓示したもうことを信じ、なお今より後、神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。」（信仰箇条第9条）「われらは、イスラエル人は、文字通りに四方より集合し、その十支族の元に立ちかえることを信ず。われらは、シオンはこの（アメリカ）大陸に建てられ、キリストは御自ら地上に王となりて治めたまい、地球は元にあらたまりて楽園の栄えを受くることを信ず。」（信仰箇条第10条）

紳士は、一心に耳を傾けていた。彼は、通路の反対側の自分の席に戻ろうなどとは、みじんも思わなかった。ジョニーはさらに続けた。「われらは、自らの良心に従い、全能なる神を礼拝する特権ありと主張す。また、われらは、すべての人々にこの特権を許し、何所なりとも、如何様なりとも、または何なりともこれを礼拝することを妨げず。」（信仰箇条第11条）。「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」（信仰箇条第12条）

そして、遂に暗唱が最後まで来た。少年は信仰箇条の第13条を暗唱し始めた。「われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高徳なるべきこと、およびすべての人に善を行うべきを信ず。まことにパウロの訓戒に従うというを得べく、われらはすべてのことを信じ、すべてのことを望む。すでに多くのことを堪え忍びたれば、あらゆることを堪え忍び得んことを望む。　もし何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり。」

少年は、信仰箇条を全部暗唱し終わって、ホッとした様子だった。紳士は、はた目にもわかるほどかなり興奮していた。教会のプログラムの概略を話してくれたこの少年の能力に感銘しただけでなく、教会の教義の見事なまでの完璧さに敬服したのであった。

紳士は言った。「ロサンゼルスに2日間ほどいて用事をすませたら、ニューヨークへ帰るつもりでいたんだよ。でも、会社へ電話して、1日、2日遅らせることにしよう。そして帰りにソルトレーク・シティーに立ち寄って、教会の訪問者センターで、君の話してくれたことについてもっと詳しく聞いてみることにするよ。」

あなた方のうち、何人が信仰箇条を覚えておいでだろうか。若い人たちだけでなく、大人の方にも尋ねたい。信仰箇条を覚えておいでだろうか。今の話と一緒に暗唱できただろうか。信仰箇条を覚えていれば、いつでも説教の準備ができていることになる。しかも、信仰箇条は、一番の基礎となるものではないだろうか。子供たちが皆信仰箇条を学び、それを完全に覚えたら、どれほど素晴らしいことだろうか。一語一句間違わずに言えたら、本当に素晴らしいと思う。

私がどのようにしてそれを覚えたか、お話したいと思う。以前にもお話したと思うが、私は乳しぼりを日課としていた。その頃の私は指2本でしかタイプライターを打てなかった。そんな手つきで、私は小さなカードに信仰箇条を全部タイプしたものであった。そして、さくの中で腰かけに座って乳しぼりをしている間中、私はそのカードを傍らにおいて、何度も何度も復唱したのである。ともかくも私は、そのようなことを何度も繰り返して、遂に信仰箇条を全部言えるようになった。しか

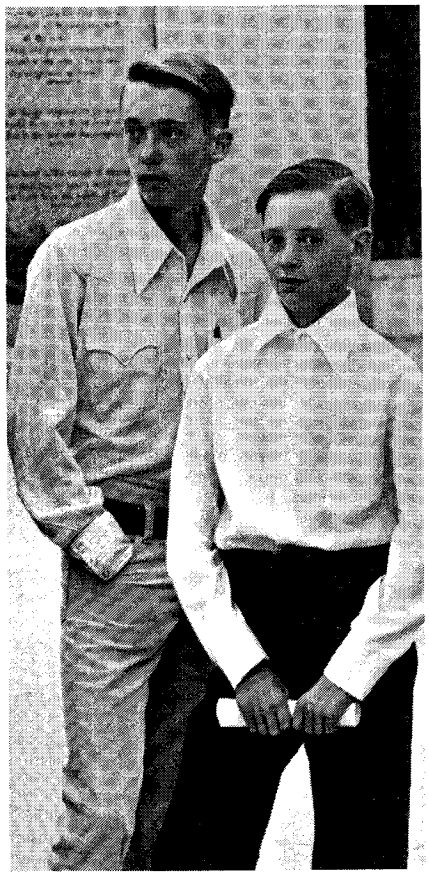
も一語一句間違わずに言えるようになったのである。このことは私にとって大変価値があったと思う。若人諸君も、私と同じように覚えていただけないだろうか。

さて次に、もう少し年長の人には、聖典を引用してお話したいと思う。パウロの書いたヘブル書から聖句を読みたい。

「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに、語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。

御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。

御子は、その受け継がれた名が御使たちの名にまさっているので、彼らよりもすぐれた者となられた。」（ヘブル1：1—4）



この聖句を読むと、教義と聖約132章の聖句を思い出す。この章の中で、主は、ロムニー副管長がお話し下さったように、この新しくかつ永遠の誓約を受け入れ、また様々な誓約に従って生活した人たちは皆天使よりすぐれた者となると約束しておられる。このような人たちは、天の門を守護している諸天使諸神の前を通り過ぎて、進んでいくのである。

「いったい、神は御使いたちのだれに対して、『あなたこそは私の子。きょう、わたしはあなたを生んだ』と言い、さらにまた、『わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう』と言われたことがあるか。」（ヘブル1：5）

諸天は天使たちで満ち充ちているかもしれないが、天使たちは、神の御子と同じような存在ではない。また、あなた方とも同じ存在でないと申し上げたい。あなた方は、約束された祝福によって、主の王国で昇栄にあずかることのできるというこの高い召しにふさわしい人々なのだからである。

「さらにまた、神は、その長子を世界に導き入れるに当って、『神の御使いたちはことごとく、彼を拝すべきである』と言われた。」（ヘブル1：6）

この御方が神の御子である。私たちが、心を尽くし、思いを尽くし、勢力を尽くし、体力を尽くして礼拝しているイエス・キリストである。イエス・キリストこそ、神の御子なのである。

「こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。」（ヘブル2：1）　おし流されてしまう。この偉大な神権プログラムを進めて行くとき、私たちが決して、この栄光あふれる事柄をおし流してしまうことのないよう、切に望んでいる。

「わたしたちは、こんなに尊い救いをなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救いは、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ(たのである。)」(ヘブル2：3)

ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロ、その他の兄弟たちから私たちは、この尊い救いの計画を聞いた。そしてこれらの人々は、その計画を主御自身から聞いていたのである。

「なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救いの君を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであったからである。」（ヘブル2：10）

兄弟たち。今宵、この話を聴いておられる22万5,000人の兄弟たち。私はあなた方がすべて神々になり得ると考えている。宇宙には、まだまだ多くの空間がある。主がその方法を知っておられることは、すでに明らかである。主は、私たち22万5,000人全員のために諸々の世界を造って下さることであろう。恐らく私たちも、その業を助けることになるに違いない。

様々な可能性について、また栄光ある未来について考えていただきたい。たった今生まれたばかりの子供でも、この栄光あふれる計画を受け継ぐことができるのである。その子供も成長し、やがて美しい女性に出会う。ふたりは聖なる神殿で結婚し、主のすべての戒めを守って生活し、自らを清く保つ。ふたりは神の子となり、偉大な計画を推し進める。天使の前を通り過ぎ、また天を守護している諸天使諸神の前を通り過ぎる。こうしてふたりは昇栄に達するのである。

教義と聖約132章に、アブラハムもこのようにして与えられた戒めをすべて受け入れたと書かれているのを覚えておられることと思う。アブラハムはすでにその王座についたと書かれている。彼はすでに昇栄に達したのである。もちろん、彼が死んでから、すでに数千年を経ている。

再びパウロの言葉を引用しよう。「このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼ（すためである。）」（ヘブル2：14）これは、死の支



ソルトレーク盆地に入る準備をするブリガム・ヤング、ウイルフォード・ウッドラフたち。マホンライ・ヤングによる約束の地記念碑から。

配を受けたのち、死からよみがえって復活体となることによって、可能になった。

「確かに、彼は天使たちの性質を継いだのではなくアブラハムの血統を継がれた。」（欽定訳ヘブル2：16）

こうして、アブラハム、イサク、そしてヤコブ、さらにはダビデを経て、つまり主は、アブラハムを通じて生れ、神の御子となられたのである。

「そこで、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たちよ。あなたがたは、わたしたちが告白する信仰の使徒また大祭司なるイエスを、思いみるべきである。（イエスもここにおられる多くの人々と同じように大祭司である。また、この壇上の幹部たちと同じように使徒である。）

おおよそ、家を造る者が家そのものよりもさらに尊ばれるように、彼は、モーセ以上に、大いなる光栄を受けるにふさわしい者とされたのである。

『……だから、わたしはその時代の人々に対して、いきどおって言った。（主はこのように言われた。ここで言う人々とは、エジプトにいた人々であって、エジプトで捕われの身になっていた人々である。）――だから、わたしはその時代の人々に対して、いきどおって言った。彼らの心は、いつも迷っており、彼らは、わたしの道を認めなかった。

そこで、わたしは怒って、彼らをわたしの安息にはいらせることはしない、と誓った』。」（ヘブル3：1，3，10，11）

安息というと、ぶらぶら散歩したり、戸外に出て草の上に横になったりすることなど、くつろいだ状態のことを考えがちである。しかし、そのようなくつろいだ状態は、主が語っておられる安息とは異なる。安息を得る人とは、最も活動的な人であり、最も一生懸命働く人であり、最も時間を有効に用いる人であり、最も天父に近い生活を送る人である。様々の労苦からは解放されるが、決して自分の業を放棄することはない。

次に、他の聖典からもう少し引用してお話したいと思う。高価なる真珠から引用する。もちろんこの会は神権会であるから、あなた方は全員神権を持っておられるはずである。神権を持つということは、まことに偉大な特権である。ここで少し、父祖アブラハムの言葉の中から読んで、神権を持つことがアブラハムにとってどれほど大切なことであったか説明したいと思う。アブラハムは次のように語っている。

「また、わがために更に大いなる幸

福と平安と安息とあるを知りたれば、(この安息が、先程私が述べた安息のことであり、皆さんはこの安息を得るために励んでいるのである)われは先祖の祝福と、この祝福を他に施す職に按手聖任されんことを乞い求めたり。而して、われは義に随う者なりたれば偉大なる知識ある者たらんと望み、義に随う更に大いなる者たらんこと、また更に偉大なる知識を持ち、多くの国民の父、平和の君たらんことを望み、また数々の教えを受けんこと、神の誡命を守らんことを望みたれば、われは先祖に属ける権能を保つ正当の世嗣、大祭司となりたり。」(アブラハム1：2)

アダムからノアまで10代、さらにノアからアブラハムまで10代であったと思う。アブラハムは先祖の祝福を受け継いだ。ではこの先祖とはだれのことであろうか。それは、最初の時代に、諸国にあって族長となった義人たちのことである。

アブラハムはさらに次のように言っている。「この権能は先祖よりわれに授けられたり。そは先祖より伝えられ、時の始めより(これはいつのことであろうか。アダムが初めて地上に置かれたときのことである。)まことに太初よりすなわち創世の前より今日に至るまで伝えられしものなり。こは誠に長子の権能にして、最初の人すなわちわれらが最初の父なるアダムに授けられ、先祖を通じてわれに至る。

われは、神が子孫に就きて先祖に与えられし任命に従い、われを神権者に任命したまわんことを乞い求めたり。」(アブラハム1：3，4)

これこそ、私たちが生まれ落ちたときから受け継いでいるものである。私たちに必要なことは、この祝福を受けるにふさわしくなることである。この祝福なくして、私たちは神殿へ行くことはできないし、神殿へ行かずに結び固められることはない。そうすれば、永遠に家族を持つことはできないし、私たちの業を進めていくこともできないのである。

「わが先祖は、彼らの義と主なる彼らの神が与えおかれし数々の聖なる誡命より背き、異教徒の神々を礼拝して全くわが声に聴き従うを拒みたり。」(アブラハム1：5)

そのためにアブラハムはその地を去らなければならなくなった。彼はカルデヤを去って川沿いに北上し、ハランに着いた。現在のトルコである。そして、そこからパレスチナへ向かったのである。

このように聖句を読んで退屈でなければ、もう2、3カ所読んで、それで話を結びたいと思う。

「而して、神の声われに至れり。(これは、主が祭壇上のアブラハムの命を取ろうとしていた男を打たれた直後のことである)……わが名はエホバなり。われ汝の祈りを聞きて降り来れるは、汝の救い、また汝を父の家よりすべての親族より離して汝の知らざる他国に連れ行かんためなり。……

ノアにありし如く、汝にもまた然あらん。されど汝が導きと教えを施す業によりて、わが名はとこしえにこの世に知らるべし。」(アブラハム1：16，19)さらに「われ……汝にわが名……を被らしむべし。」(アブラハム1：18)このわが名とは、イエス・キリストのみ名のことである。神権は「神の御子の神権の聖なる神権」(教義と聖約107：3)と呼ばれている。後に、メルケゼデクの名前がこの神権を指す名称として与えられた。それは、神の御子のみ名を繰り返し使うことを避けるためである。これに関連して、私は度々、教会員が神のみ名をあまりにも気軽に使い過ぎているように感ずることがある。主は、繰り返しを避けるために、この神権にメルケゼデク神権という名称を与えられたが、これはその点で良い模範である。

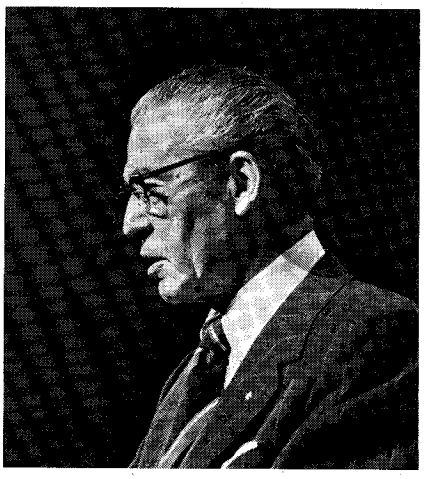
最後に、話を終える前にもう1カ所、アブラハムの言葉を引用したい。「されど、われは今後われ自らよりさかのぼりて創世の前に至る年代記を描かんと努むべし。そはわれがその記録を手に入れし故にして、今に至るまでこれを所有せり。(これは、この大会の会期中、私たちが思い巡らしてきた他の業と考え合わせてみると、極めて大切なことである)

されど、神権の権能に関する先祖すなわち族長らの記録は、主なるわが神わが手の中に守り置きたまいぬ。この故に創造の始まりの知識も、また諸々の遊星、諸々の星の知識もこれらが先祖に知られたるままわれ今日まで守り来れり。されば、わが後に来たるべき子孫のため、この記録にある若干かのことを努めてここに誌すべし。」(アブラハム1：28，31)

兄弟たち、神権を持つということは、本当に意味深いことである。執事から教師、祭司へと昇進できる神権を持ち、さらには、永遠に続く神権、すなわち私たちがふさわしい限り永遠に存続し、私たちの盾ともなり、永遠の世界に至る道ともなる神権を持つということは、本当に意味深いことなのである。私は、主が私たちを祝福して下さって、私たちが長老であることを決して当然のことと思ったり、普通のことだと思ったりしないよう、切に祈っている。「彼はただの長老さ」「彼はただの七十人さ」「彼はただの大祭司さ」というような言葉も聞かれる。大祭司、その大祭司であるということは、どのような人の生涯にあっても、必ず大きな意味を持つのである。それを軽んじ、とりたてて素晴らしいものと考えない人は、それを通じて与えられる祝福を決して理解することはないであろう。

これは皆、教会の教義からの教えである。主は言われた。「主は全能の神である」「私はイエス・キリストである」「私はエホバである」と。主こそ、私たちの礼拝している御方である。私たちの歌う歌は、そのほとんどが主についての歌である。私たちの祈りは皆、主についての祈りであり、私たちの集会での話は、主についての話である。私たちは主を愛し、敬愛している。私たちは、今この時から、再び、三たびそして四たびと、主に一層近く生活し、主の与えて下さった約束と祝福に適った生活をすると約束し、この身を主に捧げるのである。このことを、愛の限りを尽くして、イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

神の律法



宇宙のすべては法則によって治められる。
幸福を願う人は律法に従わなければならない。

第一副管長
N・エルドン・タナー

この美しい安息日の朝、テンプルスクウェアのこの歴史的なタバナクルにおいて大勢の会衆を前にし、また他の場所において本大会の模様を視聴しておられる多くの人々のことを心に思い浮かべながらこの話をするにあたって、「みたま」と主の祝福が私たちにあるようへりくだって祈るものである。

この偉大な国、アメリカ合衆国の200年祭のことを述べるとき、私は、主がその予言者を通じて下された、ふたつの重要な言葉を思い起こす。

「ごらん、この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事えさえすれば、奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることがない。この地の神とは私たちがすでに記した言葉によって明らかに示されるイエス・キリストである。」(イテル2：12)

また主は言っておられる。

「われ実にこの目的のためにわが挙げたる賢き人々の手によりてこの国の憲法を制定せしめ、流血によりてこの国を贖えり。」(教義と聖約101：80)

私たちが現在住んでいるこの国の真の価値を認める人々と共に、また、合衆国憲法起草者が定めた民主主義の原則の維持と強化に努めようと決意している大勢の国民と共に、私は真心から力を合わせて働きたいと願っている。

いつか、ひとりの若者から次のように言われたことがある。「なぜこのように多くの法律や規則や規定があるのでしょうか。どうして私たちは自分のしたいことを自由に行なえないのですか。人がこの世にいるのは幸福を得るためであって、人に与えられている最大の賜は自由意志であると教会は教えているでしょう。」

そこで私は彼に、宇宙におけるすべてのものは、また創造主なる神によって組織された宇宙自体でさえも、自然の法則として知られている法によって治められていることを説明した。私たちには、秩序を保ち、人類の権利を擁護し、他人の権利を犯す人々を罰するために、国の法律、すなわち人の定める法律が必要なことも、彼に説明した。そしてその例を幾つか挙げた。それから私たちは、神の律法と、神の戒めを守ることの大切さについて、かなり細かい点まで話し合った。

私は今日、私たちの交わした会話の細部には至らずとも、法が人類に及ぼす影響の大きさについてお話したいと思う。そのために、法を3つに分けたいと思う。第一は自然の法則、第二は人の定めた法律すなわち国の法律、第三は人の救いと昇栄に関わる神の律法である。

まず自然の法則についてお話しよう。皆さんは、毎朝決まった時刻に昇る太陽が昇ってこなくなったら、どのようなことが起こるか考えたことがあるだろうか。地球が1日だけ自転を止めたらどうだろうか。1日と言わずとも、ほんの数分でもいい。重力の法則が働かなくなったらどうだろうか。ごく短期間の内に、地球と全人類は滅びるであろう。宇宙の全天体は宇宙空間内で支配されており、法則によって運行している。

もし鉄が熱せられたときに、ある日は膨張し、別の日には収縮するとしたら、世の人はだれも機械工場を営むことができないし、いかなる種類の器具も造ることができない。これらの法則は不変である。私たちがいつも、いかなる状況の下にあっても依存することのできるような法則でなければならない。

私たちが毎日行なっているすべての事柄を振り返り、いかに自然の法則に依存しているか、また私たちの目的を遂げるためにどれほど文字通りにそれらに従わなければならないかを考えてみると興味深い。

私たちは人間が月面を歩くのを見た。また、異なった国の人と宇宙船が宇宙空間でランデブーできたことに驚異の目を見張った。生命の有無を調査する使命を帯びて火星に向かった宇宙探査ロケット、バイキングをも見た。もしもいずれかの自然の法則が働かなかったら、宇宙計画は完全な失敗に帰し、生命は失われていたことだろう。私たちは天文学者の予告を読むと、畏敬の念を覚える。彗星の出現や日食、月食を非常に正確に予知することができるからである。

これはすべて、創造主が自然の法則

によって、創造物をその中に保っておられることによる。

法則とは真理の応用にほかならない。偉大な思索家の著書から引用した次の言葉に注意を向けていただきたい。

フランク・クレインは言っている。「真理は宇宙の条理である。それは行く末の論究であり、神のみこころである。従って、人が発明し、あるいは発見するもので、それに代わり得るものは何もない。」(レオ・J・ミュア、*Flashes from the Eternal Semaphore*「永遠の信号機が投ずる光」p.100)

W・ラデリフは言っている。「基本的な真理には、推移するものは何もない。真理の意味に関する知識は増し、真理の応用法は変わることがある。しかし、真理の偉大な原則は永遠に同じである。」(同上、p.101)

主はジョセフ・スミスに下した啓示の中で、次のように宣言しておられる。

「また誠にわれ汝らに告ぐ。彼は昔より万物に一つの律法を与え、この律法によりて万物は時と期に随いて運行を止めざるなり。

而してこの運行の道は定まりて動かず、正に天地の道にして地とすべての遊星に通ずるものなり。

而して、地と星とはまたその時と期に於て、分と時と日と週と月と年とに於て相互に光を与うるなり。……

地はその道をかけり、日輪は昼間その光を与え、月輪は夜その光を与え、諸星もまた夜にその光を与え、みな神の能力の中にその光栄を顕してかけり行く。……

そもそも、これらは皆王国なれば、その何れにてもまた如何に小さきものにても、見たるなり。」(教義と聖約88：42－45，47)

このように、自然の法則は、私たちがこれを知っていようといまいと、常に同じように働く。この法則を知らない子供は、熱いストーブに触れるとやけどをする。重力の法則を無視すれば、ひどい傷を負うかもしれない。また、自然の法則を理解し、それに従って生活するならば、そのことから恩恵を受ける。これらの法則を無視し、あるいは反する行為をとる人々が直面する数々の危険を、逃れることができるからである。

次は、国の法律すなわち人の定めた法に関してであるが、私たちは法律によって治められる必要がある。法律は悪事を行なう人々を取り締まるだけでなく、すべての人々の権利を守るためのものである。教義と聖約を引用しよう。

「われらは信ず、政府は人間のために神により制定されたるものにして、社会の福利と安全のため法律を制定しまたそれを施すに当り、政府に関して人間の為す行動に対し神は人間に責任を負わせたもう。

われらは信ず、政府は各個人に対し良心の自由なる行使、財産の所有権とその管理、および生命の保護などを保証する如き法律を制定し、且つこれを犯さるることなく保持するにあらざれば、如何なる政府も平和に存立するを得ず。

われらは信ず、すべて政府は政府の法律を施行せんがため、必然吏員および長官らを要す。而して、公平と正義とを以て法律を行う如き人物は、これを求めて共和国の場合ならば人民の投票により、他の場合にはまた主権者の意志によりて支持すべきなり。」(教義と聖約134：1－3)

当教会の信仰箇条第12条には、このようにある。「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」

すべての国民は政治の問題を知っておくことが、極めて大切である。国の法律を知ること、および、政務を司る正直で賢明な人々を選べる場合には、それを積極的に行なうことが大切である。

行政機関を通過した法令の合法性に、それが国の最高法廷で合法と立証された場合でさえも、疑いをはさむ人々が大勢いる。このような人々は、その法律を無視し、また法律に違犯することを意に介しないのである。

かつてアブラハム・リンカーンは次のように述べた。「人のためにならない法律があるならば、できるだけ速やかにそれを廃止すべきである。しかし、まだ効力を持つ間は厳密に守るべきで



ソルトレーク盆地を眺める姉妹。

ある。」

これは、法律の遵守に関する当教会の態度でもある。私たちは次の声明を発した人の言葉に同意するものである。

「実際に法律を無視し、あるいは愚弄する人は、自分の座っている板をのこぎりでひく愚か者に似ている。社会の崩壊には、法律を敬わずに無視する態度が最初のしるしとして必ず見られる。法を尊重する態度は、あらゆる社会における最も基本的な美徳である。なぜなら、法律に反するものは、暴力と無秩序だからである。」(*Case and Comment*「判例と注釈」、1965年3－4月、p. 20)

法律に対する無視、違犯、あるいは自分勝手な解釈については、何らの正当化も、言いわけもできない。キリストは私たちに、法律を守る民の偉大な模範を示しておられる。それは、キリストを苦境に陥れようとしていたパリサイ人たちが、カイザルに税金を納めてよいかどうか尋ねたときのことである。この問いかけに対して、イエスは税として納める貨幣にだれの肖像が刻まれているかと尋ねられた。そして彼らがカイザルの肖像ですと答えると、次のように言われた。

「それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。」(マタイ22：21)

いかなる国民も、それぞれに責任があり、自分が選んで住んでいる国の法律の範囲内で行動しなければならないということを、常に心に留めておく必要がある。さらに教義と聖約から引用したい。

「われらは信ず、すべての人はその固有不動の権利を政府の法律によりて保護せらる間その属する各自の政府を支持し擁護すべき義務あり。されば、かかる保護の下にあるあらゆる国民にして、治安の妨害、謀叛などを為すは妥当にあらず。故に、かかる輩は罪に従って処罰すべきなり。而して、すべての政府は公共の福利を保証するために、政府の判定に於て最も善く計画せられたる如き法律を制定する権利を有す。されど、また同時に良心の自由を神聖に保つべきなり。」(教義と聖約134：5)

ではここで、神の律法について考えよう。神の律法も、自然の法則と同じように、明らかであり、拘束力があり不変である。また、私たちの成否、幸不幸は、この律法の理解度と、人生における応用の程度に左右される。私たちは次のように言われている。

「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。

すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」(教義と聖約130：20，21)

私たちは、福音には人間関係、すなわ



ち精神的および霊的な生活に関する人生の律法が含まれていると信じている。これらの律法は、自然界における自然の法則と同じように、有効範囲内においてだけ作用するものである。

予言者ジョセフ・スミスは、知識を得ることの大切さと、律法に従うことの重要性を認めていた。彼は聖徒たちに次のように説いている。

「およそ、われらのこの世に於て達する英智の一切は、何にてもよみがえりの時われらと共によみがえるべし。

さればもしある人ありて、精励従順によりこの世に於て他の人よりも一層勝れたる知識と英智とを得ば、未来の世に於てそれだけ利を得べし。」(教義と聖約130：18，19)

主のみ言葉は私たちにとって非常に明瞭であり、主の律法は私たちの幸福のためにはっきりと定められている。にもかかわらず、ある人々は自分の判断のみに頼り、神の律法を無視し、みじめで不幸な状態に陥っている。その理由を理解することは困難である。予言者ヤコブは次のように勧告している。

「それであるから兄弟たちよ、主に向って勧めをしようとはしないで主から訓戒を受けようとせよ。ごらん、あなたたちは主が智恵と正義と大きな憐みとをもって、造りたもうた万物を勧め戒めて治めたもうていることを知っている。」(モルモン経ヤコブ4：10)

また、ソロモンはその深い知恵によって語っている。

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。

すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5，6)

イエス・キリストの福音の道標は明らかである。私たちには十戒がある。その例を幾つか挙げよう。

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。……

あなたは殺してはならない……姦淫してはならない……盗んではならない……偽証してはならない……

安息日を覚えて、これを聖とせよ。」(出エジプト20章参照)

また山上の垂訓はあなた方すべてがよく承知しておられるものである。さらに律法の中でどの戒めが大切かをイエスは告げておられる。

「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な、第一のいましめである。

第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。」(マタイ22：37－39)

これらふたつの戒めを守ることは全世界にどれほど大きな影響を及ぼすか、いくら強調しても過ぎることがないほど、私たちの評価をはるかに越えたものである。平和と正義が津々浦々にまで行きわたるのである。

私たちにはまた聖典がガイドとして与えられている。これは、予言者を通して、神が直接啓示によって下したもうみ言葉を記したものである。その予言者のひとりが、スペンサー・W・キンボール大管長である。主は今日、キンボール大管長を通して語っておられる。そしてこれら予言者の教えを受け入れ、これに従って生活するときに、私たちは永遠の生命を得ることができるのである。私たちは皆、パウロのように感じ、語る勇気を持とうではないか。

「わたしは福音を恥としない。それは、……すべて信じる者に、救を得させる神の力である。」(ローマ1：16)

主は言っておられる。「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)

このことは主が御自身の命を捧げられたほど何にも代え難いものであった。すなわち、主の贖いの犠牲によって、私たちは復活し、不死不滅と昇栄を享受することが可能となったのである。主の偉大な目的を達するために、宣教師として働く素晴らしい特権と祝福と機会があることは、私たちにとって何と幸いなことだろうか。

このような約束が与えられている。「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約82：10)また、次のような警告もある。

「わが律法を受けてこれを行う者はすなわちわが弟子にして、わが律法を受けたりと言いてこれを行わざる者はわが弟子にあらず。これらの者は、汝らの中より追い出さるべし。」(教義と聖約41：5)

実に先程の私の若い友が感じたように「人がこの世にいるのは幸福を得るためであり」、「人に与えられている最大の賜は自由意志である」という教会の教えと、私たちには法が必要であるという事実との間に何の矛盾もないことは明らかである。私たちには選択の自由があり、律法に従ってその律法に基づく祝福を享受することもできれば、律法に従わずにいることもできる。律法に従わなければ、私たちのために備えられている完全な喜びを決して享受することはできないのである。

次のような主の栄えある約束をもって、私はこの話を結びたいと思う。

「主は言う。わが命に従い、誠心を以てわが栄光を仰ぎ見て今この地に集り来れる人々は、見よ、幸福なるかな。

そは生くる者は地をつぐことを得、死ねる者は全く働きを休みて安息を得。されど彼らのなしたる業はその人々につき従いて、わが備えたる父の住居に於て冠を受けしむればなり。

然り、その足シオンの地の上に立ちて、わが福音に従い居る者は幸福なるかな。その者は報いとして地の善きものを受け、而も地はそれを力強く生ずべければなり。

またわが前に忠実にして勤勉なる者は、天より祝福をもて冠を受くべき、また誠に少からざる誠命とその時々に関する啓示とを与えらるるなり。

この故に、われ彼らに一つの誠命を与う。曰く、汝心を尽し、勢力と思いと体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。また、イエス・キリストの名によりて神に仕うべし。」(教義と聖約59：1－5)

私は、これらの事柄が真実であることを、イエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。



人々が健全な教えに耐えられなくなる時が来るであろう

神を否定する者があろうとも、末日聖徒は神の存在を宣言し続けなければならない。

十二使徒評議員会会員
L・トム・ペリー

総大会の折に少し早めに来て、この偉大なタバナクルの通路を歩きながらこの会場に集まる大会の訪問者と挨拶を交わせることは、私にとって喜びである。これが真に世界の大会であることをあなた方はご存知である。

たとえ話す言葉は違い、意思を通じる方法は異なっても、握手を交わし、目を見れば、共通の絆があることがすぐにわかる。国境を越えた兄弟姉妹の愛があるのである。

私たちはこの大会において、アメリカ合衆国に宛てたメッセージをいくつか送ってきた。このようなとき、私は、通訳を介してこのメッセージを聞く他の国の人々の顔を関心を持って見る。そして、人々が深い関心を抱く様を見てとった。心から関心を抱き、理解しているのである。私はそうあって然るべきだと思う。歴史で学ぶように、何度も繰り返される全世界共通のテーマがあるように思えるからである。

私たちはこの偉大な国を愛している。また、あたた方の国も愛している。なぜなら、そこはあなた方の故郷だからである。私は今、アメリカ合衆国200年祭の計画を援助するという素晴らしい責任をいただいている。かつて、これほどはっきりと歴史を見つめ、政府の計画に携わる機会をいただいたことはない。

数ヵ月前のこと、合衆国200年祭における宗教団体の参加を募るために特別の会合が催された。そして、国内の大勢の宗教指導者をその会合に招くよう、私に依頼があった。こうして私たちは400名の者がワシントンD.C.に集まり、この素晴らしい祝典に貢献する方法について、2日間討論を交わした。

私は出席した大勢の宗教指導者に深い尊敬の念を覚えたが、同時に、あなた方が自由主義者と呼んでいる一連の人々にはとても心配な気持を抱いた。

この2日間に及ぶプログラムの一環として、私たちは約20名ずつの小グループに分かれ、この祝典において教会が貢献できる事柄について話し合った。

初日のプログラムを終えたところで私はこの会合に出席するよう招いたひとりの人と話す機会を得た。そこで、この国の諸教会が国民に共同で発することのできる宣言、および神の導きが必要であることの確認、ならびに合衆国政府の設立にあたって主が導きの手を伸べたことに対する感謝の言葉を準備できるか否かについて話した。この人がその夜いつまで起きていたかは知らないが、朝食で顔を合わせたとき、彼は先の宣言の草稿をもう準備していた。すぐれた内容のものだった。

私はその朝、私たちのディスカッショングループでそれを提示できると喜んだ。けれども、私の喜びもつかの間であった。私たちの神である主に関する宣言は、いかなるものも承諾できないというのが、この小グループの宗教指導者の一致した意見であった。この種の宣言は無神論者に不快な気持を与えるだろうと、彼らは結論した。特に彼らが言うには、無神論者も自分の信念を表明する権利があるというのである。もちろん私は、万人に自由意志を守る権利があることには完全に同意する。しかし、すべての人に受け入れられないからということだけで、私たちの堅い確信を封じてしまうことは良くない。私は活発に反対意見を述べた。けれども、私たちが論ずれば論ずるほど、ますます反対者は結集するだけであった。結局私たちは、いかなる宣言も出すことができなかったのである。

私はその成り行きと、私たちの努力が無駄であったことに全く当惑を覚え私たちの宣言に反対した宗教指導者を捜し出すことにした。そして彼と話すにあたって、私はさらに大きなショックを覚えたのであった。彼は神学の学位を幾つも持つ、キリスト教徒の指導者であった。にもかかわらず、私の質問に対する彼の返答は、次のようであった。

問：「この偉大な国を設立するにあたって、神が当時の指導者たちを導かれたことをお信じになりますか。」

答：「私の学んだ限りでは、いかなる時代にも神は人類の事柄を指図してはおられません。」

問：「あなたはそのような考え方をもって、毎週人々の前に立ち、キリスト教の教義を教えていらっしゃるのですか。」

答：「ええ、むずかしいことではありませんよ。会衆の代表者たちを集めて、そのグループの一致した意見があれば、それを説くんです。」

もう一度繰り返して申し上げたい。私はワシントンD．C．でこの会合に出席していた間に、多くの献身的な素晴らしい教会指導者たちに会った。しかし同時に、この旅行を終えて戻るときに大きな不安を感じた。それは、この国だけでなく全世界の多くの教会の説教台から、神が告げられた教えではなく、人の教えが説かれる傾向が強まっているのではないだろうかということにである。

私は会合を終えるにあたり、この大きな宗教指導者の集まりが永遠の父なる神に対する感謝の宣言を下さなかったことに非常に失望した。しかしながら、この 200年祭の年度中、少なくとも次のふたつの点を私の声として聞いてもらおうと堅く決心して戻って来たのであった。

まず第一に、正しいと信じていることを擁護する勇気を増すことである。天は閉じられていないという証を、私は宣言しよう。主は、この世においてそのみ声に耳を傾けるすべての子らを今なお導いておられる。私はまた、義しい政府の基は、人の努力に導きをもたらす主から与えられた律法であるという私の揺るぎない確信を説こう。義しい政府は主の導きを受ける。タナー副管長が引用した聖句は、合衆国政府の設立に関するものである。「われ実にこの目的のためにわが挙げたる賢き人々の手によりてこの国の憲法を制定せしめ、流血によりてこの国を贖えり。」（教義と聖約101 ：80）

私は、憲法起草者の心の中にあった信仰を絶やさないために、自分にできる限りのことをすべて行なおうと決意している。

ジョージ・ワシントンは次のように宣言している。「国民は、神と聖書なしに正しく治めることは不可能であることを承知している。」

また、第7代合衆国大統領のアンドリュー・ジャクソンは、「聖書はこの共和国が依って立つ岩である」と宣べている。

私は今日皆さんの前で、主なる神は今なお神の子らの諸事を治めておられるという、私の信仰を再び言明したいと思う。神の律法は確かに、すべての法が建つ基である。従って私たちは、神が与えられた律法を進んで支持し、擁護しそれに従って生活しなければならない。

次に私は、自分たちの学問によって神の律法を変えることができると信じ込んでいる人々に対して、ここで公に反対を唱えたいと思う。人類が意見を一にしようとも、決してこれらの神聖な律法を変える力はないのである。

これらうわべだけの博識者たちが、どのように神聖な結婚制度を彼らの誤った教義と教えによって破壊しようとしているか、その一例を挙げてみたい。次に引用するものは、最近のある出版物から取ったものであるが、ほかにも類似するものは数多くある。

「これらの証言の根拠として、あるオブザーバーたちはこう語っている。『変遷する社会の要求に合わせて何世紀もの間変えられてきた結婚制度は、やがて廃止されることになると言われてきたが、今や我々は、まさにそのような時代に直面している。』究極的に結婚は、宗教上の儀式あるいは法律上の承認行為としてではなく、単なる社会的事実として受け取られることになるだろうというのが、彼らの判断である。」（ウイリアム・H・マスターズ、バージニア・E・ジョンソン共著、*The Pleasure Bond*「放縦の絆」p.179）彼らは、結婚に対する考え方を新たにするようキリスト教徒に求めている。徐々にであろうと、不承不承であろうと、独断主義は人道主義に屈しつつあると彼らは言う。また彼らは、自分たちの研究から明らかになったように、婚外の男女関係は神に忠実さを表わす手段となるであろうと確信をもって語るのである。

このような教えが人類に対する主の命に全く反することを、私は知っている。主の計画における外形的な秩序を見ても、主が証正を必要としておられるようなことを私は何ら見出せないのである。地球は同じ方向に回り続けているし、地軸の角度も変わっていない。水は海から雲となり、地に降り、川を下って海に入る循環を繰り返しており、変わりなく人に恵みを与えている。



疲労と暑さ、乏しい食糧、それに逃亡と、西への旅は苦難の連続であった。マホンライ・ヤング作の約束の地記念碑から。

神が人類のために定められた律法についても全く同じである。神は時の初めにこのように宣伝しておられる。

「また主なる神は言われた、『人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう』。…

そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。

主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。

そのとき、人は言った、『これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう』。

それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるでのである。」



（創世２：18，21－24）

夫婦の結びつきは、主にあって聖なるものであり、軽薄に取り扱うべきものではない。また、結婚の誓約は、主なる神が天と地を創造されたその目的と使命を果たすために欠かせないものである。

いつの時代にも主は、夫婦のこの聖なる関係を保護するために、神聖な律法を宣言しておられる。モーセがイスラエルの子らを治めるために、律法が必要なことを知ったときに、主は彼に、「あなたは姦淫してはならない」（出エジプト20：14）という宣言を下されたのであった。

神の生みたもう独り子は、この世において、この永遠の律法を再び次のように強調された。「『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。

しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」（マタイ５：27，28）

主は、モルモン経にあるように、アメリカ大陸においても、この不変の教えを再び宣言しておられる。「汝姦淫すべからず。」（モーサヤ13：22）

主はまた、近代の聖典にその教えを記さずにおくようなことはなさらなかった。近代の世に、主は再び次のように宣言しておられる。「汝ら姦淫することなかれ。姦淫をなして悔い改めざる者は捨てらるべし。」（教義と聖約42：24）

神の律法は、過去にも未来にも、決して矛盾がない。そしてどの時代の聖典も、人が変えることのできない不変のメッセージを宣言しているのである。

私は今日、古代の使徒パウロが語った言葉を、私の警告の言葉として声高らかに述べたいと思う。「人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。」（IIテモテ４：３，４）

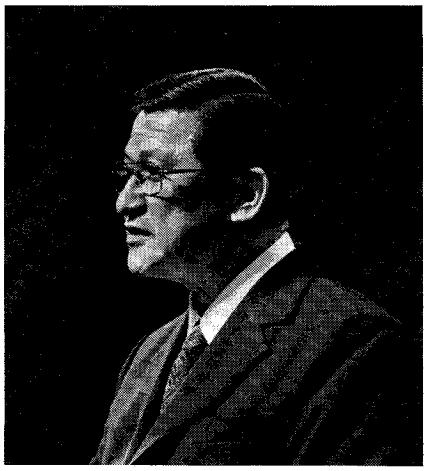
皆さんに私の証を残したい。神の律法は終始一貫し、いつまでも変わりがない。そして私たちは、神の律法に従って生活するときに、この世の生涯において喜びと達成感と平安を見出すことだろう。一方、神の律法を悪用し、変え、無視するならば、神の裁きを受けなければならない。そしてそうするときに必ずや、苦悩と悲哀と心痛とを被ることになるのである。

次の詩を書いた詩篇作者の精神を読み取ろう。「地と、それに満ちるもの、世界と、そのなかに住む者とは主のものである。」（詩篇24：１）

私たちが正しいと承知している事柄を擁護する勇気を持てるよう、神の導きのあらんことを、イエス・キリストのみ名によってへりくだって祈る。アーメン。

10月5日(日)　午前の部における説教

東洋の人々の信仰と主のみ業



地域総大会、東京神殿の建築計画、教会員の犠牲、これらによって教会は急速に発展を続けている。

十二使徒評議員会補助
アドニー・Y・小松

愛する兄弟姉妹の皆様、この半期総大会に出席する機会と祝福を心からへりくだり天父に感謝したいと思う。素晴らしい大会の雰囲気を味わい、予言者であるスペンサー・W・キンボール大管長をはじめとする教会幹部から受けた数々の指導と助言に感謝している。また、主のみたまの導きがあって、私がこれから話す事柄が大会の精神を高めるものとなるよう祈り、また願うものである。

新約聖書に、次のようなヨハネの言葉がある。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3：16）

天父は地上の子らを非常に愛しておられる。それ故、私たちにこの世の経験を得る機会を与え、やがて、救い主イエス・キリストによって神のみ前に立ち帰る道を備えられたのである。

救い主はこの世でみ業に携わっておられたときに、こう述べておられる。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」（ヨハネ11：25，26）

さらに救い主は、「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなく、わたしをつかわされたかたを信じる」（ヨハネ12：44）のであるとも述べておられる。

私たち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は今日、キリスト教世界に住む数多くの人々と同じように、神が生きておられ、イエスが生ける神の子キリストであり、世の救い主であることを理解し、信じている。

しかし現在でも、アジアの諸国では、世界人口の大多数を擁しているにもかかわらず、この明白な真理が地上に住む子らのための神の計画として理解されてはいない。

だが、主のみ業はアジア民族の間にも着実に進展している。10年前、極東にはわずか3つの伝道部しかなかった。それが現在では15の伝道部、5つのステーキ部となっている。

先頃開かれた日本、フィリピン、台湾、香港、韓国の地域総大会は素晴らしい経験であった。教会員たちは予言者であるスペンサー・W・キンボール大管長や他の教会幹部の話を聞き、歓喜の涙を流していた。

これらの地域総大会に出席した人は、教会員と非教会員を合わせてほぼ45,000人に達すると報告されている。神の生ける予言者の声に耳を傾けることは、数多くの教会員と非教会員にとって初めての経験であった。

東京の大会でキンボール大管長が神殿建設の提議をしたとき、会衆は喜びのあまりおもわず拍手をした。やがて、人々が右手をあげて支持する頃には、それは静かな感謝の涙と変わっていた。地域総大会が開かれたアジアのどの地でも、同じような光景が見られた。アジアで最初の神殿を建てるという予言者の提議に対して、教会員は喜んで支持したのである。

さらに私にとって、とても素晴らしい経験となったことは、アジアに住む教会員のためにキンボール大管長が与えた助言と勧告をこの耳で聞き、さらに導きを受けたことに対する彼らの感謝と愛に満ちた顔をこの目で見たことであった。

キンボール大管長は、アジアの国々に住む教会員にイエス・キリストの福音に従って生活し、主の戒めを守るように励ました。また、会員たちに系図活動の重要性を説き、神殿結婚の大切さを強調した。数年内に神殿が建てられ、教会員はこの大きな祝福にあずかることができるのである。ある人は家から神殿まで数時間で行けるようになる。また遠い人でも、現在大部分の人々が参入しているハワイまでほどの道のりではなくなるのである。キンボール大管長会はさらに、家族が大切であること、そして伝道に出るにふさわしい若人を育てなければならないことを強調した。

この福音のメッセージを多くの人口を擁するアジアの国々に伝えるためには、伝道活動の歩みを早めなければならない。またキンボール大管長の助言と勧告に従って、この偉大な業を助ける若者を地元で備える必要がある。アジアに住むすべての教会員は努力を結

集しなければならない。私たちは、日常生活において「すべての会員は宣教師である」と語ったマッケイ大管長の勧告に従わなければならないのである。

多くの教会員にとって、地域総大会は奇跡であった。様々な困難や厳しい状況の下におかれていた会員たちは、地域総大会に出席して予言者の話を直接に聞けるとは夢にも思っていなかったからである。

モルモン経の予言者のひとりは次のように述べている。

「さて私モロナイは少々言いたいことがある。私は、信仰とはまだ見ない物事を望むことであると世の人に教えたい。それであるから、あなたたちは自分がまだ見ていないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでないと証が得られないからである。

世の人々の中に信仰がなければ神は人の間に奇蹟を行うことができないので、人々が信仰してからでないと神は人に現われたまわなかった。

いつ何時でもまだ信仰のない中に奇蹟を行なった者はない。すべて奇蹟を行なった者はまず神の御子を信じた。」（イテル12：6，12，18）

確かに多くの国々において、地域総大会で大きな祝福を受けるために会員たちの信仰が試された。教会員たちの証は、それぞれの国で地域総大会の準備をするとき、信仰を深める数々の経験を得てきたことを物語っている。これらの経験はすべて、会員の信仰を増し、証を強める手だてとなったのである。

ここで、沖縄の軍人の地方部で起こった事柄をお話したい。沖縄の会員たちは、約1,450キロも離れた東京で開かれる地域総大会に出席するために熱心に準備していた。そのとき、軍人の支部の若者たちは、ある活発な家族が大会への出席を断念したことを知った。そこでその理由を尋ねた。すると強い信仰を持ったその兄弟は、ためらいながら、今の彼には妻子を連れて大会に出席するだけのお金がないし、どうにもならないことを語ってくれた。

軍人の支部の若者たちは直ちに会合を開いた。その家族を大会へ出席させるに必要な費用を集めるためである。そしてクッキーの販売を計画した。若者たちは各家庭でクッキーを焼き、それを売るために忙しく駆け回った。そして理由を説明しながら他の軍人たちの間を回ったとき、驚くようなことが起こったのである。皆快くクッキーを買ってくれただけでなく、若者たちが目的を達成できるようにと、代金以上のお金を払ってくれたのである。このような助けによって、幸いにもこの若い家族は支部の会員たちと共に東京の大会に行くことができた。一方若者たちは皆、人に奉仕し、愛することの偉大な教訓を学んだ。他人のことを気づかい、時間と才能と持ち物を他人のために使う者は、人生の完き祝福を受けることを身をもって学んだのである。

予言者ジョセフ・スミスは、愛が愛を生むことを次のように語っている。「昔から語られていることわざに、『愛は愛を生む』というのがある。全人類に愛を注ぎ、親切を尽くそうではないか。そうすれば主は必ず永遠に増し加えられるという報いを私たちに与えて下さるであろう。私たちのパンを水の上に投げなさい。多くの日の後、私たちは数百倍にもなったそれを得るからである。愛とは鉄と鉄を鍛接する鍛冶屋のターレイ兄弟のようなものである。それは人に喜びをもたらす力を持って人類家族を和合一致させるものである。」（*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.316）

各地の地域総大会で準備に携わった教会員の多くは、この与え、愛するという偉大な教訓を確かに学んできた。また、コーラスで歌い、文化活動でダンスを踊り、あるいはそれぞれの委員会で働くとき、主の祝福を受けたのである。

他人のために時間と労力を捧げることは、この世の物を与えること以上に大切である。この最も大切な福音の原則こそ、神の戒めの基礎となるものである。主はこう述べておられる。「汝心を尽し、勢力と思いと体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。また、イエス・キリストの名によりて神に仕うべし。汝己れの如く汝の隣り人を愛せよ。」（教義と聖約59：5，6）

言い換えると、人は隣人のために尽くさなければならないということである。病人や貧しい人を訪れ、失意に沈んでいる人を力づけ、人々が幸福になれるように、あらゆる機会に励ましを与えなければならないのである。

ロバート・ルイス・スティーブンソンはこう述べている。「多くの友人を得たければ、人をよくほめ、ねたみ心をなくさなければならない。他人の幸せを大いに喜び、愛と思いやりに欠ける中であなたの愛が宝となるように、寛大な心で人を愛さなければならない。」

私たちが教会の活動に活発に参加し、ホームティーチング、家庭訪問、あるいは新しい家族やあまり活発でない会員のフェローシップを行なうことは、隣人に対する愛の表われである。救い主は、「わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」（ヨハネ15：12）と語っておられる。

兄弟姉妹、私の証を申し述べたい。この福音は真実である。神が生きておられ、私たちの祈りを聞き、答えて下さることを私は知っている。またイエスは御父の生みたもう独り子、キリストであり、生ける神の子であり、世の救い主である。ジョセフ・スミスはこの完き福音を回復するために、この末の世に神から召された予言者であった。また、スペンサー・W・キンボール大管長が今日この地上における神の予言者であり、主のみ業を指導していることを心から証するものである。すべてをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



「ひとりではできない」

相互依存は福音の本質である。証さえも人々の助けによって育まれる。

十二使徒評議員会補助
ロバート・D・ヘイルズ

兄弟姉妹、今この壇上に立ち、同じようにここで大会が開催されるようになってから108年経つ、最初の大会以来、ここに立った数々の人々からおのずと発散されたその霊を身に感じ、またきょう述べられた証を実感として味わうことができることは大きな祝福である。アドニー・Y・小松長老の次に話す人は実に損な役回りである。彼は神の人であり、率直、謙遜で、私は自分の残りの生涯を彼と共に主のみ業に捧げたいと願っている。聖歌隊からは大きな感動を受け、私はそれらに励まされて、胸につかえている話がどうやらスムーズに出てきそうである。

「私たちはひとりではできない」という言葉について、どうか少しの間一緒に考えていただきたいと思う。程度の差こそあれ、私たちの多くはそれぞれに証を持っている。私たちは皆、この世に生まれ出たときにキリストのみたまを与えられた。それは賜である。私たちは皆、聖霊に助けられて証を自分で育ててきた。私たちは神が生きておられることを知っている。また、イエスがキリストであることや、キリストが私たちを贖うために命を捧げて下さり、私たちが再び生きることができるように、復活され、今なお生きておられることを知っている。さらに、ジョセフ・スミスが時満ちたる神権時代に末日聖徒イエス・キリスト教会を回復したことも知っている。確かに、私たちはイエス・キリストの再臨をひかえた「最後の神権時代」という素晴らしい時代に生きている。この「時満ちたる時代」はすなわち、これまでに啓示されてきた聖典のすべてが人類に与えられる時代である。私たちは、スペンサー・W・キンボール大管長がこの末の時代に神権のすべての鍵を授けられ、啓示によってこの教会を導く神の予言者であることを知っている。しかし兄弟姉妹、これらのことをすべて知っているにもかかわらず、この世に生まれたのはひとりきりで生きるためではないという非常に大切なことを悟らない人々がいるのはなぜだろうか。

あなた方は自分の行動を自分や他人から隠すことはできない。ポローニアスは息子のレアーチーズにこう言っている。

「いちばん大事なことは、おのれに誠実なれ、ということだ。さすればかならず、夜が昼につぐごとくにじゃな、他人に対しても誠実ならざるを得ん。」（シェイクスピア、「ハムレット」1, iii、三神勲訳）

この言葉はまさに真実である。しかし、自分や隣人に誠実であるにはどうしたらよいかという関心も、その上さらにつけ加えるべきである。キリストの光を遮断した「閉ざされた自己」は、その人を誤りやすく、間違った考えに走りやすくする。人を気遣い、人に気遣ってもらうその調和と釣合いが、人生そのものの本質である。私たちには、自己欺瞞を避けるために他人からの励ましの援助が必要である。知的エリートたちに神のみたまを拒む人が時々見受けられるのは、私にはどうにも理解し難いことである。

ここで私の証を述べたい。私たちはこの世に来る前に天父と共に住んでいた。聖典にそう言われている。私たちは、肉体を受け、この第二の位に住み、神の戒めを守り、すべてに反対のものがあることを経験する道をそこで選んだことも知っている。正反対のものがあることで、私たちは強くなれる。私たちの霊は火に耐えて、はがねのように強くなるのである。

私たちはだれの助けもなしにひとりで神のみ前に帰ることはできないというのも、また神の計画である。ヤコブはそれをこう言っている。「信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである。」（ヤコブ2：17）　福音の計画では与えることと受けることが要求される。信仰だけでは不充分であり、私たちには奉仕し、奉仕される「行ない」が必要である。これは、ひとりではできない。

私たちの人生に課せられた数々の使命は、人の助けなしでは立派に果たすことができない。誕生には地上の両親が必要である。また、幼児の祝福、バプテスマ、聖霊の賜を受ける按手礼、教会員になること、神権の聖任、伝道、結婚、自分の子供を持つこと、病気や必要なときの祝福など、これらは皆人の助けが必要である。そしてそれはす

べて、人との助け合いを必要とする愛と奉仕の行為である。

私たちが天父のもとに帰るとき、天父は私たちがひとりで戻るのを望んではおられない。自分の家族や人生の道を助け合って一緒に歩んできた人々と誇らかに帰っていくことを望んでおられるのである。私はこの話を用意しながら、福音の計画の本質が、今住んでいるこの位でお互いに頼りあう相互依存にあることをはっきり知った。

私たちの体は不完全で、精神も理性も不完全なこと、すなわち私たちが完成されていないことを、私はよく知っている。そのためにこそ、私たちは互いに依存し合っているのである。私たちは自立しなければならないが、それは人の援助が全くいらないという意味ではない。私たちは聖霊の助けなしに証は得られないし、私たちより前の時代に住んでいた先祖の助けなしに系図は調べられない。私たちは「兄弟である最も小さい者」に仕えるかどうかを見られるために、この世にいる。私は教会幹部に召されてから、大管長や副管長や十二使徒たちが、自分を最も小さい者と考えていることを知った。

まさに神は、私たちをこの地球という星に置いて、身のまわりにある苦労や不完全を経験させておられる。他の場所ではできないことが経験できるので、そのためにこの世が必要なのである。前世と来世においては、私たちの体や霊や精神は今よりももっと完全に近い。しかし、この世におけると同じように自分を捧げる機会はないのである。福音の原則とは何と簡単な真理であろうか。私たちはこの世で苦労し、奉仕して、福音の計画の真髄をきわめるのである。

私が空軍中尉であったとき、飛行中隊のモットーに「名誉の帰還を」という言葉が選ばれた。私たちはその言葉を中隊全員のものと理解した。つまり、隊全体が互いに協力し合ってひとり残らず名誉の帰還をするということである。私たちはジェット機をフィンガーチップ編隊で操縦していた。ちょっと、親指を折ってあとの4本を伸ばしたまま、手の甲の側から見ていただきたい。1機が先導し、3機が両翼を守る計4機が見える。あなたは左右を守られて先導機が目標地点をめざす。ここで両側の指を1本ずつ離してみると、先導機と護衛機が1機ずつになる。すなわち両翼が撃墜されてもまだ、1機は前に1機は翼のわきを守っている。しかしながら、編隊から離れた飛行機は守るものもなく、確実に撃墜されることを、私たちは皆苦い経験から知っていた。

それなのに私たちの多くは、なぜ「人生をひとりで歩いて」、私たちを最も愛する人々に、分かち合うことの喜びと祝福を与えようとしないのだろうか。必要な人を助けるという原則は、19世紀のアイルランドの有名な詩人トーマス・モアの感動的な夫婦愛の話によく表われている。モアが仕事で家をあけていて帰ってみると、妻が2階の寝室に鍵をかけて閉じこもり、だれにも会いたくないと言っていた。美しい妻が天然痘にかかって、白い顔にはあばたの跡ができているという恐ろしい事実を、モアは知った。妻は鏡の自分を見てから、雨戸を引いて、もう夫には会いたくはないと言ったのである。しかしトーマス・モアはそれに耳を貸さず、2階へ上がって真暗な部屋にランプを灯しはじめた。妻は暗い中でひとりにしておいてと夫に懇願した。夫に、美しさの損われた顔をさらしたくないと思ったのである。彼女は夫に出て行くように頼んだ。

モアは部屋を出た。彼は階下に下り、その夜、祈りにも似た詩を書き上げた。それまでは歌を作ったことはなかったが、その晩は作詞のほかに作曲もした。空が白み始める頃、モアは暗い妻の寝室へ戻った。「起きているかい？」と聞くと、

「ええ、でも私の顔を見ないで。トーマス、どうか私を苦しめないで」と、妻は言った。

「じゃあ、君に歌を歌ってあげるよ。」こうしてトーマス・モアは今も愛唱されているこの歌を妻に歌ったのである。

若き日のほおは清らに
わずらいの影なく
御身いま　あでにうるわし
されど面　あせても
わが心は変わる日なく

モアは、妻がひとり横たわっている暗い部屋の片偶に動く気配を感じた。彼は歌を続けた。

御身をば慕いて
ひまわりの陽をば恋うごと
とこしえに想わん
（アイルランド民謡「春の日の花と輝く」より）

歌は終わった。歌声が止んだとき、妻の起き上がる音が聞こえた。彼女は部屋を横ぎって窓に近寄り、手を伸ばしてゆっくりと雨戸をあけ、カーテンを開き、朝の光を部屋に入れた。

私は今、自分の妻が雨戸をあけ、彼女の光と彼女の人生を部屋に入れて、私に分けてくれることを感謝したいと思う。妻の愛と友情がなければ、現在の私はなかったであろう。

私たちが霊や体を損われるとき、最初に取る行動は、落胆の暗がりに引きこもって、希望と喜びを、天父の戒めを守っているという安心感から来る人生の光を消してしまうことである。それが結局は、友だちになろうとする人や、一番の助けとなる人や家族をも相手にまわして反抗するようになる。またそれにもまして悪いのは、ついには自分自身を信じなくなるということである。

孤独な人、寂しい人は自分だけの考えや自分の殻に閉じこもってはならない。閉じこもってしまえば、結局は暗闇へ導く敵の影響を受けて、失望、孤独、挫折に陥り、自分を価値がないと考えてしまう。自分を価値のない者と思い込んでしまうと、繊細な霊的感覚をむしばむ仲間の方に目が向き、霊のアンテナを役立たずにしてしまうことがある。確固たる信仰を持たず、耳ざわりのよいことしか言ってくれない人々と交わる。彼らの助言を聞いても、何の益があるだろうか。私たちが日の光栄の目標を達成できるよう助けることのできる愛情深い両親や友だちの所へ行く方が、よくはないだろうか。

アルマがヒラマンやシブロンへ語った言葉を読んでみよう。そこには、事実を直視して息子に語る愛情深い父親

の姿がくっきりと浮彫りにされている。「お前がもし神の命令に従うならば地に於て栄えるであろう。しかし、神の命令に従わないならば、神の御前から追い払われる。」（アルマ38：1；36：30をも参照）自分の息子にはなかなか言えないことだが、しかしこれは真理である。

人生をひとりで経験しようとする人は、自分に忠実でもなければ、人生における大切な使命にも忠実でない。人はよく困難に出会うと、「ひとりで頑張ります」、「放っておいて下さい」、「助けはいりません」、「自分のことは自分でできます」と言う。しかし、人の助けが要らないほど人生経験に富んでいる人はいないし、隣人に役立つことが何もないほどに経験の乏しい人もいない。信頼して人の助けを仰ぐ気持、親切にそれに応じる気持が、私たちの心の底にいつもなければならない。

私は少年時代、ニューヨーク州ロングアイランドに住んでいた。その頃、こまどりが毎年わが家の屋根に巣をかけていた。母鳥がひなを育てるのを家族でいつも観察したものである。こまどりはひなを養い育てた。飛ぶ時期が来れば、やさしくひなを巣の外へつつき出した。するとひなは地面へ向けて滑空しながら、はばたいた。おぼつかなげに、怖そうに、飛び方も知らず。すると母鳥は地面に下りて、えさの捜し方を教え、飛び方を教えた。母鳥はひなが自立するように手伝いたかったのである。

毎年、「ひとりでしよう」とするこまどりのひながいた。そのようなひなは大変悲しい結果を招いた。ユリが咲く谷間の岩場に、死んだひなの姿をよく見かけたものである。

世捨人はこの上ない利己主義の容認者である。この世で人々に役立つようにと与えられた賜や才能をまるで無にしている。彼は悪魔の狡猾な道を歩んでいるのである。孤立や隠遁は、人生のゲームで盤の上から退くこまのように、私たちを引き下ろしていく。

アメリカの詩人ジョン・ホイッターは、人生と人間の相互依存を的確に表現している。

汝が我を引き上げよ、さらば我汝を
　引き上げん。
而して共にのぼりゆかん。

私たちは天父と共に出発した。私たちはこの世に来た。そして敵なる悪魔の与えるものを甘んじて受け、天父のみもとに「名誉の帰還」を成し遂げることを理想としている。

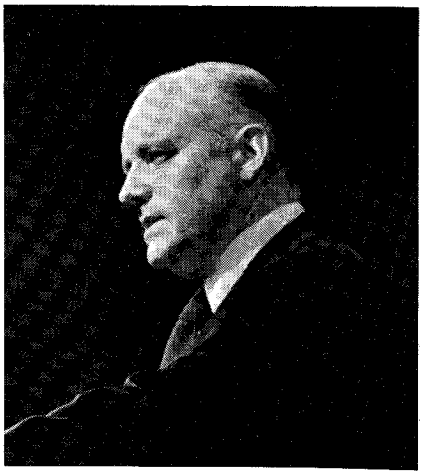
私は至極単純な証を持っている。神は生きておられる。イエスはキリストである。私たちは目的を持ってこの世に来たこと、そして私たちが受ける最大の喜びは、私たちが人々のためにする愛と奉仕の行ないであることを私は知っている。私たちはその愛と奉仕を通じて力と証を強くし、天父の祝福を自分自身と家族にいただくのである。他人の助けを全く必要としないほど立派な人は存在しないということも、私がこれまでの人生で知ったことである。何でも「ひとりでできる」ような偉い人は存在しない。

私たちがもし予言者であるスペンサー・W・キンボール大管長のように、真っ正直な愛にあふれた生活をして、周囲のすべての人たちに関心を示し、己を捧げて奉仕したならば、自分には他人の援助が必要で、他人も自分の援助を待っているということが十分に理解できるであろう。福音の基本であるこの原則を理解して、隣人と互いに愛し合えるように、イエス・キリストのみ名によって祈る次第である。アーメン。

トリーフ・ナファス作の手車隊記念碑から。（テンプルスクウェア）



タバナクル



2世紀目を迎えるこの建物は、後の世代に
対する私たちの責任を思い起こさせてくれる。

十二使徒評議員会会員
ハワード・W・ハンター

本日は、この大会衆を擁するテンプルスクウェアのモルモンタバナクルにとって歴史的な日である。このタバナクルが主のみ業のために献納された日から、ちょうど2世紀目に入るのがきょうである。この建物はユニークな建築物として知られており、ラジオを聴きテレビを見る全世界の人は、ここがモルモンタバナクル合唱団とオルガン演奏の起点であることを知っている。今大会は、このタバナクルが献堂された1875年10月の総大会から百年目にあたる。百年前のきのう、献堂されたのである。建築に携った初期の開拓者たちの労苦とこの世の富の犠牲が、ここに来て音楽や言葉に耳傾ける何百万何千万の人々に祝福をもたらしているのである。

その建設者たちの物語は私たちの心を捕えて放さない。彼らがミシシッピー河岸のわが家をあとにしたとき、未踏の西部についてほとんど知識を持たなかった。彼らはグレートアメリカン砂漠の焼けつく道を越え、長い苦闘の旅を経て、1847年7月24日、土曜日にソルトレーク盆地へ入った。日曜日は礼拝に捧げられ、月曜日と火曜日は盆地内外の探検が行なわれた。その翌日の夕方には町の位置が決定され、ブリガム・ヤングが神殿の建設予定地にステッキを立てた。

木曜日にはニューメキシコで除隊になったモルモン大隊の一団が盆地の聖徒たちに加わり、人数は400人ほどにふえた。除隊してきた人々はすぐ、神殿用地の南東の角に仮の集会所を造る仕事にかかった。これがタバナクルの前身である。山から丸太を切り出して地面に立て、葉のついた木の枝で覆って屋根とした。盆地で最初のこの建物は、到着1週間後の土曜日に完成し、翌日の日曜日には、人々はその木陰で礼拝をすることができた。

もちろんその集会所は仮のものであったが、2年間初期の開拓者に利用され、その後壊されて同じ場所にもっと大きなものが建てられた。2番目の集会所の屋根は木の枝と土ででき、100本の柱がそれを支え、最初のものと同じように側面はあいていた。使用されたのは天気の良いときだけであったが、以後3年間集会所として使われた。

そのときには、聖徒たちはすでに新しい開拓地に慣れ、土地を開墾し、家を建てていた。しかし集会や礼拝を行なうのにもっと適した会場が必要だった。彼らは、どんな天候のときにも使えて、もっと長持ちする建物を求めてタバナクルの建設に着手した。建物の側面はアドービれんがで、けた組みの屋根を支えた。そのために、以前の集会所で不便を感じていた支柱が必要でなくなった。

アドービれんが造りのタバナクルは、後に旧タバナクルとして知られるようになったが、建築に1年を費やして、1852年の総大会のときに初めて使用された。しかし盆地にやってくる聖徒の数が多くなったため、大会時には建物が狭く、入場できない人も多かった。それから2年後の4月大会では、会場に人があふれ、7千名が場外で大会に臨んだ。その年の10月大会の前に、大会出席者を収容できる大きさをもつ3番目の仮の集会所が建てられた。

ふさわしい建物が必要なことは明白だった。そこでブリガム・ヤング大管長は、現在私たちが座っている大タバナクルと言われる新しい建物の設計を指示した。それは最初の開拓者がこの砂漠の盆地に到着してから、わずか15年目であった。1863年の4月大会で何人もの話し手が、発表されたこの建物の話をし、経済的な犠牲や建築への協力を全員に呼びかけた。限られた資材しかなく、輸送のための鉄道もない辺境の開拓者の住人にとって、それは大事業であった。外部からの資材はすべて、牛車でミズーリ州から輸送しなければならなかった。什分の一基金は10年来建造中の神殿に必要であったため、タバナクルの建築費は寄付に頼るしかなかった。聖徒たちは現金をほとんど持たなかったので、宝石、建築資材、パン、労力など、自分の持ち物を何でも寄付するように要請された。

建物は奥行76メートル、幅45メートルで、端は半円形、そして46本の柱で屋根を支えることになった。また、高さ7メートルの柱の上端から13メートルの高さ、すなわち床上20メートルに及ぶ楕円形の屋根をもつ。床はよく見

えるように、後ろ正面から前正面まで5メートルの傾斜がつけてあった。設計施工当時は、柱のない建物として世界最大と言われていた。

1863年春に工事が開始された。フォートダグラス後方のレッドバットキャニオンから赤砂岩の大石塊が切り出され、木材の大半はワサッチ山脈の松林で伐採されてビッグコットンウッドキャニオンの製材所で加工された。タバナクルの中央部分が先に完成し、次に西側先端の曲線部がつけ加えられて、オルガンの製作と据付け工事が開始された。ボルトや釘や帯金は入手できなかった。そのため、木材の交差部分は木に穴をあけ、ほぞをかませてつないだ。そして端はくさびでその場所に固定した。木材が裂けたときは生皮を巻いた。すると、乾燥するに従って生皮が縮み、万力を使ったように強力に梁を支えることができた。

大型パイプオルガンの製作の話にはだれもが驚く。オルガンが初めて演奏された当時は、ふいごに男性5人がかりで空気を送り込んだ。それでは大変ということで、その後は最下部に水車を取りつけ、さらに電気が普及するようになってようやく、その動力が確保されたのであった。建物が完成した当時はすでに座席が足りなかったので、わきと後方に階廊が設けられ、3千名の座席が追加された。

以来この建物で集会や大会が行なわれたが、献堂されたのは今から百年前の1875年、10月大会のときである。このときにはすでに鉄道が敷かれていた。その週の日曜日、ユリシーズ・S・グラント合衆国大統領が初めて、旗とまん幕に飾られた特別列車でユタ準州を来訪した。停車場からウォーカーハウスに至る道路にはサバススクールの児童が列を作り、その後ろには何百人という見物人が大統領と護衛の馬車の隊列を一目見ようと立ち並んだ。新聞はソルトレーク・シティーについて論評し、人口はおよそ2万5千、「宗教的用途にあてられる公共の建物数は人口に対する割合においては合衆国中のどの町や村をもしのぎ、恐らくは教会、集会所の座席数総計はこの社会の男女子供の全員を優に上まわる」と書いた。(「ソルトレーク・ヘラルド」紙、1875年10月3日、6：102) その翌朝、グラント大統領はエメリー総督と共にテンプルブロックへ行き、真新しいタバナクルに入った。

土曜日の総大会午前の部の初めに、ブリガム・ヤング大管長は、ジョン・テイラー長老が献堂の祈りを捧げると発表した。その祈りを全文読んでお聞かせしたいが時間がないので、その一部のみをご紹介しよう。テイラー大管長の祈りはこうであった。「汝が古の契約の民に慈悲を賜わらんことを。おお主よ、汝がよしと見たもうときに、愛顧と懇願の精神が彼らの上にとどまり、汝が散らしたまいしすべての国々より彼らが集められ、父祖のゆずりを受け、その贖い主を知り、エルサレムが主の玉座とならんことを。」それから次のような興味深い請願をした。「おお主なる贖い主よ、道から迷い出たレーマン人に、子孫に誓約を再新するとその祖先に汝が約束したまいしレーマン人に慈悲を垂れたまえ。汝が彼らに夢とビジョンとを与え、彼らが汝を求め始めしことを感謝したてまつる。」(「デゼレトニューズ」紙24：594)

その日の午後の大会で、ジョージ・Q・キャノン長老は、家族を残し宣教師として伝道に携わる人々の名前を読み上げた。総勢105名であった。当時、宣教師に召される者は総大会においてこのタバナクルの前壇から氏名を読み上げられるのが慣例となっていた。後に宣教師の人数がふえるに伴ってこの慣例は変わり、やがて大管長から文書で召されるようになった。もし総大会で氏名を読み上げて宣教師に召す方法が現在も続いていたら、この大会では7,923名の名前を呼ばなければならない。それだけで3日間の大会の半分を使ってしまうはずである。7,923名という数字は半年前の総大会以来召された宣教師の数で、ちなみにその数は今この会場に着席している人々の数とほぼ同数である。

ジョージ・Q・キャノン長老は、献堂を控えたタバナクルのこの壇上に立ち、伝道活動について話をした。彼の言葉は、現在の大管長が語っていることを、過去から語りかけているようである。キャノン長老は次のように語っている。「長老たちは、神が世の民のただ中で行なっておられること、これからなそうとしておられることについて、警告の声を上げるべく、何百人と東部諸州に旅立って行った。その目的のために、彼らはヨーロッパに、西海岸に、太平洋の島々に、アジア、アフリカに行く。彼らは全地の面のあらゆる国々を越えていくであろう。数百万のアジアの民は、やがてイスラエルの長老たちから救いのよきおとずれを聞くであろう。……イスラエルの長老たちが告げるこの福音の声が地の端から端へ響きわたるときは間近い。それは万国へ証人として説き伝えられねばならないからである。」(*Journal of Discourses*「説教集」13：53)

時は変わり、生活の状態は違っている。しかし、この回復された福音の目的は変わらず、真理は不変である。今はすでに亡き人々の犠牲と努力は、現在の私たちにとって祝福となり、これから後の人々に対する私たちの責任を思い起こさせてくれる。この建物はその記念碑である。タバナクルは、この入口を入り、ここから音楽や言葉でそのおとずれを聞く世界中の人にイエス・キリストの福音を紹介する偉大な宣教師として立ち続けてきたのである。幾年月もの間、教会の宣教師はそのおとずれを携え、地上の何十万何百万の人を祝福してきた。彼らは今もなおその同じおとずれを携え、それに耳を傾けて信じる人を永世にわたって祝福している。その教えは真実である。私はこのことをイエス・キリストのみ名によって証する。

アーメン。





死者の贖い

生者と死者のために福音の儀式を施す責任を怠ってはならない。

十二使徒評議員会会員
ボイド・K・パッカー

兄弟姉妹の皆さん、私は昨今心に非常に強く感じている事柄を本日の話のテーマに選んだ。また、これは非常に神聖な性格をもつものであるために、普段以上に皆さんの支持の祈りを必要としている。

主はこの世におられたとき、人が救われる道はひとつ、しかもただひとつであることを明らかにされた。「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：6）その道をたどるにあたって、次にあげるふたつの事柄が極めて大切になってくる。まず第一に、人類の救いを保証する権威が、主のみ名にあるということである。「わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。」（使徒4：12）次に、永遠の生命を得るためにすべての人が通らなければならない門としての必須の儀式、バプテスマがある。

主はそれらの過程、しかもすべての過程を支配する権威が主御自身の内にしかないことを宣言されるにあたって何らの躊躇も弁解も加えられなかった。この過程を経てこそ、私たちは天父のみ前に戻ることができるのである。この理想は、使徒たちの心の中にもはっきりと描かれていたあった。それで彼らは、人が自らを救うひとつの道、しかもただひとつの道を備えるために宣べ伝えたのである。

何世紀もの間大勢の人々が、事実ほとんどの人々がその道を全く見出せなかった。そして、これについて説明することは非常に困難になった。恐らく彼らは、他の道を認めることを寛容の徳を示すものだと考えたのであろう。その結果人々は、その教義を曲げたりあるいは変更を加えたりした。

主御自身が「命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」（マタイ7：14）と述べておられるにもかかわらず、人々は「主は一つ、バプテスマは一つ」というこの厳格な言葉は、あまりにも制限的であり、排他的であると考えるのである。

バプテスマは不可欠のものであるので、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる世の人々にイエス・キリストの福音のメッセージを伝えることに、是非とも関心を持たなければならない。これは、主から戒めとして与えられたものである。

主の真のしもべは、福音の原則に耳を傾けるすべての人を改宗しようとすることだろう。また、主が不可欠のものと宣言されたバプテスマを勧めることだろう。程度の差こそあれ、ほとんどのキリスト教会で福音の伝道が行なわれている。しかしながらそのほとんどは、人々が福音を聞けるように実際に何らかの働きかけをするでもなく、ただ教会員から得られるものをもって満足しているのである。

末日聖徒イエス・キリスト教会における力強い伝道精神と活気ある伝道活動は、真の福音と権能が当教会にあるという、極めて素晴らしい証となっている。そして私たちは、この世のすべての人に福音を宣べ伝える責任を受けているのである。「全世界の人々を改宗しようというわけですね」と問われたら、「そうです。私たちは生きているすべての人に宣べ伝えるつもりです」と、私たちは答える。

ある人々は、このチャレンジに対してすぐに言うであろう。「どうしてです。それは不可能でしょう。そんなことはできっこない」と。

それに対して私たちは、「ことによるとそうかもしれません。でも、とにかく私たちはそれをします」と簡単に言ってのける。

それは不可能であるという暗示に対して、私たちは、この業を義にかなって進めることができるようにあらゆる能力と資力を投入することを喜んで決意するのである。先のチャレンジと比べた場合、現在の成果は少なすぎる感があるかもしれない。しかし、達成されつつある事柄、あるいは試みられつつある事柄を考えた場合、そこには無視し難いものがあるのである。

現在、21,000名以上の宣教師が伝道に従事しており、その特権に応えている。これは努力のほんの一部にすぎない。しかし私は、人数から受ける印象をとやかく言うつもりはない。なぜなら、私たちのあるべき状態と行なって

いることとが一致するとは決して考えていないからである。それ以上に大切なことは、もし人々が彼ら一人一人の宣べ伝えている確信の源を知るならば、それだけで十分に彼らはこの業が真実であることの証人になり得るということである。

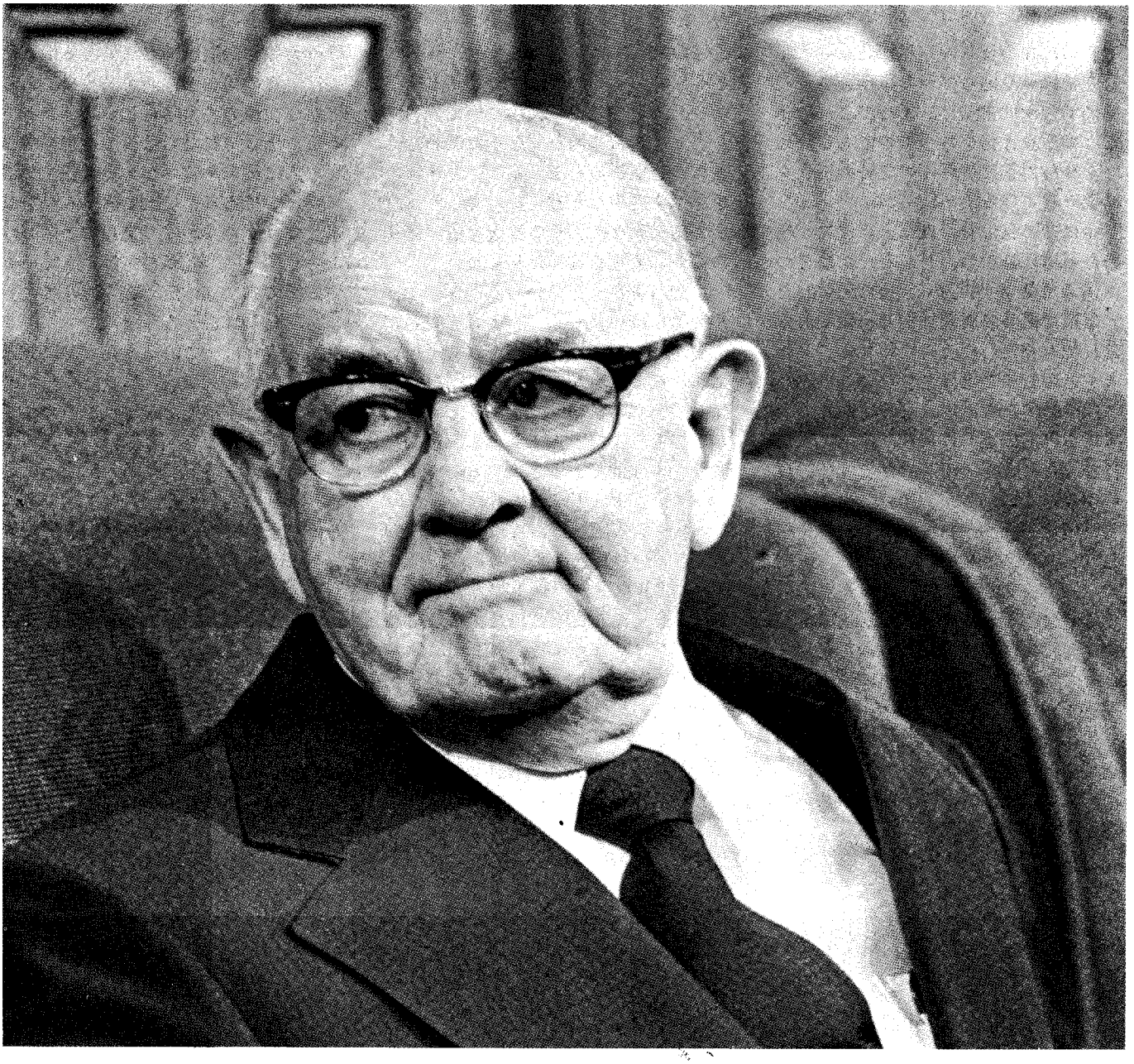
生あるすべての人を捜し求め、彼らに福音を教え、バプテスマを勧める務めを、私たちは決して休もうとは思わない。また、失意を抱くこともない。この業には大きな力があり、このことは、心から求めている人により実証されるからである。

主の教会であることを立証するもうひとつの特徴がある。それはバプテスマにも関連するものである。バプテスマを受けずに死んだ人々について、非常に不安をかき立てる疑問がある。死者はどうなるのか、と。もし人を救い得る名が主を別にしては天下のだれにも与えられていず（まことにその通りなのだが）、彼らがその名を聞くことさえなしに世を去ったならば、またバプテスマが不可欠のもので（その通りなのだが）、彼らがそれを受け入れる機会さえなしに死んだならば、彼らは一体どうなっているのだろうか。

これを説明することはむずかしい。またこれは、人類のほとんどが関係する問題である。

幾つかの宗教は、ほとんどのキリスト教教派よりも大きく、またそれらの宗教を合わせると、すべてのキリスト教教派よりも大きい。そして何世紀もの間、それらの宗教の信者たちは次々と世を去ったが、バプテスマという言葉を全く聞いたことはなかった。彼らはどうなるのだろうか。

これは人々の心を非常に動揺させる疑問である。主は一つ、バプテスマは一つという教えがありながら人類のほ



とんどがその影響下にないことはどのように考えればよいのだろうか。この疑問に解答が与えられなければ、人類の大多数が失われることになる。また、正義あるいは慈悲の律法に反することにもなる。さらに、キリスト教自体、どのように存続していくというのだろうか。しかしながら、もしも私たちが真実の教会を見出したならば、人心の動揺を招くこの疑問に対して満足できる答えも見出すことができよう。

また、答を何ら持たない教会は、どうして主の教会であると主張できるだろうか。主は、バプテスマを受けていない大多数の人々を忘れることを良しとはしておられない。

この疑問に対する答えを何ら持たないことを当惑の面持ちで認める人々は、この世における主のみ業を管理する権能、すなわち全人類に救いをもたらす業を管理する権能を主張することはできない。

キリスト教徒たちがバプテスマそのものは大して重要な意味を持たないと考えるようになったのは、バプテスマを受けていない人々の行く末に関して全く答えを持たなかったからである。また、キリストのみ名も必ずしも必要ないと思うようになった。そして、人を救い得る名はほかにあるにちがいないと、考えるようになったのであった。

この難問に対する答えは、人が考え出せるものではなかった。ただ、啓示によってのみ答えられたのであった。啓示という言葉を強調したい。啓示もまた、主の教会に欠かせない特徴である。私たちの教会が設立されたとき、啓示を通しての主との交流の道も開かれたのである。そしてこれは現在まで、絶えることも変わることもなく、この教会にある。

バプテスマを知らずに死んだ人々の疑問について語るとき、私は最も敬虔な気持に打たれる。これが神聖な業に結びついているからである。世の人々にはほとんど知られていないが、私たちはある業を従順に進めている。そしてこの業の前途には人の夢をはるかにしのぐ驚くべきものがある。これは神より霊感を受けた、真実の業である。そしてこの中に答えがある。

教会の初期の時代に、予言者ジョセフ・スミスは啓示によって、古代に建てられていた神殿に似たひとつの神殿を建るようにとの指示を与えられた。また、人類を救うためにそこで執行すべき儀式も啓示された。

次いで、キリスト教界で　一般に無視され、見過ごしにされていたひとつの古代の聖句が理解され、大きな意味をもつようになったのである。「そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」（Ⅰコリント15：29）

これが答えであった。正当な権能を持つ者の手により、全く機会のなかった人は身代りによるバプテスマを受けることができた。そうしたときにその死者は、自らの望みによって、バプテスマを受け入れることも、拒むこともできるのである。

この業は、現在キリスト教界でほんの一部の人しか信じていない、極めて基本的なある事柄をはっきりと再確認するものとなった。その事柄とは、死後にも生活があるということである。誕生がこの世の生活の始まりであると同様に、死はこの世の生活の終りに過ぎない。贖いの偉大な業は、この死すべき世ばかりでなく、死後も続くのである。

主は言っておられる。「よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。」（ヨハネ5：25）

1918年10月3日、ジョセフ・F・スミス大管長は幾つかの聖句について思いめぐらしていた。そのひとつは、次のペテロの言葉である。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるためである。」（Ⅰペテロ4：6）

このとき、驚くべき示現が開かれ、スミス大管長は、義人の群れを見た。また大管長は、彼らの間で導きと恵みを施すキリストを見た。次いで、福音を聞く機会のなかった霊たちや、福音に雄々しく従わなかった霊たちを見、彼らを贖うための業を見た。ここで、この示現についての大管長の記録を引用したい。

「私は、主が真理を否定した邪悪な者、不従順な者の中へ行って教えられたのではないことを知った。主は義人の中から軍を組織し、権威と権能をまとった使者を任命し、闇の中にいる者たち、さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行く権限を与えられたのであった。このようにして死者に福音が宣べ伝えられたのである。」（「死者の贖いの示現」、聖徒の道、1974年4月号、P.188）

当教会は身代りによってバプテスマを執行する権能を与えられている。従って死者が、説かれた福音に耳を傾け、それを受け入れることを欲するときに、この必須の儀式は執行されたことになるのである。この必須の儀式を免じられる者はだれもいない。事実、主御自身もそれを免じられなかった。

現在私たちは、課せられているこの業を果たすことに心の励みを覚え、熱心にこの業を推進している。私たちは亡き親族の記録を集め、全人類の記録を収集している。そして、古代にあったと同じ型の、聖なる神殿のバプテスマフォントで、これらの聖なる儀式を執行しているのである。

「不思議なことだ」と言う人がいるかもしれない。しかし、単なる不思議にはとどまらない。神聖な卓越した業なのだから。この業それ自体が、イエスは私たちの主であり、バプテスマは不可欠のものであり、主が真理を教えられたことを立証している。

そこで、「かつてこの世に住んだことのあるすべての人々のためにバプテスマを施そうというのですね」と問われるかもしれない。

これに対する答えは簡単で、「はい」と言うだけである。私たちはそうするように命じられているからである。

「全人類のためにですか。どうやって。それは不可能ですよ。現在生きているすべての人に福音を宣べ伝えることが

大きなチャレンジであるならば、ましてやこれまで世に生まれた人全員のために身代りの業を行なうことは、不可能とも言えるでしょう。

これに対して私たちは答える。「ことによるとそうかもしれません。でも、とにかく私たちはそれをします」と。

再び申し上げる。私たちは落胆しない。自分たちの務めを休むことも、それを果たすことに対する言い訳もしたいと思わない。チャレンジに比べた場合、現在の成果は実際に少ない。しかし、他のいかなる場所でも行なわれていないことから見て、主が私たちの働きを喜んでおられることは確かである。

すでに私たちは、数十億の名前を集めており、その業は神殿において進められている。また、将来建てられる数数の神殿において続けられることだろう。しかし私たちは、成果の大きさをとやかく言うつもりはない。なぜなら、私たちの本来あるべき状態と行なっていることとが一致するとは決して考えていないからである。

この業について深く考える人々は、死者の名前の中で集めることのできないものについて尋ねるであろう。「記録に名前のない人についてはどうなるのですか。その人々に対してはできないでしょう。名前を捜し出す方法がないのだから」と。

これに対して私は、「あなたは啓示を忘れておられる」と答えよう。私たちはこれまで、この方法によって数多くの記録を与えられてきた。啓示は個々の会員に与えられ、彼らは全く奇跡的な方法で家族の記録を見出しているである。また、他の業では見られない、この業に特有の霊感を感じることがある。そして私たちは、自分のなし得る事柄をすべて行なったときに、残りの部分が与えられ、道が開かれるのである。

すべての末日聖徒は、この業に対して責任がある。この業がなければ、福音の救いの儀式は、福音が真実であるという宣言をこの世において聞く機会のなかった人々のために施せないことになる。

この業から、生者に関連してもうひとつの恩恵が得られる。それは家族生活と家族の永遠の存続とに関係することである。私たちが最も神聖に、また大切にしているもの、すなわち自分の家族内の愛する者たちとの交わりに関わることである。

私の家族の記録にある手紙を読むと、この精神を幾分かでも感じることができると思う。アリゾナ州グレアム郡サフォードからの1889年1月17日付の手紙を読みたいと思う。これには私の先祖で初めて教会に入り、その数日後に死んだ曾祖父、ジョナサン・テイラー・パッカーのことが書かれている。この手紙は義理の娘が家族宛に書き送ったものである。

彼女は、私の曾祖父が数週間耐え忍んできた苦しみと苦難について述べた後、次のように続けている。

「けれども、私は彼のためにできる限りのことをするつもりです。それが私の務めだと思います。私の愛するお母さんのためにして欲しいと思う同じことを、私は義父のためにするつもりです。」

さらに彼女はこう書いている。「お父さんは、皆さんに、祝福の原則に忠実であるようにと言っています。そして、アブラハムと、イサクと、ヤコブの祝福が皆さんの上にあるように願い、復活の朝にまた会おうと皆さんに別れを述べています。

マーサ、涙でもう字がよく見えません。ですからこれで終わります。姉メアリー・アン・パッカーより」

私は幕の彼方でこの曾祖父を初め、祖父や父にも会えることを知っている。また、完全な福音がこの地上にない時代に生きていた先祖たちにも会えることを知っている。これらの先祖たちは、主のみ名を耳にすることなく、バプテスマの機会にあずかることもなしに、この世を去ったのである。

この教義ほど、この教会を他の教会とはっきり分つものはないことを申し上げたい。私たちはこれがなければ、他の教派の人々と同じように、新約聖書がバプテスマを不可欠なものであると宣言している言葉を受け入れながらも、ほとんどの人がそのバプテスマを受けることができなかったことを認めざるを得ないだろう。

しかし私たちには啓示がある。死者のためのバプテスマをはじめとする聖なる儀式がある。この死者のためのバプテスマを義務として私たちに課している啓示は、教義と聖約128章にある。ここで、この章の終りの部分を2、3節読みたいと思う。

「兄弟よ、われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い起てよ、兄弟たち。進み進みて勝利に至れ。汝ら喜べ大いに喜べよ。世の人、歌声を張り裂けしめよ。死者よ、王インマニュエルに永遠讃美の歌を語り出だせ。インマニュエルこそ創世の前より、われらをして死者をその囚屋(ひとや)より贖うを得しむるをことを定めたまえり。……

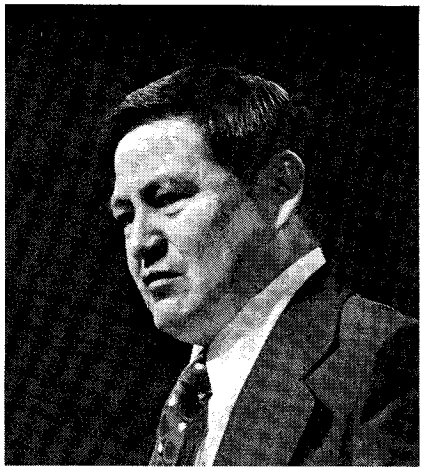
山々は喜びの声を挙げよ。汝ら谷よ、皆声高く叫べ。すべて諸々の海と乾ける地とは、汝らの永遠なる王の為したもう驚嘆すべき御業を語れ。河よ、小川よ、谷の流よ、歓びの声を挙げて流れ下れ。森よ、野の樹よ、みな主を讃えよ。堅き巌(いわお)よ、喜びに泣け。……

この故に、いざわれら一教会員として、一人の民として、また末日の聖徒として、義しきに適う捧物を主に捧げん。またいざわれら、主の神殿の完成せる時、その中に於て、主が完全に受け入れたもう価値ある、われらの死者の記録を載せたる一冊の書を主に呈せん。」(教義と聖約128：22—24)

証を述べたい。この業は真理にかなっており、神は生きておられ、イエスはキリストである。また、この偉大な務めを負って現代のイスラエルを導いている神の予言者が、今日この地上にいる。私は、主が生きておられ、死者の贖いの業を心にかけて見守っておられることを知っている。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

10月5日(日) 午後の部における説教

神の選民である私の先祖



一年365日、一週7日間、常時末日聖徒として過ごすべき時がすでに来ている。

七十人第一定員会会員
ジョージ・P・リー

兄弟姉妹の皆さん。今日このように、予言者ならびに神の王国で予言者を助ける方々の前に立てることは、大きな名誉であり、特権である。

兄弟姉妹、私は今、自分がリーハイ、ニーファイ、それにモルモン経のあらゆる偉大な予言者の子孫であることを皆さんに誇りをもって申し上げたい。私はモルモン経の民の子孫であることを誇りに思っている。私は自分の本当の先祖を見出し、自分が何者であるかを知った。私は神の息子であり、神の子供であり、モルモン経の民の子孫であり、リーハイの子孫である。モーセやアブラハム、その他の偉大な予言者たちを経て、天父にまで至る恵まれた受け継ぎをいただいている。

私はまた、自分の国の偉大なインディアンの酋長の子孫であることをも誇りとしている。レッド・クラウド、シティング・ブル、チーフ・クレイジーホースなど、民の指導者としてよく務めた立派な酋長は、私の先祖である。彼らが偉大であったことを、皆さんに知っていただきたいと思う。私は彼らが全員パラダイスにいるとしても驚かない。また、幾人かが福音を受け入れ、宣教師のレッスンを学んでいるとしても驚かない。私は立派な先祖をいただいていることを誇りに思う。

私は、インディアン保留地や各都市、また海の島々にいるレーマン人に申し上げたい。イエス・キリストは私たちの長兄であり、救い主であり、贖い主である。

私たちは素晴らしいものを受け継いでいる。天父が皆さん方、レーマン人を愛しておられることを知っていただきたい。皆さんの長兄イエス・キリストも皆さんを愛しておられる。イエス・キリストは皆さんのために死に、人々の罪に打ち勝つため自らの生命を犠牲にされた。そして、皆さんやこの世のあらゆる人々のために死に打ち勝たれたのである。現在キリスト・イエスは生きておられ、この地球の神である。



全世界の教会員に申し上げたい。争いを止め、神の子として互いに手を結ぶ時はすでに来ている。私たちには、全世界に住む天父の子供たちをもっと大勢神の王国に連れ来る大きな務めがある。私たちは日曜日だけの聖徒ではなく、一年365日、一週7日間、常時末日聖徒として過ごす必要がある。主はすべての末日聖徒が宣教師として、他の人々を主の教会に連れて来るようにと望んでおられる。

兄弟姉妹の皆さん。終りまで耐え忍び、主が再び来られる日まで忠実でなければ、日の光栄の王国に行けるという保証は全くないのである。主の教会の会員であるというだけでは、日の光栄の王国に行けるという保証は得られない。今やこのことを認識すべき時に来ている。

真理を求めていながら、神の存在を否定している全世界の兄弟姉妹に、今ふたつのチャレンジを与えたい。現在十二使徒と予言者がおり、啓示によって導かれ、水に沈めるバプテスマが執行され、神権がある教会、組織、生命の道がほかにあるかどうか捜していただきたい。そのような教会がないことをあなたは知ることだろう。私たちの教会のような運営方法をとっている組織はほかにひとつもない。イエス・キリストがかつてこの地上に、すなわち

聖書の地において組織された教会と同一の教会がここにあるのである。

それが皆さんへの私の最初のチャレンジである。次のチャレンジは、皆さんの周囲を見ていただきたいということである。何が見えるだろうか。私たちの救い主、イエス・キリストの手に成る美しい創造物である。

主は私たちのためにまことに数多くの素晴らしい事柄を行なってこられた。理性を働かせて見たときに、どうして私たちは神とイエス・キリストの存在を否定することができようか。皆さんの目の前にある木、草、宇宙、月、太陽、これらはすべて、イエス・キリストを立派に証するものである。

人類を創造できる者がだれかいるだろうか。

草や宇宙、太陽、月、雨、雪、木、私たちの食べる食物を創造できる者がだれかいるだろうか。

今私たちが目にし、住んでいるこのような美しい世界を創造できる者がだれかいるだろうか。

科学者や学識ある人々は、秩序正しく正確な美しい創造物を目の当たりにしながら、神とイエス・キリストの存在をどうして否定できるだろうか。私たちが目にするものを複製できる者はひとりとしていない。神が遣わされたイエス・キリストの存在を感じるには、これで十分である。主は生きておられる。イエス・キリストはこの世の創造主である。福音は主の計画であり、生命の道である。

死んでパラダイスに行くとき、そこにはアメリカ人の住む合衆国は見出せないであろう。私たちはみな、このことを考えなければならない。

私たちが行こうとしている場所はみな同じであることを皆さんに理解していただきたい。私はインディアンであるが、パラダイスにインディアン保留地はないだろう。ホウピー族のための保留地はパラダイスにはないだろう。日本人がそこに日本を見つけることはないし、中国人も中国を見つけることはないだろう。神の子として共に住もうではないか。私たちはみな、兄弟姉妹なのだから。もし義しく、終りまで耐え忍ぶならば、私たちは全員同じ場所に行くことだろう。パラダイスに合衆国はない。ナバホ族の保留地もない。神が備えられた生活以外に、どのような生活もないのである。

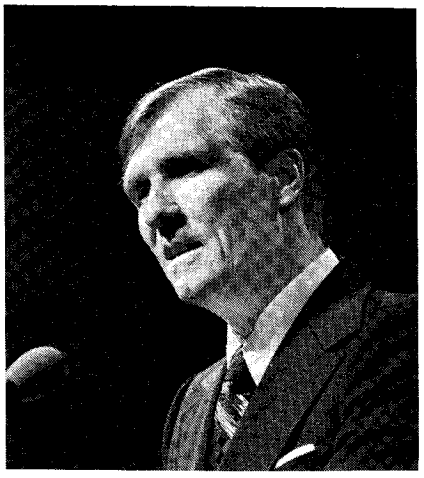
神は生きておられ、イエス・キリストも生きておられる。以上のことをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



10月5日(日) 午後の部における説教

伝道精神

教会について人々に語るよう、主は今日、その予言者を通して私たちに求めておられる。



七十人最高評議員会会員
レックス・D・ピネガー

キンボール大管長の呼びかけに応じた教会員の熱意には、全く目を見張るものがある。1973年度中新たに伝道に従事した宣教師は、月平均にして761名であったが、それが1974年には、847名に増加した。ところが、1975年度は9月末までに、月平均にして約1,200名に達している。この召しに応じた人は老若を問わず同じ精神を抱いている。その精神は、宣教師のひとりが書いた次の言葉にありありとうかがえる。

「私は涙ながらにその召しを受けました。恐れや悲しみや、当惑からではありません。主が私に寄せて下さった信頼に胸を打たれたためです。ニーファイのような信仰を、私も持ちたいと思います。大きな信仰を要する大切な務めが今私にはあるのですから。」

私たちは皆、主からの召しに応えるため、宣教師たちがそれぞれ大きな犠牲を払っていることを知っている。約束された将来を投げ打って宣教師として伝道に携わった優秀なスポーツマンも少なくない。ある若者たちは、学業や専門教育を延期して、主のために出かけている。

このような数多くの気高い人々の代表として、次にあげるブラジルの若者がいる。

フェルナンド・レキーノ兄弟は、自分の所属する小さな支部の聖餐会に出席していた。そしてその会で、伝道部長の話を聞いたのであった。伝道部長は、すべての若人は伝道に出られるように準備すべきであるというキンボール大管長の宣言を強調した。レキーノ兄弟はそのときまで、伝道に出ることの必要性についても、可能性についても考えたことはなかった。年期奉公に出て、自分の生活費と、学資にあてるお金を得ることだけで精一杯であった。両親は教会員でないばかりか、彼が教会に入ったことをよく思っていなかった。しかしなお、予言者の言葉に彼は心を駆り立てられたのである。

ある朝のことである。彼は父親とふたりきりになると、父親を愛し尊敬していることを告げた。それから、あらん限りの勇気を奮い起こして、父親の目をじっと見つめ、優しくていねいな口調で言った。「お父さん。主のために伝道に行かせていただきたいんですが。教会の宣教師として働きたいんです。」

しかし父親は頑として受け付けなかった。そのようなことのためにお金を出す経済的な余裕などないと言うのである。するとこの息子は、ほおに涙しながら父親の顔を見つめ、自分が相続する土地を売ってそのお金を伝道の費用に充てたいと答えた。

彼は父親に、神の予言者がすべての若人に、主のために伝道に出る備えをし、出かけるように求めていることを話した。そしてまた、自分が3日間断食して祈り、神権の責任を果たすために何を行なえばよいかを主から示されたことも話したのであった。父親の心は和らいだ。彼は息子のフェルナンドを胸に抱くと、ふたりは共に涙を流したのである。「お前が自分の相続を犠牲にしてまで行きたいという、それほどの気持があるのなら、行くことを許してあげよう。お前は土地を売らなくてもいいよ。伝道の費用は私が何とかしよう。」父親はこのように言った。

主のみ業を進めるために喜んで犠牲を払う従順で忠実な者のために、主は仕える道を開いて下さる。

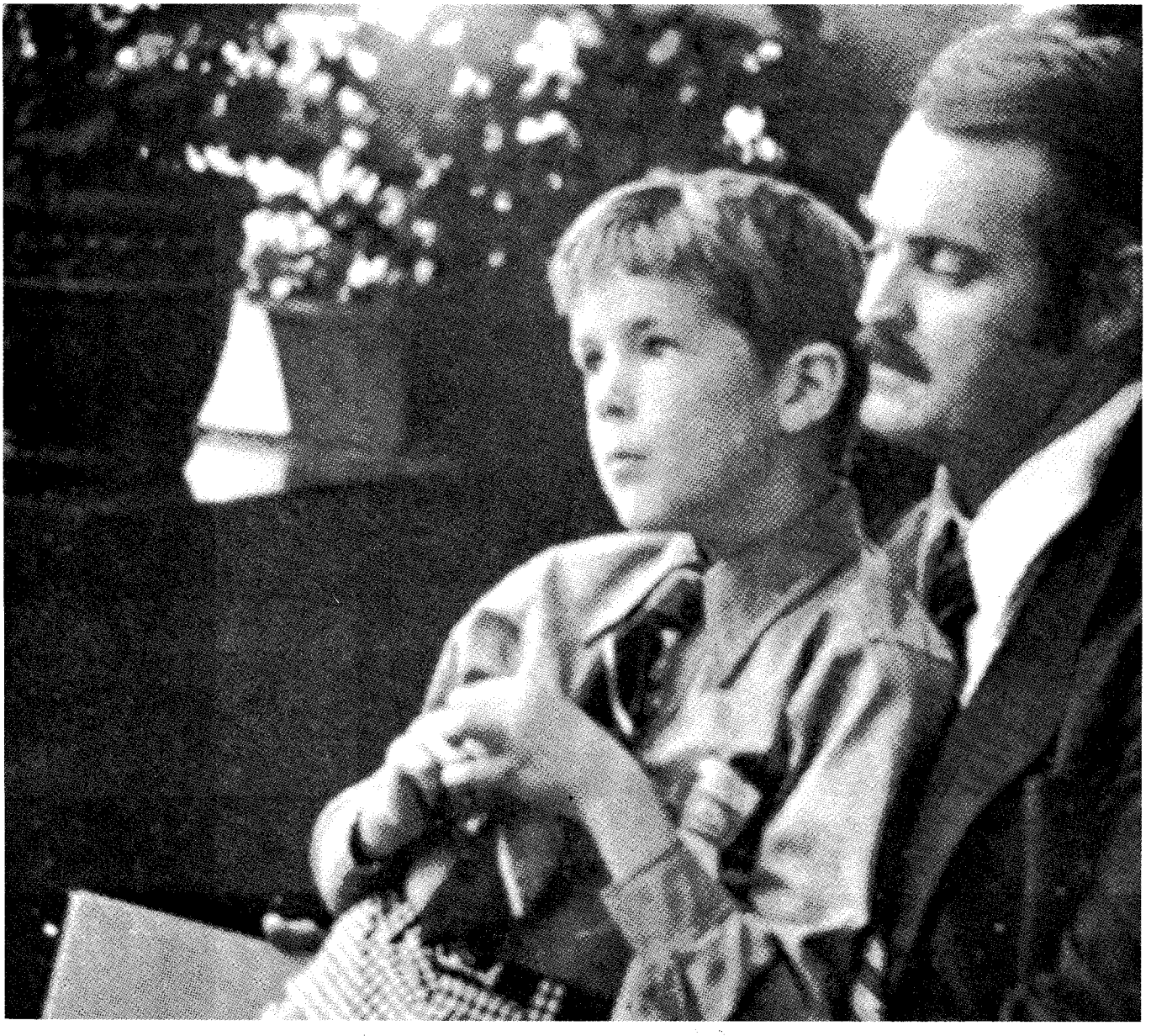
最近私は、ドイツのシュタットガルトで宣教師たちと集会を開く機会を得た。その会で私たちは、主のみ業に緊急に必要な事柄について話し、伝道をさらに効果的に進める方法を検討した。宣教師は求道者を従来の8倍にするようにというキンボール大管長からのチャレンジについて、私たちは話し合った。集会後長老たちはアパートへ戻った。そのとき、ひとりがこう言った。主の予言者がおっしゃるのだから、私たちにはできますよ。方法を見つけましょう。」そして彼らは行なったのである。研究し、祈り、働いた。その結果、翌週の末までに、5組の宣教師で200回以上ものレッスンを教えたのであった。各組ともにそれぞれの目標を達成し、8倍以上の効果を上げたのである。

私は、世界各地、訪問した所ではどこでも、これと同じような熱意と献身を目にしてきた。支部やワード部の会員たちもまた、主の召しに心を留めている。

このような雄々しい兄弟が、ブラジルのグアラテンジェタに住んでいる。彼は起きている時間のほとんどを福音の伝道に捧げている。しかもユニークな方法で。彼は会う人ごとに、E・J・サリバですと自己紹介し、名刺を渡すのである。そして相手が名刺に印刷された名前を読むのを待っている。「シオン、E・J・サリバ長老」これに対してほとんどの人は、「ここに書かれているシオンというのは何ですか」と尋ねる。すると彼はこう言う。「おや、シオンについて御存知ないのですか。では御説明しましょう。」サリバ兄弟はここで相手に、末日聖徒イエス・キリスト教会のことを紹介するのである。サリバ兄弟はこのような勇気ある方法を使い、主に対する熱意と愛をもって、天父の王国に 130名以上もの人々を連れて来たのであった。

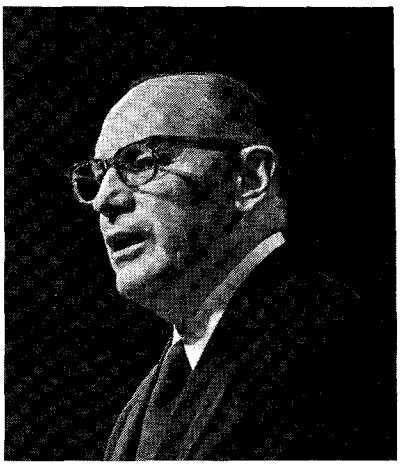
もうひとりの主の兵士は、タクシーの運転手である。彼は自動車の中に、「私は関心があります」という標語をはっている。するとほとんどの乗客は、「あなたは何に関心があるのですか」と尋ねる。そこでこの立派な兄弟は、自分が人に関心を持つ教会に所属していることを説明するのである。そしてその乗客がさらに問いかけてくると、彼はモルモン経を渡し、相手の興味を呼び起こす。そのために常時、何冊かのモルモン経を運転席の所に備えているのである。この忠実な会員は、 200名以上の人々を改宗に導いている。

現在この世にいることは何と素晴らしいことだろうか。進み行く業を目にする私たち一人一人が、その業に貢献できるように願っている。勇敢かつ忠実に奉仕の業に励むことにより、主のぶどう園にまかれた種から豊かな収穫を得ることができるように。私はこの教会が地上における神の王国であり、スペンサー・W・キンボール大管長が主の僕の頭であり、予言者であることを証する。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



10月5日(日)　午後の部における説教

みたまの言葉



みたまはヨーロッパの人々の間で働いており、耳を傾ける人々が神の大いなる祝福に与るよう備えている。

十二使徒評議員会補助
ジョセフ・B・ワースリン

兄弟姉妹ならびに友人の皆様、この聖なる場所で霊感あふれる大会に出席できることは特権である。この会場には主のみたまがとどまっている。私はそう感じているし、皆様もそのように感じていることと思う。皆様の力強い信仰と祈りが、この場にみたまをもたらし、さらにそれを強めているのである。事実、私たちは、この教会が神の教会であり、スペンサー・W・キンボール大管長がまことに天父の予言者であるということを世の人々に証するためにここに集っている。今日リー兄弟が教会幹部に支持されているのを目のあたりにしていたら、私の父はきっと喜んだろうと思う。父はインディアンの人々を愛していたからである。私たちもそうである。それであるから、私たちはリー兄弟がこの責任に召されたことを本当にうれしく思っている。

この6ヵ月間は、私にとってこれまでになく有意義で、しかもチャレンジに富み、高揚された時であった。

私たちは今日のヨーロッパの人々の中に、何かを求めてやまない心を見てきた。なぜか？　人々の心の中に満たされることのない飢えがあるからである。しかもその飢えは、福音の真理で満たされなければ、人生に空しさを感じさせ、平安を脅かすものなのである。世のいわゆる賢人が提唱した経済上の「イズム」をいろいろ寄せ集めたところで、ほとんど問題の解決にはならなかったし、本物の喜びは得られなかった。このような空しい解決策を講じることによって、人々はこの世のもの、物質的なものの力を追い求めるようになり、日々神の戒めを守ることによって、義しい堅固な家庭が築け、幸福がもたらされるという真理に対して盲目になってしまったのである。心というものは、乾ききった、満たされないままで放っておけるものではない。その飢えが何であるかを究明し、人々に悟らせるのが私たちの使命である。私はヨーロッパの人々の中に、アモスの言葉の成就を見た。「わたしがききんをこの国に送る日が来る。それはパンのききんではない……主の言葉を聞くことのききんである。」（アモス8：11）

いくつかの明らかな真理をかいつまんでお話したいと思う。最近の経験を通して、私は次第にこれらのことを深く考えるようになった。

まず、言葉の力を超越するほどの伝達手段があることを、私はかつてないほど強く感じている。

言葉とは何か。なくてはならないものである。歴史が立証するように、言葉は単に使うものとしてよりも、理解するための手段として非常に多く用いられている。相容れない気持があると、たとえ明らかな言葉を使っても、それは無意味なもの、空虚と欲求不満の媒体と化してしまうのである。

教会には言葉の障害というものはない。言葉によって伝えられるメッセージに勝る偉大な力があるからである。すなわち、みたまが私たちの心にメッセージを伝えてくれるのである。いかなる気候風土であっても、救い主の暖かいみたまは、言語に関係なく、真理を求めるすべての人に働きかける。みたまは心を向けるすべての人を訪れる全人類のためのメッセンジャーと言える。最近の経験から、私は言語に関係なく、どこにあってもこのことを感じてきた。この種のコミュニケーションは力があり、確実であることを証する。古代のペンテコステの日と同じように、みたまは今日も真理を求めるすべての人々に福音を伝えるのである。

この奇跡について教義と聖約ははっきりと述べている。

「その日、イエス・キリストを啓示するために彼らの上に注がるる『慰め主』の施したもうによりてこの能力を授けられたる者たちの口より、あらゆる人々は己が国語と己が言葉にて完全なる福音を聞かん。」（教義と聖約90：11）

みたまの力は言葉以上のものを伝える。このことはヨーロッパ地区不動産担当責任者であるピーター・モーリック兄弟の経験から明らかである。モーリック兄弟は以前市役所として使われていた建物を購入する交渉で、市長をはじめとする市の職員たちに会った。この建物が購入できれば、教会堂として使用されることになっていた。その場には隣のジャーマン町の町長も同席した。最近境界線が変わり、この取扱いについては両方の市と町が関係することになったからである。

モーリック兄弟を市長と町長、それ

に職員に紹介した紳士は、軽率にもこう言ったのである。「モーリック氏を御紹介します。モーリック氏はあるグループの代表者でして……この団体は……。」 最後になってようやく「この教会」と口にしたのだった。

するとモーリック兄弟は手を上げて言った 「市長、異議があるのですが。」

市長は答えた。「まだ交渉は始まっていないのに、どんな異議ですか。」

モーリック兄弟は次のように答えた。「交渉を始める前に、私は皆様に、私が何の代表者かを承知しておいていただきたいのです。私は今日地上において、唯一真の教会である末日聖徒イエス・キリスト教会を代表する者です。」

この言葉は笑いをさそった。そして市長はモーリック兄弟を紹介した人に向かってこう言った。「この教会について言うときは、気をつけた方がいいね。」

モーリック兄弟はこれで下準備ができたと思った。すると、町長は声を大にしてこう言った。「おたくの教会について少し申し上げたいことがあります。私たちはおたくの教会に校舎を2年以上お貸ししたことがあります。そして皆さんがとても心のきれいな人だということがわかりました。私は学校のプールによく行くんですが、ある晩のこと、教会の人々がプールの近くで何やら会を開いていました。バプテスマの儀式をしていたのですね。私はグラウンドのすみに静かに腰を下ろし、じっとながめていました。彼らは讃美歌を歌いました。美しい歌でした。それからだれかが祈り、『アーメン』と言うと、全員が『アーメン』と繰り返しました。私はその光景の素晴らしさにあっけにとられてしまいました。それから十代の女の子が立ち上がると、キリストと教会が自分にとってどんな意味があるかについて話し始めたのです。涙を浮かべていました。私も心を打たれてしまいました。そして、そこに集まっていた人々の心暖まる誠実さ、それに一致と霊的なつながりに何とも言えない感動を覚えたのです。私は家に帰ると妻にこう申しました。『この教会についてもっと研究しよう。もっと知る必要があると思う』と。」

町長の話が終わったとき、モーリック兄弟はこう言った。「町長、あなたは私どもの教会の素晴らしい監督になるでしょう。」 ここで一同は再び笑った。

こうして、この会の雰囲気は大きく変わった。そこには主のみたまがありみたまがそこにいる人々の心にささやいたのである。モーリック兄弟は感激してこう言った。「町長が私どもの教会について説明して下さいましたので、皆様は、なぜ私どもがこの建物を、しかもできるだけ安く購入する必要があるのかをおわかりいただけたと思います。」

教会はこの建物を非常に安く購入した。モーリック兄弟が勇気をもって証を述べたからこそ、これは達成できたのである。そしてこの証はみたまの力によるものであり、みたまの力が町長を啓発して話をさせ、それによって、市の職員に教会に対して好意的な印象を抱かせたのである。みたまが人々の心に伝えるものには、口で表わす言葉以上のものがある。

宣教師時代に学んだ第2の真理は、主が奇跡的な方法を用いて成し遂げるべき主の目的を告げられるということである。宣教師に召されて、イタリアに赴任したゲイリー・D・ショウ長老は、みたまのささやきに従い、これが確かな



約束の地を眺める少年。マホンライ・ヤング作の約束の地記念碑より。

ものであると確信した。ショウ長老が宣教師となってまだ2週間足らずのとき、先輩同僚が病気になった。そのためふたりの長老は一日中アパートに引きこもっていなければならなかった。そのときショウ長老はみたまに動かされ、だれかに福音について話したいという強い望みが湧いてきた。そこで電話帳を取り出すと、300万もの名前の中から3つの名前を選んだ。最初の家は応答がなかった。2番目は婦人の声だったが、福音には全く関心がないという返事だった。そればかりか、長老のおぼつかないイタリア語とひどい言いまわしが理解できないとまで言われてしまった。3番目は男の人が出た。ショウ長老が自己紹介をすると、その人はマビグリアと名乗り、実に暖かい応待ぶりだった。そして奇跡的に約束がとれ長老たちは霊的に高められ、啓発され、たのであった。第1課のレッスンが終わったとき、マビグリア氏はこう言った。「不思議なことがあるものですね。私は宣教師たちがよく街頭伝道をしていたあの通りの銀行で働いているんです。もう2年になります。宣教師たちのそばを通りながら、幾度となく話しかけようとしたんですよ。でも恥ずかしくてできませんでした。でもこうしてあなた方にお会いできたのですから。」



トーリーフ・ナファスの手に成る手車隊記念碑より。（テンプルスクウェア）

ここでマビグリア氏をマビグリア兄弟と呼ぶことにする。というのは、電話でコンタクトを受けた彼は、幾度かレッスンを受けた後、バプテスマを受けたからである。現在マビグリア兄弟は、ナポリ支部の支部長会で働いている。

ワースリン家で初めて福音を受け入れたのは曾祖父のレオポルド・ワースリンで、100年以上も昔にさかのぼる。彼はスイスで生まれ、若くして福音を信じた。しかしそのためすぐに両親に勘当されてしまった。これによって彼はソルトレーク盆地への長い困難な旅を決心したのである。それから数年後、曾祖父はスイスで伝道するようにブリガム・ヤング大管長から召しを受けた。彼はこれを快く受け、所持品すべてを売り払った。曾祖母は夫の留守中、製塩会社の塩袋を縫って家族を支えたという。

終りに当たって申し上げたい。曾祖父の行ないは確かに神から認められるものであったと私は信じている。また彼の言葉を私の思いに変えて、永遠の証として申し上げたいと思う。レオポルド・ワースリンは心からへりくだってこう述べた。「自らの務めを正しく遂行するとき、私は祝福されていると感じる。だが怠ると不幸な気持になる。だから、私たちは教会員として、自分自身をよく見つめ、忠実に自らの務めを遂行しているかどうかを問うてみるべきである。」

私の言葉も少し付け加えさせていただきたい。神は生きておられる。イエスはキリストであり、御父と御子は予言者ジョセフ・スミスにその姿を現わされた。予言者ジョセフ・スミスを通して、真実かつ永遠の福音が私たちに回復された。その結果私たちは天父の愛する子供たちとして栄えある昇栄に至ることができるのである。これらをイエス・キリストのみ名によって証申し上げる。アーメン。



家族の探求

死者を贖う業がさらに容易に行なえるように、主はその道を備えておられる。

大祝福師
エルドレッド・G・スミス

時の初めに、神はアダムを地上に置き、魚と鳥と家畜を治め、また全地を治める権能をアダムに与えられた。今日、ある人々にとって、これは至高の地位であるように思われることだろう。しかし、アダムが全地を治める権能を持っていたにもかかわらず、神は言っておられる。「人がひとりでいるのは良くない。」(創世2：18)こうして神はアダムに、伴侶として、助け手としてイブを与えられた。次いで神は、ふえよ、地に満ちよという最初の大切な戒めを彼らに与えられた。

アダムとイブが善悪を知る木の実を食べて、園から追放され、死すべき世の生活を始めるようになるまで、どれ位の期間エデンの園に住んでいたか、私たちには告げられていない。ただ私が指摘したい点は、神御自身が第一の家族を定められたということである。結婚は、人類の進歩の過程で廃止することのできるものではない。人が作った制度ではない。私たちの生活の中で最も関係が深く、大切なものはすべて、家族に関連を持つ。この世において家族の中心となっているものは愛であり、愛のある所に、私たちは幸福をも見出すのである。

確かに、人がひとりでいるのは良くない。主はその知恵によって、人がこの地上で幸せになり、また永遠にわたってその喜びを持続する道を備えられた。最も大きな喜びと幸せは、家族を通して得られる。人類の歴史が始まって以来、これは変わらない。来世は別だと言えるだろうか。家族は非常に大切である。従って主は、この世の家族はみなひとつに結び固められなければならないことを、私たちに告げられた。福千年の終りまでに、福音を受け入れるアダムの子孫は全員、神権の力によって一家族としてひとつに結び固められなければならない。この神権の権能により地上で結び固めることは天でも結び固められ、地上でつなぐことは天でもつながれるのである。

この世に来る人は全員、福千年の終りまでに、これらの結び固めの祝福をことごとく受ける機会を持つに違いない。もしそうでなければ、神は公平でないことになる。しかし、これらの結び固めの祝福を得るためには、まずバプテスマの儀式を受けてイエス・キリストの教会に入らなければならない。次いで夫婦は、この世においても永遠にわたっても結び固められなければならない。また、この結婚以外の結婚によって生まれた子供たちは、その両親に結び固められなければならない。こうするときに、彼らは新しく且つ永遠の誓約の下に生まれたかのごとく、諸々の祝福を受けることができるのである。

この律法を知らずに世を去った人々は、身代りによって、この祝福を受ける特権にあずかることができる。私たちの責任が存在するゆえんはここにある。私たちはまず、生者に福音を教えなければならない。それから、この大切な業が行なえるように、律法を知らずに世を去った家族の記録を集めなければならないのである。

教義と聖約128章から予言者ジョセフ・スミスの言葉を引用しよう。

「さてわが親愛なる兄弟姉妹よ。われ断言す、こは死者と生者とに関する原理原則にして、われらの救いに関して決して軽々に見過すべからざるものなり。それ死にたる者の救いは必要にして、死にたる者の救わるることはわれらの救いにとりて必須なることなり。パウロわれらの先祖に就きて言いたる如くわれらなくば彼らは完うせらるることなし。すなわちわれらの死にたる者なくば、われらもまた完くなる能わず。」(教義と聖約128：15、ヘブル11：40をも参照)

パウロはコリントの人々に復活の原則について教えた際、この点を次のように述べて明らかにした。

「そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」(Ⅰコリント15：29)

これは、パウロの時代に、死者のための身代りの儀式が執行されていたことを示している。

予言者ジョセフ・スミスがモロナイから受けた最初の指示のひとつに、マラキ4：5、6からの引用があった。

モロナイはこの句を次のように引用している。

「見よ、主の大いなるおそるべき日の来る前に、予言者エライジャの手によりて、われ神権を汝に顕さん。……

彼は先祖になされし約束を子らの心に植え、子らの心にその先祖を思わしめん。もし然らずば、主の来る時、全地はことごとく荒れ廃れん。」（ジョセフ・スミス2：38，39）

予言者ジョセフ・スミスはこう言っている。

「神が私たちに与えたもうたこの世での最大の責任は、私たちの死者を探すことである。」（*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.356）

このことは、このバプテスマと結び固めの業を、これを受け入れるすべての神の子のために行なわなければならないことを意味する。現在この世に住んでいる教会員だけでなく、この世に住んでいる間に機会がなくて、将来イエス・キリストの福音を受け入れる私たちの先祖を始めすべての人々のために行なうのである。

主はこの偉大な業を始めるにあたって、まず諸々の鍵と神権の権能を回復しておられる。これは、1836年4月にカートランド神殿で行なわれた。このとき、エライジャがジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに結び固めの鍵を回復したのである。次いで主は、この卓越した神権時代にこの世に来るために留めておかれた特別な霊たちを、この世に送り出された。福音を受け入れる、雄々しく強い霊たちを送られたのであった。これらの霊たちは現在、世界の至る所に送られており、福音が伝えられると、それを受け入れている。次にその人が核となって、その家族や友人が福音を受け入れるのである。こうして彼らは主の神殿に参入し、自分自身の結び固めを受け、次いで身代りとなって彼らの先祖のために結び固めを執行している。

しかしながら主は、この業を援助するために、今なお多くの事柄を行なっておられるのである。主はほかにも優れた霊たちをこの世に送ってこられた。この霊たちは、科学的な手段と設備を開発する特別な知識と訓練を受けている者たちである。そのおかげで、主のみ業の進展は早められており、また名前の収集、分類、保管、および照合が重複することなく、組織的に行なわれている。これは奇跡にも等しい。私たちが主のみ業を容易に行なえるように、主は可能な限りすべての事柄を行なっておられるのである。皆さんはこれらの手段を利用しておられるだろうか。

私たちはこれらの祝福を理解しているだろうか。もし理解するならば、大勢の改宗者が、多大の労力と多額のお金を心から喜んで費やして自分たちの両親へ結び固められる機会を得、そうすることに価値を見出すであろう。

私たちは可能な限り、あらゆる先祖の記録を集める必要がある。生半可な態度でなく、熱心に、絶え間なく、祈りの気持をもって求めていただきたい。都合のよい時まで待っていてはならない。都合のよい時など来ないかもしれないからである。年老いるまで引き延ばしてはならない。年老いては、何事もすることができないから。明日何が起こるか、私たちには全くわからない。それであるから私たちは、各家族の結び固めが行なわれるようにしなければならないのである。この業に伴う責任を逃れることのできる者はひとりとしていない。私たちは、伯母やその他の親戚がこの業を行なっていたからと考えて、言い逃れすることはできないのである。

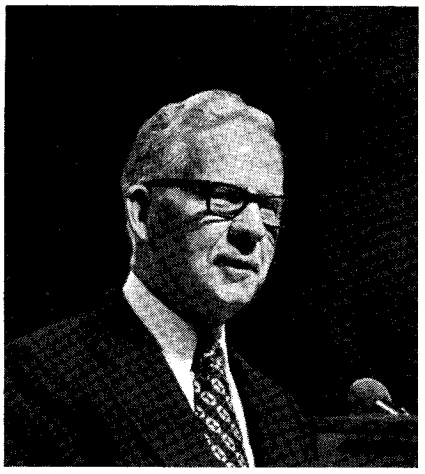
「あなたは先祖の中に、盗人や犯罪人など、好ましくない人を見出したらどうしますか」と尋ねられ、系図を探求していたある若い婦人は、次のように答えた。「先祖がどのように生きたかは、私に関係ありませんわ。ただ、この世に生きていて、この世を去ったという事実だけです。特に、私が今いるのはその先祖のおかげです。ですから、その先祖のためにバプテスマと結び固めの業を行なって、その借りを返したいと思います。それを受け入れるかどうかは、先祖の責任ですわ。」

これが、私たち一人一人に課せられた責任である。この業がなければ、私たちはだれも完全になることはできない。教会の他の責任で忙しくて、系図に少しの時間もあてることができないという言い訳を、主が受け入れて下さるかどうか疑わしい。私たちが行なうべきことを行なわなければ、だれか他の人が行なうことになる。なぜなら、それは必ず行なわれなければならないからである。自分の責任を怠るときに、どうして数々の祝福を受けることを期待できるであろうか。

全世界の人々に、励ましの言葉を述べたいと思う。快活に、勤勉に、主を信頼して生活していただきたい。そうすれば、主はあなた方を助けて下さるであろう。あなた方は恐らく、記録を集める特別な業に携わるため、あるいは特別な伝道の務めを果たすために、現在いる地に置かれたのである。従って、もしあなた方が主の導きを請うならば、主は皆さんの業を成功させ、満たされた気持を与えて下さることであろう。

大勢の立派な教会員が、多くの記録を棚に積み上げている。集めただけで、まだ神殿の業を行なうために送っていないのである。それらの記録を神殿に送れるようにしていただきたい。大勢の霊たちが、その業の行なわれるのを幕の彼方で待っているからである。「行なおう」というキンボール大管長のスローガンに従おうではないか。「行なおう」これは本大会における格好のスローガンであると思う。

私たちはこの業によって、主の再臨のための道を備えることができる。従って、この業に熱心に携わるすべての人々に主の祝福があらんことを。私はこれが主のみ業であることをあなた方に証する。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



愛は持続しなければならない

天父は私たちと同様、行ないの伴わない愛に飽きておられることだろう。

十二使徒評議員会会員
マービン・J・アシュトン

私の友人が最近、とても大切なことを学んだと自分の経験を話してくれた。まだ小さい彼の息子の話であった。友人は仕事から帰ると、息子の頭をなでて、「お父さんはおまえが好きだよ」言った。

すると少年は、「ああ、お父さん。好きでなくってもいいから、フットボールをして遊んでよ」と返事をした。この少年は、父親に欠けていたものを教えてくれたのである。

私たちも含めて世の多くの人々は、愛を単なる言葉で表わしがちである。

しかし、本当の愛は作用する過程である。まことの愛には人の行ないがある。愛が真実であるには持続しなければならない。方便やのぼせや興奮、おせじ、欲望といったものが愛と間違われることが実に多い。私たちの愛が、口に出したその場限りの表現や、そのときだけの感情にしかすぎない薄っぺらなものだとしたら、何と空しいことだろうか。先だって数人の大学生が、年上の人々の言うことで一番いやなのは、「何か私にお手伝いできることがあったら言って下さい」という言葉だと話してくれた。ほかの人もそうだと思うが、彼らは言葉よりも行ないがずっと大事だと思っているのである。

私たちは人に対する愛を、適当な間隔を置いていつも口に出して表現すべきだが、それを行ないで証明するには長い時間がかかる。まことの愛は持続しなければならないのである。偉大な羊飼いはそのように考えておられた。主は、「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」（ヨハネ14：15）、「わたしの羊を養いなさい」（ヨハネ21：17）と言っておられる。愛が続くためには行動が必要である。愛は過程である。ただの言葉ではない。口先ではない。その場限りの気分ではない。愛は便法でもなければ、都合に合わせたものでもない。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」、「わたしの羊を養いなさい」は神から与えられた宣言であり、養い維持する過程で愛が最もよく示されることを私たちに教えてくれる。

先程の友人の子息より何歳か年上で、ここから数百キロ離れた州刑務所に入っている若者から、私たちはその愛の過程についてさらに学ぶことができる。私は先日彼から感動的な手紙を受けたが、その中で彼は、現在の状態に至った原因やそれに伴う苦悩を切々と語ってくれた。彼はこのように書いている。「父は僕を全然愛しているようには見えませんでしたが、『おまえが大好きだ』と大げさに言ってキスなどするんです。だからぼくは『おまえが大好きだ』って言いさえすればいいのだと思うようになりました。家の仕事をきちんとするようにきつく言われたこともなければ、道徳や霊的なことを教えられたことも全然ありません。いまだに両親がどんな主義をもって生きているのか知らないのです。」

まだ会ったことのないこの友人の言葉をもう一度繰り返してみたい。「『おまえが大好きだ』と言いさえすればいいのだ」と。私は有益なことを教えてくれた彼を友と呼びたい。彼の言葉を、この機会に皆さんのお役に立てたいと思う。

父親の側から見れば、彼の父は養い守ったと言えないのではないだろうか。おそらく家族は食物には不自由していなかったであろう。息子は屋根の下で無事に、長い歳月を日夜、外の自然から守られていたに違いない。そうではないだろうか。しかしそれに答えるにあたって、私は彼の両親やそのほかの人たちに言いたい。養うことは、食べ物をあてがうだけのことではない。人はだれでもパンだけでは生きてゆけない。養うとは、愛によって、その人に物質にも精神にも道徳的にも霊にも十分な栄養を与えることである。守るとは、心遣いや世話や親切がほどよく混じり合った状態である。守るとは、四方の壁と屋根を与えるだけのことではない。家庭を愛に満ちたところとするためには、生活と愛の積み重ねが必要なことを私たちはいつも思い起こさなければならない。

さて、私たちはどのようにしたら、愛をよく示すことができるだろうか。自分の抱いている愛をどうしたらわかってもらえるだろうか。ペテロは主なる教師から、どうしたら愛を一番よく示せるかについて教えられた。「イエ

スが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

彼らが食事をすませると、イエスはシモン、ペテロに言われた、『ヨハネの子シモンよ、あなたはこの子たちが愛する以上に、わたしを愛するか。』ペテロは言った、『主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです。』イエスは彼に『わたしの小羊を養いなさい』と言われた。

またもう一度彼に言われた、『ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか。』彼はイエスに言った、『主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです。』イエスは彼に言われた、『わたしの羊を飼いなさい。』イエスは三度目に言われた、『ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか。』ペテロは『わたしを愛するか。』とイエスが三度も言われたので、心をいためイエスに言った、『主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしはあなたを愛していることは、おわかりになっています。』イエスは彼に言われた、『わたしの羊を飼いなさい。』」（ヨハネ21：14－17）



最近あなたが家族や友だちから養われたのはいつだったであろうか。肉体の糧や思想の糧、計画、1日の活動の予定、娯楽や楽しみ、悲しみ、心配、関心、黙想を共にしたのはいつだったであろうか。これらは、愛し、気遣ってくれる人とだけ共にできることである。あなたは不幸と試練にあった人たちを慰めに行き、かえって遺族の信仰や信頼に養われた経験があるだろうか。守り、養うことで愛を示す最良の方法は、時間を取って毎日毎時間それを証明することである。行ないが伴わないときは、愛や慰めを表わしてもそれは空しい。神は私たちを愛し続けて下さる。私たちが奉仕と励ましを続けるならば、家族や隣人は私たちを愛してくれる。まことの愛は命そのものと全く同じく永遠である。永遠の幸福が、養い、守り、気遣い続けることの中にないとどうして言えよう。神の目的を悟り、神の子供たちを理解するとき、私たちは善をなすのに疲れることはない。

天の御父はきっと、言葉だけの愛の表現にはうんざりしておられることだろう。神は予言者やみ言葉を通じて、神の道は言葉ではなく実行の道であることを明らかにしておられる。神は口先よりも行ないを喜ばれる。私たちは神への愛を、み言葉を守り、人々を養うことで示すのである。

ここで皆さんにふたつの例をお話したい。どこにでもある話だと思うが、毎月、毎日、毎時間、互いに愛を示し合っている人の例である。それがどこにでもある話だと言うわけは、私たちが常日頃、自分のまわりに行動に表われるまことの愛を見ているからである。まず最初は、突然夫に死なれたひとりの母親のことである。彼女には10歳を越えたばかりから伝道に出る年齢までの、3人の息子がいた。彼女は長年、模範と懸命な努力で、自力で経済を支え、子供たちを励まし、家族を一致させてきた。養い、守ることの成果は、3人の立派な宣教師を育て、子供たちは学生

となり、夫となり、父親となった。その息子のひとりは最近このように話している。「母はいつも時間を取って愛を示してくれたのです」と。この母親は、息子たちがなお教育を求め、自分の家族を持とうとしている現在も、まことの愛を示し続けている。

かなり前に、地域のある建築請負人の技術と心構えに感心したことがある。彼の完璧を求める気持と仕事に対する誇りにひかれて、私はいろいろ質問し、親しくなった。彼はまだ若い頃に両親を失い、何人かの弟妹をひとりで養ってきた。正式な教育は中学2年で断念しなければならなかった。そして弟や妹たちが自立できるようになってから、結婚をした。ところが結婚後1年で、妻は重い病気にかかり、長期の闘病生活を余儀なくされた。それから25年間妻の健康が徐々に悪化していく間、彼は妻とふたりの息子の面倒をみてきた。手術を受け、多額の費用がかかったが、彼はよく働き、世話をし、無条件に愛した。私は彼と話をして、自分が途方もない立派な人物と会えたことを知った。愛は持続しなければならない。愛は耐えることである。彼はめったにはいない人物だった。彼がどんな状況の下でも養い、守り、分かち合うまことの愛を知っている人であることは、彼の行ないが教えていた。長い人生の間に、悲しい出来事や危機や死別にもめげず、まことの愛の根本となる原則を実行している人たちを見ることは、何という喜びであろうか。平凡な日常生活にあっては、毎日のささいな表現がまことの愛を示し、その中にこそ礼儀や思いやりや親切が一番よく表わされることがある。私は今、機会を逃さずに息子のために時間を取り、一緒に散歩して自然の不思議を発見するなど、息子と裸で接する場を設けているある父親のことを考えている。あなたの知っている母親たちのことを考えてみてほしい。喜んで娘に料理やお菓子作りを教えている母親たち。息子に本を読んで聞かせたり一緒に読んだりして、読書の楽しみを教えている母親たち。弟に切手の収集法を教えている兄、弟の話の準備を手伝う姉、彼らも愛を行動に表わしている人たちである。「なんとつまらない、なんと平凡な」と思うかもしれない。しかし、このようなことが養うことの基であり、それは結果として、喜びと幸せを生じるのである。

もっとほかの例をあげよう。チームの少年たちのために勝つこと以上のものを求めているコーチ、デートをする娘や息子を寝ずに待ち、いつでもじっくり話合いのできる母親や父親、旅行の準備を助け合う家族など。宣教師に常に励ましの手紙を書きながら、ふさわしい相手とふさわしい時にふさわしい場所で結婚しようと身を清く保っている20歳前後の女性も、何気ない日常の愛を示す立派な一例である。またいつも変わらず妻を愛して、子供たちに日々まことの愛の何たるかを教えている父親も素晴らしい模範である。皿洗いや子供を寝かしつけるといった普段の仕事を手伝うことも、行ないが伴わないために空しく聞こえる甘い言葉よりはるかにまことの愛を伝えるものである。愛を本当に理解している人は、愛とはもともと、さりげない、継続する真心からのものであることを知っている。

家族や隣人、地域社会への伝道など、神への愛を示す機会には際限がない。家族が落胆したり反抗したり迷い出ていったりしたときに、ややもすれば愛を示すことを止める人たちがいる。しかし、愛を受けるに足りないと思われるときこそ、愛が一番必要なのである。愛はおどしや非難、失望した様子や仕返しで表現できるものではない。まことの愛には、時間と忍耐と手助けと継続する行為が必要とされる。私はひとりの長老見込み会員のことを考えている。彼は35年間というもの全く教会には不活発だったが、今では我が家のホームティーチャーとして私を養って下さる。私は彼に、「ジョン、どういうわけでまた教会に戻ってこられたんですか」と尋ねたことがある。すると、彼はこう答えた。

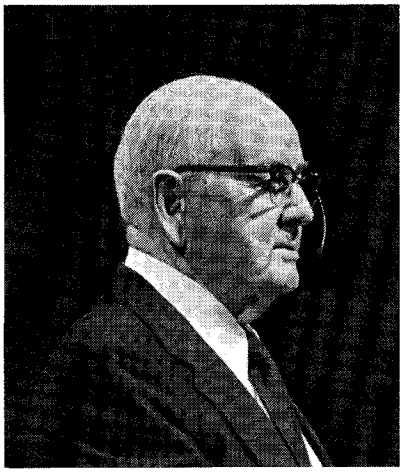
「私の妻がどうしてもあきらめなかったんです。それに今晩私のわきにすわっているホームティーチャーの同僚が上手に私を『後押し』してくれたんですよ。」特にふたりの人が愛とはどういうものかよく知っていたために、現在ジョンは幸せを得、一生懸命にみ業に励んでいるのである。

神を愛するにはその愛は継続しなければならない。家族を愛するにも、国を愛するにも、そして恋人への愛にも、自分を愛するにも、その愛を持続させなければならないのである。

愛の言葉を聞くことよりも行ないにそれを求める幼い息子や囚人、学生、母親、父親、娘、あるいは見知らぬ人、たとえどのような者であれ、私たちには、「愛しているよ」という言葉以上のものが必要であり、またそれを受ける価値があるのである。私たちは時間を取り、己を捧げて愛をそれなりの行動や実行に移す決心をしようではないか。神もまた、言葉以上のものを必要としておられる。私たちが養い、守り、保ち続ければ、神は喜ばれる。

中身のある愛は、それにあずかるすべての人に喜びと幸せをもたらす長続きのするものである。この真理を私たちが知ることができるように、天父の助けを祈るものである。願わくは家族、友人、見知らぬ人、そして私たちの予言者や神に対して時間を取り、言葉の愛が行ないにより裏付けられていることを日常の生活で示せるように。愛が神と人とに受け入れられるためには、心の中から湧き出ていつまでも続かなければならないことを、私たちが知ることができるように。

まことの愛には時間がかかることを私たちが忘れずにいられるように、天の御父に祈る。神は、私たちが時間を取って、養い、守り、世話することに伴う祝福を享受できるように助けて下さる。皆さんに証をしたい。私たちの属しているこの教会は真実である。これは、生ける天の御父と救い主イエスの永遠の愛によって回復され、守られてきた。このことをイエス・キリスト尊いみ名によって申し上げる。アーメン。



兄弟たちの説教

私たちの気持を奮い立たせた本大会の警告のメッセージは、現在の私たちに対する主の勧告である。

大管長
スペンサー・W・キンボール

兄弟姉妹の皆さん。3日間、延べ8回のセッションにわたって開かれた栄えある大会も、間もなく終わろうとしている。幹部の兄弟たちは心から主の教えを説き、主イエス・キリストの福音に関わる数多くの偉大な真理に心を向けるよう注意を喚起してきた。

この大会に出席して説教を聴いた指導者ならびに教会員は、霊感を受け、心の高まりを覚えたことと思う。また幹部の兄弟たちの説教を聴いて心に浮かんだ思いを、数多くメモにしてきたことであろう。あなた方指導者がその務めを完全に果たせるように、有益な提案が数々与えられた。また、自分自身の生活を整えるために役立つ提案もたくさん与えられた。私たちがこの大会に来た第一の理由はここにある。

私は自分の席に座っていながら、今夜この大会を終えて帰宅してからのことを心に思い巡らしていた。私の生活には、完全にする余地のある事柄が非常に多くある。私は心の中でそのリストを作っていた。そして今、大会を終えたらすぐにそれを始めたいと思っている。

あなた方は、福音の原則を非常に力強く語る兄弟たちの言葉を聞いてきた。ベンソン兄弟がその霊的な説教の中で、神の不変の律法は天上にあっても同じく不変であると語る言葉をも、私たちは聞いた。人々や国家がその律法に背くときは罰が下るにちがいないと、ベンソン兄弟は語っている。彼らは滅びることだろう。罪は罰を要求するからである。さらに彼はこう語っている。「それ故、私たちは、主の謙遜な僕として、国々の指導者たちに向かい、神のみ前にへりくだるよう、また神の霊感と導きを求めるよう勧める。」大胆な声明である。しかし全くその通りなのである。

あなた方がお聞きになったように、トーマス・S・モンソン長老は、十二使徒評議員会会長がいかに主の霊感を受けて幹部の訪問先を変えているかについて話した。モンソン長老は、死を間近にした子供に祝福を授けるため、必要な場所に遣わされたのであった。モンソン長老は私たちに、どのようにして予定が変更され、彼がその地の大会に赴くことになったかを話してくれた。その訪問時に彼は、130キロ以上もの道を車に揺られ、やがて幼な子に別れを告げなければならなかった家族に会ったのである。

自制力を失い、放縦な生活の欲求に屈して、その力を失うことになった偉大な権力者の例を幾つかあげて語ったシル長老の言葉を、あなた方はお聞きだろうか。熊手でごみを集めることに専念し、冠の申し出を断わった男の話「天路歴程」についても彼は話した。

またシル長老は言っている。「私たちには大義がある。世の中で一番の大義がある。問われているのはこれだけである。『私たちはどのように戦うのか』と。」

家庭の夕べプログラムについてのカリモア長老の話もあった。何と素晴らしい話であろうか。あなた方はみな、それぞれの家に帰ったら、家庭を築くこの栄えあるプログラムを怠ることなく実施していただきたい。扶助協会大会で述べられたように、悪魔はどこを攻めればよいかを知っている。悪魔は家庭を攻め、家族を破壊させようとしている。悪魔はそれを望んでいるのである。幹部の兄弟たちが述べたように、彼らの述べたサタンの業は結局、家庭、家族、両親、それに愛する者たちを破滅に追いやるものであることがわかるであろう。これこそ、サタンが欲していることなのである。私たちの家族の中でサタンがこのようなことを行なえないように、心の備えをしようではないか。

タトル長老やその他の兄弟たちから偉大な伝道活動の話を聞いた。

ロムニー副管長は聖典を引いてこのアメリカ大陸の国々の歴史について詳しく語った。ニーファイ人とジェレド人について話し、次いで主の約束を取り上げて語った。この約束の地を所有する国民は、この地の神であるイエス・キリストに仕える限り、決して束縛を受けず、天下のいかなる国々からもしいたげられることはないのである。これについて語った言葉は、合わせてもわずか数語に過ぎない。しかし、それは何と大きな価値ある約束であろうか。

マッコンキー長老は、千年ごとに1

度か2度、大きな祝福が下されると語っている。そしてそのことを詳しく取り上げ、この神権時代に私たちに与えられた偉大な計画、すなわち福音の回復の計画について話している。

ハンクス長老は、息子をしつけ、教え、導く父親の力と、そのために何をなせばよいかについて語った。

あなた方はヒンクレー長老の言葉も聞いている。ヒンクレー長老は、現在の世の人々を押し流さんとしているポルノの洪水、それに性と暴力が衆目を集めていることを語った。彼は私たちに、指導者たちすなわち州議会がこのような状況を制する適切な法を制定するよう求めている。　そして、彼らがそれを行なうときに感謝を述べ、もしも行なわなければそうするよう少し注意を促すように勧めている。私もその通りだと思う。

教会は委任がなければ効果的にその機能を果たさないと、ハイト長老は語っている。委任するためには、神権が必要である。神権はすでに私たちに与えられている。従って、業を押し進める備えはできているのである。

その他すべての兄弟たちの話を引き合いに出せたらと思う。これらの説教はすべて例外なく有益なものである。席に着き、耳を傾け、祈ったときに、実に私たちはその話に胸を打たれたのである。

今朝この建物の歴史について語ったハンター長老の話について述べたいと思う。私はもうこの地に久しい。私はこの地で生まれた。しかし今日のような話を聞いたことはなかった。これらの善良な民、私たちの先祖が払った犠牲と労苦の美しい物語に感謝している。私たちは先祖のお陰で、少なくとも不自由なくこの偉大なタバナクルに集えるのである。何と長い期間使われてきたことだろう。彼が語ったように、100年間も使われてきたのである。この建物は100歳にもなるのである。

この建物の中で、予言者や使徒や、その他の指導者たちが数多くの偉大な説教を述べてきた様が思い出される。兄弟たちが心から捧げた祈り、長年続いている合唱団や指導者たちの姿が思い出される。この建物は何と大きな貢献をしてきたことか。私は少なくともう100年間この建物が存続するようにと願っている。

ハンター長老は伝道の業について述べるにあたり、もし伝道に行く人々の名前がこの説教台から読み上げられるとしたら、それだけで丸一日かかると述べた。今年召された宣教師は、タバナクルの収容人数、すなわちこの会場におられる方々とほぼ同数となっているのである。私たちがあなた方を全員伝道に召したらいかがであろうか。

そのほかの素晴らしい説教についても述べる時間があればと思う。なぜなら、私にとって、これらの事柄をまとめ、自分が聞いたこと、覚えておきたいこと、そして実行したいことを心の中で整理することは助けとなるからである。

結婚に関してのペリー兄弟の力強い説教について取り上げたい。これは現実の問題である。サタンは私たちを破滅に導く事柄にねらいをつけている。その筆頭が結婚ではないだろうか。私たちが結婚を止め、家庭生活を放棄したら、サタンにしてやられることになる。

兄弟姉妹たち。この福音はイエス・キリストの福音である。耳を傾けるすべての人々にとって価値あるものである。この3日間に私たちが語ってきたことは真実である。全くの真理である。耳を傾けて聞くすべての人に救いと昇栄を必ずもたらすものである。

これはキリストの福音であり、キリストは私たちの主である。これはキリスト教会である。私たちは主に従い、主を愛し、主をたたえ、主に栄光を帰す。今こそ私たちは前進し、あらゆる点において主に従わなければならない。福音は回復され、現在私たちのために完全な福音が地上に置かれている。かつてこれほどまでに完全で、広汎に及ぶ福音はなかった。私たちはこれまでの時代でこれほどのものを知らない。福音は今日、私たちをはじめ、それに耳を傾ける幾百万の人々のために地上に置かれているのである。人々がそれを放棄し、無視するという誤ちを犯すことのないように願っている。耳を傾けてきたあなた方に、神の恵みがあらんことを。

また、現在この会場にいるすべての人々に、神の恵みがあらんことを。あなた方が家族のもとに戻るとき、神があなた方と共にその家庭に行かれるように。平安があり、あなた自身の人生も家族の生活も大いなるものとならんことを。これらの祝福を主に願い、ここで私の証を申し上げたい。この業は神の業であり、神は生きておられ、イエスはキリストであり、救い主であり、贖い主である。主が計画された生命の道は、すべての点にわたって正しく真実である。あなた方への大きな愛と感謝の気持をもってこの証を申し述べたい。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



予言者の兄であり、共に殉教したハイラム・スミス。マホンライ・ヤング作。（テンプルスクェア）

「全世界に出て行き」

復活された救い主はガリラヤの山で11人の弟子に姿を現わし、こう言われた。

「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し。」（マタイ28：19）

このとき弟子たちに与えられた責任は、今日、教会の伝道部門の目指すところである。

キンボール大管長のチャレンジに答えて、世界各地で伝道の業が飛躍的な発展を遂げていることは、最近の伝道役員会の報告が示す通りである。

世界の至る所における大会や説教の中で、キンボール大管長はさらに多くの宣教師が必要であることを強調している。また、福音を教えるために「歩みを早めよ」と叫び、「さらに備えをなさなければならない」と繰返し述べている。

1974年、キンボール長老が予言者、大管長に就任した当時、世界中の伝道部数は111であった。それが、1975年には133になり、19.8パーセントの増加となっている。

来年の目標は163であり、この数字は1975年の22.6パーセント増ということになる。

伝道部の数が増えると、当然のことながらキンボール大管長が言われたように「さらに多くの宣教師」が必要になり、私たちはそのチャレンジに応えていかなければならない。

1973年9月現在の専任宣教師総数は15,903名であった。

翌年9月には、10.7パーセントの増加で、17,557人。さらに1975年9月には21,163名に達している。これにはもちろん、数万名を数えるステーキ部宣教師は含まれていない。ちなみに1975年11月3日現在、ステーキ部宣教師の数は21,860にのぼっている。

1974年9月から1975年9月の1年間に、13,004人もの宣教師が召された。その結果、帰還した宣教師を差し引いても、その数は増している。

さらに宣教師の努力の賜、すなわち主の子らをバプテスマの水に導いた数は、昨年よりも26.6パーセントも多くなっている。伝道部進歩状況報告書によると、1973年9月から1974年9月までのバプテスマが74,970名であるのに対し1974年－75年は94,886名となっている。

すべての国民に教えよ…

伝道部数	
1974年	111
1975年	133
1976年（目標）	163

彼らにバプテスマを施し……

バプテスマ数	
1974年9月	74,970人
1975年9月	94,886人

キンボール大管長は言われた……
「さらに多くの宣教師が必要である。」

宣教師数	
1973年9月	15,903人
1974年9月	17,557人
1975年9月	21,163人

1974年9月から1975年9月

伝道部増加率	19.8%
宣教師増加率	20.5%
バプテスマ増加率	26.6%
専任宣教師一人当たりのバプテスマ	4.9人

ブラウン長老、クリスチャンセン長老 12月2日逝く



ヒュー・B・ブラウン長老



エルレイ・L・クリスチャンセン長老

12月2日、ふたりの教会幹部がユタ州ソルトレーク・シティーにある末日聖徒病院で亡くなった。十二使徒評議員会会員のヒュー・B・ブラウン、十二使徒評議員会補助のエルレイ・L・クリスチャンセン両長老である。

ふたりの幹部が日を同じくして天に召されたのは、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殉教以来、初めてのことである。

クリスチャンセン長老は、午前5時に胸痛が起こったため入院し、午前7時45分に息を引き取った。担当医の話では、心搏動停止に余病が併発したためとのことである。78歳であった。

ブラウン長老が息を引き取ったのは午後2時、92歳であった。

長い間病床に伏していたが、老衰に余病が併発したためと、医師は話している。

ブラウン長老は十二使徒評議員会補助として、大管長会会員として、また十二使徒評議員会会員として主に仕えた。葬儀は12月5日ソルトレーク、タバナクルにおいて、十二使徒評議員会によって行なわれた。

スペンサー・W・キンボール大管長が葬儀を管理、司会し、最後に弔詞を述べた。他に第一副大管長N・エルドン・タナー長老、十二使徒定員会のマービン・J・アシュトン長老も弔詞を述べた。

家族からの弔詞は、孫のエドウィン・ブラウン・ファーメイジが述べた。

クリスチャンセン長老の葬儀は、12月4日正午からテンプルスクウェアのアッセンブリーホールで行なわれた。スペンサー・W・キンボール長老が管理し、最後に弔詞を述べた。司会は第一副管長N・エルドン・タナー長老が務めた。

他に十二使徒評議員会会長エズラ・タフト・ベンソン長老、十二使徒評議員会会員トーマス・S・モンソン長老、L・トム・ペリー長老が弔詞を述べた。

地区代表セミナーの報告

「エンサイン」編集主幹
ジェイ・M・トッド

1975年10月の半期総大会に先立って開かれた地区代表セミナーにおいて、ゴードン・B・ヒンクレー長老より、新しい方式による地区集会についての説明があった。従来の地区集会は年に2度ずつ、年間を通じて様々な地区で開かれていたが、今後は各地区で年に1度だけ6月に催されることになる。また、これによって今後中央の補助組織の大会も廃止される。

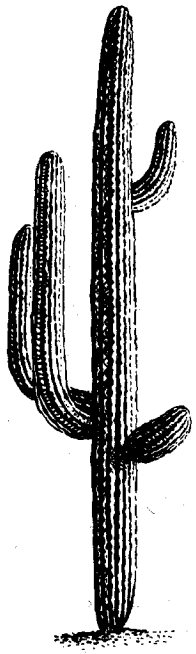
ヒンクレー長老より、新しい地区集会の目的についての説明もあった。年に1度、指導者に教会のプログラムに関する指針を与えることがその主な目的である。この集会では、「十分に時間をとって、指導者に責任とプログラムの紹介ならびに訓練が与えられる」と、ヒンクレー長老は語っている。

特に、十二使徒会地区代表の指示の下に開かれる1976年6月の地区集会の概要が、以下のように紹介された。

1. ステーキ部神権組織ならびに補助組織会長会全員が出席する。各ステーキ部からの出席者は以下の通りである。ステーキ部長会、高等評議員、ステーキ部幹部書記、ステーキ部書記、定員会会長会、グループリーダーおよび補助、監督会、ワード部幹部書記、ワード部書記、ステーキ部ヤングアダルトおよびスペシャルインタレスト評議会（男性および女性）代表、ステーキ部扶助協会会長会および書記、ステーキ部初等協会会長会および書記、ステーキ部日曜学校会長会、子供日曜学校主任および書記、ステーキ部若い女性ディレクター、アドバイザーおよび書記。神権指導者は、この集会に招待されているステーキ部ならびにワード部の指導者に、あらかじめ休暇をとり、この「年に一度の大切な集会」に出席するよう勧めていただきたい。
2. 集会時間は7時間ないし9時間で、全時間を学習にあてる。
3. 神権指導者は全員、神権組織の教科課程と福音の学習、神権役員会集会、およびバプテスマとフェローシッピングについて話し合う。
4. 昼の時間に文化活動の発表を行なう。文化活動としては以下のものがある：美術品の展覧、伝統芸術、ホームメーキング技術と実演、手芸、コレクション、成功をおさめたステーキ部行事のポスター、小規模な音楽あるいは演劇グループによる発表。地区集会出席者のために、文化活動の夕べを開いてもよい。その内容としては、著しい成果をあげた過去の行事の発表、音楽祭、ダンスフェスティバル、演劇祭、ミュージカルコメディー、ロードショー、タレントショー、演説祭などが考えられる。

メキシコに16のステーキ部

メキシコ・シティー・メキシコカマロネスステーキ部
ステーキ部長　ジョルジュ・O・ロハス



94年前、十二使徒評議員会のモーゼス・サッチャー長老が福音を伝えるためにメキシコの地を献納して以来、メキシコの聖徒たちの間に数々の重要な出来事が起こった。例えば、1972年にはハロルド・B・リー大管長がメキシコ・シティーで地域総大会を管理し、1974年には、スペンサー・W・キンボール大管長が16,000名の会員、宣教師が集った宣教師大会で説教された。これはごく最近の出来事をあげたにすぎない。

ところが1975年11月8、9日に驚くべきことが起こった。この偉業はメキシコ・シティーの聖徒たちの心に長く留められることだろう。メキシコ・シティーにある5つのステーキ部が15のステーキ部になったのである。それも同時に。いまだかつて、これほど多くのステーキ部が一度に組織されたことはなかった。13のステーキ部が新たに組織され、ふたつのステーキ部が組織変えされたのである。続いて11月13日木曜日に16番目のステーキ部である、メキシコ・ポサレカステーキ部がメキシコ、ベラクルス伝道部から組織された。

メキシコに最初のステーキ部であるフアレスステーキ部ができたのは1895年のことである。当時フアレスステーキ部は、それより9年前にメキシコ、チワワ州の北西部に定着したアメリカモルモン開拓者のグループの中に生まれたものであった。そして次のステーキ部は1961年メキシコ・シティーにおいて組織された。純粋なレーマン人のステーキ部である。それ以来この国には、14年間で24のステーキ部が生まれ、今日26のステーキ部と（7つの伝道部）がある。

メキシコ・シティーの5つのステーキ部は、過去14年間で教会員の指導力が一段と向上した。畑は耕され種がまかれた。その中で教会は新しい組織の備えをしたのだった。

驚くべきこの出来事は、2ヵ月前、J・トーマス・ファイアンズ長老が教会幹部としてメキシコに住むようになったそのときからすでに準備されていたのである。ファイアンズ長老はメキシコの地に足をおろしたときから、メキシコの聖徒に特別な愛と思いを示された。そして、ステーキ部を分割し、より質を向上させること、教会員の移動範囲を狭めること、このようにしてメキシコにおける教会の飛躍的な発展対応すること、これらの必要を感じ取ったのである。小さいステーキ部の方が会員への訓練も行き届き、指導効果も高まる。毎月1,000名と予測される改宗者に対してもよくフェローシップができるのである。

このことがファイアンズ長老から5人のステーキ部長に提議された。5人はただちにそれを受け入れた。そして大管長会に申請され、承認されたのである。

ハワード・W・ハンター長老が6日の晩この地に到着したときには、すべてが整っていた。7日金曜日の午前9時から午後9時までの間、200名以上の神権者が面接のために呼ばれた。実に価値のある一日であった。ハンター長老は、主がステーキ部を管理するよう望まれている15人の兄弟を見出した。

翌日と翌々日、聖徒たちは6つの会場に集まり、主の使徒から新しいステーキ部長の発表を聞くという最も霊的な経験を味わったのである。ハワード・W・ハンター長老はJ・トーマス・ファイアンズ長老ならびに4人の十二使徒会地区代表と共に8日(土)午前10時から9日(日)午後7時までの33時間のうち、18時間を6つのステーキ部大会の管理に費やし、またステーキ部センターからステーキ部センターへの移動のために合計9時間を要した。休息と食事の時間はわずか6時間であった。

さらに、ハンター長老とファイアンズ長老そしてふたりを助ける他の兄弟たちは、45人のステーキ部長会を任命し、96ワード部、288人の監督会と、12支部、36人の支部長会ならびに各ステーキ部の高等評議員を按手任命した。

パリに最初のステーキ部組織される

1975年11月16日十二使徒評議員会のマーク・E・ピーターセン長老によってパリに最初のステーキ部が組織された。

この新しいステーキ部のステーキ部長には、ジェラール・ジロ・キャリエ兄弟が、副ステーキ部長にはジェームズ・スチーブン兄弟、サージ・コンバース兄弟が召された。

ベルサイユの教会堂で開かれたステーキ部大会には、七十人第一定員会のチャールズ・A・ディディア長老および十二使徒会地区代表のジュコブ・ド・ジャージェ長老も列席した。

フランス・パリ伝道部から組織されたこの新しいステーキ部には、5つのワード部と3つの支部がある。

フランスで最初に伝道したのは、ウェールズ、アバデア出身のウイリアム・ホーウェルである。彼は福音の扉を開くため、1849年7月、英国伝道部伝道部長会によって、フランスに派遣された。

レアブールの港に着いたホーウェル長老は、1849年7月30日に最初のバプテスマを施した。オーガスタス・サンタナという人であった。1850年4月5日ボローニアーブロニュースーメに最初のフランス支部を組織した。当時会員は6名だった。

1851年の初め、カーティス・E・ボルトン長老によって、モルモン経の翻訳が始められ1851年5月には「デゼレトの星」がジョン・テイラー長老によって出版された。

この最初の伝道部は今日、フランス・パリ伝道部、フランス・ツールーズ伝道部、スイス・ジュネーブ伝道部、ベルギー・ブリュッセル伝道部の4つの伝道部にふくれ上がった。

ジロ・キャリエ新ステーキ部長は、1944年2月21日、フランスのリーブルに生まれた。1968年11月30日、フランス、ツールーズでバプテスマを受けた。1965年7月12日にアニー・レベリオンと結婚し、4人の子供に恵まれている。

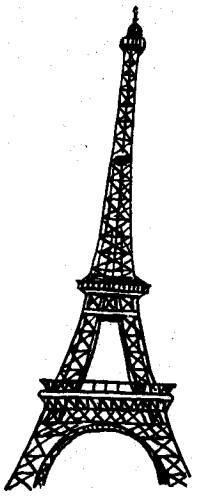
ジロ・キャリエ兄弟は土木技師である。これまで、副地方部長、地方部長、副伝道部長、支部長を歴任した。

スチーブン副ステーキ部長は1938年5月7日、マサチューセッツ州スプリングフィールードで生まれ、1963年3月19日、リディア・J・トーマンダーと結婚、5人の子供に恵まれている。

これまでフランス・パリ伝道部の家庭学習セミナリーコーディネーター、高等評議員、フランス・パリ伝道部副伝道部長を歴任した。スチーブン兄弟はフランス、フォンテンブローにある商業管理学校の組織形態学の教授である。

コンバース副ステーキ部長は、1946年7月1日、フランスのエピナルで生まれ、1970年3月16日教会に改宗。1972年1月17日、スイス神殿でダニエル・バステットと結婚し、ふたりの子供に恵まれている。

コンバース兄弟は、支部書記、幹部書記、副支部長、支部長、地方部長、副地方部長を歴任した。



シアトルに神殿

1975年11月15日、大管長会は今年3回目の神殿建設の発表を行なった。ワシントン州シアトルである。発表に続いて、シアトル北ステーキ部センターにおいて、ワシントン、オレゴン、北部アイダホおよびブリティッシュコロンビアに住む約170,000の会員を代表するステーキ部長や他の役員の間に話合いが行なわれた。神殿の敷地については追って発表されることになっている。

建設は1976年末に始められ、その後2年ほどで完成の予定である。神殿の地区内に住む教会員は、建設費の一部を負担することになる。シアトル神殿は19番目の神殿である。このほかにふたつの神殿建設が発表されている。1975年3月1日発表のサンパウロ神殿、および1975年8月9日発表の東京神殿である。また開拓者がユタに最初に築いた神殿を含むふたつの神殿が、長期間にわたる修理を終え、新たに献堂された。アリゾナ神殿とセントジョージ神殿で、献堂日はそれぞれ1975年4月15日、1975年11月11日である。シアトル神殿地区内には現在36以上のステーキ部があり、発展が期待されている。

私と安息日



日本札幌伝道部　小樽支部
和田　健一
ひろみ

安息日はとても大切です。そう知れば知るほど、私はつらくなりました。なぜなら、私の仕事は調理師で、日曜日はいくら安息日とわかっていても、仕事を休むわけにはいかなかったからです。神権会と日曜学校を終えたら、急いで帰り、仕事をします。「聖い安息日を感謝します」と言うお祈りの言葉が、いつも私の心を暗くしていました。ある日、支部長と面接がありました。「兄弟、どうですか。安息日を守ることはむずかしいですか。」私はとても大変ですと答えました。でも支部長は「大丈夫、兄弟自身が守りたいと望むならいつか必ず守れます」と約束してくれました。しかし、支部長の言葉が励みになったもののこの仕事をしているうちはとてもむずかしいと、自分自身あきらめていました。ただ、いつかは自分で店を持って安息日を必ず守ろうと言う気持には変わりなく、いつもお祈りの中に入れていました。私は、この教会が確かに主イエス・キリストの教会であり、福音が真実なものであることを良く知っていましたので、安息日を守りたいと望んでいる者には必ず主が助けて下さるということを信じ主がどのように答えて下さるか待ちました。でも内心、やはり無理だろうと思っていました。今の姉妹と教会で知り合い、1年後に結婚しようと決めたのはその頃です。そうなってくると、大神権を受けることがどれほど大切かということを痛切に感じるようになり、安息日を守れない自分が情なくなりました。そうこうしているうちに今度は体をこわしてしまい、1月から2月まで入院するはめになりました。4月に結婚する予定だった私は非常に心配でした。でも姉妹をはじめ宣教師や兄弟姉妹がいろいろと準備をして下さいましたので、結婚式は予定通り4月にできることになりました。そして2月の末に退院したのですが、退院の数日後、神様はとても不思議なことをして下さいました。ある店の主人をしているおじが、良い場所があいたから自分で店をやらないかと言うのです。私は飛び上がらんばかりでした。でもひとつ、安息日のことだけが心配でした。ところが聞いてみるとその場所は市場のすぐ横で、しかもその市場は日曜日が休みなのです。私はこれだと思いました。確かに神様は安息日を守れるように、私たちのために本当に不思議な方法で独立開業の道を示して下さったのです。

4月3日、私たちはたくさんの人たちに祝福され、結婚できました。そして、その月の10日、無事開店することができました。あれほど私を悩ませていた安息日の戒めを、今は自分の意志で守ることができるのです。神さまは確かに祈りに答えて下さいました。それからしばらくして、地方部大会でとうとう大神権も受けることができました。

私はよく知っています。神様は確かに祈りに答えて下さいます。そして努力に応じて祝福を与えて下さるのです。私たちは、この世の本当の宝物は何かを、また最も大切なものは何かを知っています。では、私たちにふりかかる試練は、一体何でしょう。苦しみや悩みは、一体何でしょう。そう、試練は主のみこころなのです。何の苦しみにもあわず、何の苦労もしないのならばこの天地を造られ私たちが主御自身に似せて造られたことは何の意味がある

のでしょう。なぜ私たちはこの地にいるのでしょう。私たちがどういう方法で安息日の試練を乗り越えるかを主は、ごらんになりたかったのだと思います。ここに私たちの現世の目的があります。私たちは試しにあうその道々において主を知り、認める必要があるのです。そして、主の最も望まれる方法で、その試練を乗り越えることが大切です。私は、この安息日という大きな問題について主に祈り、助けを求めました。そして、確かに主は私の祈りに答えて下さり、それ以上の大きな恵みを与えて下さいました。苦しいときに主に祈ること、それこそ主の最も望まれる問題解決の方法です。私たちは今、本当に幸せです。私はよく知っています。本当の恐ろしいことを。それは、外的要因の中にはありません。
そうではなく、私たち自身の中にあるのです。高慢になったり、祈りを忘れたり、主と私たちの関係を忘れることなどが、それにあたります。自分自身をよく管理し、家庭を主の望まれるような愛と一致の精神で守ろうとするとき、外から来る要因は、私たちにとって何ら問題ではなくなるのです。確かに今の世は末日です。主は生きています。と同時にサタンも生きており、私たちに大きな影響を及ぼしています。いつも主に祈り、みたまを受け、主にあっていつも強くありましょう。

確かに主は、祈りに答えて下さいます。この教会は真実です。また私たちの業は主の業です。この福音が確かに、天のお父様の所まで行ける真実の福音であることを証します。

この証をすべて主イエス・キリストをのみ名によって致しました。アーメン。



木下八千代姉妹

栄えある文化の日の受章

日本仙台伝道部　盛岡支部

昨年の11月３日、文化の日に、日本仙台伝道部の会員である木下八千代姉妹に藍綬褒章（らんじゅほうしょう）が授与された。この章は自己を犠牲にして仕事に貢献した人々に与えられるもので、木下姉妹は、33年間理容ならびに美容の分野で広く社会に貢献してきた。

これまで美容学校を設立した他、岩手県美容業環境衛生協同組合理事など多くの職を歴任したが、一婦人としてその陰には幾多の困難があり、末日聖徒としても私たちが模範とするところが多い。

彼女は1907年９月８日北海道札幌市で10人兄弟の末子として生まれ、1930年に木下克郎氏（医師）と結婚し、３人の男子に恵まれた。しかし、突然夫克郎氏に先立たれ、33歳の若さで３人の子供を育てなければならなくなった。彼女は「くじけてはならない」と自分に言いきかせ、決意をしてマリールイズ美容学校に入学して洋髪を１年間、学んで美容師としての道を進んだ。そして盛岡市内に木下八千代美容室を開業することになる。美容師が髪結（かみゆい）さんとしか見られていなかった頃のことである。

以来、美容界で多くの責任を果たしてきたが、重責のため病いに倒れてしまった。モルモンの宣教師に会ったのはその頃のことである。ニュージーランド神殿からの紹介カードを持って盛岡の地に初めて派遣されたロバート・W・アレン長老とその同僚が訪ねて来たのである。

「10年前ヨーロッパ旅行をしたときの名刺がまわりまわってニュージーランド神殿に行ったのでしょう」と彼女は語っている。彼女の改宗はアレン長老が「読んで下さい」と置いて行ったジョセフ・スミスの証のパンフレットからであった。ジョセフ・スミスの経験に真実を見出し謙遜に受け入れた木下姉妹は、1969年２月22日にバプテスマを受けた。盛岡で最初の改宗者である。

重いと思われていた病気も主の祝福により奇跡的に回復し、再び多くの仕事に取りくんだ。

彼女はいつも忙しい中にあって会員の兄弟姉妹や宣教師をはじめ、多くの人々に助けと励ましを与えた、大きな愛を示してきている。特に宣教師にとって彼女は特別の存在である。彼女の奉仕と励ましが宣教師たちにとって母親を思わせるからである。

主がこれからも彼女の働きに導きと恵みを与えられるように。

聖　徒　の　道

1976年２月20日発行（毎月１回20日発行）　第20巻第２号
昭和42年12月18日第３種郵便物認可

